

MINAMINAKAJIMA

松本市南中島遺跡

— 緊急発掘調査報告書 —



1991・3

松本市教育委員会

MINAMINAKAJIMA

松本市南中島遺跡

— 緊急発掘調査報告書 —

1991・3

松本市教育委員会

序

南中島遺跡、鉾塚は松本市の東部、中山地区にあります。当地区には数多くの遺跡が散在し、これまでに中山古墳群、向畑遺跡、坪ノ内遺跡などについて、発掘調査のめざましい成果が挙げられてきました。これらのほとんどは開発に伴う記録保存として行われたものですが、今回も県営ほ場整備事業に先立つ緊急発掘として実施されました。

調査は、松本市が長野県松本地方事務所からの委託を受け、松本市教育委員会が調査団を組織して、昭和63年10月から12月と平成元年9月から翌2年1月の二次にわたり行いました。結果は、南中島遺跡では縄文時代の集落跡が確認されおびただしい遺物が出土しました。また鉾塚遺跡は中世の石積み墳墓としては松本平初めての調査になりました。これらはいずれも中山地区だけではなく松本の歴史研究に十分に役立つ成果といえましょう。



記録保存のための緊急発掘調査は、私達の生活を豊にする開発事業と、それによって失われる、かけがえのない文化遺産である遺跡の保護という矛盾する二つの課題の兼ね合いとして選択される、ひとつの手段にすぎません。本書発行にあたり、その辺の事情をお汲みいただき、且つまた文化財に対する理解を深めていただけるならこれに勝る幸いはないでありましょう。

最後になりましたが、厳寒のなかの発掘作業にお骨折りいただいた参加者の皆様、また調査実施にさいして多大な御理解、御協力を頂いた中山土地改良区、地元関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成3年3月

松本市教育委員会 教育長 松 村 好 雄

例 言

1. 本書は昭和63年11月26日から同年12月24日、平成元年9月21日から同2年1月5日にわたって実施された、長野県松本市中山5407番地付近に所在する南中島遺跡^{みなみなかじま}の第1次・第2次及び鉾塚の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は平成元年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、松本市が長野県より委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は第1章第1節：事務局、第2章第1節：太田守夫、第5章第1節1～3、第2節1：三村竜一、第5章第1節4、第2節2、第6章4：竹内靖長、第5章第4節5第4・5群：寺内隆夫、第6・7節：関沢聡、その他の項目を新谷和孝が行ない、一部久保田剛の協力を得た。
4. 本書の編集は事務局が行ない、滝沢智恵子の協力を得た。
5. 本書の作製にあたっての作業分担は次のとおりである。
土器復元・拓影：五十嵐周子、滝沢智恵子
遺物実測：関沢聡、直井雅尚、伊丹早苗、今村克、三村竜一、松尾明恵、久根下三枝子、横山真理、
新谷和孝
トレース：関沢聡、直井雅尚、竹内靖長、伊丹早苗、今村克、三村竜一、松尾明恵、石合英子、
開嶋八重子、久根下三枝子、横山真理、新谷和孝
図版作成：関沢聡、竹内靖長、松尾明恵、赤羽包子、五十嵐周子、石合英子、新谷和孝
遺構写真：三村竜一、新谷和孝
表作成：関沢聡、竹内靖長、久保田剛、石合英子、内田和子、林和子、吉澤克彦、新谷和孝
6. 遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏による。
7. 出土遺物の整理にあたっては、神村透、小林康男、島田哲男、寺内隆夫、鳥羽嘉彦、望月映、森義直の諸氏に多大な御教示、御協力をいただいた。
8. 本書作製にあたって、次の方々の御協力を得た。
内澤紀代子、上條尚美、川窪命子、神沢ひとみ、小林由美子、滝沢直美、竹原久子、竹原学、
田中正治郎、町田庄司、三村康子、村山牧枝、望月佳代子、山下泰永
9. 本書中での図の縮尺は、特に断りのあるものを除き、次のように統一した。
遺構図：住居址 $\frac{1}{60}$ 、土坑 $\frac{1}{60}$ 、 $\frac{1}{90}$ 、遺物：土器実測図 $\frac{1}{4}$ 、土器拓影 $\frac{1}{6}$ 、土製品・石器・石製品は各項中に示した。
10. 図中の記号は以下のとおりである。●土偶、■石器、▲石製品、焼土、炭化物
11. 本書では、より多くの資料を図示するため、図の縦組、横組を併用した。
12. 土器実測図等のNo.は、各項ごとの通し番号の下に、遺物実測時のNo.を付した。ただし第2・5号住居址の遺物については取り上げNo.を付した。
13. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は、調査結果の記載を重視したために本書より割愛したが、本調査に関する出土遺物及び図類とともに松本市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査経過	4
第1節 文書記録	4
第2節 調査体制	5
第3節 調査日誌	6
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地形と地質	7
第2節 周辺遺跡	9
第3章 南中島遺跡をめぐる研究史	12
第1節 中山地区の考古学研究史	12
第2節 深沢遺跡の調査と南中島遺跡既出資料の紹介	17
第4章 調査	27
第1節 調査の方法	27
第2節 調査の概要	28
第5章 調査の結果	30
第1節 第1次調査	30
第2節 鉾塚の調査	37
第3節 第2次調査	42
1 住居址	42
2 方形柱穴列	93
3 土坑	94
4 遺物包含層	94
5 縄文土器	122
6 石器・石製品	176
7 土製品	180
第6章 考察	211
1 南中島遺跡における縄文時代集落の変遷	211
2 中山地区の縄文時代遺跡群の展開	212
3 南中島遺跡の縄文時代中期後葉の住居址資料に関する諸問題	218
4 松本市内出土の古瀬戸系陶器四耳壺	223
第7章 調査のまとめ	225
写真図版	227

付 図 1 第1次調査全体図

付 図 2 第2次調査全体図

目 次

第1図	遺跡の位置	8
第2図	周辺遺跡	11
第3図	「信濃東筑摩郡埴原村地方の古物遺跡」略地図	20
第4図	深沢遺跡住居址実測図	21
第5・6図	深沢遺跡出土遺物(1)・(2)	22・23
第7～9図	周辺遺跡出土遺物(1)～(3)	24～26
第10図	調査位置図	29
第11図	第1号住居址	32
第12図	第1号・第2号竪穴状遺構	33
第13図	第3号・第4号竪穴状遺構	34
第14・15図	土坑(1)・(2)	35・36
第16・17図	鉾塚平面図(1)・(2)	38・39
第18図	第1次調査・鉾塚出土遺物	39
第19図	金属製品	41
第20図	第2号住居址	54
第21図	第5号住居址	55
第22図	第9号住居址	56
第23図	第10号住居址	57
第24図	第11号住居址	58
第25図	第13号・第32号住居址	59
第26図	第8号住居址	60
第27図	第12号住居址	61
第28・29図	第14号住居址(1)・(2)	62・63
第30図	第29号住居址(1)	64
第31図	第29号住居址(2)・第16号住居址	65
第32図	第18号住居址	66
第33図	第26号住居址	67
第34・35図	第3号住居址(1)・(2)	68・69
第36・37図	第15号住居址(1)・(2)	70・71
第38・39図	第17号住居址(1)・(2)	72・73
第40・41図	第23号住居址(1)・(2)	74・75

第42図 第31号住居址	76
第43・44図 第4号住居址(1)・(2)	77・78
第45・46図 第24号住居址(1)・(2)	79・80
第47・48図 第27号住居址(1)・(2)	81・82
第49図 第25号住居址	83
第50図 第28号住居址	84
第51図 第6号住居址	85
第52図 第7号住居址	86
第53図 第22号住居址(1)	87
第54図 第22号住居址(2)・第21号住居址(1)	88
第55図 第21号住居址(2)	89
第56・57図 第20号住居址(1)・(2)	90・91
第58図 第19号住居址	92
第59図 方形柱穴列	95
第60～64図 土坑(1)～(5)	96～100
第65～89図 出土土器実測図(1)～(25)	135～159
第90～105図 出土土器拓影(1)～(16)	160～175
第106～118図 石器(1)～(13)	196～208
第119図 土製品(1)	209
第120図 土製品(2)・石製品	210
第121～123図 集落変遷図(1)～(3)	213～215
第124図 拡張された住居址	222
第125図 松本市内出土の古瀬戸系陶器四耳壺	223

表 目 次

第1表 金属製品一覧表	41
第2表 貨幣一覧表	41
第3表 土坑一覧表	102
第4表 押型文土器観察表	125
第5表 石器一覧表	181
第6表 石製品一覧表	195
第7表 土製品一覧表	195
第8表 松本市内の古瀬戸四耳壺出土一覧	224

第1章 調査経過

第1節 文書記録

- 昭和63年9月12日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月22日 昭和64年度補助事業計画書提出。
- 平成元年4月3日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月3日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 5月15日 平成元年度県営ほ場整備事業中山地区南中島遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 5月24日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月18日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月25日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 9月11日 南中島遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 9月11日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月12日 平成2年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月22日 平成2年度補助事業計画書提出。
- 平成2年1月17日 南中島遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 1月25日 南中島遺跡埋蔵物の文化財認定。
- 4月4日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月4日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月2日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月24日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月17日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 10月12日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節 調査体制

昭和63年度《第1次調査（含鉾塚）》

調査団長：中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

調査担当者：神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場責任者：三村竜一（社会教育課埋文担当）

調査員：太田守夫

協力者：赤羽章、赤羽包子、内村美保、海野洋子、神沢ひとみ、窪田美保、佐良家照代、滝沢直美、竹内忍、土橋幸子、直井由加理、永沢周子、中島千矢子、中島三寿子、中島若子、中村恵子、波多野天、林和子、藤森寿々子、北條多寿子、町田庄司、松尾明恵、南山久子、見村芳子、宮島俊行、百瀬一子、百瀬きゑ、百瀬邦子、百瀬千恵子、百瀬弘子、百瀬正美、百瀬良子、山口順子、横山保子

事務局：浅輪幸市（社会教育課長）、田口勝（文化係長）、熊谷康治（主査）、直井雅尚（主事）、降旗英明（主事）、山岸清治（事務員）、三沢利子、佐々木仁美

平成元年度《第2次調査》

調査団長：松村好雄（松本市教育委員会教育長）

調査担当者：新谷和孝（社会教育課埋文担当）

調査員：太田守夫、三村肇

協力者：青木修一郎、青木雅志、青柳洋子、赤羽貞人、浅輪敬二、石合英子、石合佐千子、石川末四郎、伊藤智子、乾靖子、今村嘉子、遠藤ひろみ、大出六郎、太田千尋、大谷成嘉、大塚袈裟六、開嶋八重子、川上春子、久根下三枝子、小池直人、小岩井美代子、輿定夫、小島茂富、兒玉春紀、小松正子、佐々木保二、下里忠靖、下里千代子、瀬川長広、袖山勝美、高瀬きみ子、高橋八重子、瀧沢隆男、滝沢龍一、田口吉重、竹村初子、田多井うめ子、田多井巨、多田邦彦、塚原晴美、鶴川登、寺島貞友、遠山明、中島新嗣、中嶋督朗、中島久江、中島三寿子、中島若子、中村恵子、中村文一、中村安雄、花村久子、林昭雄、林伊和夫、林和子、深井一雄、藤井源吾、藤井久子、藤本嘉平、二木茂雄、降旗大太郎、洞沢高子、牧久雄、真々部まさ子、丸山麻子、丸山久司、丸山恵子、丸山誠、丸山よし子、三浦節子、三沢元太郎、村山正人、百瀬清子、百瀬清子、百瀬幸子、百瀬千恵子、百瀬弘子、百瀬二三子、百瀬真知子、百瀬康人、百瀬靖代、百瀬弓里子、百瀬義友、百瀬良子、森崎成城、矢島利保、山口順子、山本裕子、横川博子、横山小夜子、横山恒雄、横山保子、米山楨興

平成2年度《整理作業》

責任者：新谷和孝

協力者：赤羽包子、石合英子、五十嵐周子、内澤紀代子、内田和子、上條尚美、川窪命子、神

沢ひとみ、久根下三枝子、滝沢直美、松尾明恵、三村康子、村山牧枝、望月佳代子、横山真理、吉澤克彦

事務局：浅輪幸市（～H1）／荒井寛（H2～）（社会教育課長）、田口勝（課長補佐、H2～）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚（主事）、降旗英明（主事）、関沢聡（H2～）（主事）、山岸清治（～H1）（主事）、赤羽美保（～H1）、荒井由美（H2～）

第3節 調査日誌

《第1次調査（含銚塚）》

昭和63年11月26日 重機による試掘開始。表土剥ぎを並行する（12月2日まで）。

12月6日 遺構検出作業開始。

12月7日 検出作業終了。遺構掘り下げ開始。測量用の座標設定。

12月12日 銚塚調査開始。現状の平面測量を行う（15日まで）。

12月16日 銚塚、表面より石を除去する。

12月20日 銚塚、石積下層の調査開始。

12月21日 第1次調査掘り下げ及び測量完了。銚塚掘り下げ終了。

12月22日 銚塚完掘状態平面図作製開始。

12月24日 銚塚調査終了。

《第2次調査》

平成元年9月21日 後の調査区の東側から、重機による試掘開始。表土剥ぎを並行する。

9月25日 機材搬入。テント設営。

9月26日 検出作業開始。プレハブ設置。

10月9日 重機による試掘及び表土剥ぎ終了。検出作業続行。

10月18日 検出作業終了。住居址の掘り下げ開始。

10月19日 測量用の座標設定作業開始（24日まで）。

10月27日 測量開始。全体図作製より始め、以後掘り下げと並行する。

11月8日 土坑の掘り下げ開始。見学：中山史跡を愛する会

11月22日 住居址の掘り下げ及び記録ほぼ終了。埋甕の調査を開始する。

12月20日 方形柱穴列1確認。写真測量・航空写真撮影準備開始。

12月24日 大雪のため作業中止。26日まで除雪作業を行う。

12月28日 写真測量・航空写真撮影実施。測量の一部を残し、平成元年の作業を終了。

平成2年1月5日 残りの測量を行い、すべての作業を終了する。

以後報告書作製に向け、整理作業を行う。

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

1. 位置と地形

調査地は、松本市中山南中島地籍の宮入川の右岸近くに位置している。標高740m、埴原神社の西方に広がる階段状の水田域で、向畑遺跡や坪ノ内遺跡よりも20mほど高く、崖錐性の山麓傾斜地（面）に載っている。周辺の地形については向畑遺跡 I（松本市文化財調査報告No.60,1988.3）に述べたので、ここでは割愛するが、調査地は鉢伏山地西側の山麓傾斜地（面）の中では最も傾斜度が高い（6°）場所である。

2. 堆積層と遺跡

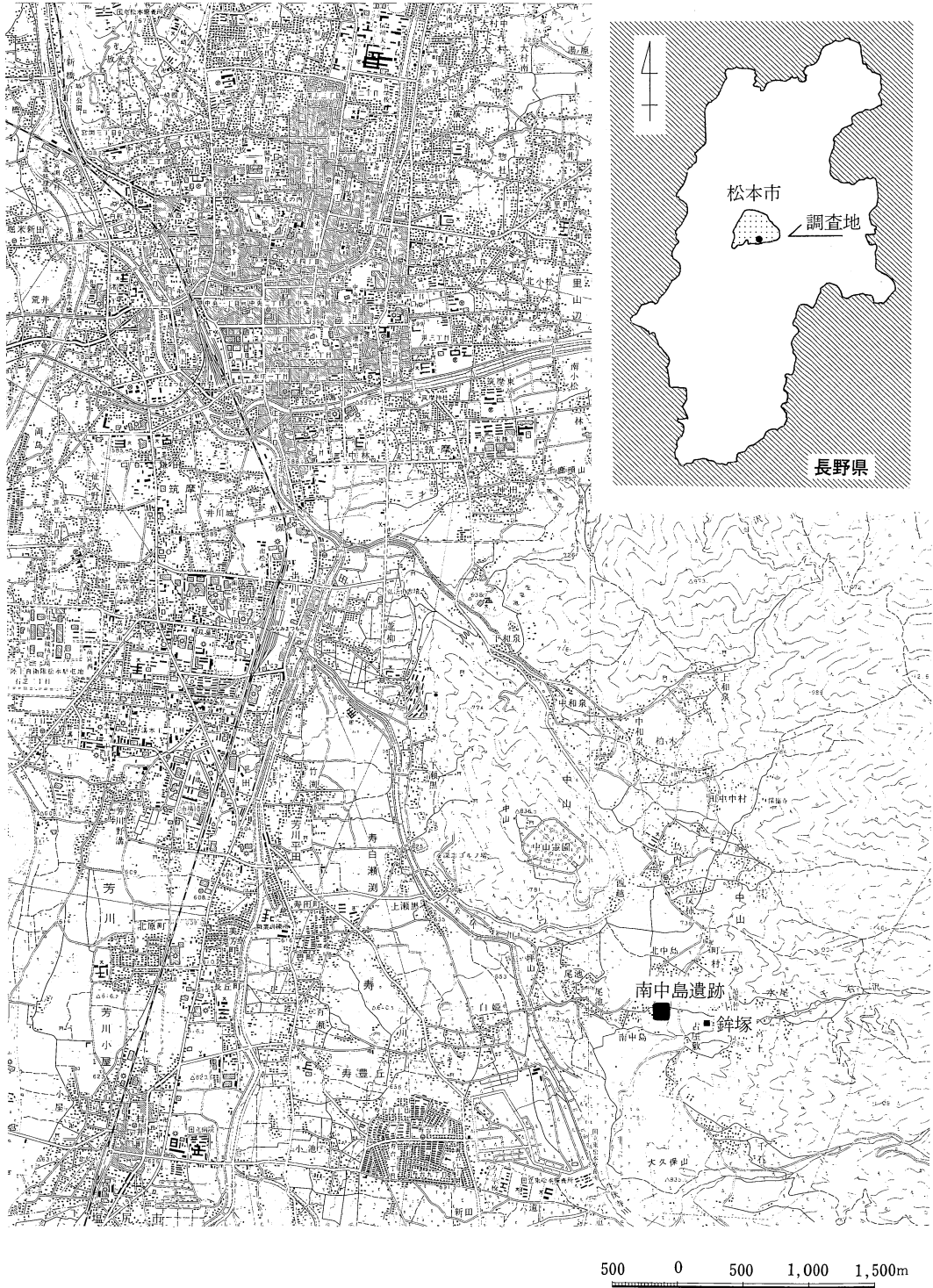
中山地区南部の山麓傾斜地（面）をつくっている地層は石英閃緑岩の大・巨礫を基底礫層とし、その上部に何度となく堆積を重ねた石英閃緑岩の風化砂・小・中・大礫を含んだローム質土壤からなっている。堆積の営力は宮入川（千石沢）のような河流による扇状地性のもや、高所からの崖錐性のものが考えられる。地形面の形成が早く、更新世（洪積世）の火山灰降下（波田ローム）がなった場所（千石面）もあるが、その後の堆積で覆われたり、破壊された面、取り残された面もある。特に中山地区南部にその傾向がみられる。

第1次調査の調査地は比較的新しい面と考えられ、表土（耕土20～25cm）の下は中礫の亜角礫と風化砂の混じったローム質土壤である。このため遺跡の立地も遅れがちであったとみられる。

（太田守夫）

第2次調査の調査地は千石面の延長上にあたる。遺構の載っている面は基盤の直径3m以上の石英閃緑岩を含む層の上にロームが堆積し、各所に礫が露出している。地元の方の話では水田を作った際などにも多量の礫が出土したとのことである。調査区の南側は宮入川に向かって落ちる谷状の地形となり、黒色土が厚く堆積している。この部分には湧水があり、表土の除去を行なった際に埋没した木材などが出土している。調査区東側の県道（主要地方道松本塩尻線）から続く斜面では、重機による試掘を行なった際、宮入川に向かって落ちる谷を確認した。調査区の北側も小さな沢により削られており、調査した部分は宮入川と北側の沢に挟まれた小さな台地状の地形になっている。

（新谷和孝）



第1図 遺跡の位置

第2節 周辺遺跡

中山の遺跡については向畑遺跡（松本市教育委員会1988年）、坪ノ内遺跡（同1990年）、弥生前遺跡（同1991年刊行予定）の報告書等で考察されている。この地区では古くより多くの遺物の出土が知られ、旧中山考古館を経て、現在は松本市立考古博物館にその多くが収蔵されている。近年この地区では様々な開発に伴う大規模な発掘調査が相次ぎ、次第にその様相が明らかになりつつある。本稿では最近の発掘の成果を中心に、中山地区の縄文時代の遺跡について概観してみたい。

この地区に最初に人々の生活の痕跡がみられるのは、縄文時代早期前半の押型文土器の時期であるが、今回報告の南中島遺跡などいくつかの遺跡で、さらに時代が遡る可能性のある石器が発見されており、今後が期待される。押型文土器は坪ノ内・向畑・深沢・南中島の各遺跡で出土しているが、いずれも少量である。向畑遺跡の遺物の中に1点、胎土に黒鉛を含む薄手の山形文土器があり、樋沢式の段階に位置付けられるが、ほとんどは細久保式以降の資料である⁽¹⁾。この時期の遺構は前述の各遺跡を合わせても数基の土坑が検出されている程度で生活の様相等の解明にはまだ資料不足である。

早期末葉～前期初頭の遺物は坪ノ内・向畑・生妻・埴原北・南中島の各遺跡で出土している。押型文の時期に比べると遺物量は急増するが、遺構は土坑が数基存在する程度である。坪ノ内遺跡では廃棄空間的な性格と推定される土器集中区より、在地及び東海系の土器が多く出土している。共伴関係等は明確でないが、量的にはまとまった、この地域では良好な資料である。土器の様相は不明な部分が多いが、在地の土器では所謂「縄文施文尖底土器」が主体である。新しいものは中越式の直前に位置付けられるものもあり、増加した資料を今後さらに分析することにより、様相が明らかになっていくことが期待される。

前期前・中葉の遺物はこの地区では断片的な出土例があるが、資料は極めて少ない。前期後葉～終末の段階になると坪ノ内遺跡で2軒の住居が調査され、まとまった資料が得られている。地区全体では弥生前・南中島・深沢で少量の遺物が出土しているが、全体の量はまだまだ多くない。近年松本市入山辺の南方遺跡からもまとまった資料が出土しており、この地域では資料が増加しつつある。

中期初頭では向畑遺跡で9軒の住居址が調査されている。ここでは集落のほぼ全体及び周辺が広く調査されており、また縄文時代ではこの時期のみに集落が存在しているため、その様相を知る上では良好な資料である。遺物も土器の好資料が出土しており、竹原学氏によって周辺遺跡の資料も含めた考察が行われ⁽²⁾、この地域における同期の土器群の様相が明らかになっている。この他には坪ノ内・南中島で少量の破片が出土している程度である。

中期中葉のものは、坪ノ内遺跡の土器集中区より多量の土器が出土している。この遺跡からは古くより多量の遺物が出土していたが、1988年の発掘調査でその全容が明らかになった。この時期の遺構は数基の土坑が検出されたのみであるが、土器集中区の遺物は中期中葉のほぼすべての段階の

資料が存在する。全体として比較的小形の土器が多いこと、勝坂式土器の区画内の充填や地文に縄文を多用する資料が多くみられることなどが特色として指摘できる。詳細については報告書を参照されたい。その他では弥生前遺跡で2軒、今回の南中島で3軒の住居址が調査された。しかしいずれも遺存状態は良くなく、この地区では中期中葉の住居址や集落の構造を窺える資料は得られていない。

中期後葉には地区内の各地に集落が営まれるようになる。調査例も多く、様々な所見を得ている。住居址は坪ノ内で6軒、弥生前で22軒、深沢で2軒、生妻で2軒、南中島で17軒が調査されている。時期をさらに細分すると古い段階（中期後葉Ⅰ・Ⅱ期）のものは少なく、中期後葉Ⅲ期～終末の段階のものが多い。坪ノ内遺跡では中期後葉の環状集落が全面ではないが検出され、その変遷の様子が明らかになっている。南中島には古い段階の資料があり、弥生前では終末段階の良好な資料を得た。全体を通じて資料は充実してきており、今後の分析により様相が明らかにされることが期待される。土器については多くの先学の指摘があるように、この時期には唐草文系の土器が主体を占め、曾利系、加曾利Ⅱ系の土器がわずかに伴うようになるという松本平の一般的な様相を示している。これについてはさらに小さな集団ごと、あるいは時期による差が予想され、充実してきた資料のさらなる分析が期待される。

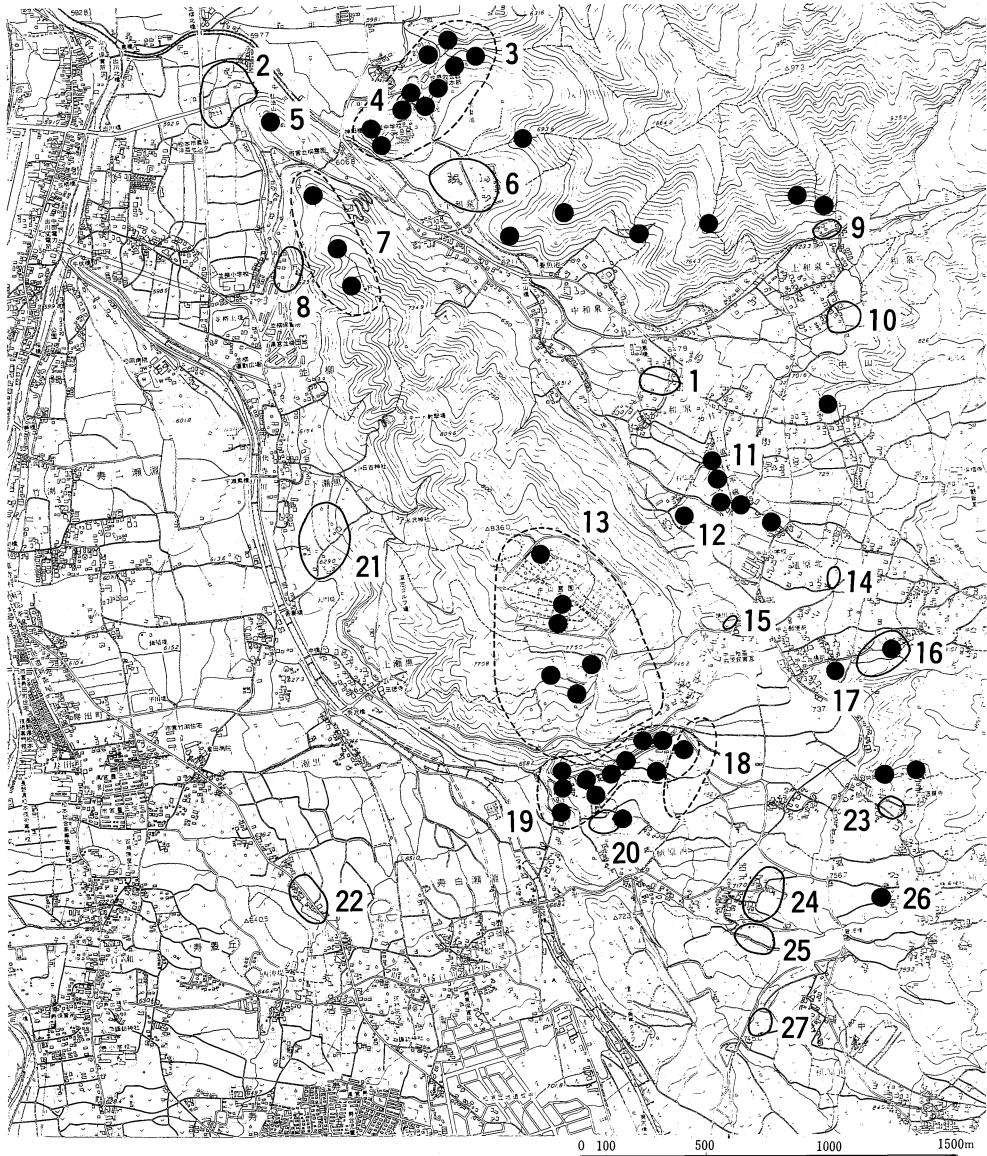
後期では初頭～中葉の遺物が坪ノ内・弥生前で出土し、前・中葉の住居址が坪ノ内で17軒、弥生前では3軒調査されている。坪ノ内では同期の環状集落がほぼ全面調査され、遺構の遺存状態は悪いものの、その様相が明らかにされている。弥生前でも2軒の敷石住居など注目される資料が多い。

後期後葉から晩期の遺物は中山地区では、現在のところ発見されていない。各辺の地区でもこの時期になると、遺跡は次第に標高の低い場所に移る傾向がみられ、同地区でも同様に人々の生活の場が移っていったものと推定される。

以上時期別に概観してみると、各期の様相は次第に明らかになってきているものの、まだ不十分な点も多い。今後の研究により地域の特性、さらには集団の移動など中山地区の中での詳細な姿が解明されていくものと思われる。

註1 向畑遺跡の報文中（「松本市向畑遺跡Ⅲ」松本市教育委員会1990年3月）に「格子目文土器」とされているものがあるが、後世のものである。

2 竹原学「付偏 松本平の縄文中期初頭土器」（「松本市向畑遺跡Ⅱ」松本市教育委員会1989年3月）



- | | | |
|------------------|-------------------|--------------------|
| 1. 弥生前遺跡 (縄) | 10. 和泉遺跡 (縄・古) | 19. 坪ノ内, 向畑古墳群 (古) |
| 2. 平畑遺跡 (弥~平) | 11. 小丸山古墳 (古) | 20. 坪ノ内遺跡 (縄) |
| 3. 棺護山古墳群 (古) | 12. 柏木古墳 (古) | 21. 瀬黒遺跡 () |
| 4. 中山36号墳 (古) | 13. 鍬形ヶ原古墳群 (古) | 22. 白川遺跡 () |
| 5. 弘法山古墳 (古) | 14. 埴原北遺跡 (縄) | 23. 町村遺跡 (縄) |
| 6. 生妻遺跡 (縄~平) | 15. 推定 牧監庁跡 (奈・平) | 24. 南中島遺跡 (縄) |
| 7. 中山北尾根古墳群 (古) | 16. 山影遺跡 (古) | 25. 深沢遺跡 (縄) |
| 8. 山行法師遺跡 (縄) | 17. 小山下古墳 (古) | 26. 鉾塚 (中) |
| 9. 宮平八幡宮裏山遺跡 () | 18. 向畑遺跡 (縄・古) | 27. 古屋敷遺跡 () |

第2図 周辺遺跡

第3章 南中島遺跡をめぐる研究史

第1節 中山地区の考古学研究史

南中島遺跡のある松本中山地区には多くの遺跡や古墳があり、過去に様々な調査や研究が行なわれている。それらは故小松昌之氏による集成⁽¹⁾、桐原健氏による資料紹介⁽²⁾などで詳細にまとめられており、また近年では宮下健司氏による資料の紹介⁽³⁾の中に関連する遺物の記載がある。筆者も坪ノ内遺跡の報告では同遺跡をめぐる研究史をまとめた⁽⁴⁾。本稿ではそれらをもとに新発見資料を加え、中山地区の考古学研究史としてまとめてみたい。なお作成にあたっては、関沢聡氏より多大な御教示を得た。

本稿では大正時代までをⅠ期、昭和50年代までをⅡ期、それ以降をⅢ期とし、長野県内の他の地域での研究動向と合わせてまとめてみたい。

Ⅰ期

中山地区の考古学に関する最古の記録は元禄16（1703）年の郷内の石橋に穴蔵（古墳の横穴式石室）の蓋石を使用した記録（百瀬武正氏文書）で、文書としては長野県の考古学史上でも最古のものである。これをはじめとして18世紀の県内各地では、様々な文献に考古学の記事が散見するようになる。中山地区ではこの後、寛政年間（1789～1800）に和泉八幡山古墳が発掘された記録があるが、詳細は不明である。明治以前の考古学は科学的な意識の下で行なわれたものも一部にはあるが、ほとんどは好事的性格によるものが多い。

明治時代となり近代政府が成立すると、各地を把握するため町村誌などが作られるようになる。明治11～15（1878～82）年に作られた『長野県町村誌』の中山村陵墓の項に古墳の記録がみられる。

「2ヶ所。1は本村字中山の峯、大小稜塚数ヶ所あり。幅5尺5寸長さ9尺余、上に大小石を負せてあり。近頃矢の根、鼠瓶など掘り出せり。塚の高さ7尺、間口5軒余、右何帝の時なるや未詳、古来より唯御陵と云伝へり。1は村の中央字棺護山に陵墓5ヶ所あり。其形ち前に同じ」。

この文より現在の棺護山古墳群の存在が既に知られていたこと、当時から古墳の遺物が掘り出されていたことが窺われる。

この頃になると日本にも近代科学としての考古学が入っている。中央では東京人類学会が結成されており、明治20年代には様々な研究者が各地を訪れ、調査等を行なった。中山へは明治25（1892）年に鷹野秀雄氏が訪れ、埴原村尾池（現松本市中山尾池）周辺で表面採集を行なっている。この記録は翌年4月の『東京人類学会雑誌』⁽⁵⁾に報告され、そのうち4ページには遺物のスケッチと略地図がある。この遺物は現在の坪ノ内遺跡からの出土品と推定される。また略地図（第3図に所収）

には、現在の鍬形原古墳群の付近に49基の古墳が図示されている。明治30（1897）年には若林勝邦氏が松本を訪れている。また小松昌之氏の調査によれば、この頃桜立古墳が発掘されているが、この2件については詳細は不明である。明治32（1899）年には中山村で、「中山地区出土考古品展」が開催されている。この時の詳しい記録は確認されていないが、村単位の考古資料展は当時としては異例のもので、地区の出土遺物の豊富さとそれらに対する関心の高さを窺わせるものである。またこの年には大野延太郎（雲外）氏が松本周辺で調査を行なっている。この頃坪井正五郎氏らの活動により、各地に地方単位の人類学会が結成された。松本では明治33（1900）年に東筑摩交詢会の主催により、坪井氏が招かれ、人類学講義が行なわれた（8月5日～19日）。それがきっかけとなり10月には松本人類学会が結成されている⁽⁶⁾。この講義の際には、中山地区出土の遺物が展示され、そのうち数点は翌年野中完一氏により『人類学雑誌』に報告されている⁽⁷⁾。また八木奨三郎氏の『日本考古学』（明治35（1902）年刊行）には埴原村出土の土偶2点が紹介されている。明治39（1906）年9月22日には松本紀年館が開館し、中山地区の出土遺物が展示され、同43年には銅駝坊陳列館に中山出土遺物が寄贈された。このように明治後期には出土遺物が中央へ紹介されるなど重要な出来事が続き、人々の考古学への関心が高まってきた。長野県内では各地で坪井氏の講演が行なわれたほか、W. ゴーランド、N. G. マンロー等による調査も行なわれている。また諏訪湖底の曾根遺跡が発見され、それを巡る論争が始まったのも、この時期である。

大正時代に入ると地区内の各地で古墳の発掘調査が相次いで行なわれている。まず大正3年には松本市国府町の牧野某氏が地区内の古墳を発掘している。詳しい記録は残されておらず、好事的なものであったと推定される。同年には小松昌之氏らが中山郷土研究会を結成している。大正8（1919）年に刊行された『東筑摩郡誌』には、鍬形原、坪ノ内、柏木、仙石という中山地区の古墳についての記載がある。これによると鍬形原では当時かなりの古墳破壊が進行していたことが窺われ、仙石の古墳も発掘されたことが知られる。同11（1922）年7月には鳥居龍蔵氏が来村し、「中山の古墳について」という研究講演を行なった。同氏はこの頃『諏訪史』『上伊那の先史及原史』などを始め、県内各地の調査を行なっている。これらの調査はその後の考古学研究に大きな影響を与えており、また現在は失われてしまった資料の記録としても大変重要といえる。鳥居氏は松本平にも何度か訪れてはいるが、規模的に他地域ほどの調査を行なっておらず、記録も『有史以前の跡を尋ねて』（1925年刊）等に見られる程度である。しかし『諏訪史』の中には周辺地域出土の遺物として、中山地区を始め、松本平のものがいくつか見られる。大正12年（1923）年には当時帝国大学生の宮坂光次氏が鳥居氏の指導の下、向畑（2号）古墳（3月25～26日）、蟹堀古墳（同26～27日）を発掘している。この結果は『史前学雑誌』に報告されているが⁽⁸⁾、市内の発掘調査の記録が中央の雑誌に報告された最初のものである。これに続いて地元の人による発掘が行なわれ、翌13年には小松昌之氏らが西越古墳を、14年には小笠原庄三郎氏他が柏木古墳を発掘している。柏木古墳については詳細な見取図が残されている。

以上が大正時代以前の研究史である。全体を通してみると資料の紹介や小規模な調査が行なわれ、この地区の遺跡や遺物に学問的な位置付けが行なわれはじめている。しかしその反面、好事的性格の調査も行なわれ、古墳の破壊などが進んでいる。

Ⅱ期

昭和に入ると引き続き、地区内で小規模な発掘が相次ぐ。昭和5（1930）年2月14日付けの信濃毎日新聞には石川武雄氏（市立松本病院長）が坪ノ内遺跡で小発掘を行ない、縄文時代中期中葉のものと推定される完形土器を発掘した記事がある⁹⁾。同氏は各地を歩いており、他にも同年に地区内沖田地籍で石錘を発見した記事などが散見される。しかしその調査は学術的なものとはいえず、やはり好事的性格によるものである。

この頃には地区内出土の遺物が研究者により中央へ寄せられたり、好事家により持ち去られようとするが多くなる。また同時に開墾に伴う古墳の破壊などもあり、多くの遺物が出土した。しかし前出の小松氏などの努力で、出土遺物を学校に寄贈するという傾向が広まった。それらが元となり、昭和6年6月1日、中山小学校内に考古館が設立され、遺物を保管・展示ようになる。これは後に中山考古館に発展し、現在の松本市立考古博物館の前身的なものと位置付けられる。また遺物の散逸を防ぐとともに、これを展示公開し、文化財に対する地域の意識を向上させたという点からも高く評価すべきものである。

文献では『松本市史』（昭和8（1933）年刊）に中山古墳群の記載がある。また昭和10年12月には丸山益延氏が「古墳群か防塁か」を発表している¹⁰⁾。これは中山丘陵北尾根上の小墳群について考察したものであるが、文中には現在の弘法山古墳についての記載があり、弘法山古墳が文献に現われる最初のもので、当時の様子を知る貴重な資料である。同年10月には弥生山1号古墳が発掘されているが、詳細な記録はなく、遺物のみが現存する。同12年には東筑摩郡教育会東部支会が考古学講習を行なった。講師には当時帝国博物館の後藤守一氏を招き、北尾根の古墳1基を発掘した。後藤氏は中山考古館を訪れ指導を行っており、現在松本市立考古博物館にはこのとき氏の書いた「考古」の額と、当時の芳名録が保管されている。またこの年の5月には東京帝室博物館において、土偶の特別展が行なわれ、その中に中山村出土のものが1点見られる¹¹⁾。翌13年には弥生山2号古墳が発掘されているが詳しい記録は存在しない。

昭和15（1940）年には中山古墳群が県史跡に指定されている。翌年刊行された『東筑摩郡郷土誌』には「中山村と南安曇郡有明村付近は古墳の多いところである」との記載が見られる。翌16年には向畑8号墳が松本の某医師により発掘されたと伝えられるが、詳細は不明である¹²⁾。以上が戦前の動向である。古墳を中心に小規模な発掘が繰り返されているが、それらの資料はほとんど残っていないので詳細は不明である。その一方では後藤氏の調査など、学問的な位置付けや考古館の設置という重要な動きがあったことは見逃せない。

終戦とともにそれまでの皇国史観は捨て去られ、静岡県登呂遺跡を始め、各地で新しい真の歴史

を求めた発掘調査が行なわれる。県内では塩尻市平出遺跡の調査が行なわれており、後の地域考古学研究に大きな影響を与えた。中山では昭和21（1946）年に連合軍総司令部国宝調査員ギャラガー氏が来村したという記録がある。同23年には大場磐雄氏が中山考古館の遺物整理を行ない、この記録は4年後に『中山考古館案内』としてまとめられ、所蔵遺物を体系的・学問的に位置付けている。なお中山考古館の芳名録によって、同氏は戦時中の昭和19年5月にも訪れていることが知られる。

昭和30～40年代には、地区内で遺跡や古墳の発掘が相次いで行なわれる。昭和34（1959）年には開成中学校敷地造成工事のため、棺護山古墳群のうち2基が調査された。わずか2日間の発掘であるが、鉄剣5口と直刀など多数の遺物が出土した。正式報告はされていない¹³³。遺物は松本市立考古博物館に所蔵されている。同39年には推定牧監庁¹³⁴と深沢遺跡の発掘調査が行なわれた。翌40年には坪ノ内遺跡で発掘調査が行なわれたが、これについては別稿で詳しく触れている¹³⁵のでそちらを参照されたい。この深沢、坪ノ内両遺跡の調査は中山地区で最初の縄文時代遺跡の学術調査である。前者では地区内で初めて縄文時代中期後葉2軒、平安時代1軒の住居址を検出している。しかしいずれも正式な報告は行なわれておらず、また調査面積が小さいため、遺跡の一端を明らかにした程度であった。調査以外では昭和32（1957）年に中山考古館が新築され、また同42年には中山古墳群が松本市史跡に指定されている。こうした学術調査や史跡指定の動きとは対照的に、この頃さまざまな開発が盛んになり、それに伴う緊急調査が多くなってきた。昭和41（1966）年には開成中学の校庭拡張に伴い中山36号墳が、翌42年には中山霊園造成に伴い中山17・39号墳が調査された¹³⁶。この霊園造成部分は鍬形原古墳群の北側で、調査された2基は整備され、霊園内に残っているが正式な報告はされていない。また過去の記録等によれば上述2基以外にも多くの古墳やその残骸もあったことが予想される。こうした動きのなかで昭和46（1971）年には、小松昌之氏を会長とする中山地区史跡愛護会が結成されている。この頃発掘された遺物のほとんどは中山考古館に納められている。しかし急増する資料に対する十分な分析は行なわれないまま過ぎている。昭和49年には中山丘陵北端の弘法山古墳が発掘された¹³⁷。この調査も当初は松商学園のグラウンド造成に伴う発掘であったが、調査の後は国史跡に指定され、整備・保存されている。こうした調査が進む中、藤沢宗平氏（昭和49（1974）年）、小松昌之氏（同53年）、小松虔氏（同54年）と、尽力された方々が相次いで亡くなり、研究上大きな損失となった。そのような中で桐原健氏が中山の既掘古墳資料の集成と中山考古館所蔵遺物の紹介を行なっている¹³⁸。これにより本稿で述べてきた中山古墳群の全容が明らかになるとともに、学問的位置付けが確立した。

以上が昭和50年代までの研究史である。この時期には多くの調査が行なわれ、様々な資料が集積している。しかし縄文時代の遺跡の様相は明らかにならないままである。

Ⅲ期

昭和50年代後半以降、松本平では長野自動車道の建設や大規模なほ場整備事業が行なわれるようになり、それに伴う発掘調査の件数や面積も急増した。それは中山地区も同様で、昭和60年代には

大規模な調査が相次ぐ。以下はそれらの概要である。昭和62～63（1987～88）年、県道建設とは場整備事業にともない向畑遺跡が調査された⁽¹⁹⁾。ここではかつて宮坂光次氏が調査した向畑2号墳の周辺で、7基の古墳を調査したのを始め、縄文時代中期初頭、古墳時代前・中期の集落、中世の墓と推定される土坑墓群が検出された。昭和63年には、ほ場整備事業に伴う坪ノ内遺跡⁽²⁰⁾及び、本書で報告する南中島遺跡第1次調査と鉾塚の調査が行なわれている。坪ノ内遺跡では縄文時代中・後期の集落のほぼ全面と、土器廃棄の空間と思われる土器集中区が調査されたことにより、その全容が明らかになるとともに、過去の発掘などで出土した膨大な資料についての位置付けがなされた。平成元（1989）年には南中島、弥生前、生妻⁽²¹⁾の3遺跡がほ場整備事業に伴い調査された。いずれも縄文時代中期を中心とした集落で多くの資料を得ている。平成2年には中山霊園の拡張に伴い、鉾形原古墳群が調査され、新たに6基の古墳を確認した。これらの調査については現在整理作業が進んでおり、多くの資料を分析することによって、この地区の様相を一層明らかにできるものと期待される。その反面急増する膨大な資料を消化し切れず、十分な分析に至っていないという現実もある。

以上が中山地区における考古学の研究史である。多くの先学の業績に対しての誤認や曲解も少なくないと思われるが御寛容いただきたい。この地区の様相については近年の大規模調査により、詳細が明らかにされつつあるが、まだ不明な点も多い。また膨大な資料の未消化という点については坪ノ内、南中島両遺跡の調査担当者として、その責任を痛感している。今後過去の資料も含め、この地域の様相解明を行ないたいと思う。

- 註1 小松昌之1974『中山考古館ならびにその周辺の主要課題』
- 2 桐原健1980「松本市中山の古墳・古墳群」『長野県考古学会誌』36
- 3 宮下健司1987「坪井正五郎の「人類学講義」と松本人類学会の創設」『長野県考古学会誌』53
- 4 新谷和孝「坪ノ内遺跡をめぐる研究史」『松本市坪ノ内遺跡』1990松本市教育委員会
- 5 鷹野秀雄1893「信濃東筑摩郡埴原村地方の古物遺跡」『東京人類学雑誌』85
- 6 註3前掲論文及び、宮下健司1988「長野県の考古学史」『長野県史』考古資料編全1巻（4）
- 7 野中完一1901「瓶廻舎雜記（第3回）」『東京人類学雑誌』184
- 8 宮坂光次1930「長野県東筑摩郡中山村古墳発掘報告1.2」『史学前雑誌』2-1
- 9 信濃考古学会1930「記録帖—厚手式縄文土器発見」『信濃考古学会誌』2-2、「石錘発見」同2-4にこれらの新聞記事が引用されている。同誌にはこの他にも当時の県内関係記事が多数記録されている。
- 10 丸山益延1935「古墳群か防塁か」『信濃』I-4-3
- 11 中部考古学会1937「帝室博物館土偶特別陳列」『中部考古学会彙報』2-4、なお同誌2-3から掲載されている「東京帝室博物館の藏品」は中部地方出土の帝室博物館収蔵資料目録を同館年報より再録したものであるが、中山地区のものでは以下の記載がある（資料番号は省略）。中山村南埴原小字坪ノ内、石鏃3点、砥石1点、土器7点、土偶2点/南埴原、粘板岩製有孔石器1点、磨製石鏃1点、石鏃9点/中山村内、磨製石斧1点
- 12 同古墳は1988年に松本市教育委員会が発掘調査を行なった。松本市教育委員会1990『松本市向畑遺跡Ⅲ』
- 13 註2前掲書に概要と遺物の紹介がある。
- 14 一志茂樹ほか1964「長野県松本市北埴原推定信濃牧監跡調査報告概報」『信濃』Ⅲ16-12
- 15 註4前掲書
- 16 原嘉藤ほか1973「長野県松本市中山36号古墳調査報告」『信濃』Ⅲ25-4、中山17・39号墳については註2前掲論文に概要と遺物の紹介がある。
- 17 松本市教育委員会1978『弘法山古墳』
- 18 註2前掲論文
- 19 松本市教育委員会1988『松本市向畑遺跡』、同1989『松本市向畑遺跡Ⅱ』及び註12前掲書
- 20 註4前掲書
- 21 松本市教育委員会1991年刊行予定『松本市生妻遺跡』『松本市弥生前遺跡』

第2節 深沢遺跡の調査と南中島遺跡既出資料の紹介

深沢遺跡は南中島遺跡の南側、深沢川の対岸に位置する。中山地区の考古学研究史の項で述べたように、昭和40（1965）年に小松虔・藤沢宗平氏等により小規模な発掘調査が行なわれたほか、耕作時にも多量の遺物が出土している。調査時の出土遺物は松本市立考古博物館に、耕作時出土のものは地主の百瀬有賀氏宅に保管されている。今回はこの調査の記録を再録するとともに、遺物の実測（一部再実測）を行ない、紹介したい。

深沢遺跡の調査は昭和39年11月28日から12月2日の5日間に行なわれた。このときの正式な報告書は刊行されていないが、『日本考古学年報』18、『松本市公民館報』中山版（昭和40年1月25日号）に略報が、『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻に遺構と遺物の報告があるので、それらの一部を引用しておく（なお各報文中で住居址番号の違いや誤りがみられるため、引用にあたっては『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』の図№に合わせて統一し、また小松昌之氏の報文には住居址番号を加えてある）。

『日本考古学年報』18「長野県松本市中山深沢遺跡」

調査概要 本遺跡は土地所有者の百瀬有賀氏が耕作中に石蓋をした埋甕を発見し、調査となったものである。調査は埋甕の周辺と、南にトレンチを設定し調査の結果、縄文中期の住居址と、これにほぼ重複して土師式後期の住居址が重複して発見された。最初に発見された埋甕のある第1号住居址は、遺跡の北側を流れる、深沢川により半分位が削られており、耕作の都合により全体を調査することはできなかった。この南トレンチ内に発見された第2号住居址にも、石の蓋をした加曾利E式の埋甕があり、炉は石囲であり、囲の石が一部失われているがほぼ方形である。住居址は隅丸の方形で、側壁は第2号住居址と重複した部分がはっきりしない。第3号住居址の上部に発見された、土師式の第2号住居址は、東壁の北よりの隅近くに石組の竈があり、隅丸方形に近い住居址である。遺物はあまり発見されなかった。 (小松虔)

『松本市公民館報』中山版（昭和40年1月25日号）「古代住居址の発掘」

（前略）中山地区には、縄文、弥生、土師器の各時代を通じて、その遺物（石器、土器等）が非常に沢山出土しているにもかかわらず、その遺跡（住居址）は今までに一つも見つかっていませんでした。ところが、南中島の百瀬有賀氏所有の畑を、昨年11月28日より5日間にわたって、松本博物館の小松虔氏及び同好有志者数名が発掘した結果、明瞭に竪穴住居址が三つあることがわかりました。これは耕土表面から50～60cmのローム層（赤土）にあったのです。

1. 大体3m四角に深さ約50cmの柱穴が四つあり、そのほぼ中央に炉が一つ築かれている。南側に壺が一つ埋められていた。この壺は、深さ約35cm、口径約15cmのもので、食物貯蔵用かと思われる

る…縄文時代（3号）

2. これと重なって、別に一つの住居址（2号）

3. 1. の北東約3mの所に一つ、これは川岸のため、欠け崩れていて大部分は不明（1号）。

（中山考古館長 小松昌之）

『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻「縄文時代中期の住居址」

南中島深沢遺跡6244番地は、小松虔によって調査されたが、最初に石蓋をした埋甕を発見し、その周辺を調査した結果、縄文中期の住居址と、これにはほぼ重複して土師期の住居址が発見された。最初に発見された埋甕のある第1号住居址は、遺跡の北側を流れる深沢川のためその後半分くらい削られており、さらに、同一トレンチ内に発見された第3号住居址にも石蓋のある埋甕があり、この住居の炉は石囲いで、石の一部が失われていた。なお、この住居の平面プランは隅丸の方形であり、第2号住居址と重複していた。しかしその内容もこれ以上明らかにはできなかった。

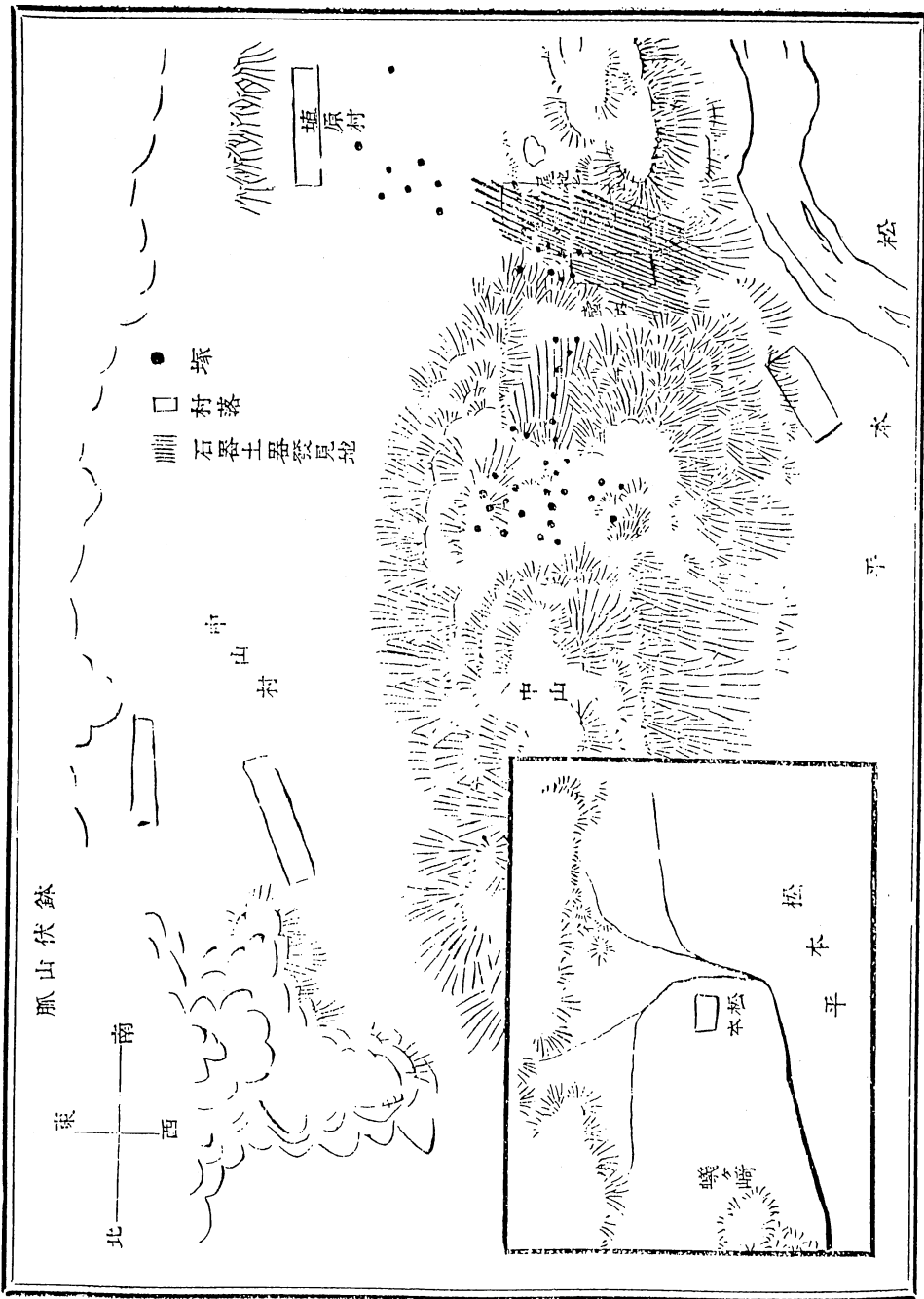
（藤沢宗平）

このときの調査の報告は以上3篇のみである。藤沢氏の報告の図は小林康男氏より原図のコピーをお借りし、再トレースして収録した。詳細な記録等がないので、以下実測図より測定したデータを記しておく。第1号住居址はプラン等不明、時期は中期後葉Ⅲ期。第2号住居址は隅丸方形。カマドが検出された東側が奥壁と考えられる。推定規模は奥行（東西）5.0m、幅（南北）4.9m、主軸はN-75°-Eである。時期は平安時代後期と推定される。第3号住居址は隅丸方形で、入口側（埋甕のある南側）がわずかに張り出す。推定規模は奥行（南北）4.7m、幅（東西）4.8m、主軸はN-15°-Wである。主柱穴はP₁~P₄の4本。炉は中央奥寄りで大形の石囲炉、時期は縄文時代中期後葉Ⅲ期である。発掘及び耕作時に出土した遺物については十分な整理を行なえなかったので、概要を紹介するにとどめる。土器は最も古いもので縄文時代早期の樋沢式の段階と推定される押型文土器が数片ある。時代順に見ていくと早期末~前期初頭の胎土に多量の繊維を含むもの、それに前期後葉~終末に位置付けられるもの、中期中葉の勝坂式の後半に属するものは各々少量ある。主体となるのは中期後葉のものでほぼ全段階の資料がある。Ⅰ・Ⅱ期のもは唐草文系の土器が主体で把手などの破片が多いが、全体の量は少ない。2軒の住居址が検出されたⅢ期の資料は非常に多く、全遺物の大半を占める。唐草文系の大形の深鉢が主体で、わずかに加曾利E系の土器が伴う。Ⅳ期の資料は少ないが、やはり唐草文系土器が主体である。把手やバケツ状の吊手などの破片がみられる。後期の土器は前葉の堀之内式期と、中葉の加曾利B式期の破片が少量存在する。またこの時期のものとして推定される注口土器の破片も数点ある。石器では磨石類や打製石斧が非常に多く、いずれも数千点に達すると思われる。打製石鏃も数百点あり、黒曜石製のものがほとんどである。有茎鏃も少量あり、土器は確認できなかったが、後期後葉以降のものも存在したと思われる。石製品では長さ30cm、直径10cmの大形の石棒を始め、飾り玉類の資料が多くみられる。これらの遺物から推定すると、縄文時代中期後葉を中心としたかなり大きな集落が存在したと思われる。

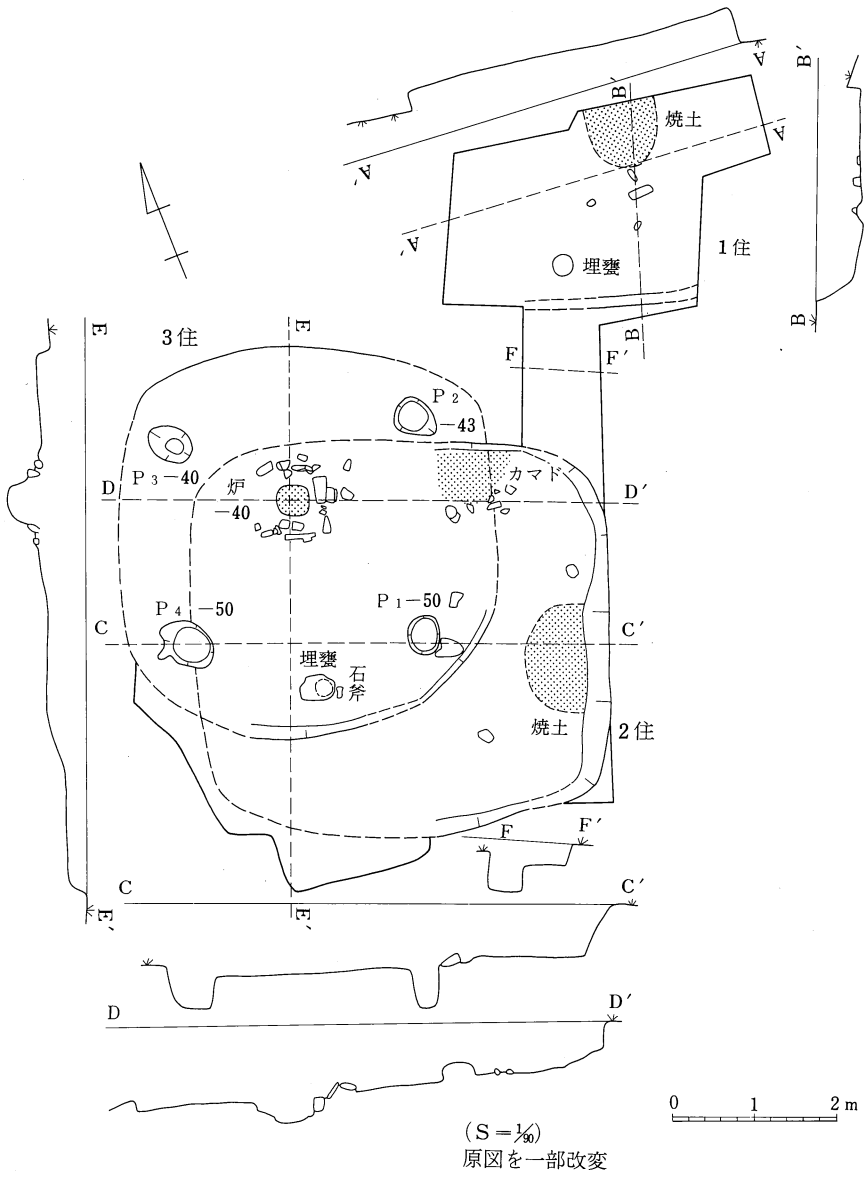
縄文時代以降のものでは古墳時代のものと思われる管玉や、灰釉陶器の皿、土師器の坏など平安時代後期の遺物が少量出土している。第5・6図は今回実測または再実測した資料である。1は第3号住居址の炉の上部より出土した深鉢、2は第1号住居址、5は第3号住居址の埋甕である。2の下端は埋設時に切断されている。3・4、6～10は今回実測した百瀬氏所蔵の遺物である。6は小形の壺で口縁に小さな片口がある。7は重弧文をもつ口縁である。以上の縄文時代の遺物は、1～6が中期後葉Ⅲ期、7は同Ⅰ期に位置付けられる。8は灰釉陶器の皿、9は輪花のある段皿である。ともに美濃古窯の大原2号窯式期の製品である。9は須恵器の瓶類の底部であるが、時期は不明である。

11～13は南中島遺跡の既出資料である。いずれも第2次調査区西側の久保添地籍より出土した。11は中期後葉Ⅰ期、12は中期中葉勝坂Ⅲ～Ⅳ期、13は同勝坂Ⅳ期に位置付けられる。

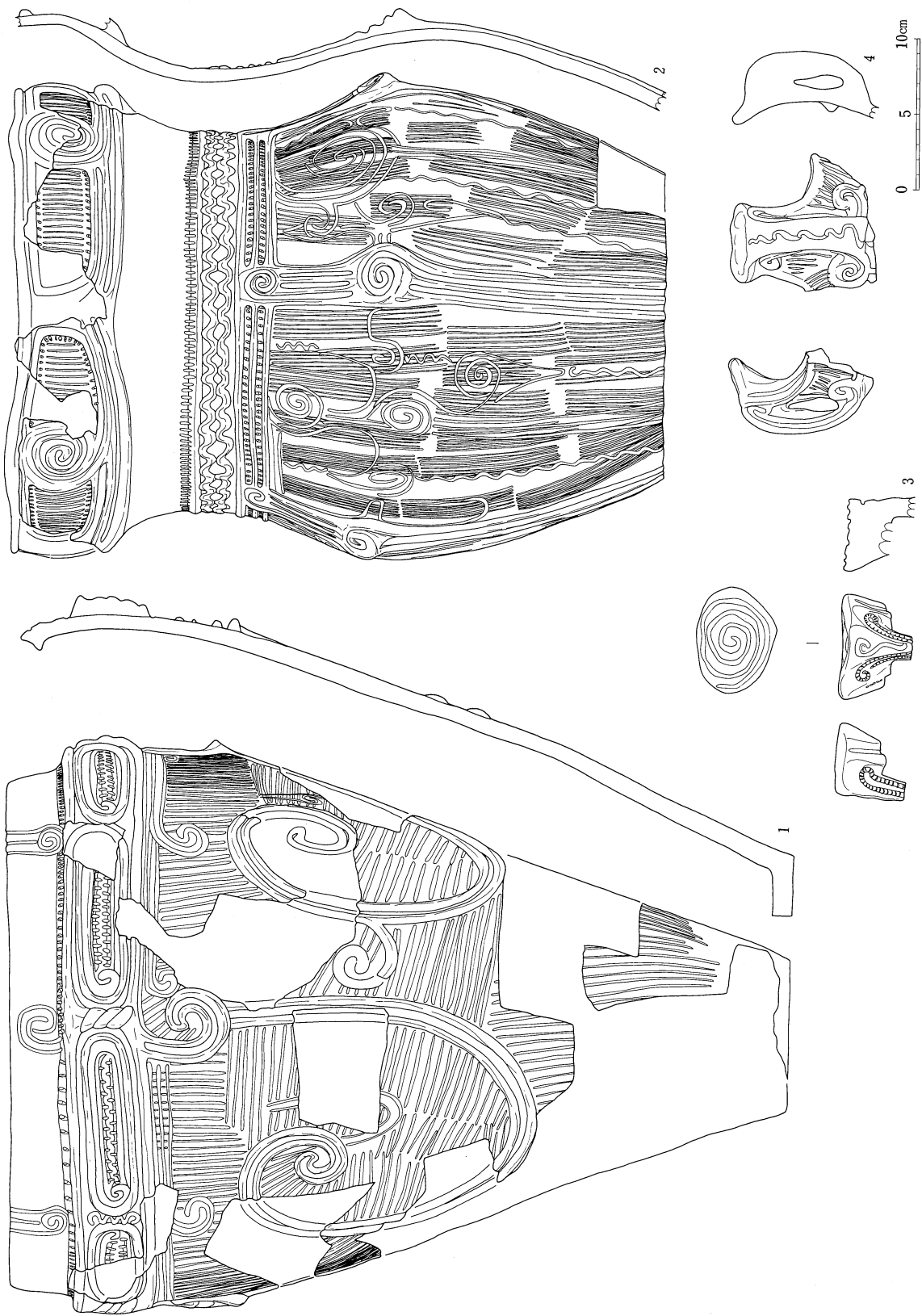
14～18は坪ノ内遺跡の報告書に収録できなかった資料である。図中に記した出土位置については同報告を参照されたい。時期は14が中期中葉、15・16が同勝坂Ⅳ期、17は同Ⅱ期、18は後期前葉堀之内Ⅰ式期である。



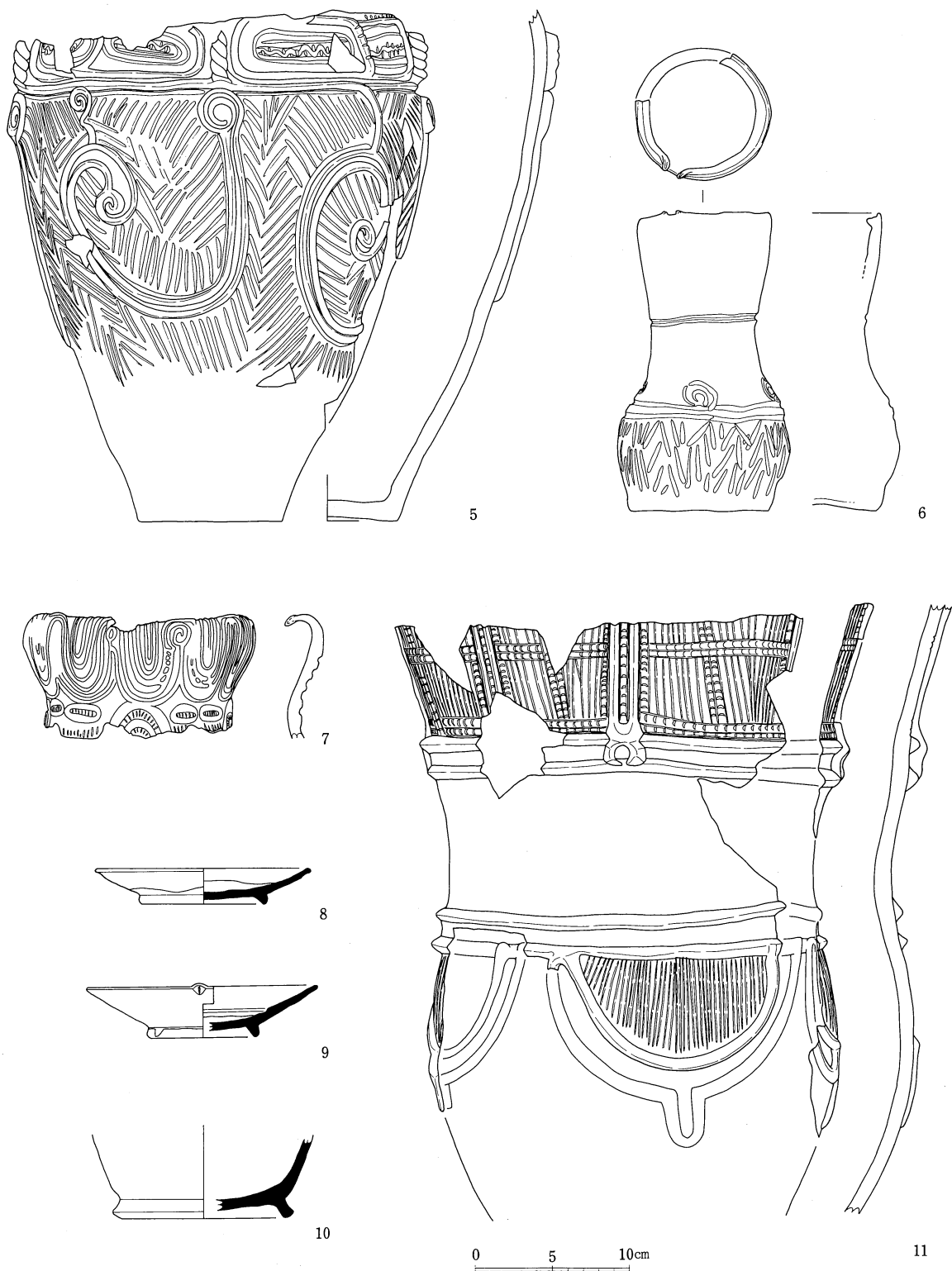
第3図 「信濃東筑摩郡埴原村地方の古物遺跡」略地図 (鷹野 1893より)



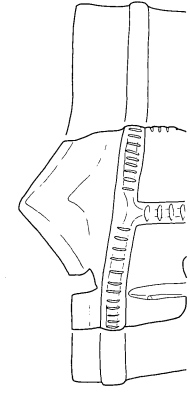
第4図 深沢遺跡住居址実測図



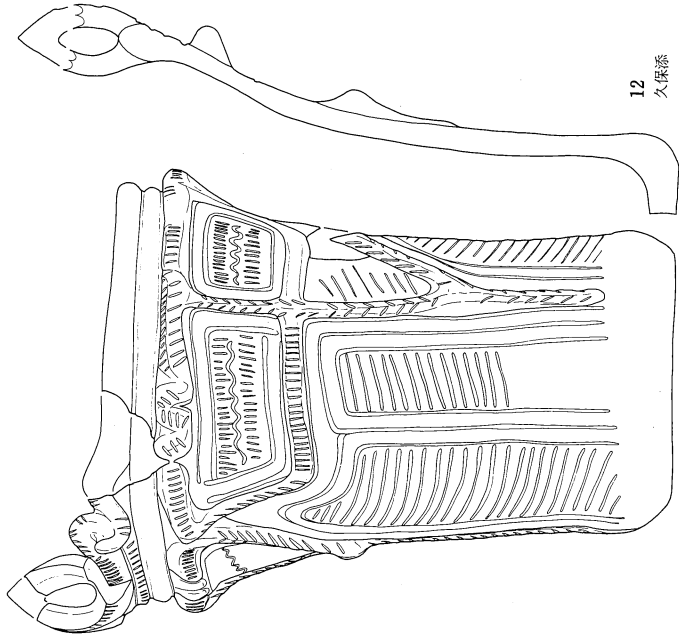
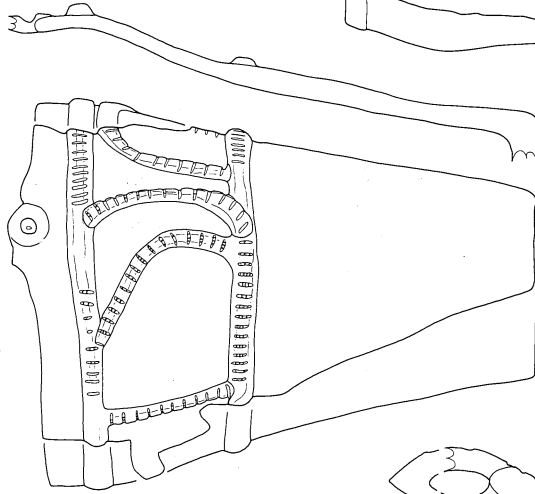
第 5 图 深沢遺跡出土遺物 (1)



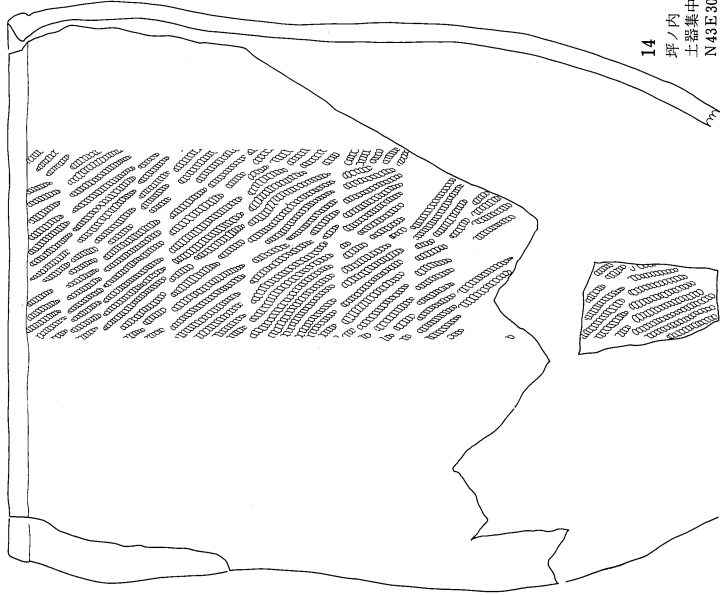
第6图 深沢遺跡出土遺物 (2)



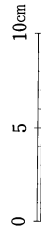
13 久保系



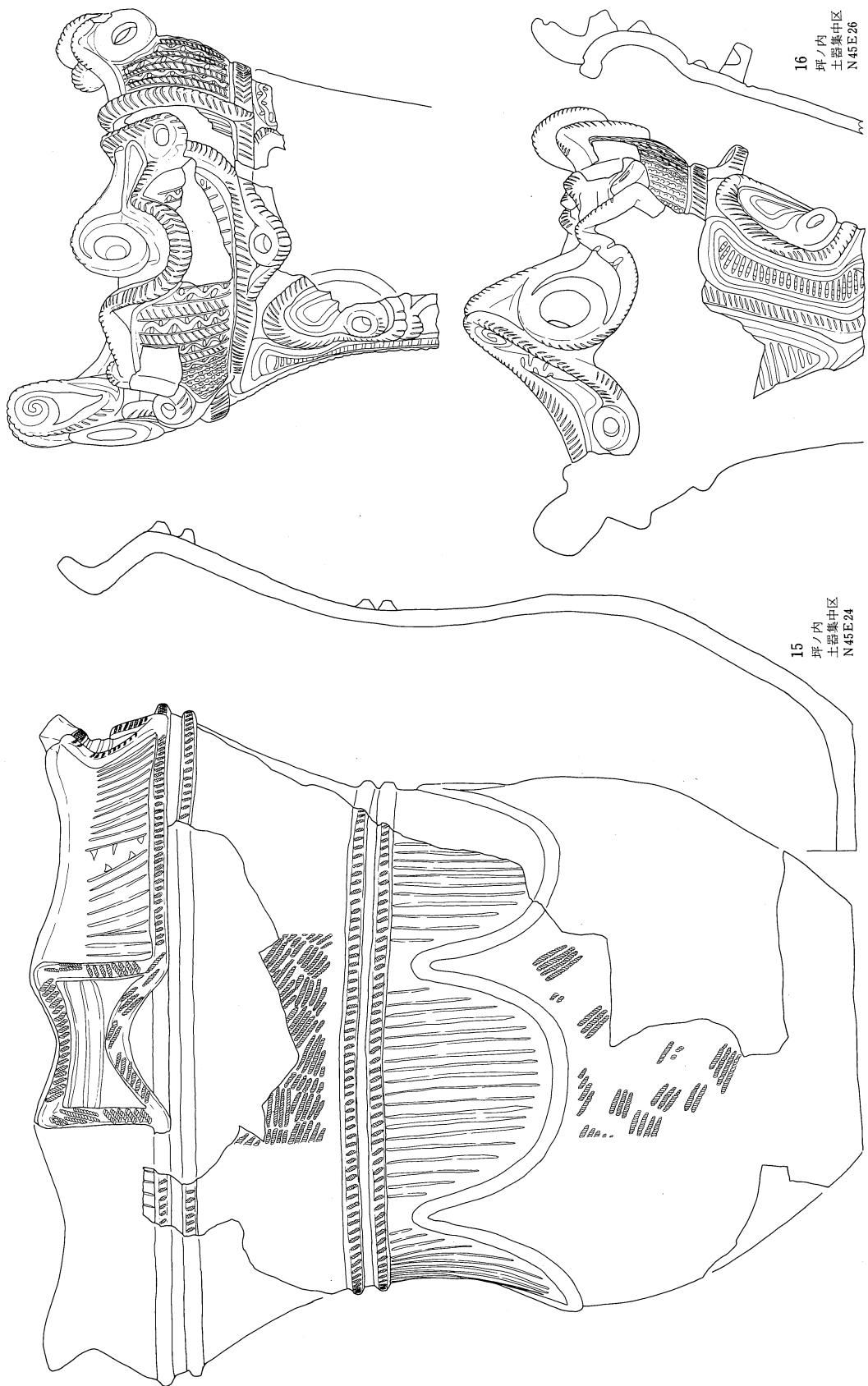
12 久保系



14 埴ノ内
土器塚中区
N43E30



第7図 周辺遺跡出土遺物 (1)

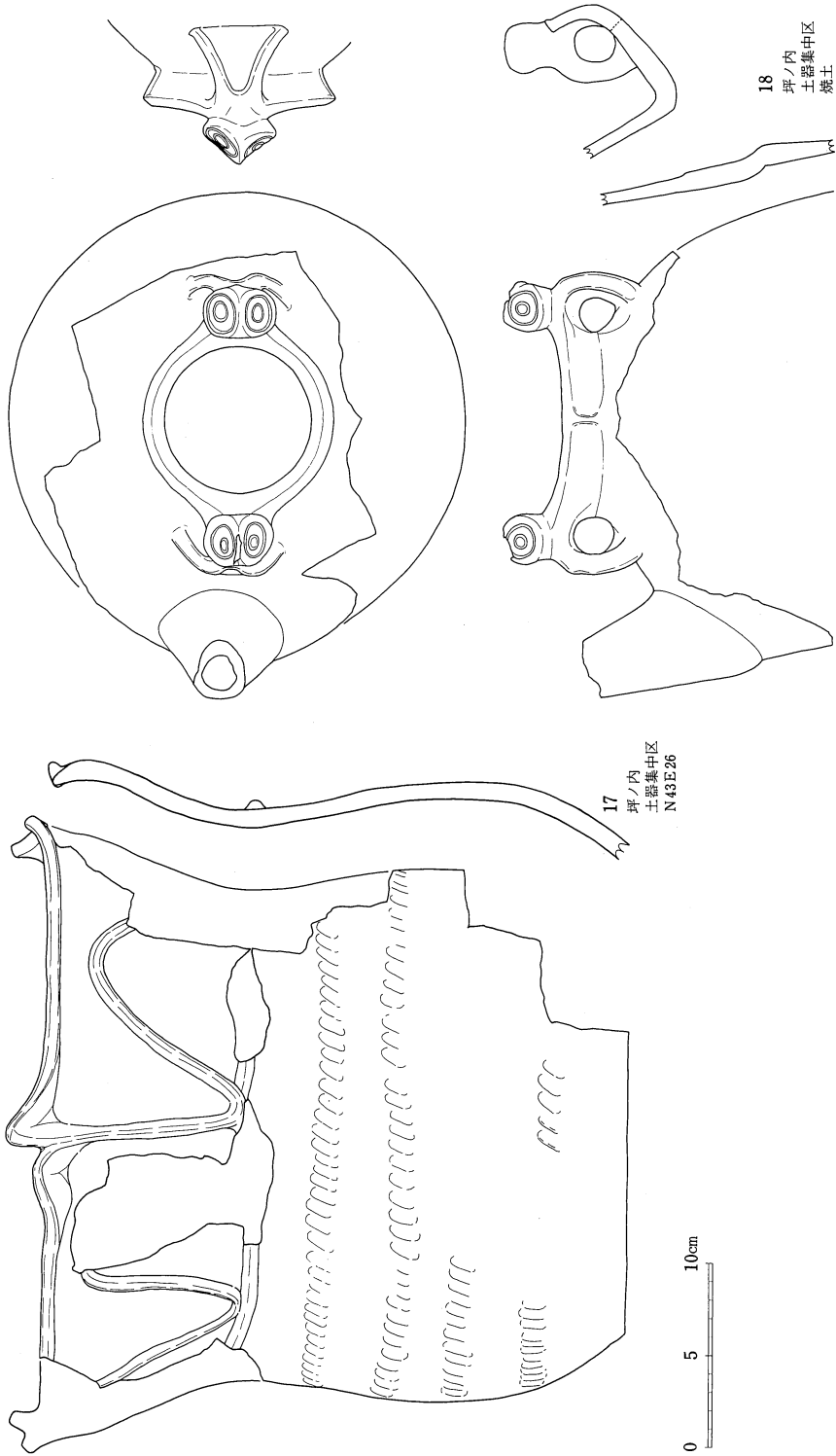


15
 塚ノ内
 土器集中区
 N45E24

16
 塚ノ内
 土器集中区
 N45E26

0 5 10cm

第8図 周辺遺跡出土遺物 (2)



第9図 周辺遺跡出土遺物 (3)

第4章 調査

第1節 調査の方法

1・2次調査とも、遺跡のある台地のは場整備の対象となる部分で重機による試掘調査を行ない、その結果をもとに調査範囲を決定した。調査面積は1次が1694㎡、2次が3113㎡である。なお2次調査直前に1・2次調査地東側で県道建設に伴う調査を行なっている。調査はまず重機によって全体の表土を地山（二次堆積ローム）の上面まで剥いだ後、遺構検出及び掘り下げを行なった。2次調査区の西側については、昭和20～30年代に人力による水田拡張工事が行なわれており、その際に遺構が存在したと思われる深さまで破壊されていたため、調査を行なっていない。また東側は県道のすぐ南まで各所に重機でトレンチを入れたが、遺構等は確認されなかった。遺構番号は検出時に規模より住居址・土坑に大別し、全体図作製の際、いずれも1から順に番号を付けた。2次調査では住居址はNo.2から、土坑はNo.41から付けている。1次調査で当初住居址として扱ったもののうち、掘り下げ中に住居址でないことが判明したものは、堅穴あるいは土坑とした。2次調査では同様の場合、土坑あるいは集石と考えられるものも多かったが、整理時の混乱を避けるため、名称の変更は行わず、本書の各項中に性格等を記している。また切り合いを誤認したものや掘り下げ中、新たに確認されたもの等の番号振り替えは行なっていない。このため時代の新しい住居の方が小さな番号をもつという原則が適用されない場合もある。なお整理の段階では、現場で使用した番号で注記等の作業を行なった。測量の方法は1次調査は調査区の南西隅、2次調査では調査区の中央部に基点を設定し、南北及び東西の方位に合わせて3×3mの方眼を組んで、調査区全体を覆い、これを基準として調査を行なっている。測量は全体図（1/200）を作製し、調査区全体の平面図（1/20）を作製した。高さの基準については調査区全体の高低差が著しいため、数か所に基準点を設定し、標高測量を行なった。遺構の掘り下げは住居址・堅穴状遺構・大形の土坑については十字に土層観察用のベルトを残して掘り下げ、記録した後完掘した。小形の土坑は半分割した後、土層を観察し、柱痕が明瞭なものや特殊な遺物を伴うもの等は土層断面図を作製、他は覆土と断面形を記録した後完掘した。遺物はある程度形の残るものについて位置を記録し、取り上げた。なお鉢塚の調査方法については鉢塚の項で後述する。最終的な全体図は1/20の平面図を接合作製した。等高線は調査時に地表面の1m毎に標高を測定し、これをもとに作製した。

遺物整理の方法

住居址出土の土器はすべて接合を行ない、図示可能なものを抽出し、図化した。土坑の遺物は発掘時の記録及び洗滌時の判別により抽出し、接合以降の作業を行なった。土器の図化にあたっては、手描きと写真実測を併用している。

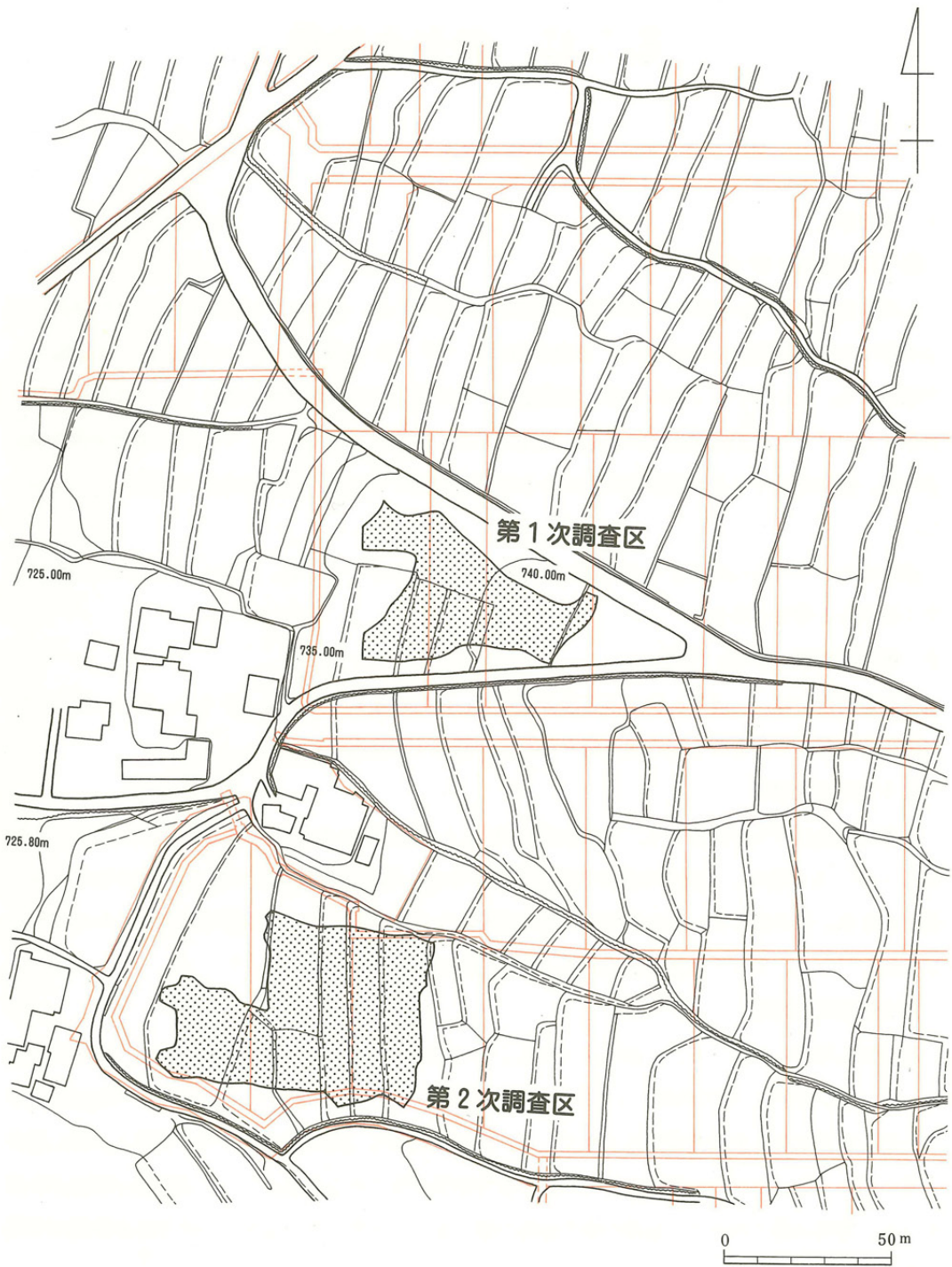
報告書の作製と表記

住居址の図は原則として、主軸を天地とし、入口と推定される方向を下に向けて統一した。ただし各施設等から入口の方向を判別するのが不可能なものは、この限りではない。大きさのデータは入口方向が明らかなものについては奥行を主軸長で、幅は主軸と直行する軸長の最大値で表し、はっきりしないものは長軸、短軸の長さを記している。住居址を切る遺構は位置を点線で示し、切られる遺構は図示していない。土坑は主要なものを抽出、図示した。一部のものは遺物のみの図示にとどめた。他は一覧表を作製し、データを記載した。土器を埋設した施設は、住居址の入口部のものを埋甕、他を埋設土器とした。埋甕は住居の一施設との観点から、数え方を1基、2基とし、土器そのものを示す場合は1個体、2個体とした。土器は後述する基準により分類して、時期別・系統別に配列し、図示した。住居址の遺物については、覆土中に混入した時期の異なるものを排除している。住居址が切り合っている場合で、明らかに別の住居址からの混入と考えられるものは、本来帰属すると思われる遺構の項に含めた。年代観については、土器の項を参照されたい。

第2節 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は以下のとおりである。

- | | |
|-------|--|
| 第1次調査 | 住居址1（平安時代）、竪穴状遺構4、土坑34 |
| 銚塚 | 中世墳墓？1 |
| 第2次調査 | 住居址30（縄文時代中期中葉9、同後葉21…ただし集石・竪穴などを含む）、
方形柱穴列2以上、土坑 |



朱線はほ場整備後の水田境を表わす。

第10図 調査位置図

第5章 調査の結果

第1節 第1次調査

1. 住居址

第1号住居址（第11図）

1次調査区南東部に位置し、第4号竪穴状遺構に切られる。重機による深い削平により平面形状は不明だが規模は南北4.4mを測り、主軸方向はN-49°-Wを指す。僅かに残る覆土は暗褐色土が堆積する。堅くたたきしめられた二次堆積ロームの床面には礫が多量に混入し、ゆるやかな起伏があった。ピットは20個検出されたが、支柱穴はなく性格は不明である。カマドは東壁中央に検出された。破壊されているが構築材を思わせる河原石が残っていた。底面はあまり被熱していなかった。

遺物はカマド付近の床面より土師器・灰釉陶器が少量出土している。これらの遺物から10世紀前半に属すると考えられる。

2. 竪穴状遺構（第12～13図）

今回の調査では、一辺3m以上の方形の竪穴で、住居址としての施設（カマド、柱穴、貯蔵穴等）が確認できなかったものを竪穴状遺構とした。今回は4基検出された。

第1号竪穴状遺構

本址は調査区中央に位置する。平面形状は南北4.1×東西3.6mを測る隅丸方形を呈し、長軸方向はN-18°-Eを指す。上部を全体に削平されているが、遺存状態は良好である。壁はなだらかに掘り込まれ、残存高は2～8cmを測る。床は礫を含む二次堆積ロームで軟質で地形に合わせて僅かに傾斜している。ピットは20基検出されたが、性格は不明である。

第2号竪穴状遺構

調査区北東部に位置する。平面形状は南北2.9×東西3.1mを測る隅丸方形を呈し、長軸方向はN-71°-Wを指す。壁は外傾して立ち上がり、残存高は8～17cmを測る。覆土下層～底面にかけて少量の炭化物及び多量の礫が含まれていた。底面は軟弱な二次堆積ロームで、地形とは逆に西から東へ向かって、わずかに傾斜しており、小さな起伏が多くみられる。ピットの施設は検出されなかった。遺物は覆土中より土師器の坏の底部の破片が1点出土しているが、小片のため時期は不明である。

第3号竪穴状遺構

調査区北東部に位置する。平面形状は南北2.5×東西3.8mを測る不整長方形を呈し、長軸方向はN-51°-Wを指す。壁はなだらかに掘り込まれ、残存高は8～26cmを測る。床は軟弱な二次堆積

ロームで起伏が著しく、地形に合わせて西へ向かって傾斜している。ピット等の施設は検出されなかった。遺物は覆土中より内耳鍋の口縁部の小片が1点出土している。本址の時期を決定できる資料はない。

第4号竪穴状遺構

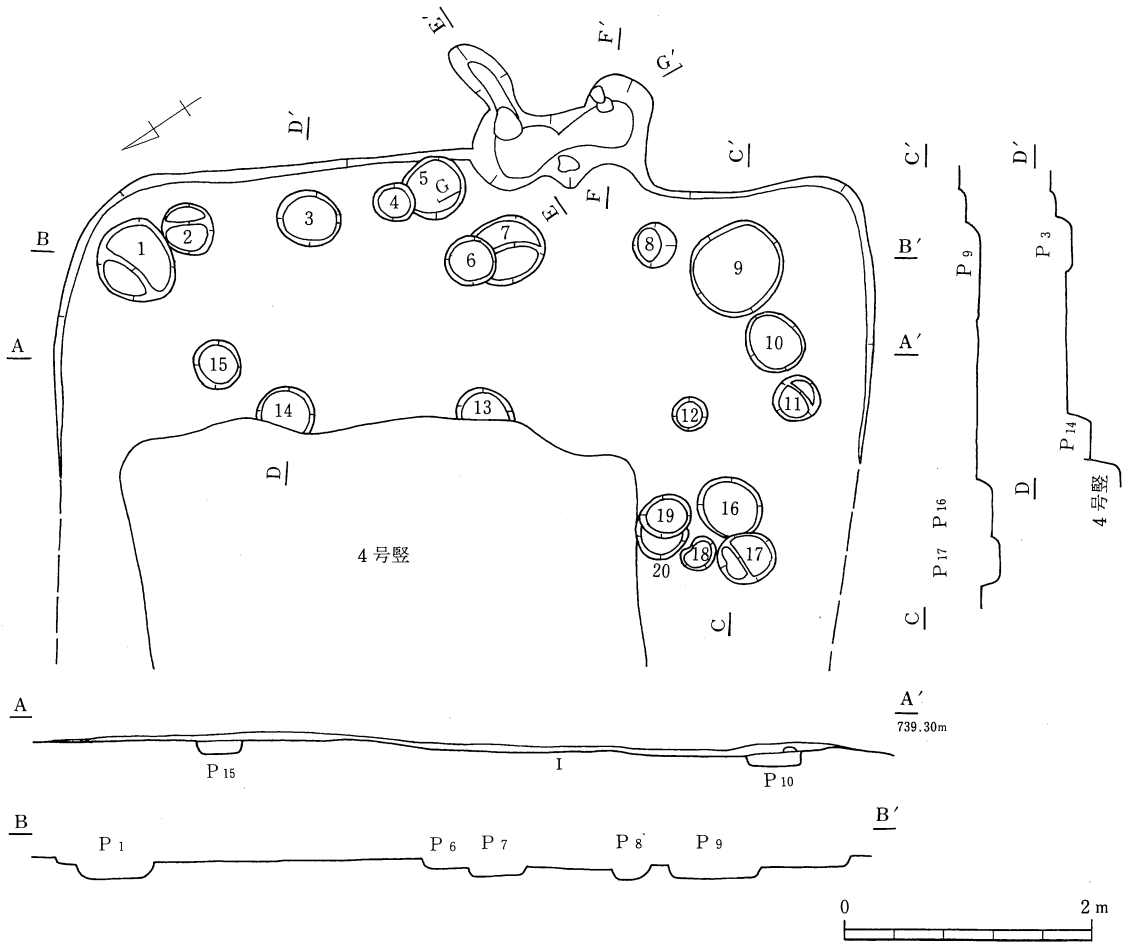
調査区南東部に位置する。第1号住居址を切り、第4号土坑に北西の隅を切られる。平面形状は南北3.5×東西4.0mを測る不整形を呈し、長軸方向はN-60°-Wを指す。壁はなだらかに掘り込まれ、残存高は8~30cmを測る。床は小礫を含む二次堆積ロームで軟弱である。全体に平坦で地形に合わせて西へ向かって傾斜している。ピット等の施設は検出されていない。本址からは少量の土器、陶器片が出土しているが、近世以降のものが多く、時期を決定できる資料はない。

3. 土坑

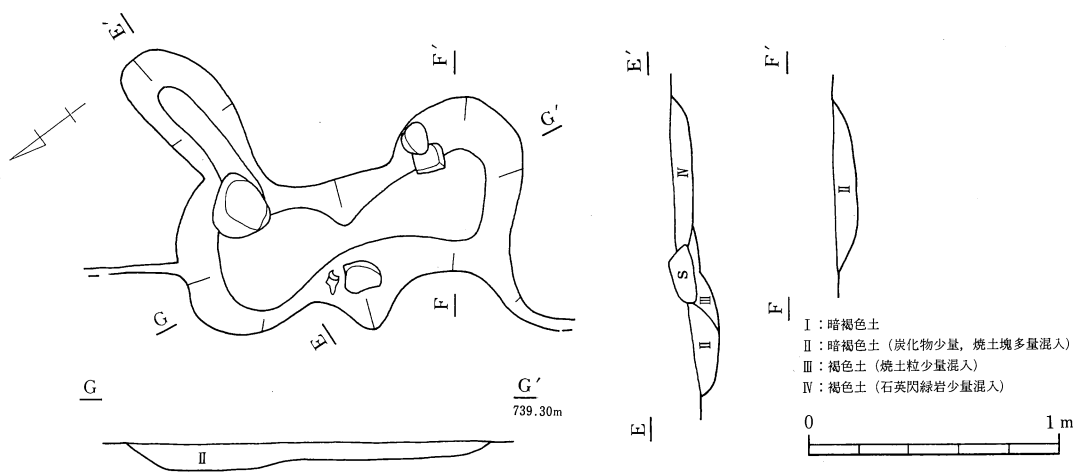
1次調査で確認された土坑は34基である。分布をみると北側中央に集中しており、東側の1住付近にもまとまってみられる。規模は長径で最大37~276cmである。便宜的に50cm単位で区分すると、長径50cm以下2、50~99cm15、100~149cm10、150cm以上6となる。平面形は楕円形のもの最も多く13基、以下円形11、隅丸方形6、その他(不整形)4となる。詳細については一覧表にデータを示したので参照されたい。ほとんどの土坑に出土遺物がなく、時期を決定できるものはない。

4. 第1号住居址出土遺物(第18図1~5)

2は土師器の坏である。ロクロ調整で体部内面から口縁外部にミガキが施されている。3は土師器の椀の体部とみられる。体部はロクロナデ調整が施され、下端部には高台の貼付け痕が観察される。5は土師器の羽釜である。内外面ナデ調整されており、口縁外面には指頭圧痕が観察される。1は灰釉陶器の小瓶である。頸部から肩部にかけてしか残存していない。外面は全面施釉されている。上記の組成から羽釜の存在が例外であるが、第1号住居址の時期は10世紀前半代と考えられる。

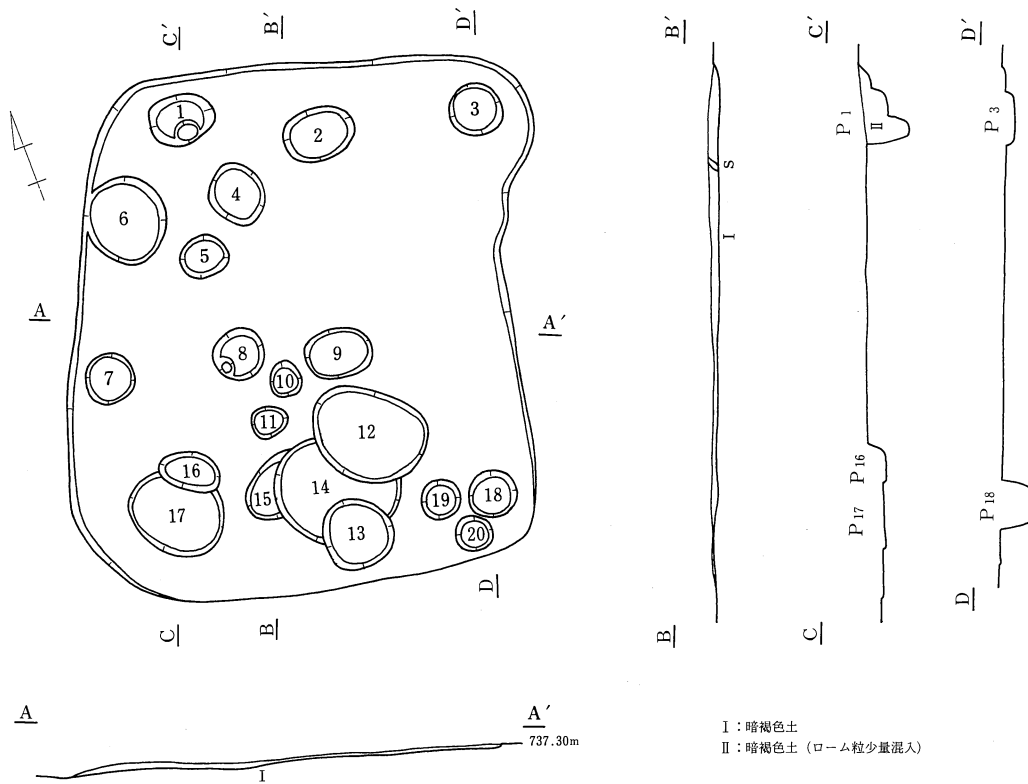


カマド

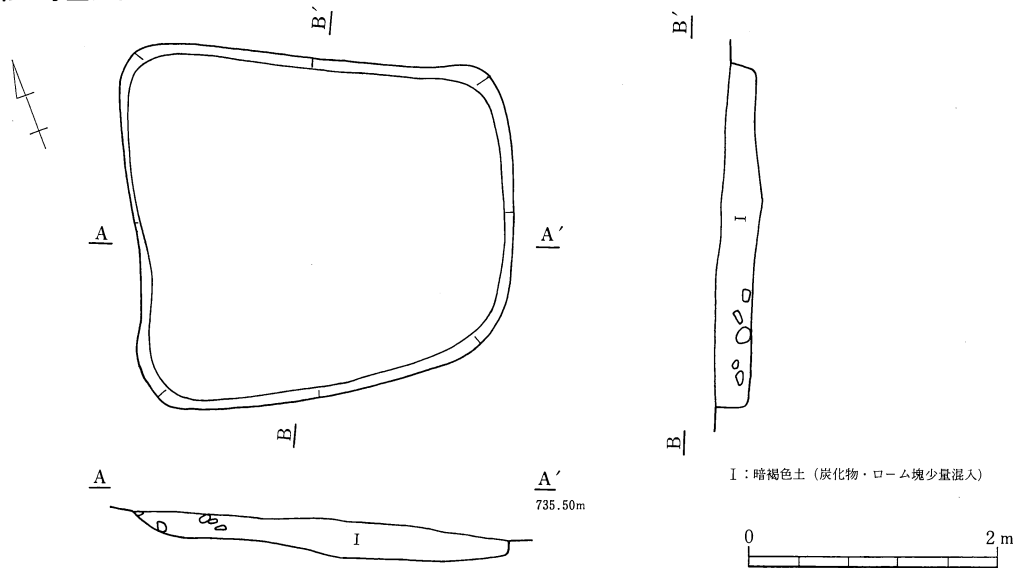


第11図 第1号住居址

第1号竖穴状遺構

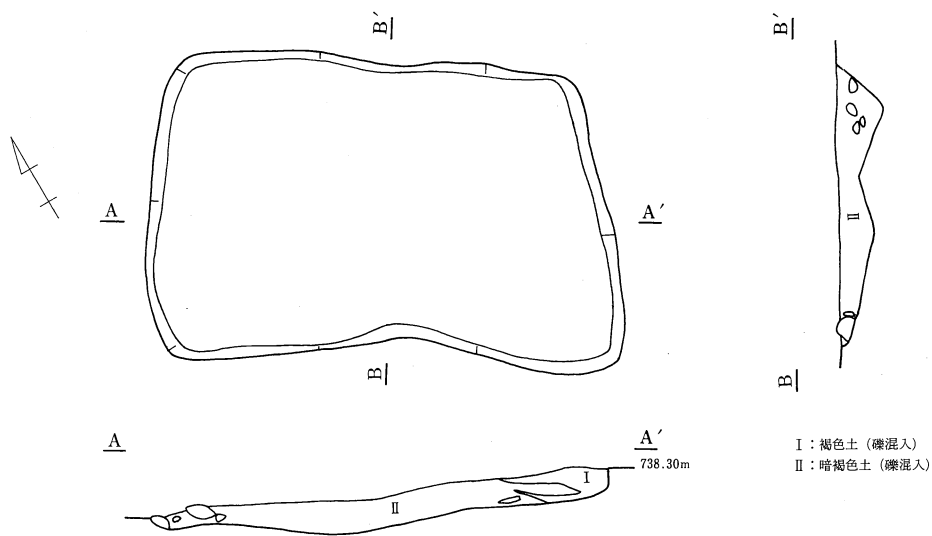


第2号竖穴状遺構

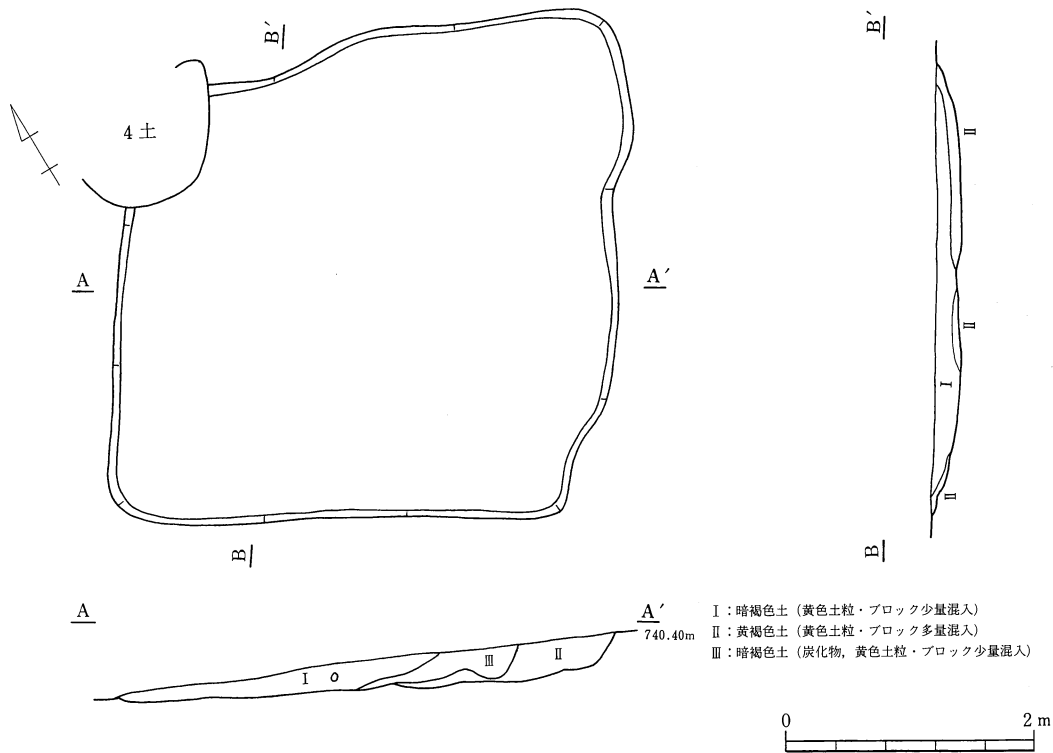


第12図 第1号・第2号竖穴状遺構

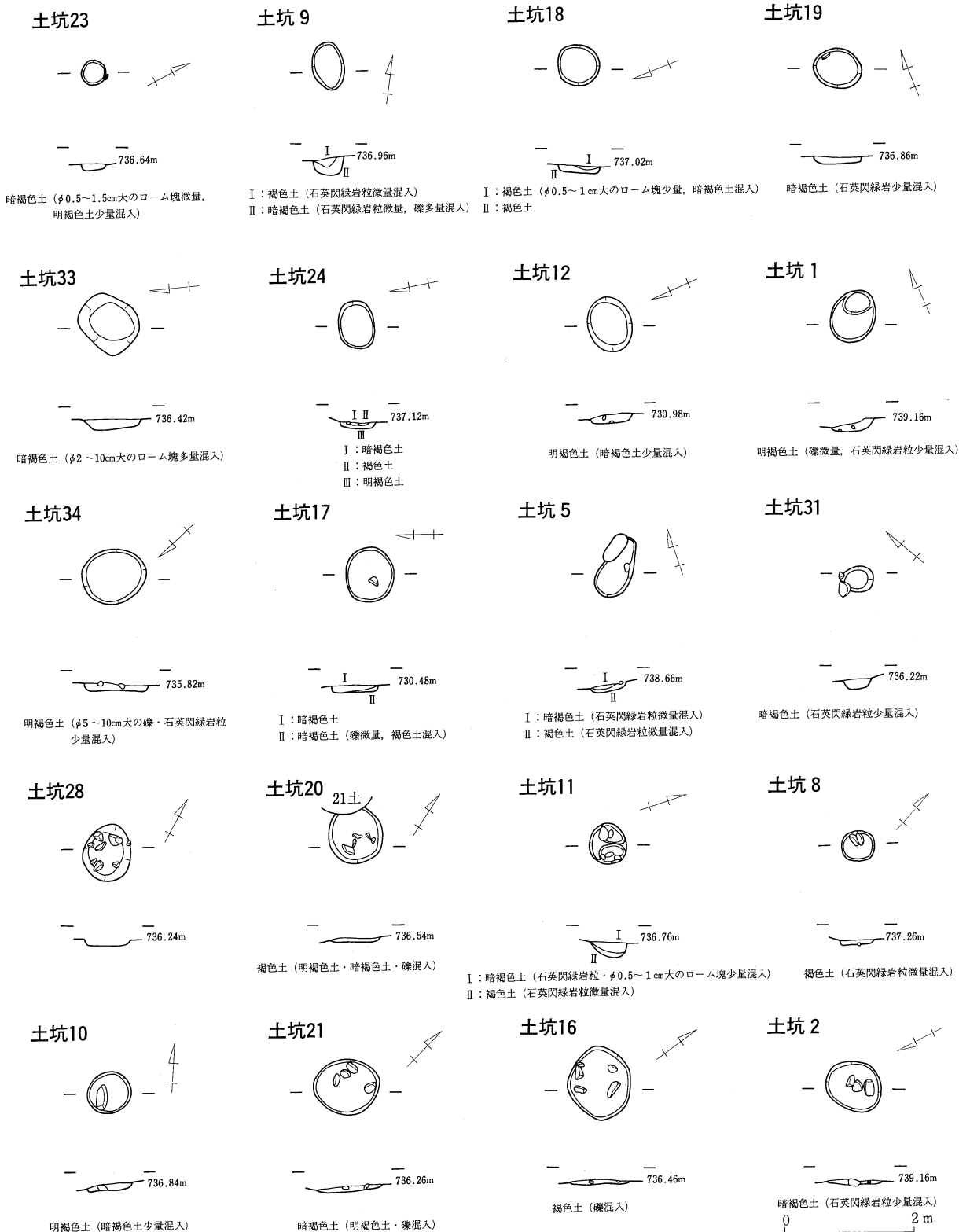
第3号竖穴状遺構



第4号竖穴状遺構

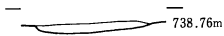
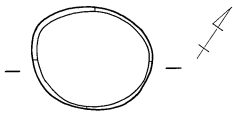


第13図 第3号・第4号竖穴状遺構



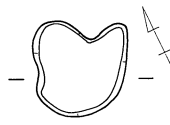
第14図 土坑 (1)

土坑 3



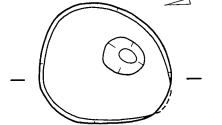
暗褐色土 (石英閃緑岩粒微量,
φ0.5~1.5cm大のローム塊少量混入)

土坑 4



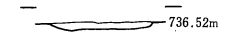
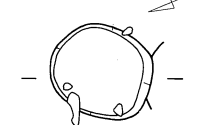
I : 暗褐色土
II : 褐色土

土坑32



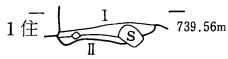
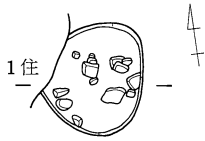
暗褐色土 (石英閃緑岩粒・明褐色土少量混入)

土坑25



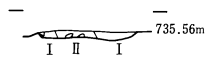
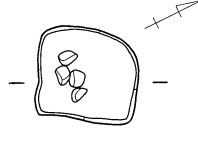
明褐色土 (石英閃緑岩・石英閃緑岩粒多量混入)

土坑 6



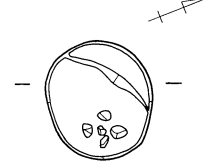
I : 褐色土 (石英閃緑岩粒・ローム粒微量混入)
II : 明褐色土 (石英閃緑岩粒微量混入)

土坑15



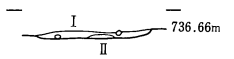
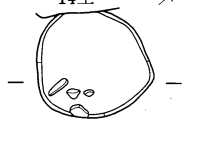
I : 暗褐色土
II : 褐色土 (礫微量, 石英閃緑岩粒少量混入)

土坑13



暗褐色土 (石英閃緑岩粒・礫少量, 褐色土混入)

土坑15
14土



I : 暗褐色土
II : 明褐色土 (礫混入)

土坑27



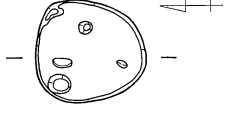
褐色土 (φ10~20cm大の礫多量混入)

土坑29



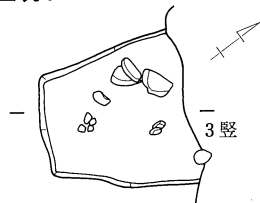
明褐色土 (石英閃緑岩・石英閃緑岩粒少量混入)

土坑30



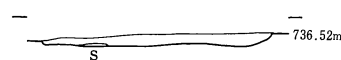
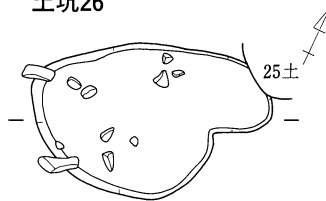
暗褐色土 (φ0.5~2cm大のローム塊微量,
石英閃緑岩粒少量, 明褐色土混入)

土坑 7



I : 明褐色土 (石英閃緑岩粒微量, 礫混入)
II : 褐色土

土坑26

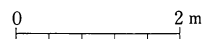


暗褐色土 (φ0.5cm大のローム塊微量, 石英閃緑岩少量,
石英閃緑岩粒多量混入)

土坑22



暗褐色土 (石英閃緑岩粒微量, 褐色土・礫混入)



第15図 土坑 (2)

第2節 鉾塚の調査

中山鉾塚田地籍の水田の間に『鉾塚』と呼ばれる4.0×4.0m、高さ50cmを測る方形の石積みがあり、信仰の対象となっていた。現状は中央最上部に東向きに石製の祠が祀られ、東方には私道に通じる参道がのびていた。この塚の年代や性格は不明であったが、中山地区には多数の古墳が確認されていることから、古墳である可能性も考えられていた。鉾塚が今回ほ場整備事業用地に含まれることになり、緊急発掘調査を行なった。

1) 調査

最初、明らかに最近持ちこまれたと思われる空き缶等のゴミと表面の礫を除去し、本来の石積みの状態を確認した。その結果石積みの平面形は隅丸方形を呈するもので、周囲に50cm大の礫を積み上げ、その内部に拳大の礫を詰め込んでいると判明した。南側の積石は南下の水田と境の石垣を兼ねており、そのまま東方へ長く続いていた。地元の話では、以前当地は南西に大きく傾斜をもつ畑地で、鉾塚の石積みは現況よりもかなり南方へのびていたということで、開田の際に削り取った南側の礫を使用して石垣を築いた様である。次に現況の平面・側面図を作成した後、南北方向に土層観察用の畔を残して石を外し、掘り下げを行なった。表面を覆う直径5～15cmの礫は深さ30cmほどでなくなり、以下底面までは礫と暗褐色土を混合して詰め込んであった。底面は石英閃緑岩を含んだ軟弱な二次堆積ロームで、大きな起伏があり、整地した様子は窺われなかった。また石積みと直交する形で北側にトレンチを設定したが、周溝等の施設は検出されなかった。

2) 遺物

遺物には土器・陶器・銭貨・鉄製品があるが、量的には少ない。

ア) 土器 トレンチより縄文土器小片が出土している。

イ) 陶器 (第18図6・7)

6は古瀬戸系陶器の四耳壺である。土石混合層中の底面から15cmほどの地点に正位で埋設されていた。頸部より上はすべて失われており、意識的に打ち欠いた可能性がある。胴部上半部及び内面底部に淡緑色の灰釉がかかっている。胴部は肩の張りがやや強い。肩部に付けられた耳部は、2本の小突線がほぼ対称に施されている。高台は細長く直立し、底部はヘラ削りの後にナデ調整されている。内面には粘土紐輪積み成形痕が観察されるが、横方向の雑なナデにより一部消されている。胴部外面下半部には赤彩が施されているが、塗ったというよりは縦方向にすりこんでいる。壺の内面には骨片等の遺物は認められなかったものの、出土状態などから蔵骨器と推定される。時期的には、藤沢良祐氏の編年の古瀬戸前期様式(13世紀代)に比定されるものと考えられる⁽¹⁾。

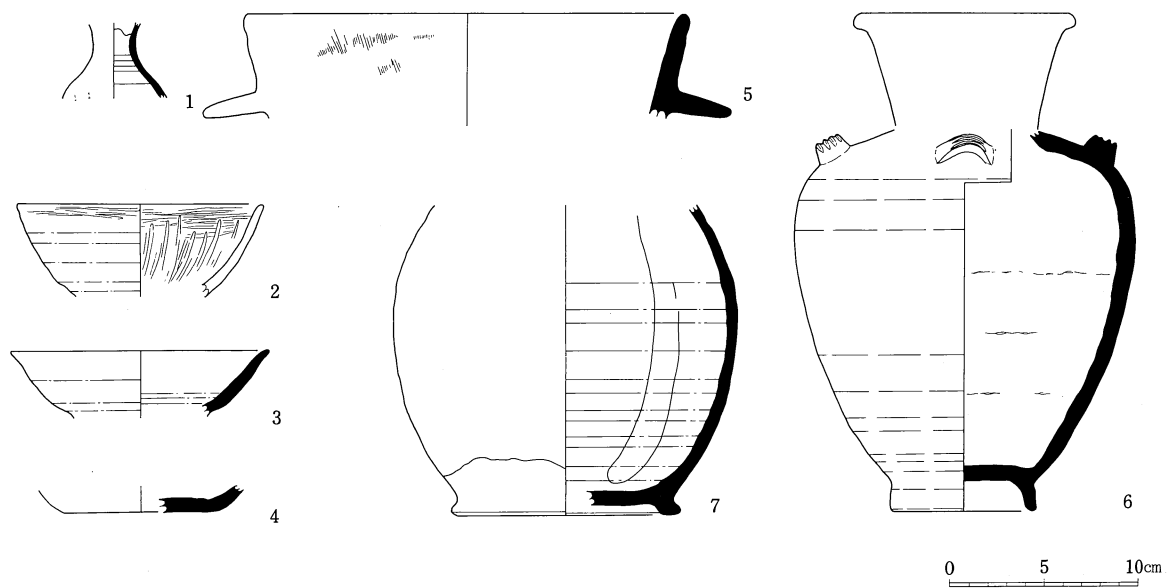
7は鉄釉がかかった壺類である。釉調は光沢のある黒色および黄褐色を呈し、胎土は茶褐色で焼成は良好である。底部は、ヘラ削りの後高台で中央付近に釉がかかっている。在地産とみられるが、産地は不明である。近世以降の所産とみられる。



第16図 鉾塚平面図 (1)



第17図 鉢塚平面図 (2)



第18図 第1次調査・鉢塚出土遺物

註1 藤沢良祐氏の編年観による。「古瀬戸」概説』『美濃陶磁器資料館報Ⅲ』1984年 土岐市美濃陶磁歴史館

ウ) 金属製品 (第19図)

銚塚地点から、鉄製品・貨幣が総計12点出土している。

1は火打ち金具である。中央部が山形に突出し、両端では垂直に立ち上がっている。類似する資料は吉田川西遺跡(塩尻市)の近世遺構などから出土している。

2～11は寛永通宝(初鑄年1636年)である。このうち、2は表面の鍍が鉄鍍で、他の貨幣の鍍が緑青である点と異なっている。また、11は裏面に「元」銘がみられる。銚塚の現存していた石製塔から、これらの寛永通宝は近世の信仰にかかわる遺物—例えば賽銭など—と考えられるものである。

このほかに、器種は不明であるが、茎部と考えられる鉄製品1点が出土している。

3) 結果

銚塚は今まで古墳ではないかと考えられていたが、石積みは古墳の石室ではなく、中世の墳墓であると判明した。松本平では中世以降の土坑墓の調査は松本市向畑遺跡等で実施されているが、墳墓としては今回が最初の調査例となった。また古瀬戸系陶器の蔵骨器の出土は松本市和田衣外の四耳壺に次いで2例目である。銚塚の所属時期はこの四耳壺より13世紀代に位置付けられるが、礫層中からも陶器の壺・寛永通宝・火打ち金具が出土しており、近世以降に於いても信仰の対象となっていたのであろう。銚塚の被葬者については、言い伝えもなく不明だが、地域の有力者が埋葬されていると思われる。

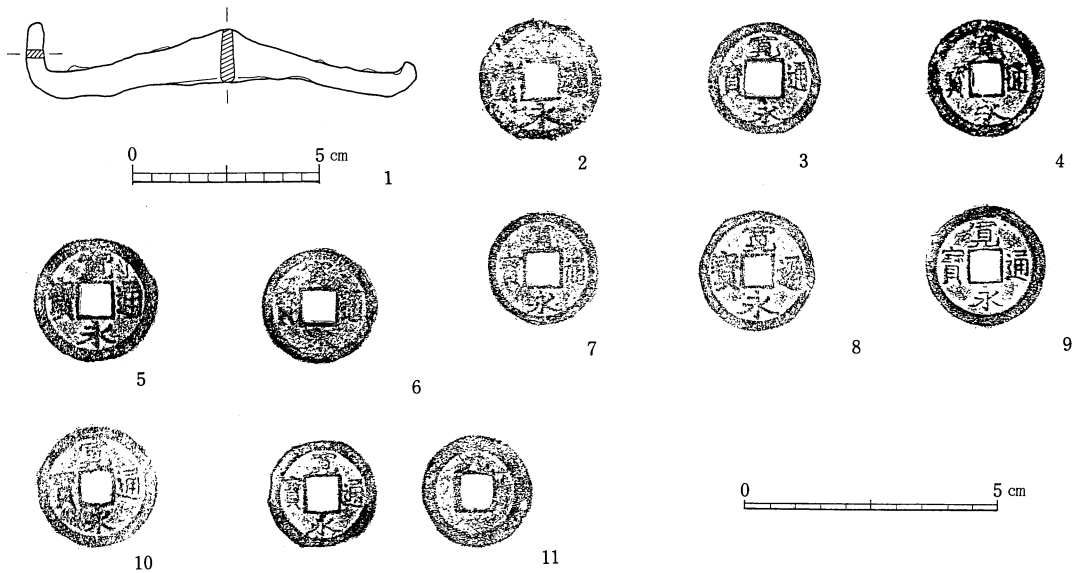
参考文献 松本市教育委員会1972『松本市和田衣外四耳壺出土報告書』

第1表 金属製品一覽表

No.	図No.	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損状況	備考
1	1	火打ち金具	(1.9)	10.3	(0.4)	(12)	片側端部欠	
2		不明	(3.8)	(0.9)	(0.2)	(1)	片側欠	基部?

第2表 貨幣一覽表

No.	図No.	名称	直径 (cm)	重量 (g)	備考	No.	図No.	名称	直径 (cm)	重量 (g)	備考
1	2	寛永通宝	2.51	3.40		6	7	寛永通宝	2.30	2.75	
2	3	〃	2.30	2.40		7	8	〃	2.40	2.75	
3	4	〃	2.41	3.40		8	9	〃	2.43	4.00	
4	5	〃	2.50	3.05		9	10	〃	2.41	3.35	
5	6	〃	2.28	2.70		10	11	〃	2.24	2.20	裏面に「元」銘



第19図 金属製品

第3節 第2次調査

1. 住居址

(1) 縄文時代中期中葉の住居址

今回の調査では9軒検出されている。調査区の北東から東側に分布している。各住居の項で後述するように炉等の施設が遺存するものは少なく、堅穴もしくは大形の土坑と考えられるものがほとんどである。資料が少ないため集落の展開等は不明である。なお今回の第2次調査区の西側、久保添地籍では昭和40年代に道路の拡張を行なった際、同時期の土器が多数出土している。これらの土器は現在松本市立考古博物館に保管されているが、完形に近い資料も多く、この付近にも同時期の遺構が存在したものと推定される。

① 第2号住居址（第20図）

調査区の北東隅に位置する。南側の一部を第24号住居址に切られ、西側は大きく削平されている。プランは不整形円形で、南西側が入口と推定される。主軸はN-24°-Eとなる。規模は奥行（南西-北東）推定3.9m、幅（北西-南東）3.8mである。覆土は自然堆積で微量の焼骨片を含み、北側には石英閃緑岩の礫を多量に混入する。床は地山の二次堆積ロームを固めているが、比較的軟弱である。主軸上の中央やや奥寄りに埋設土器があり、その周辺で若干の焼土を確認したこと、土器に被熱がみられることから、炉は埋甕炉であったと推定される。土器は胴部のみ埋設され、遺存状態は良好であるが、風化が著しい。掘り方は奥壁方向へ延びている。柱穴は埋設土器を囲むように検出されている。柱痕の明瞭なものもあるが、深さ等のバラツキがあり、本来の配置や構造は不明である。遺物の量は多く、中央部の床面直上から10cm程上のレベルより、12個体の土器が潰れた状態で出土している。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期中葉勝坂Ⅱ期と推定される。

② 第5号住居址（第21図）

調査区の北東に位置する。東側の覆土上層の一部を第23号住居址及び近世の暗渠に切られる。プランは不整形円形で、入口は南西側と推測される。規模は奥行（南西-北東）6.7m、幅（北西-南東）5.2mあり、主軸はN-30°-Eである。覆土は土器と多量の石英閃緑岩の礫を含んでいる。壁は比較的しっかりと掘り込まれており、遺存状態は良好であった。床は二次堆積ロームを固めており、壁際は堅くしまっている。中央部にはおよそ4×3mの不整形をした凹みがある。炉は床面の中央付近にわずかな焼土を認めたが、はっきりしない。柱穴は壁に沿って巡るように検出されたが、柱痕の明瞭なものはなく、構造等も不明である。

遺物は覆土中より多量の土器が出土している。大きく分けると、床面中央の掘り込み内からのものと覆土上層～床上約5cmから出土したものとなるが、両者間で接合した個体もあり、時期差は認められない。全体量は整理箱（54×34×20cm）で8箱分にもなる。個体数では70個以上を数え、

1個体がそのまま潰れた状態で出土したものも少なくない。ほとんどが深鉢であるが、大きさは多様である。その他数片の押型文土器、第23号住居址からの混入と思われる中期後葉の土器が少量みられる。土器以外では多量の石器、土偶の胴部1点（第118図2）が覆土中より出土している。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期中葉勝坂Ⅳ期と推定される。

③ 第32号住居址（第25図）

調査区の北東部に位置する。上部を第4号住居址に切られている。大半が調査区外へ延び、一部を検出したのみである。床として捉えた西側がしっかりしていて、柱穴と思われる穴もあるため、住居とした。規模・プランとも不明である。床は地山の二次堆積ロームを固めている。炉は確認されなかった。遺物は多い。中期中葉のもの他、少量後葉の破片があった。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期中葉勝坂Ⅱ期と推定される。

④ 第9号住居址（第22図）

調査区の中央やや東寄りに位置し、南側で第10号住居址を、また西側で第12号住居址を切る。長軸4.2m、短軸3.8mの不整円形を呈する。全体に削平されており、遺存状態は良くない。床は地山の二次堆積ロームを固めたもので、軟弱だった。柱穴は壁に近いところで検出されているが、柱痕の明瞭なものもなく、構造等は不明である。遺物量は極めて少なく、他遺構からの混入も多い。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期中葉勝坂Ⅳ～Ⅴ期と推定される。なお住居址として扱ったが、炉の検出もなく、性格は竪穴もしくは大形の土坑と考えたい。

⑤ 第10号住居址（第23図）

調査区の中央部に位置し、北側で第12号住居址を、東側で第11号住居址をわずかに切っている。全体に削平されており、西側は床面以下まで破壊されていたため、柱穴の配置から不整円形のプランを推定した。規模は南北5.5m、東西推定5.6mである。床は地山である二次堆積ロームを固めた軟質なもので、地形に合わせて西側が低くなっている。柱穴は壁に沿って巡るものと推定されるが、柱痕が明瞭にわかるものもなく、構造等は不明である。遺物量は少量で、他からの混入と推定されるものが多くみられる。

本址の時期は出土遺物より、縄文中期中葉勝坂Ⅱ期と推定される。なお本址も住居址として扱っているが、炉の検出がなく、竪穴もしくは大形の土坑と考えたい。

⑥ 第11号住居址（第24図）

調査区の中央やや東寄りに位置する。西壁を第10号住居址に、東壁を第341・342号土坑に切られる。また全体に削平されているため遺存状態は良くない。規模は長軸4.3m、短軸3.7mで、不整円形のプランを呈する。床は地山の二次堆積ロームで軟質だった。柱穴は東側に集中して検出されたが、柱痕は不明瞭で、いずれも浅く、構造等は不明である。遺物は少なく、他時期の混入がかなりある。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期中葉と推定される。なお本址も住居址として扱って

るが、炉の検出がなく、竪穴もしくは大形の土坑と考えられる。

㉗ 第13号住居址（第25図）

調査区の東端に位置する。規模は長軸5.5m、短軸4.2m、プランは不整楕円形である。上部の削平が激しく、遺存状態は良くない。床は地山の二次堆積ロームを固めているが、軟質である。また地形に沿って西に傾斜している。施設はピットが3個検出されたのみである。遺物の量は極めて少なく、主体と思われる中期中葉のもの以外、他時期の混入も多い。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期中葉勝坂Ⅰ期と推定される。なお住居址として扱ったが、炉の検出がなく、竪穴もしくは大形の土坑と考えられる。

㉘ 第8号住居址（第26図）

調査区の中央東側に位置する。規模は南北4.6m、東西4.6m、プランは不整円形である。上部に削平を受けているが、遺存状態は良好である。床は二次堆積ロームを固めており、軟質である。炉は検出されなかった。柱穴は東側を除いて検出されているが浅く、柱痕も明瞭でない。遺物の量は極めて少なく、他時期の混入もみられる。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期中葉勝坂Ⅰ期と推定される。本址も住居址と扱っているが、炉がなく、竪穴もしくは大形の土坑と考えられる。

㉙ 第12号住居址（第27図）

調査区の中央東寄りに位置する。東～南の大半は第9・10・11号住居址に切られている。南西部は削平されており、遺存状態は良くない。プランは不整円形となり、規模は推定で南北6.6m、東西5.6mである。床は地山の二次堆積ロームを固めており、軟質である。炉は見つかっていない。柱穴は多数検出されているが、浅く、柱痕の観察できたものもほとんどない。構造等是不明である。遺物は微量で、早期から中期後半まで様々な時期のものが混在している。

本址の時期は切り合いより、縄文時代中期中葉以前と推定されるが、明確な時期は不明である。なお本址もまた住居址として扱っているが、竪穴もしくは大形の土坑と考えたい。

(2) 縄文時代中期後葉の住居址

今回の調査では21軒検出されている。調査区の北東辺に沿って15軒が弧状に分布し、他の6軒は中央寄りに位置する。中央部の6軒は後述するように、住居址というより、土坑または下層に竪穴状の掘り込みをもつ集石と考えられ、この時期の集落は調査区中央部の広場とその北側に分布する住居址群により構成されていたと考えられる。住居址の時期は、中期後葉の各段階のものがある。

㉚ 第14号住居址（第28・29図）

調査区の北部に位置し、西側を第28号住居址に切られている。なお本址掘り下げ中に第28号住居址を確認したので、遺物等は本址のものとして扱われているものが多い。規模は奥行（南東―北西）6.2m、幅（南西―北東）推定6.3mである。プランは不整円形で、入口を南東と推定した。主軸は

N—10°—Wである。覆土には多量の石英閃緑岩の大礫と少量の焼骨片が含まれる。壁は第28号住居址と重複する部分を除いて、深くしっかりと掘り込まれている。床は地山である二次堆積ロームを固めたもので、堅くしまっている。全体に平坦だが、入口側がわずかに下がっている。奥壁近くには炭化材や焼土が多量で、この部分には骨片も多くみられた。

炉は中央南東寄りに位置する。円形の石囲炉で、入口方向に開いて石を配置している。規模は奥行1.0m、幅0.8mであり、石英閃緑岩を使用した炉石は被熱による風化が著しい。掘り込みは浅く、底部はあまり焼けていなかった。入口側には深い掘り込みがあるが、この中の土と炉内の覆土に差異はなく、掘り込み部に焼土等もみられないことから、本址の炉に切られる古い遺構の可能性が高い。柱穴は壁際を巡るように検出された。柱痕の明瞭なもの（P₂・P₆・P₇・P₁₀・P₁₃・P₁₆）は東壁に沿って分布している。これらが主柱穴と想定され、他は補助的な性格をもつものと推定される。遺物の量は非常に多いが、本址に直接伴うものは少量である。覆土上層から出土した遺物には中期後葉のものが多く、この時期の遺構が周辺に存在したものと思われる。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅰ期と推定される。

② 第29号住居址（第30・31図）

調査区の中央北寄りに位置する。第18号住居址の掘り下げ時に存在が確認された。北側の一部を第19号住居址に、南側の大半を第18号住居址に切られている。全体のプランは不整形と推定される。床は地山の二次堆積ロームを固めているが、あまり堅くない。特に東側は地山の礫が多い部分に掘り込まれており、荒れている。炉は遺存していない。遺物の量は少なく、他遺構からの混入と思われるものも多い。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅰ期と推定される。

③ 第16号住居址（第31図）

調査区の北辺中央付近に位置する。周辺の住居址の掘り下げ時に存在が確認された。東側を第28号、西側を第15号・第26号の各住居址に切られ、南側は削平により破壊され、北側は調査区外に延びる。炉の残骸と床及び柱穴の一部が遺存するのみで、全体の規模等は不明である。覆土は暗褐色土で、少量の炭化物を含む。床は地山の二次堆積ロームを固めており、平坦で堅くしまっている。炉は北側の端で検出された。西側を第26号住居址に切られているが、本来の形態は石囲炉と推定される。炉石は石英閃緑岩の板石で、西及び南側の一部にのみ遺存し、被熱によって風化している。炉中央の掘り込みは20cm程度と浅く、底は良く焼けている。柱穴は壁に沿って巡るものと推定されるが、柱痕等は認められない。遺物の量は多いが無文のものがほとんどで、切り合う他の住居からの混入と思われるものも多い。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅱ期と推定される。

④ 第18号住居址（第32図）

調査区の中央北寄りに位置し、第29号住居址を切っている。全体に削平されており、遺存状態は

良くない。規模は南北4.3m、東西4.8mであり、不整円形のプランを呈する。覆土は暗褐色土で、多量の礫を含む。床は二次堆積ロームを固めたもので堅いが、平坦ではなかった。遺物は多量に出土しているが、他遺構からの混入が多い。唐草文系の土器が主体で、ほとんどが大形～中形の深鉢である。

本址の時期は縄文時代中期後葉Ⅱ期と推定される。

⑤ 第26号住居址（第33図）

調査区の中央北隅に位置する。南側で第15号住居址を切っており、北側のほとんどは調査区外に延びる。当初は15住として掘り進めていたが、途中で本址を確認した。規模・平面形は不明である。壁の遺存状況は良好である。床は二次堆積ロームを固めたもので、堅くしまっている。南側では周溝を確認している。遺物量は少なく、唐草文系の土器が主体である。他に古墳時代のものと思われる土師器の破片が数点混入している。

本址の時期は縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

⑥ 第3号住居址（第34・35図）

調査区の北東隅に位置する。水田造成時の削平で西側の上部が壊されているが、遺存状態は極めて良好である。プランは方形に近い円形で、規模は南北5.4m、東西5.8mであった。入口は南側と推定され、主軸はN-5°-Eである。覆土には多量の礫と少量の骨片が含まれ、特に南西部には骨片の混入が多くみられた。壁はやや斜めに掘り込まれている。周溝が北側へ半円形に巡り、また入口の東側に2.5m延びている。なお入口側の周溝外にはわずかな段がみられる。床は地山の二次堆積ロームを固め、平坦で堅くしまっているが、入口側は荒れている。炉は奥行1.3m、幅1.4mの大形の石囲炉で、廃絶時の破壊は行われていない。炉石は石英閃緑岩で被熱による風化が著しいものの、遺存状態は良好である。四方とも1枚の板石で、入口側には裏込めと思われる拳大の石がみられる。中央の掘り込みは深く、底は良く焼けている。柱穴はP₃・P₆・P₉とP₁₃の外側が支柱穴で、柱痕が明瞭に観察された（P₁₃は当初別の土坑と誤認して調査したために柱痕を観察できなかった）。またP₅・P₁₀・P₁₅は床を壊した下から検出された。いずれも遺物を伴わないが、本址に切られた古い時期のもの、あるいは本址の床下に設けられた何らかの施設の可能性がある。埋甕は入口部に唐草文系の大形の深鉢（第80図74）を正位で埋めている。埋設後の土圧によると推定される破損が著しい。底部は壊されていない。掘り方は土器よりやや大きく掘られており、入口東側の周溝を切っている。口縁は床面とほぼ同レベルであったと推定される。遺物の量は非常に多い。土器は唐草文系が主体で、小形の深鉢が多い。入口側の周溝外の床面直上からは土偶の足が1点（第119図1）、P₆の床面とほぼ同レベルからは器台（第80図73）が出土している。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

⑦ 第15号住居址（第36・37図）

調査区の中央北側に位置する。東側で第28号住居址を切り、第26号住居址に北側を切られる。遺

存状態は極めて良好である。プランは方形に近い不整形で、入口は北西と推定される。規模は奥行（北西—南東）推定5.0m、幅（北東—南西）4.9m、主軸はN—110°—Eである。覆土には多量の礫が含まれる。入口と奥の壁はしっかり掘り込まれているが、南側はゆるやかに立ち上がっている。南壁に沿って礫が列状に並んでおり、これは意識的に配されたものかもしれない。床は地山の二次堆積ロームを固めており、堅くしまっている。全体に平坦だが、入口側はわずかに低くなっている。炉は大形の石囲炉と推定されるが、炉石は抜き去られ遺存しない。中には唐草文系の大形の深鉢2個体分（第81図79・80）の破片が敷かれており、表面には被熱がわずかに認められる。底部に土器片を敷くこのタイプの炉は、松本平では検出例の少ないものである。柱穴は配置からP₁・P₅・P₉・P₁₀の4本を主柱穴と推定するが、北側の2本（P₁・P₉）が柱痕を明瞭に観察できたのに対し、南側の2本は浅く、柱痕も明瞭ではなかった。埋甕は入口壁より約1m内側にあり、胴部下半を切断した加曾利E系の深鉢を正位で埋設している。土器の底部は掘り方に接し、口縁は床よりわずかに上へ出ていた。土器の遺存状態は良好であった。また土器内は自然堆積により埋没している。遺物の量は非常に多い。土器は唐草文系と加曾利E系が混在する。唐草文系は大形の深鉢が多く、加曾利E系のものには小形の深鉢がある。炉の手前にある、P₈の中からは、彫刻を施した石皿（第118図156）が出土した。覆土上層から出土した土偶の足は第24号住居址の破片と接合している（第119図3）。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

㊦ 第17号住居址（第38・39図）

調査区の中央北寄りに位置し、南側で第29号住居址をわずかに切る。後世の削平や攪乱による破壊が著しく、検出時には埋甕が露出していた。プランは不整形で、入口は南西側と推定される。規模は奥行（南西—北東）6.8m、幅（北西—南東）6.5mで、主軸はN—58°—Eである。覆土は暗褐色土で、北東部には多量の土器が混入している。壁は削平され、遺存状態は極めて悪い。床は地山の二次堆積ロームを固め、遺存状態の良好な部分は堅くしまっている。炉は後世の攪乱により破壊されたと思われる、遺存しない。床面に焼土等がみられないため、位置も不明であるが、P₁₇付近にあったと推定される。奥壁部には礫が集中し、この部分から深鉢1個体（第82図86）が出土している。柱穴はP₁・P₄・P₈・P₁₄の西側が配置より主柱穴に想定されるが、全体の構造等ははっきりしない。埋甕は唐草文系の大形の深鉢の胴部が正位で埋設されている。掘り方は北西側は土器ギリギリに、南西側は大きく延びている。下部は埋設時に壊され、また上部は削平されていて、わずかに遺存するのみである。遺物量は少ない。唐草文系の土器が主体で、少量の無文土器が伴う。

本址の時期は縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

㊧ 第23号住居址（第40・41図）

調査区の北東に位置する。西側で第5号住居址をわずかに切り、北側を第27号住居址に切られる。当初第27号住居址を未検出のまま掘り下げたが、途中で2軒と判明した。プランはやや角張った不

整楕円形で、入口は南側と推定される。規模は奥行3.7m、幅4.6m、主軸はN-12°-Eである。覆土には少量の石英閃緑岩の礫と焼骨が含まれる。南半部の覆土中には集石状の礫の固まりがあり、その下には少量の灰がみられた。また北東及び北西の壁際には地山中の大形の石英閃緑岩があるが、住居を作った際に除去できずに残されたものと推定される。なお入口側の一部と奥壁に周溝が巡っており、北東部では露出した石を避けて掘られていた。壁はしっかりと掘り込まれており、遺存状態は良好である。床は地山の二次堆積ロームを固めたもので堅くしまっているが、わずかに荒れている。全体に平坦であるが、入口側に少し傾斜している。炉は大形の石囲炉で規模は奥行推定1.1m、幅1.0m、深さ0.4mである。入口側の炉石は抜き取られ、西側の半分も炉内に投入されていたが、他の炉石は遺存していた。炉内には第27号住居址の埋甕が埋設されているが、炉石の抜去は堆積の状態から、本址廃絶時に行われたと推定される。炉の石材はすべて石英閃緑岩であるが、入口側のみ大きな棒状の石で、他の三方は板状の石を用いている。いずれも被熱による風化が著しいが、遺存状態は良好である。底は非常に良く焼けている。柱穴は配置等からP₁～P₄の4本が支柱穴と推定される。遺物の量は多く、炉の手前部分の礫の固まりの下からは中形の深鉢1個体(第83図89)が潰れて出土した。土器は唐草文系が主体となり、加曾利E系の深鉢の破片がある。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

㊦ 第31号住居址(第42図)

調査区の北東に位置する。当初は第14号住居址に隣接する大形の土坑として調査したが、第4号住居址を掘り下げ中、さらに北へ延びることが確認され、住居址として扱うことにした。西側で第14号住居址の上部を壊し、遺存部分の上面をほとんどを第4号住居址に切られる。プランは不整円形になるものと推定される。壁は遺存部分が少ないが、比較的しっかりと掘り込まれている。床は地山の二次堆積ロームを固めたもので、堅くしまっている。遺物の量は少なく、器形を復元できるものはない。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

㊦ 第4号住居址(第43・44図)

調査区の北東に位置する。水田造成時に床面近くまで削平され、検出時には埋甕が露出していた。また掘り下げの際、最終的に床とした面の上部で水田造成時のものらしい固くしまった面を床と誤認し、複数の住居址として調査した。しかし各々に帰属する遺物の時期差がなく、接合するものも多いので、最終的に1件の住居址として扱っている。西側で第14号住居址の一部と、第31号住居址の大半を切る。プランは不整円形で、南側が入口と推定される。規模は推定で奥行4.6m、幅4.7mであった。壁は遺存しないが、東側に周溝が巡る。床は地山の二次堆積ロームを固めており、遺存部は堅くしまっている。炉は中央やや東寄りに位置する。地山中の2つの大きな石英閃緑岩の間を掘り、その岩を炉石として利用した特異なもので、両側に炉石および抜石痕は認められない。炉東の床面には焼土があった。掘り込みの中には多量の礫が投入されており、底は良く焼けている。埋

甕は唐草文系の大形の深鉢の上半を正位で埋設している。土器（第86図95）の下半分は埋設時に切断されている。口縁をわずかに欠くが、遺存状態は良好である。土器内は自然堆積により埋没している。遺物の量は少ない。土器は唐草文系が主体で、大形の深鉢の破片が多い。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。なお上で述べたような経緯により、1軒の住居址としたが、炉・埋甕・周溝等の位置に不自然な点があるため、プランや建て替えの可能性等に再検討を要する。

⑩ 第24号住居址（第45・46図）

調査区の北東に位置する。覆土の上層を第97号・第100～103号土坑に壊され、また北側では第2号住居址をわずかに切る。プランは不整円形で、入口と想定される南西側が少し張り出している。規模は奥行（北東—南西）6.3m、幅（北西—南東）5.6m、主軸はN—30°—Eである。覆土には南半分を中心にして、多量の石英閃緑岩の礫と少量の焼骨片が含まれる。南側の一部を除き、周溝が巡っている。このうち奥と北西側の周溝は二重になっており、内側のものは貼床の下から検出されている。床は二次堆積ロームを固めたもので、堅くしまっている。全体に平坦であるが、入口側がわずかに低く、この部分はやや荒れている。壁はしっかりと掘り込まれており、遺存状態は良好である。炉は石囲炉で、規模は奥行1.2m、幅1.0m、深さ0.5mと大形である。炉石はいずれも大形の石英閃緑岩の板石で、廃絶時の抜去は行なわれていない。被熱による風化が著しいが、遺存状態は良好である。入口側の石のみ上面が平らなものを用いている。底は非常に良く焼けている。炉内には多量の礫と壺形土器（第84図99）が入っていた。埋甕は入口部から3基検出された。埋甕1は曾利系の深鉢の上半部（第84図96）を正位で埋設している。土器は $\frac{1}{3}$ ほど欠損しているが、遺存状態は良い。上端は床面とほぼ同レベルである。埋甕2は唐草文系の大形の深鉢（第84図97）を逆位に埋設している。土器は底及び胴部下半が切断され、上端は床より10cm近く上に露出していた。土器の中には唐草文系の小形深鉢（第84図98）と、他にもう1個体の唐草文系土器の破片（第100図242）が中心部上層に入れられている。いずれも正位であった。さらに土器内下層にはミニチュア土器1点（第120図11）も入れられていた。土器内部の土層の観察が充分行なえなかったため確実ではないが、いずれも意識的に埋設されものである可能性が強い。この埋甕2の掘り方は入口部の周溝に切られていた。埋甕3は唐草文系の大形深鉢を正位で埋設したものである。土器は口縁部を欠くものの、他の部分はほぼ完存している。これも埋甕2と同様床上に10cm近く露出していた。土器の中は自然堆積で、上面に石英閃緑岩の大礫が入っていた。

各施設の状況から本址は1回以上の建て替えによる拡張が行なわれていることが推定される。柱穴の多くから柱痕が明瞭に観察されており、当初の支柱穴にはP₁・P₃・P₉の内側とP₁₁の4本を使用していることが窺える。その奥壁は外側の周溝付近でプランは五角形に近く、埋甕1及び2を伴う。最終段階ではP₁・P₃・P₉の外側とP₁₂を支柱穴に使用し、プランも北側へ拡張されており、周溝もそれに伴って外側へ移された。旧段階の周溝とP₁₁の上には貼床が認められており、その裏

付けとなろう。入口部の周溝も拡張後のものであり、この段階には埋甕3が伴う。周溝の切れた部分が入口と推定される。この時の主軸は建て替え前より東へ15°ほど振っている。さらに埋甕の出土状況から考えてみると、1の廃絶後に2及び3の上端レベルまで土が盛られ、入口部の床が少し高くなっていただかもしれない。その場合には埋甕1は2よりも古いものとなり、旧段階において、小規模な拡張が行なわれたとも考えられる。なお埋甕と周溝の同時性も配置から想定したもので確証はなく、さらなる検討を要するものである。

遺物の量は多い。土器は唐草文系が主体で、大形の深鉢の破片が多く、これに加曾利E系の小形深鉢の破片が少量伴う。覆土上層部から出土した大形土偶の足は、第15号住居址出土の破片と接合した(第119図3)。

出土遺物より本址の時期は、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

㊦ 第27号住居址(第47・48図)

調査区の北東に位置する。中央部上面を第163号土坑に切られ、南側で第23号住居址を切る。当初北側のプランを検出できず、土坑群と誤認していたが、これらと第27号住居址を掘り下げ中に本址の存在を確認した。このため第23号住居址と重複する部分の遺物は同址のものとして取り上げている。全体のプランは東西に長い楕円形と推定されるが、埋甕の位置から入口部(南側と推定)がわずかに張り出す可能性がある。規模は奥行推定5.0m程度、幅6.2mで、主軸はN-8°-Eである。覆土には少量の石英閃緑岩と焼骨片が含まれる。北壁の中央には地山中の巨大な石英閃緑岩が露出しており、この部分の壁際は岩を避けて周溝が掘られれている。床は地山の二次堆積ロームを固めており、堅くしまっている。全体に平坦で遺存状態は良好であるが、地形に合わせて東側がやや高くなっている。第23号住居址の床のレベルと比較すると、本址の方が5cmほど高く、入口部は同址を埋めて床を作ったと推定されるが、貼床等は認められなかった。なお埋甕の蓋石上面と本址中央付近の高さがほぼ同じであることから、入口部の床は奥部よりわずかに低くなっていたと推定される。壁の掘り込みはしっかりしているが、東側はややゆるやかに立ち上がっている。炉は大形の石囲炉で、規模は奥行推定0.9m、幅1.0mである。廃絶時に奥の炉石が抜き去られているが、他の三方はそのまま遺存している。石材はいずれも石英閃緑岩の板石で、被熱による風化が著しいものの遺存状態は良好である。底は非常に良く焼けている。柱穴はP₃・P₄・P₇・P₈の4本を支柱穴と想定する。埋甕は前述のように第23号住居址の炉の中に埋設されていた。炉の中心からは外れており、西側の炉石に沿わせるようになっている。深鉢(第86図111)の口縁に、もう1個体の口縁~胴部上半(第86図110)を同径の部分で切断の後、重ねて埋設されている。土器はいずれも加曾利E系である。石英閃緑岩の板石で蓋をしているが、土圧により蓋石は傾き、下の土器の口縁が破損している。なお下の深鉢は底を抜いて、その下に別の土器の破片を当てて塞いでいた。土器の内部は自然堆積により埋没している。遺物の量は少ない。唐草文系の土器が主体で、加曾利E系と思われる縄文を多用した破片がわずかに伴う。また炉西側の床面直上には切断された加曾利E系の深鉢

の上部（第86図112）が伏せるように置かれていた。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。なお本址と第23号住居址の時期差は少なく、主軸方向もわずかにずれている程度である。古い住居の炉の中に新しい住居の埋甕が埋設されるような重複関係は特異であり、何か特別な意識をもったものかもしれない。

㊦ 第25号住居址（第49図）

調査区の北東に位置する。上部の削平が著しく、検出時には床の一部が露出していた。このため当初は複数の土坑と捉えて掘り下げたが、炉及び埋甕を確認し、住居址と判明した。そこで調査区の拡張を行ない、全体を再検出した。プランはやや角張った不整円形で、規模は南北4.4m、東西4.0mである。入口は南側と推定され、主軸はN-10°-Eを指す。床は地山の二次堆積ロームを固めており、堅くしまっているが、全体にやや荒れ気味である。ほぼ平坦だが、地形に合わせて西側にわずかに傾斜している。壁の遺存状態は、削平のため極めて不良である。炉は石囲炉でもとは奥行0.8m、幅0.7m程度の規模であったと推定される。炉石は西側のもの以外廃絶時に抜き去られ、炉内に投入されている。いずれも石英閃緑岩の板石で、被熱によりわずかに風化している。底は良く焼けていた。ピットは10個検出され、柱穴はP₂・P₃・P₉・P₈の4本が主柱穴と想定される。なお炉の奥にあるP₁₀は3段に掘り込まれた特異なもので、その位置から立石等何らかの特殊な施設に伴うものである可能性もある。入口の埋甕は唐草文系の小形の深鉢（第86図107）を正位に埋設している。掘り方の下端は地山中の石英閃緑岩にあたり、この上に置かれる形になっている。土器は口縁を欠いているが、上端部は床とほぼ同レベルであった。底は壊されていない。内部には土が詰まっており、その中層には多量の礫と別の土器の破片が入っている。遺物の量は少なく、唐草文系の土器が主体となる。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

㊧ 第28号住居址（第50図）

調査区の北東部に位置する。第14・15・16号住居址を切る。14住を掘り下げ中に炉を検出し、その存在を確認したため、遺物は14住出土のものとして上がっている。整理作業の段階で復元した。プランは不整円形で、入口は南側、主軸はN-11°-Eとなる。規模は奥行（南北）5.9m、幅（東西）推定6.0mである。覆土は多量の石英閃緑岩の礫と少量の焼骨を含む。また石は一部で集石状になっており、覆土内配石の可能性もある。壁は北側と南側の一部を確認したのみである。床は地山の二次堆積ロームを固めており、堅いが残りは良くない。炉は1.0×0.9mの大形の石囲炉で、石英閃緑岩を使用した炉石は被熱のため風化している。内部は良く焼けている。廃絶時に一部の石が崩れ、炉の中にも石が投入されている。柱穴は壁に沿って並び、柱痕の観察できたものもいくつかあった。炉の周辺に主柱穴をもたず、壁沿いに並ぶタイプのものと思われる。遺物は多量に出土した。しかし本址が切っている住居址からの混入品がほとんどで、中でも14住に帰属するものが多い。また後葉Ⅳ期の資料に良好なものが多い。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

⑩ 第6号住居址 (第51図)

調査区の北側に位置する。第299号土坑に東壁の一部を切られ、また覆土上層を近世の暗渠に壊されている。プランは楕円形で、規模は長軸(南東—北西)6.5m、短軸(南西—北東)4.8mである。上部を削平されているため、覆土は浅い。壁はしっかりと掘り込まれているが、これも削平により遺存状態は不良である。地山の二次堆積ロームを固めた床は軟質であった。ピットは10個検出されたが、いずれも浅く、柱痕の明瞭なものもない。構造等も不明である。遺物量は非常に少ない。中期後葉のものが主体となるが、時期の異なるものの混入も多い。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅱ期と推定される。なお住居址として扱ったが、炉などの施設もなく、堅穴もしくは大形の土坑と考えられる。

⑪ 第7号住居址 (第52図)

調査区の中央やや北東寄りに位置し、北壁・東壁の一部をそれぞれ第252・256号土坑に切られている。プランは不整円形で、規模は南北5.1m、東西5.0mである。削平により残りは良くなく、壁の遺存状態も全体に不良であった。柱穴は壁に沿って巡るものと推定されるが、いずれも浅く柱痕も不明瞭で、構造等は明らかでない。遺物量は少なく、中期後葉のもの他若干の混入品がみられる。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅱ期と推定される。なお住居址として扱ったが、本址も第6号住居址と同様、炉などの施設もなく、堅穴もしくは大形の土坑と考えられる。

⑫ 第22号住居址 (第53・54図)

調査区の中央部に位置し、東側の約¼を第21号住居址に切られる。プランは不整楕円形で、長軸7.8m、短軸5.3mの規模をもつ。覆土には石英閃緑岩の大礫を多量に含む。下層の掘り込みは浅いが、しっかりしている。床は二次堆積ロームに掘り込まれていた。固めた痕跡は認められないが、全体に平坦で一部には地山中の礫が露出している。柱穴は壁に沿うように見つかっているが、いずれも浅く、柱痕もはっきりしない。遺物は覆土中から多量の土器が出土している。本址に伴うと推定されるものの他、混入と考えられるものも少なくない。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅰ—Ⅱ期と推定される。なお本址も住居址として扱っているが、炉の発見はなく、性格は下層に堅穴状の掘り込みを有する集石と考えられる。

⑬ 第20号住居址 (第56・57図)

調査区の中央やや北寄りに位置する。プランは楕円形に近く、規模は長軸5.2m、短軸4.3mであった。掘り込みは浅いが、しっかりしている。覆土は石英閃緑岩の大礫が多量に含まれる。床は地山の二次堆積ロームに掘り込まれ、一部には礫が露出している。固めた痕跡は認められない。柱穴は壁に沿うように検出されているが浅く、柱痕を観察できたものも少ない。覆土中から少量の遺物が出土しているが、時期の異なるものも多い。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。なお住居址として扱っているが、炉の発見はなく、本址も性格は下層に竪穴状の掘り込みを有する集石と考えたい。

㊦ 第21号住居址（第54・55図）

調査区の中央部に位置し、東側で第22号住居址を切る。また第267号土坑には壁の一部を切られている。プランは不整円形で、規模は南北6.0m、東西6.1mである。覆土には多量の石英閃緑岩の大礫を含む。床は地山である二次堆積ロームに掘り込まれている。固めた痕跡はみられないが、全体に平坦で、地形に合わせて西側がわずかに低くなっている。一部には地山中の礫が露出している。柱穴は壁に沿って巡るように検出されたが浅く、柱痕の明瞭なものもない。遺物は覆土中より多量の土器が出土しているが、混入と思われるものも多い。

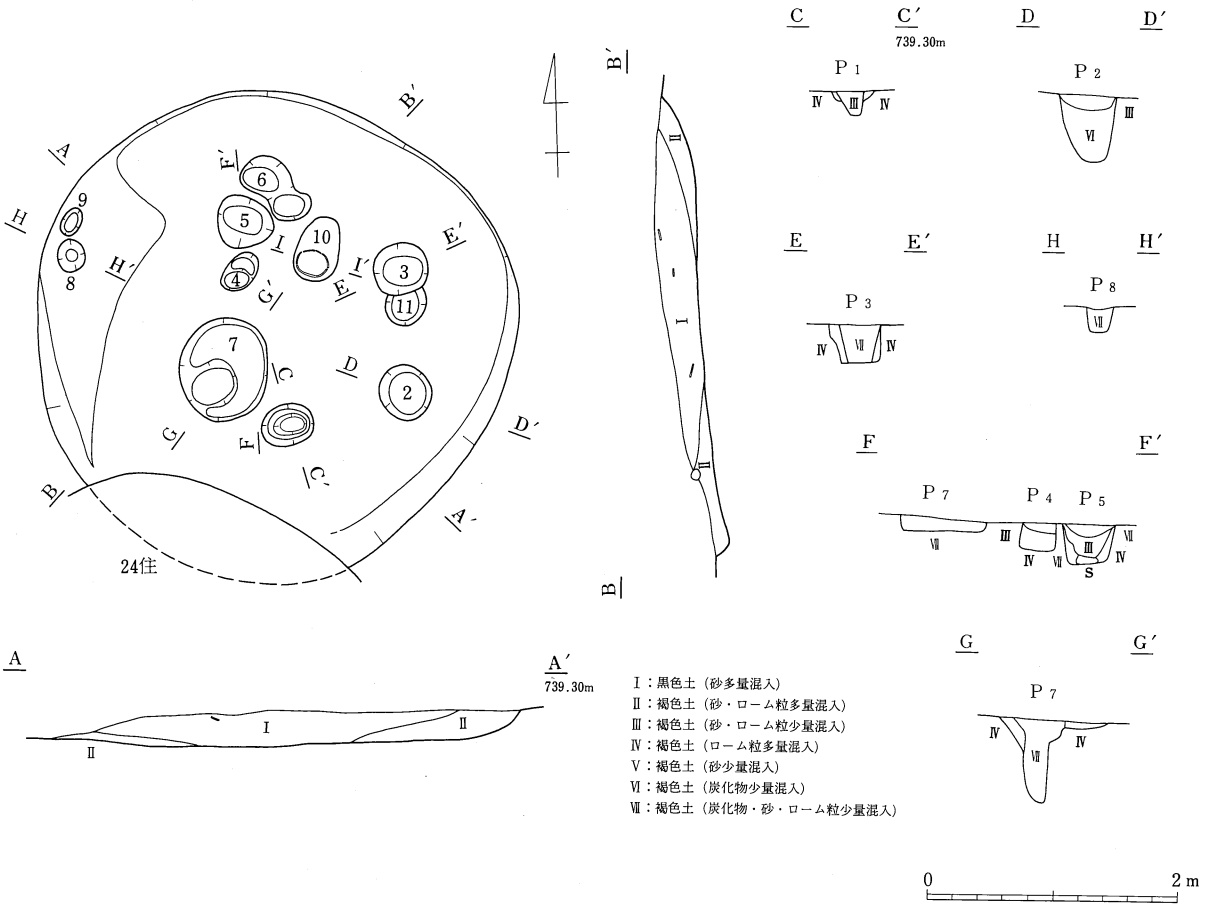
本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。なお本址も住居址として扱っているが、炉の発見はなく、性格は下層に竪穴状の掘り込みを有する集石と考えられる。

㊦ 第19号住居址（第58図）

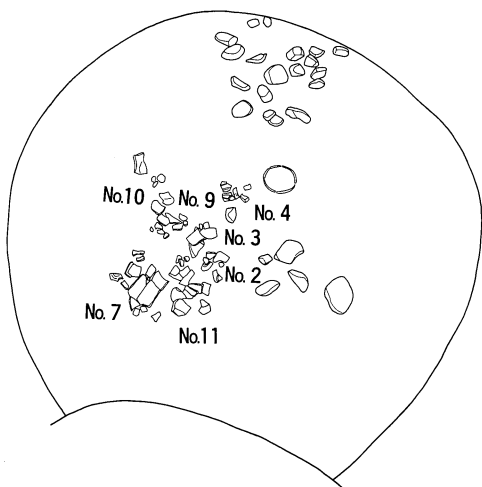
調査区の中央やや北寄りに位置し、第1号建物址の南西隅のピット上面を切っている。上部を削平されており、遺存状態は良くない。プランは丸みのある不整形をしており、規模は長軸5.0m、短軸4.2mである。覆土は石英閃緑岩の大礫を多量に含んでいる。床は地山の二次堆積ロームに掘り込んであり、固めた痕跡はみられない。床面の一部には石英閃緑岩が露出している。炉はなかった。他にはピットが1個検出されているが、柱痕は認められなかった。遺物は礫に混じって少量の土器が出土している。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅳ期と推定される。なお本址は住居址として扱っているが、炉の発見はなく、性格は下層に竪穴状の掘り込みを有する集石と考えたい。

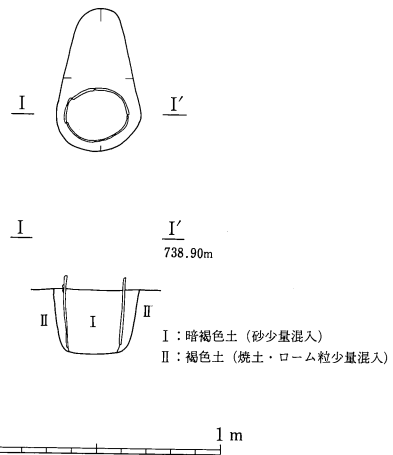
完掘状態



遺物出土状態

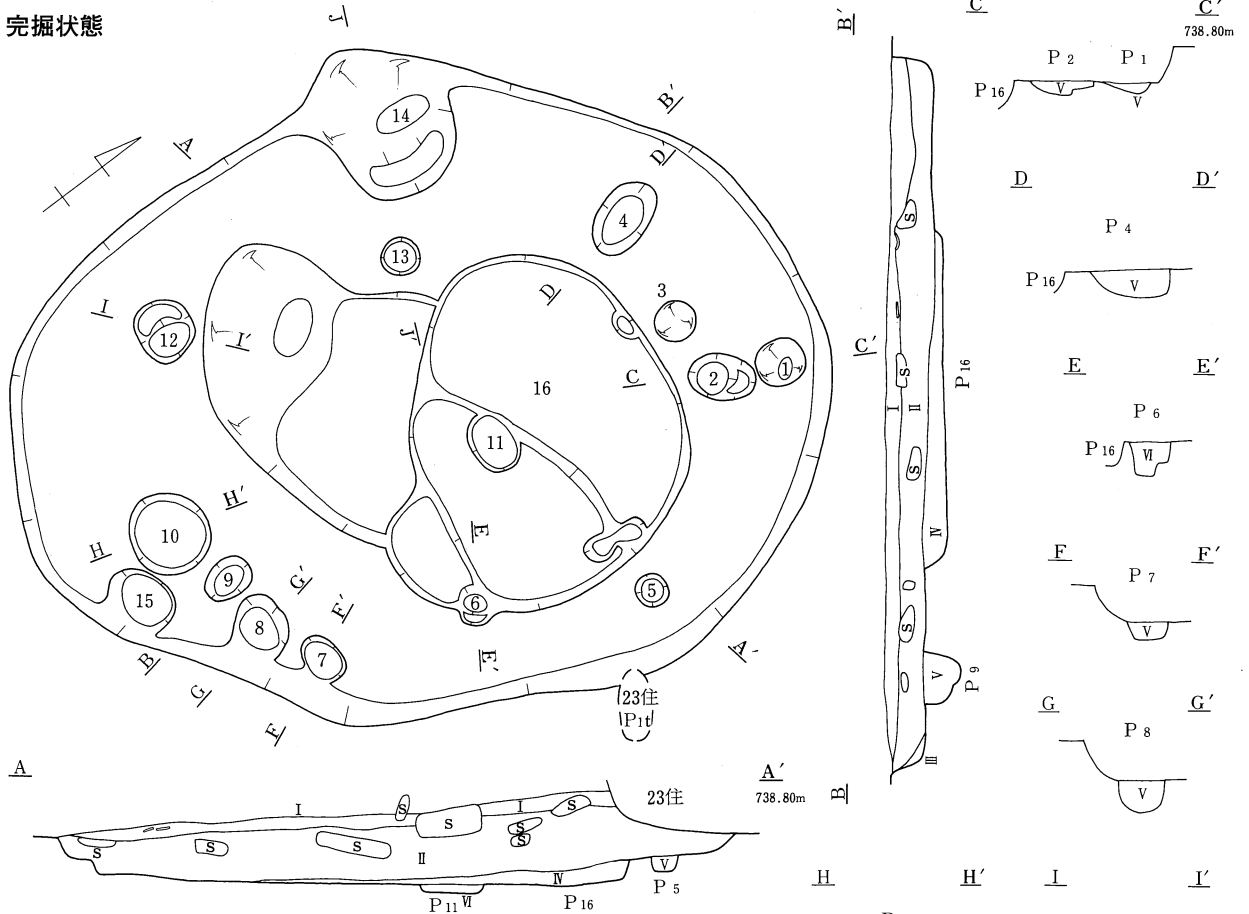


埋設土器

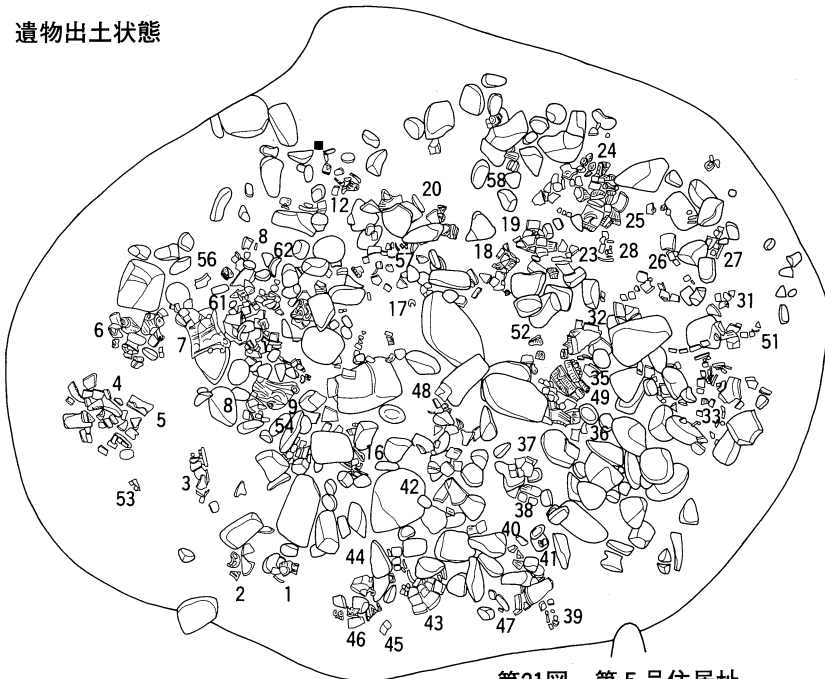


第20図 第2号住居址

完掘状態



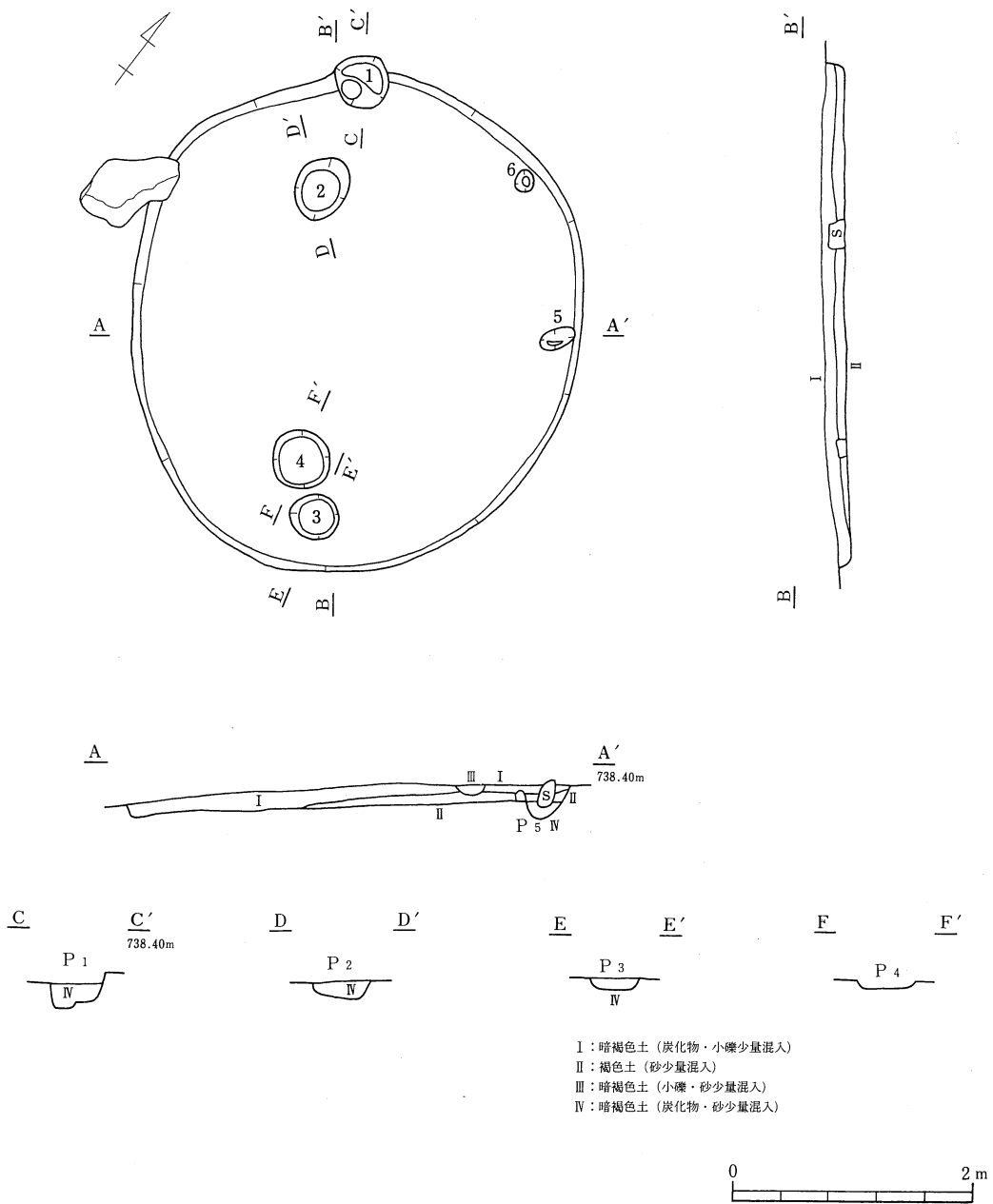
遺物出土状態



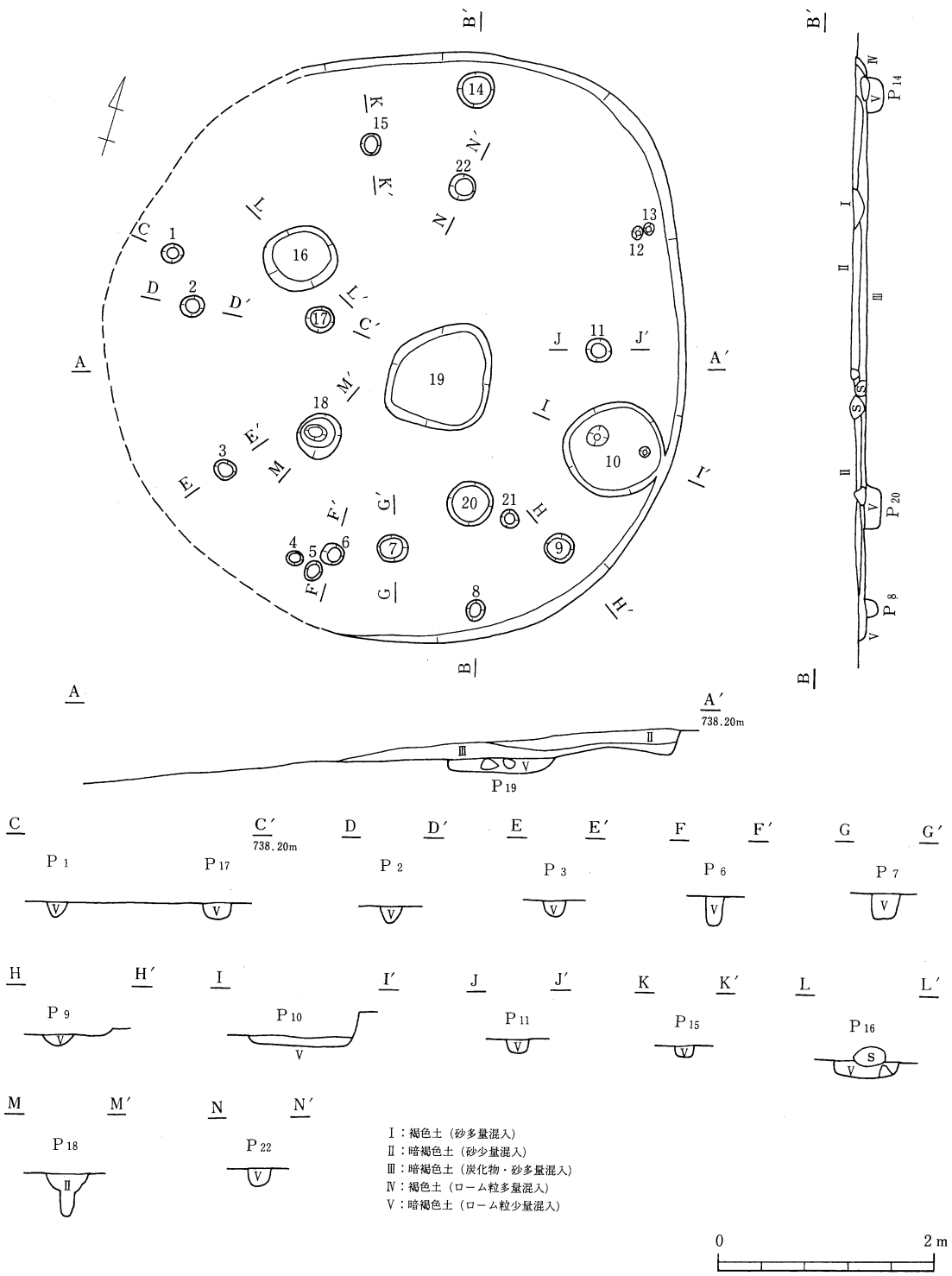
- I : 暗褐色土 (砂少量混入)
- II : 暗褐色土 (砂・ローム粒少量混入)
- III : 暗褐色土 (ローム粒多量混入)
- IV : 暗褐色土 (炭化物・砂少量混入)
- V : 褐色土 (砂・ローム粒少量混入)
- VI : 褐色土 (炭化物・砂・ローム粒少量混入)

0 2m

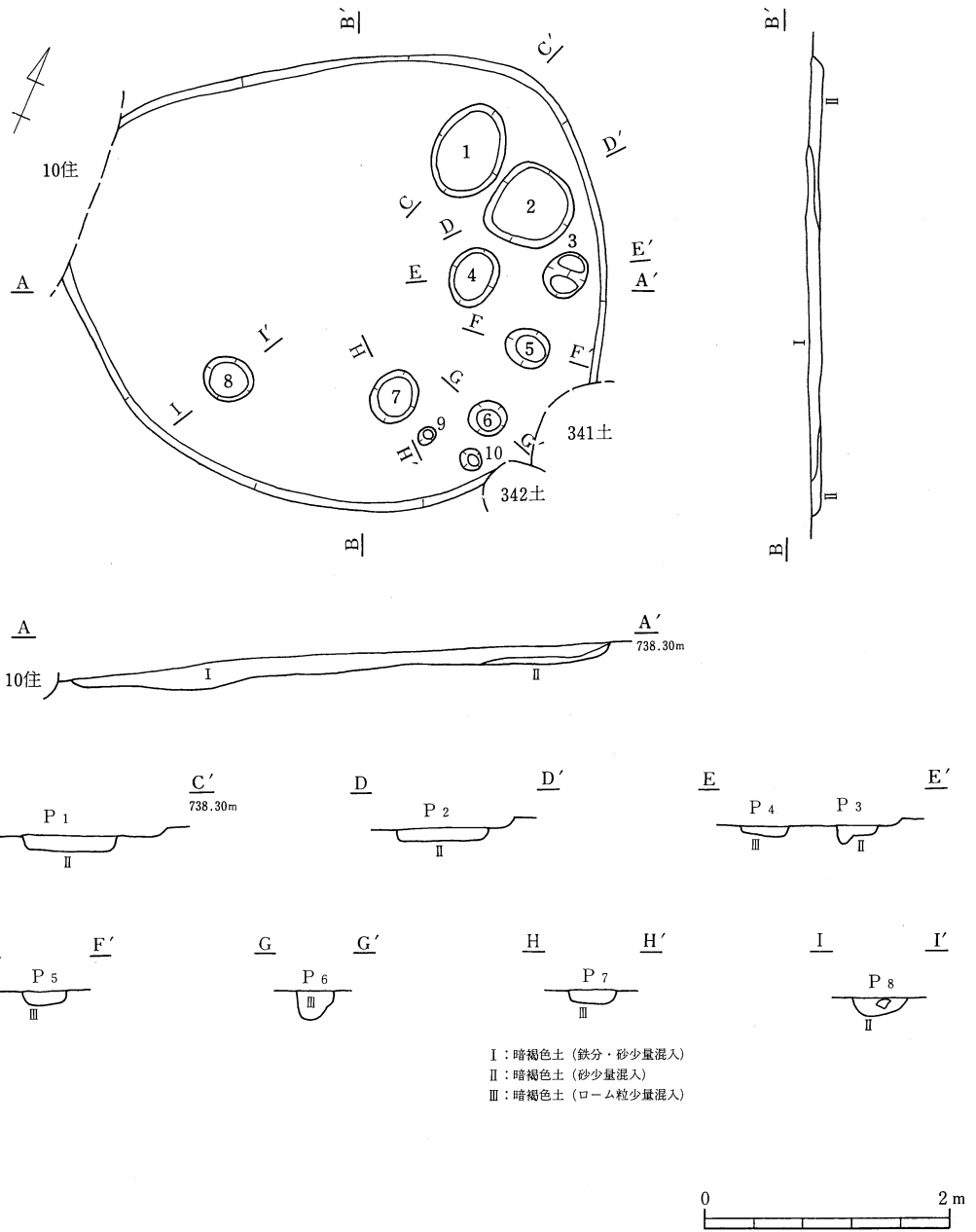
第21図 第5号住居址



第22図 第9号住居址

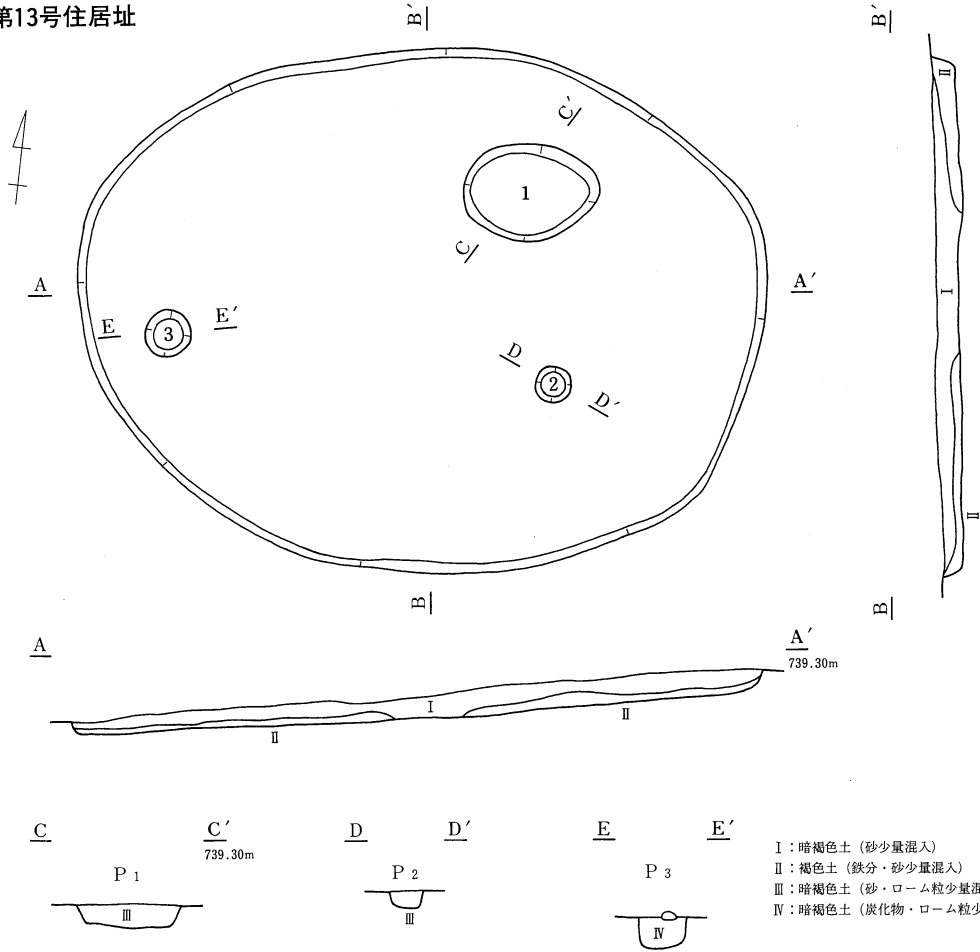


第23図 第10号住居址

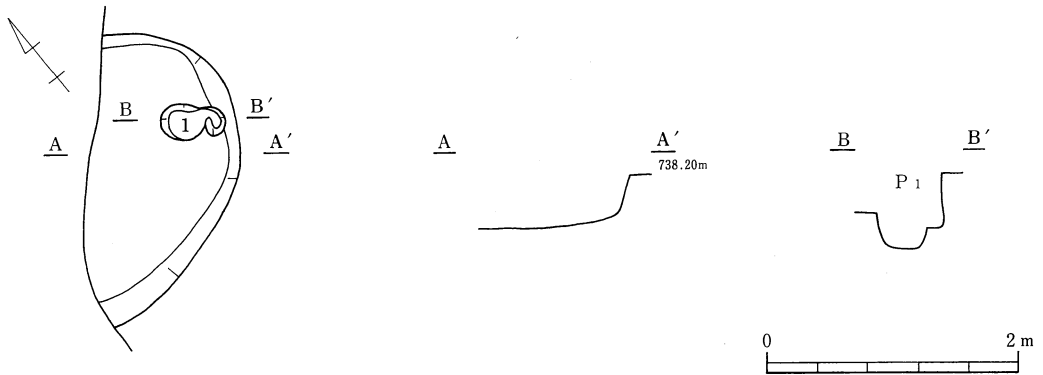


第24図 第11号住居址

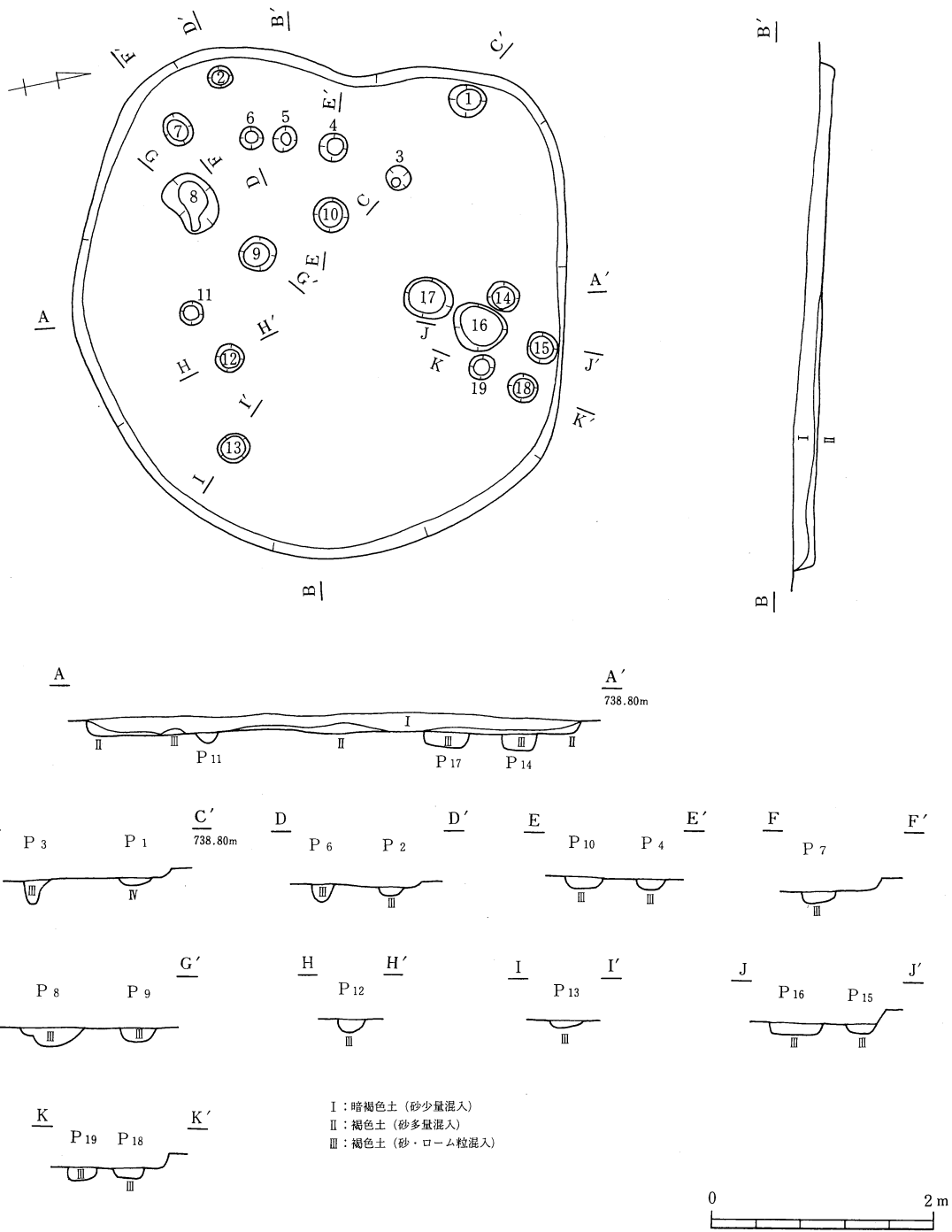
第13号住居址



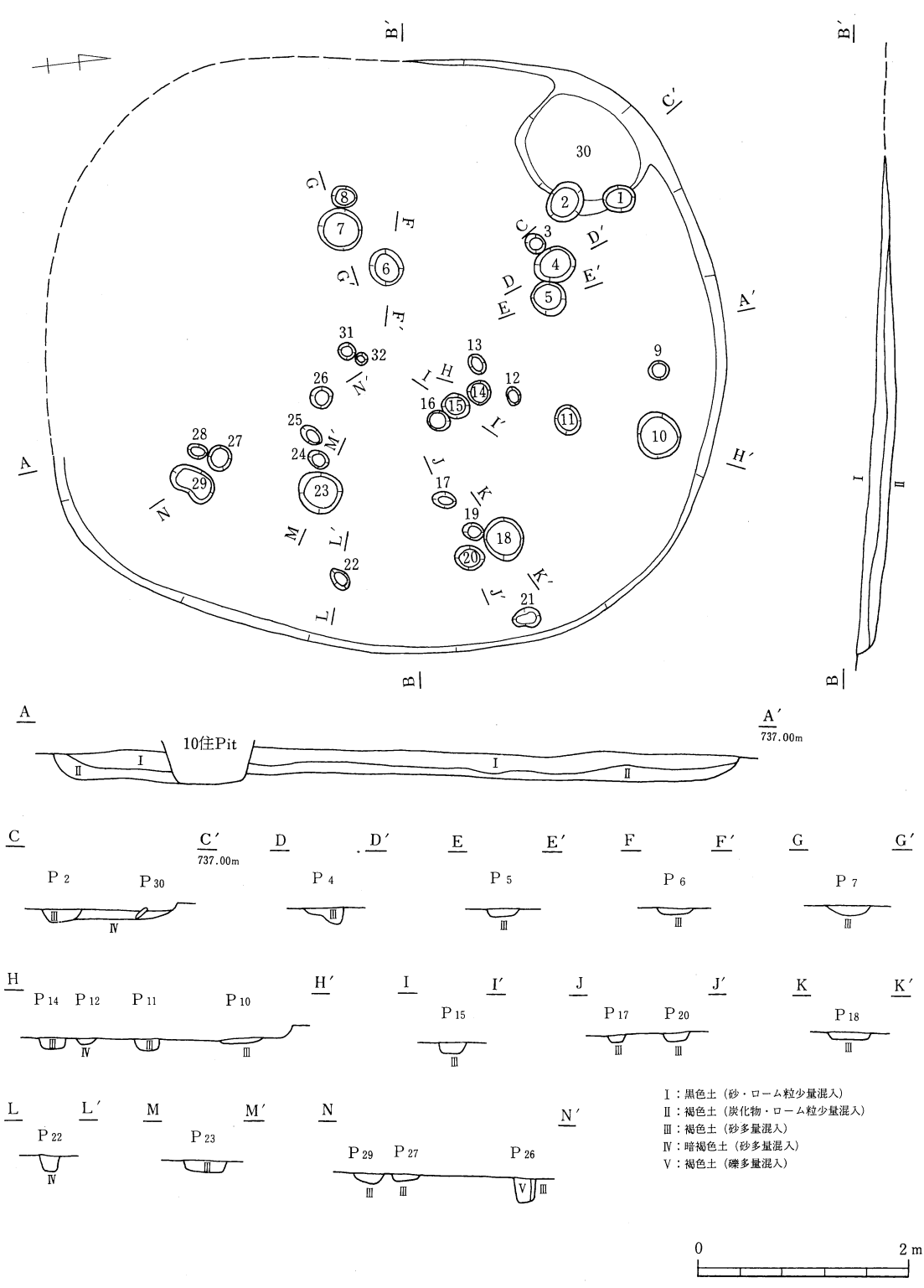
第32号住居址



第25図 第13号・第32号住居址

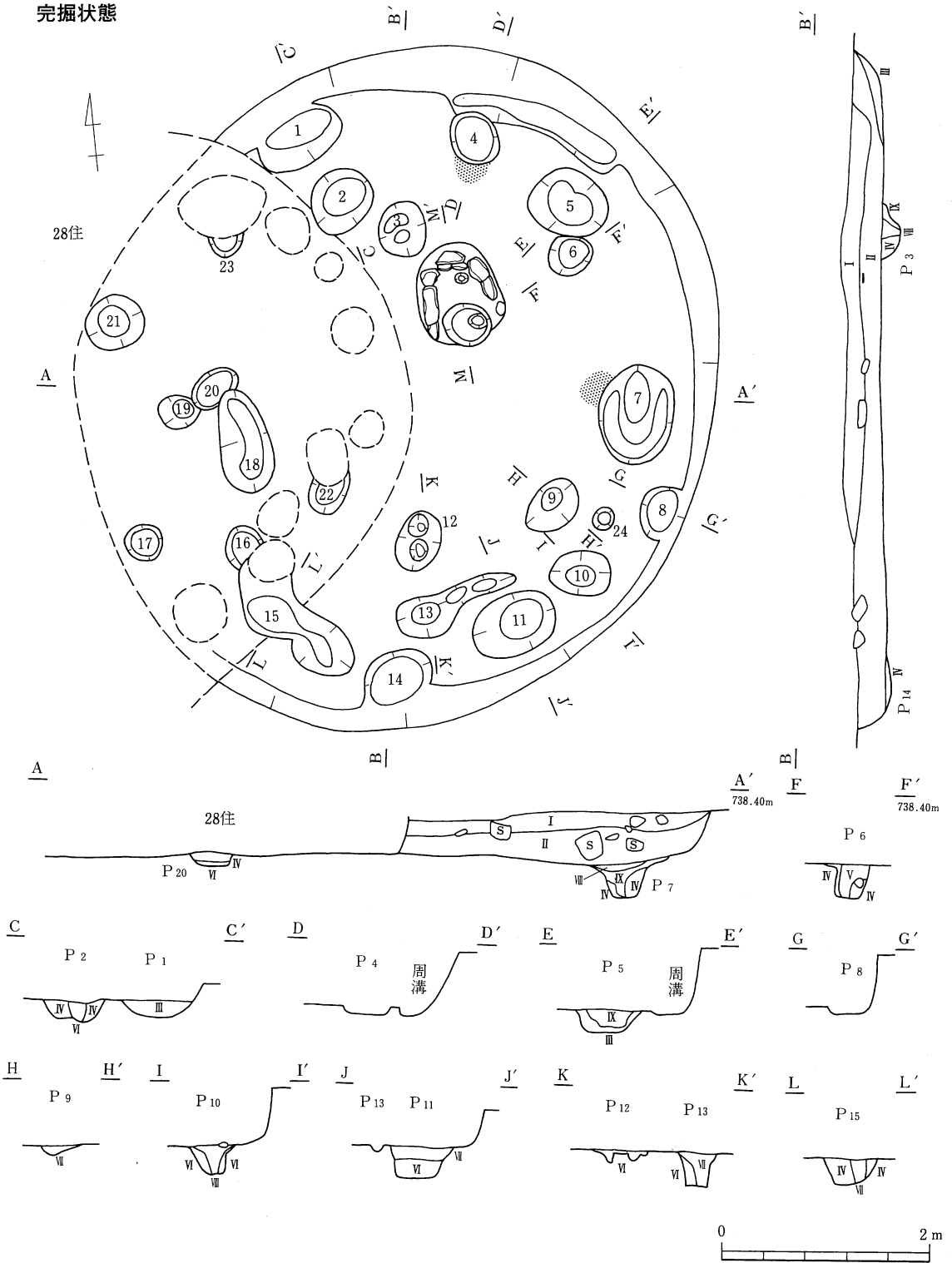


第26図 第8号住居址

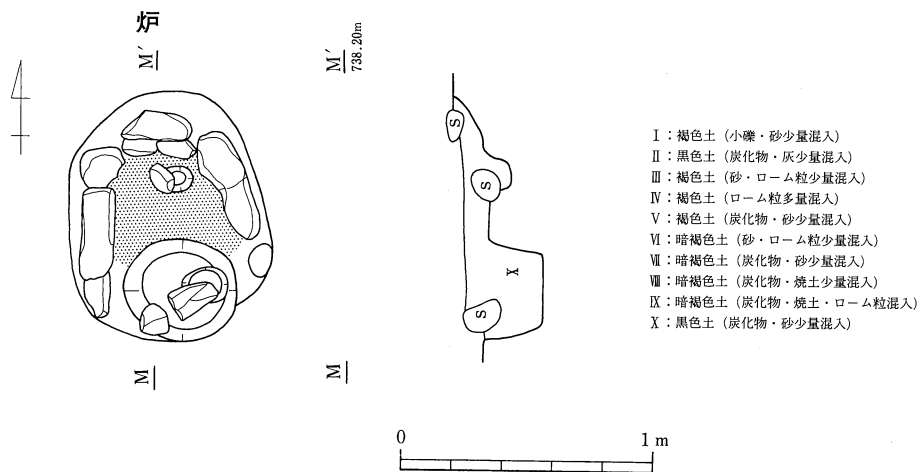


第27図 第12号住居址

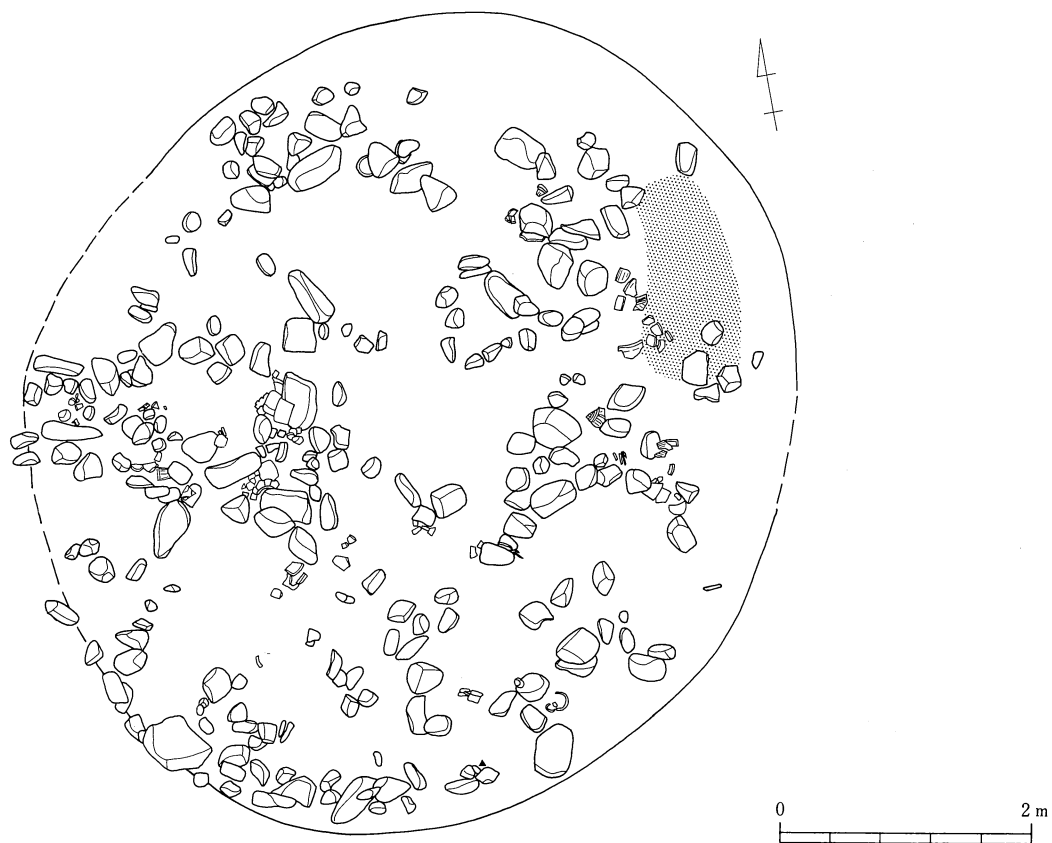
完掘状態



第28図 第14号住居址 (1)

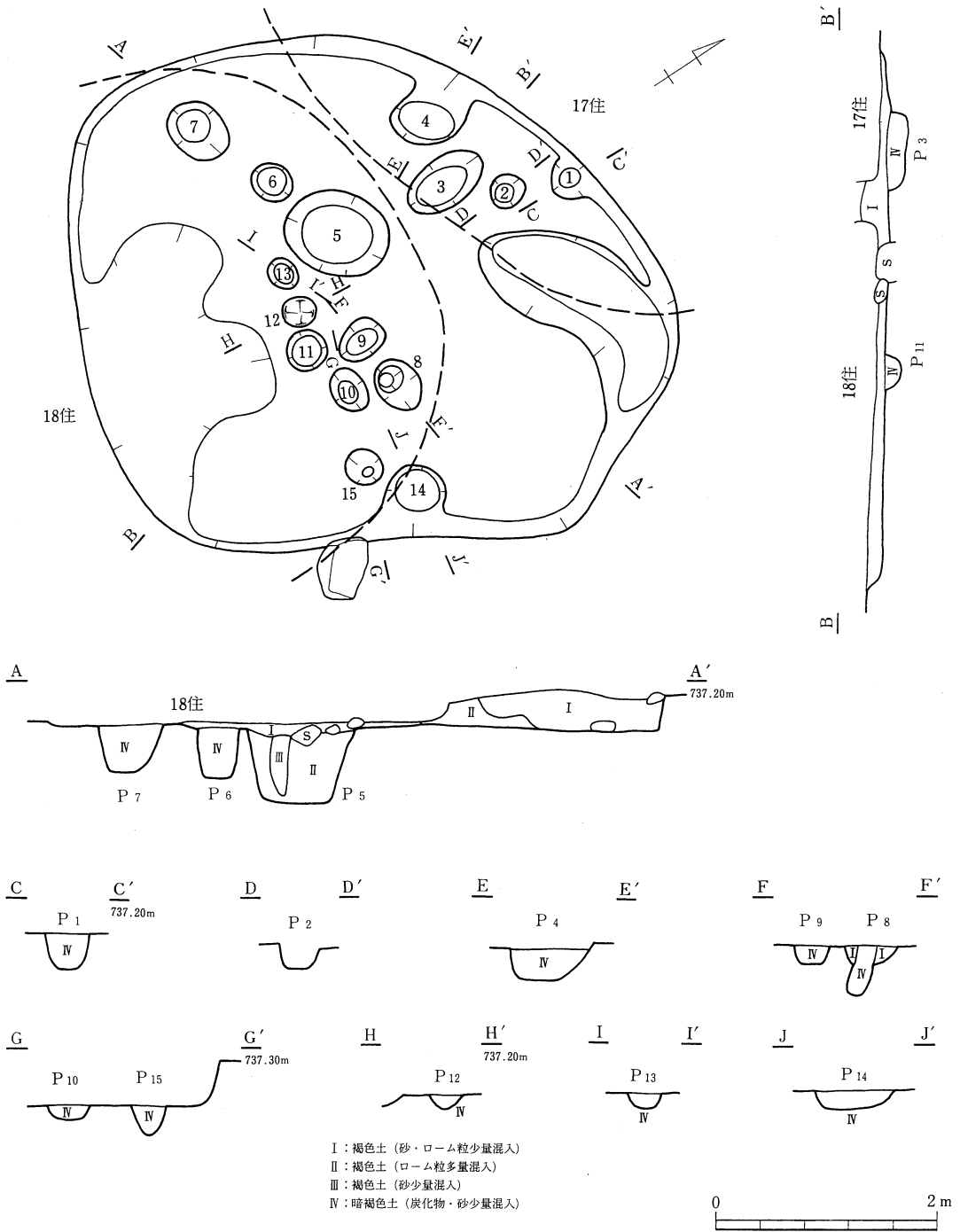


遺物出土状態



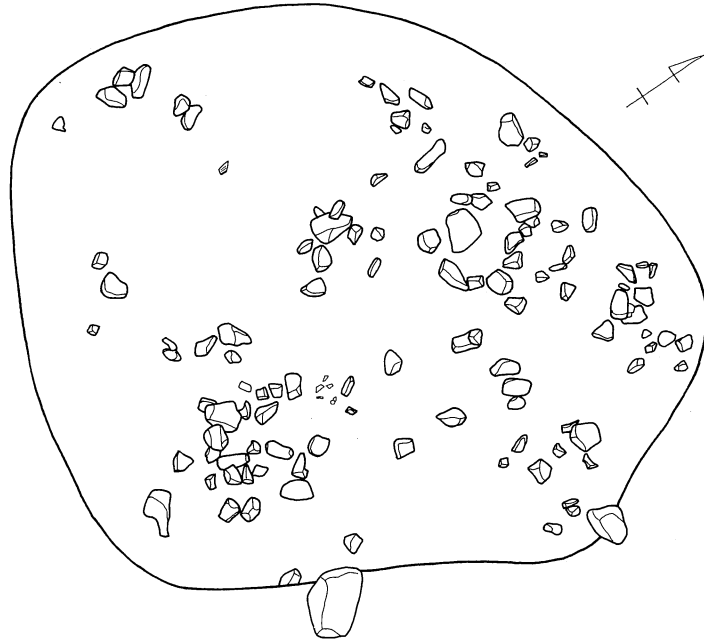
第29図 第14号住居址 (2)

完掘状態

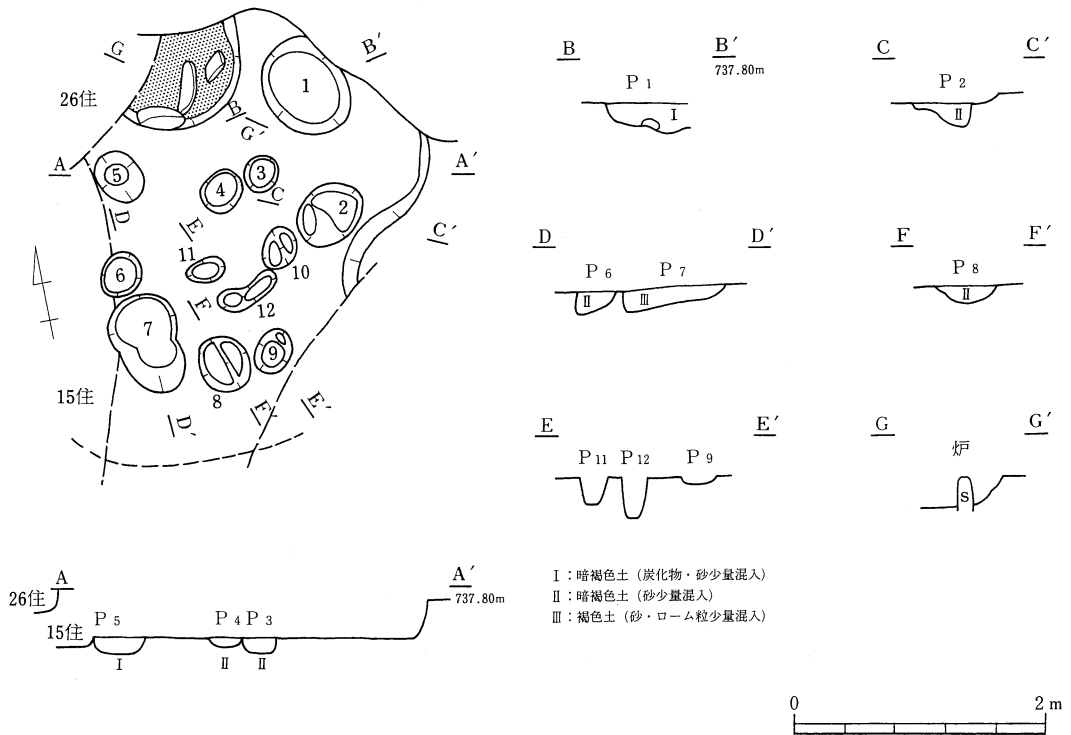


第30図 第29号住居址 (1)

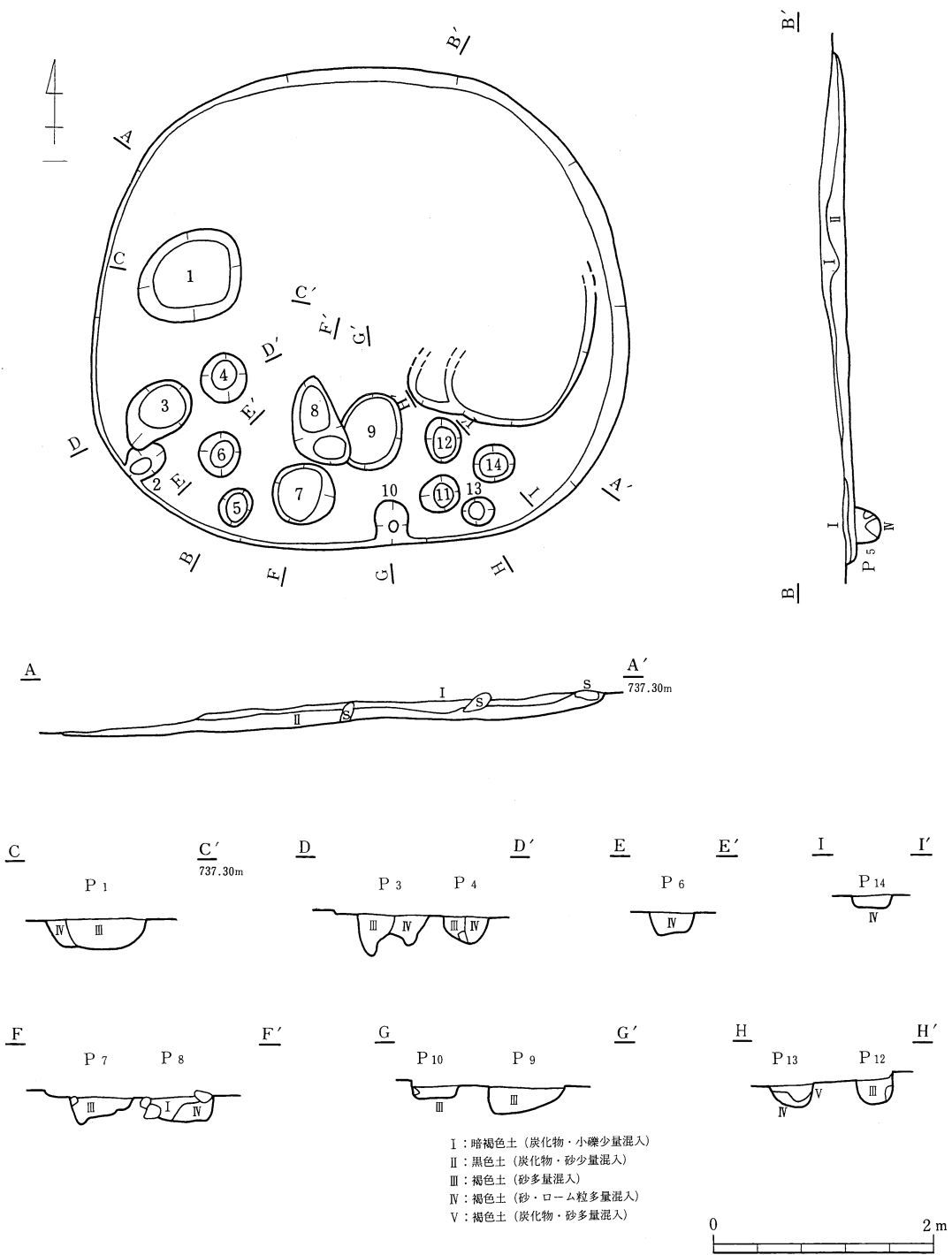
29住遺物出土状態



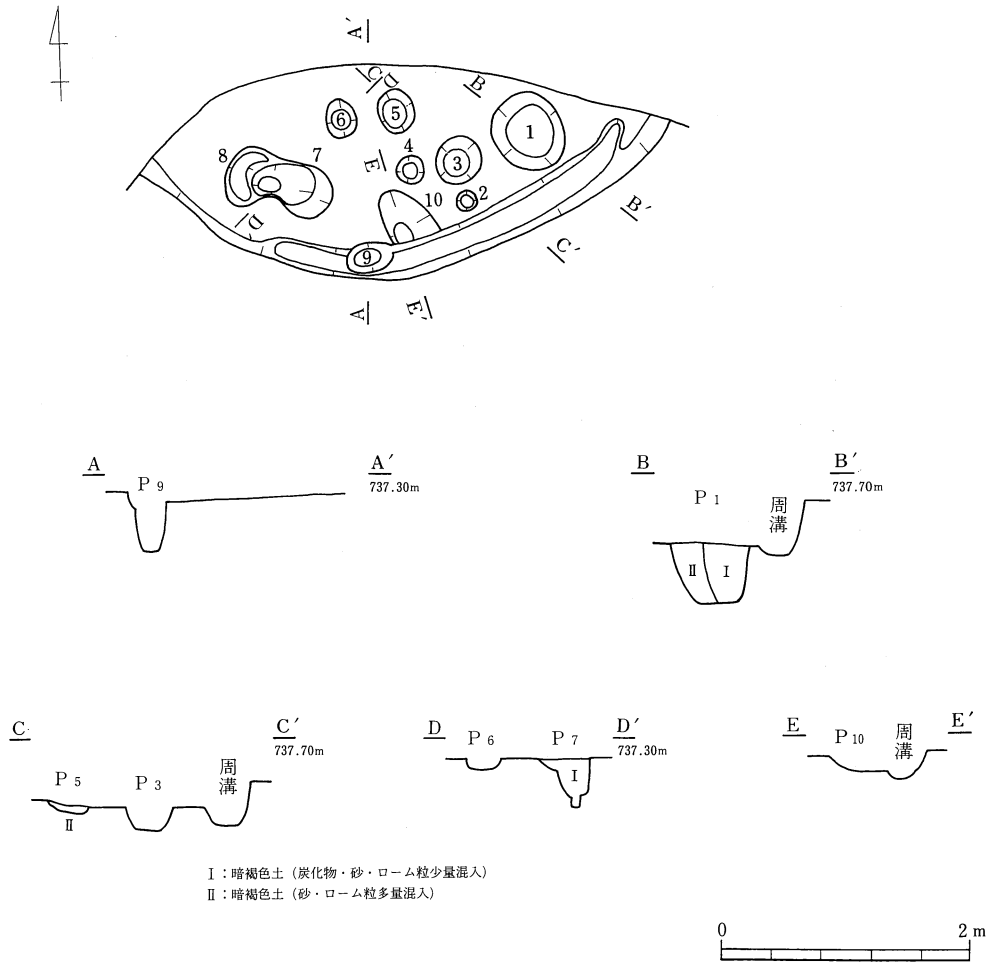
第16号住居址



第31図 第29号住居址 (2)・第16号住居址

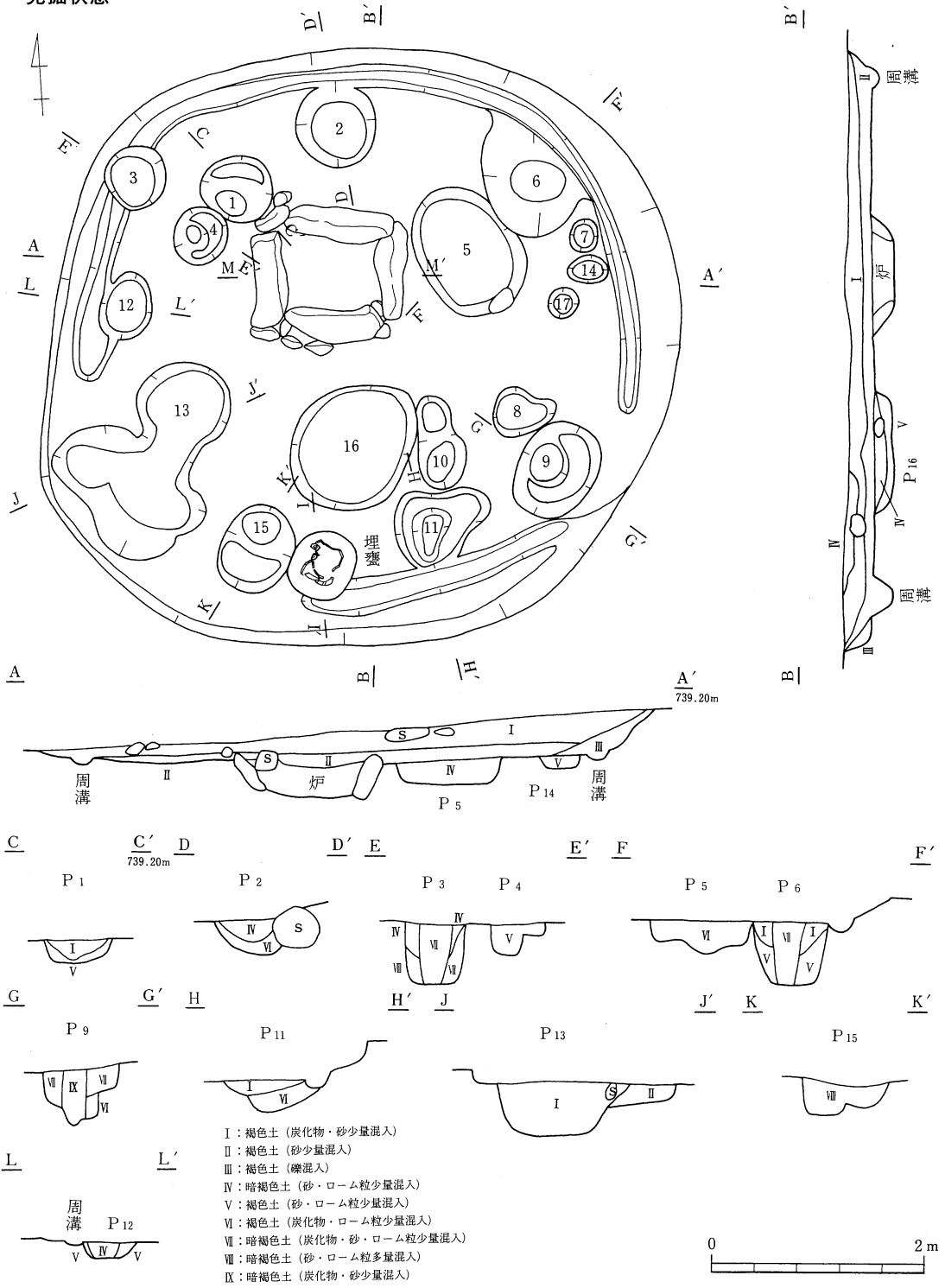


第32図 第18号住居址



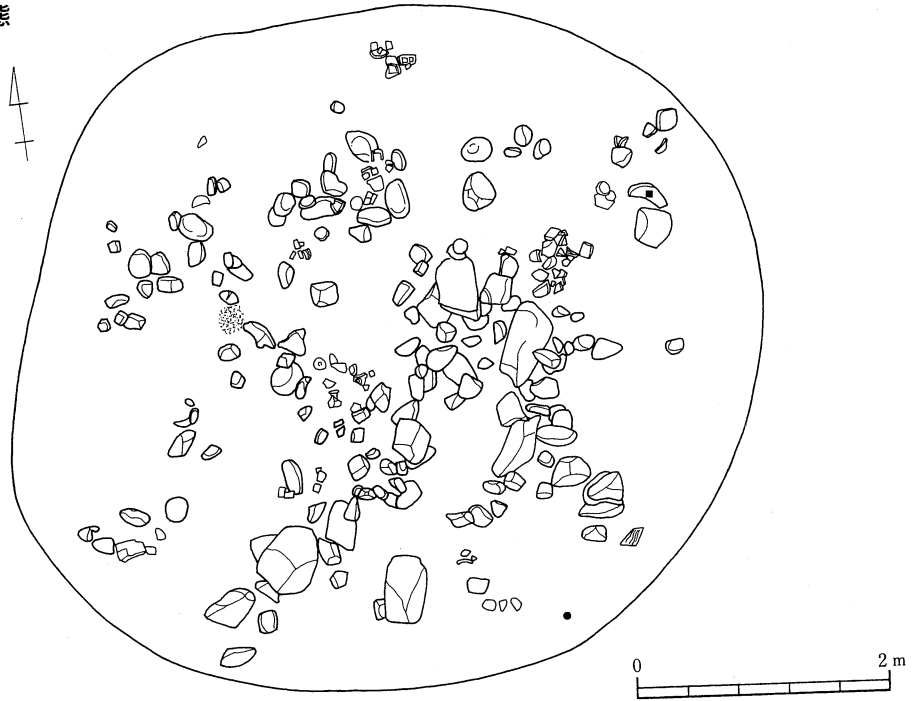
第33図 第26号住居址

完掘状態

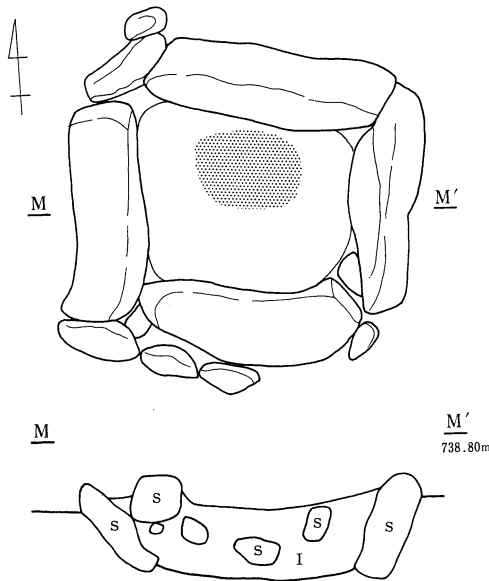


第34図 第3号住居址 (1)

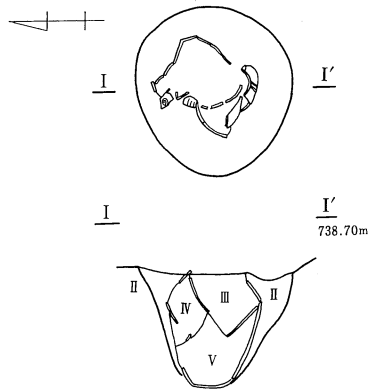
遺物出土状態



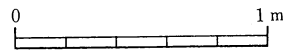
炉



埋 甕

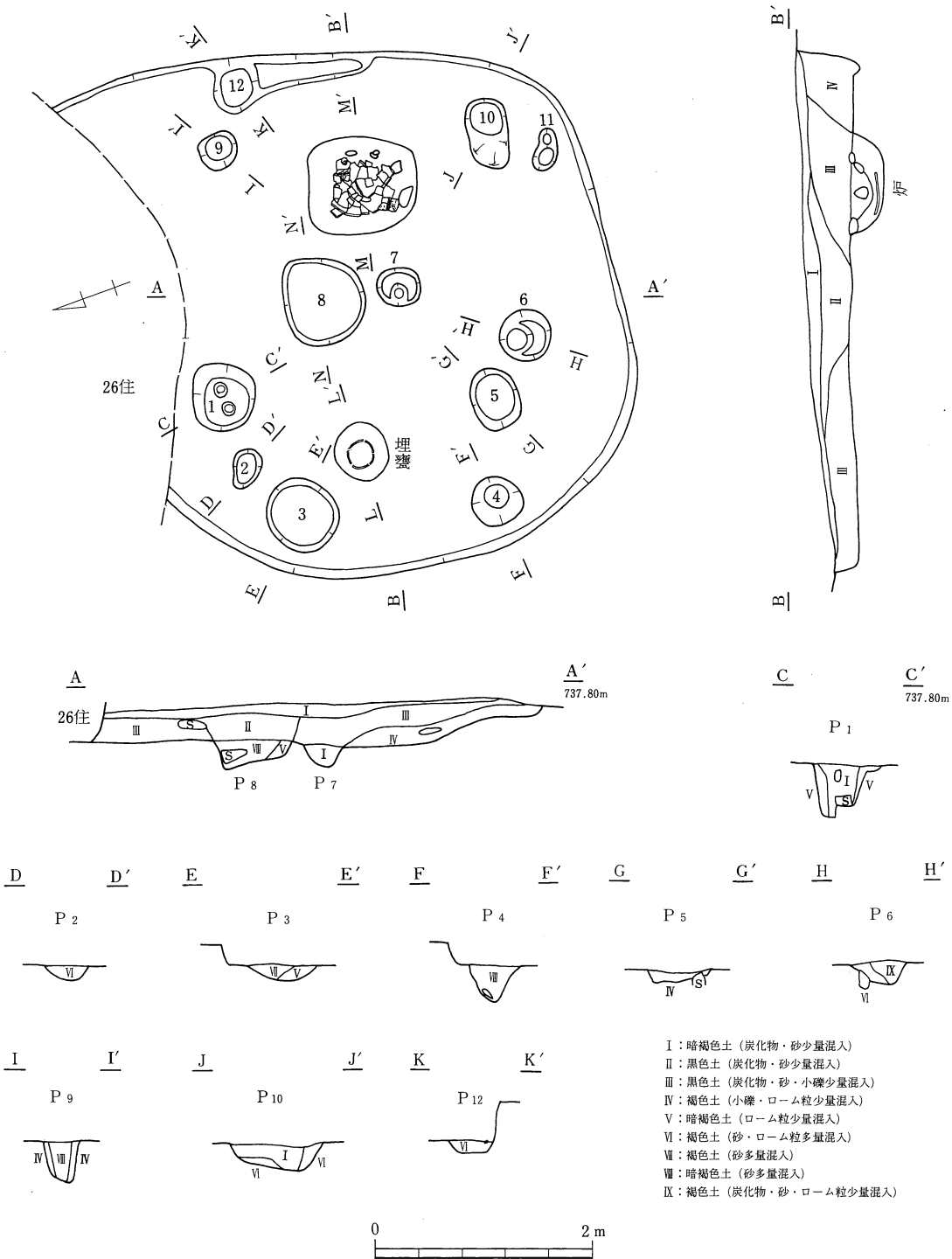


- I : 褐色土 (炭化物・砂少量混入)
- II : 褐色土 (砂・ローム粒少量混入)
- III : 褐色土 (砂少量混入)
- IV : 褐色土 (小礫・ローム粒少量混入)
- V : 褐色土 (ローム粒少量混入)

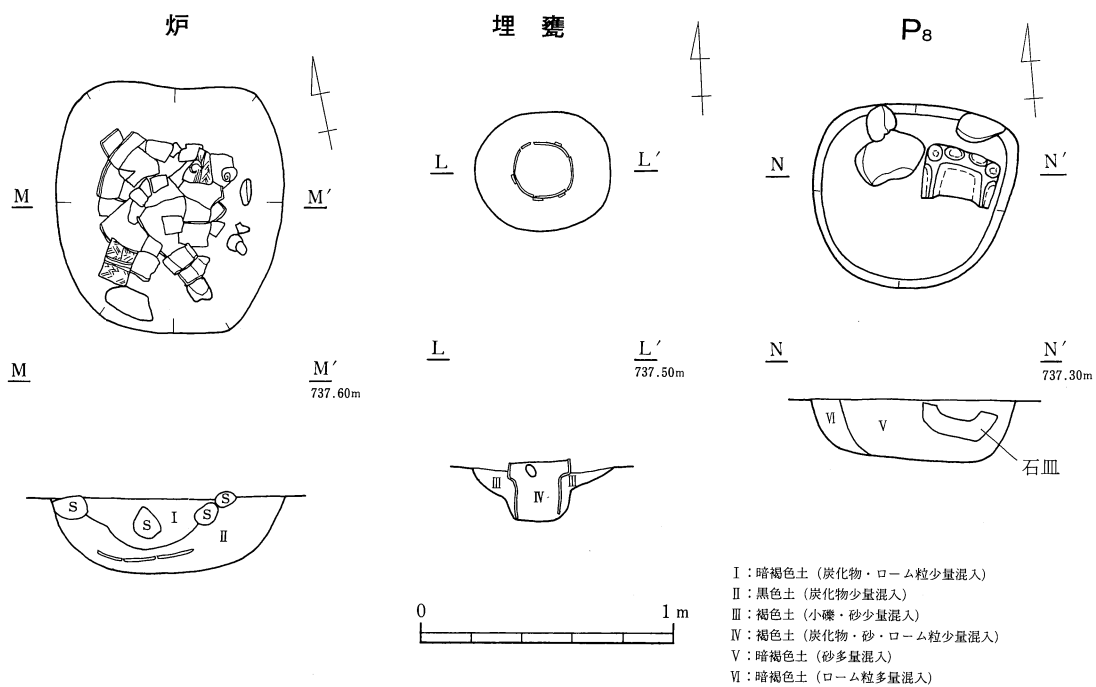


第35図 第3号住居址 (2)

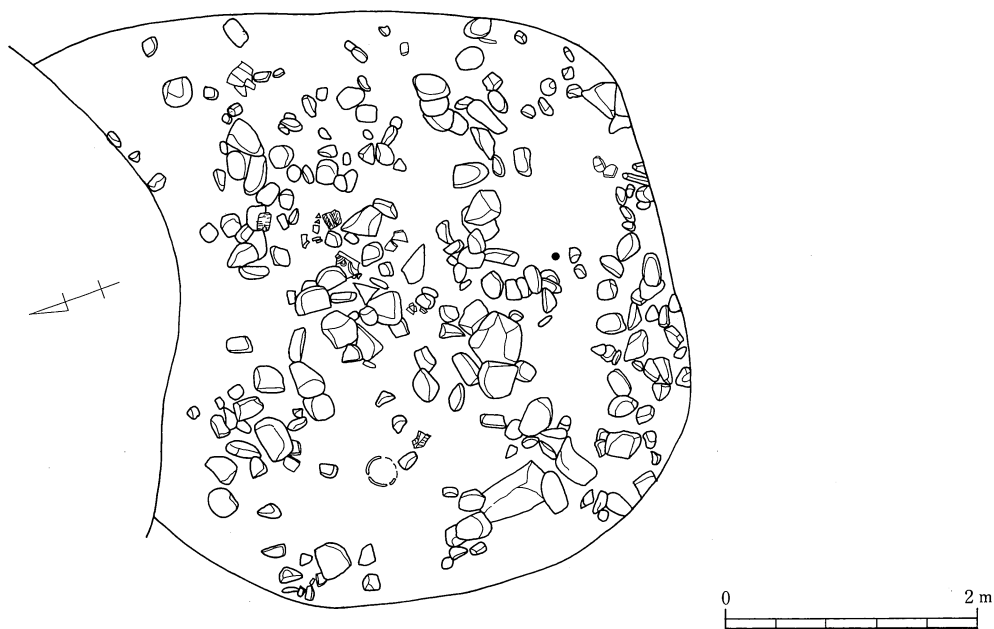
完掘状態



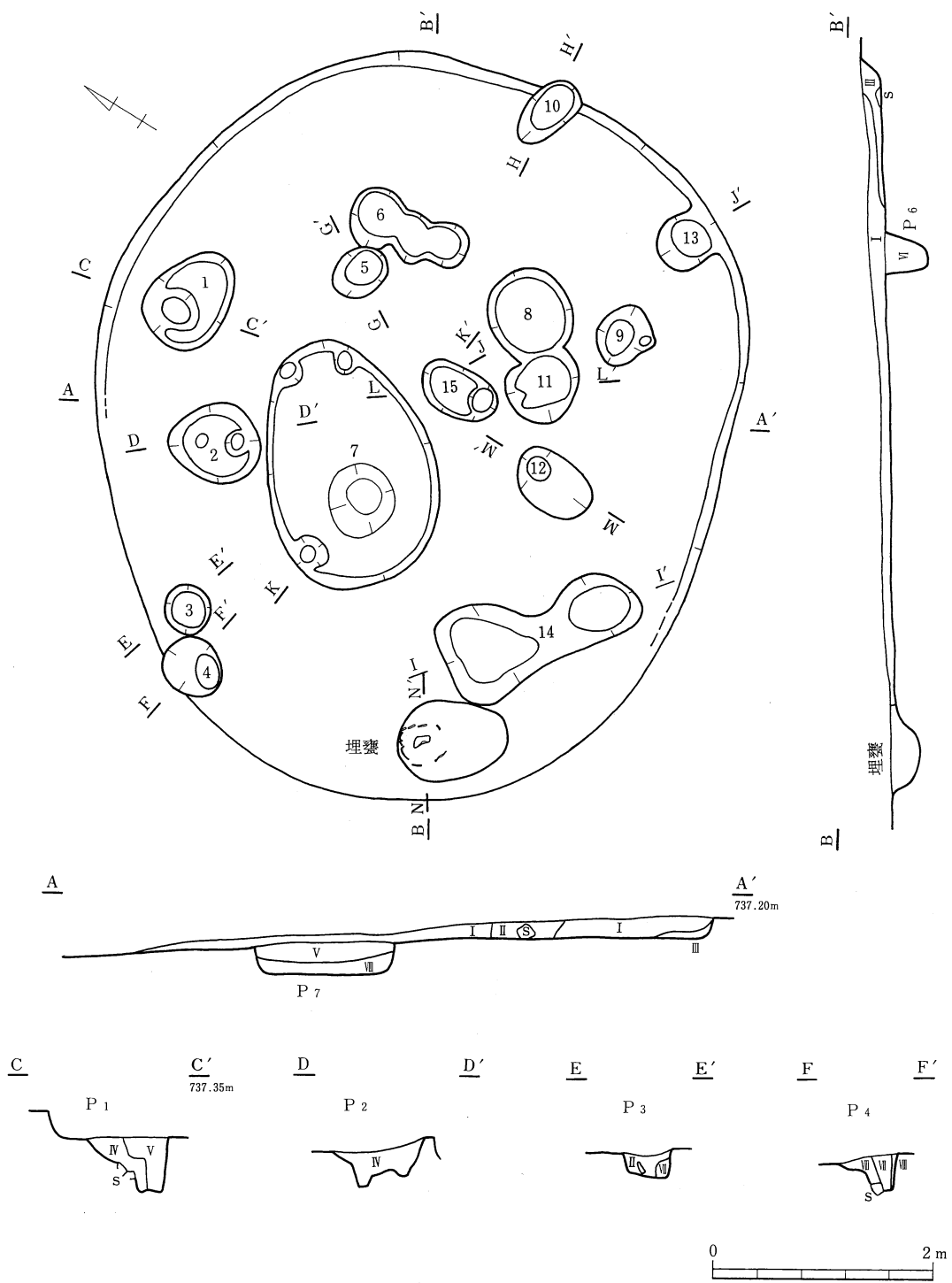
第36図 第15号住居址 (1)



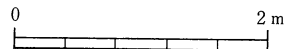
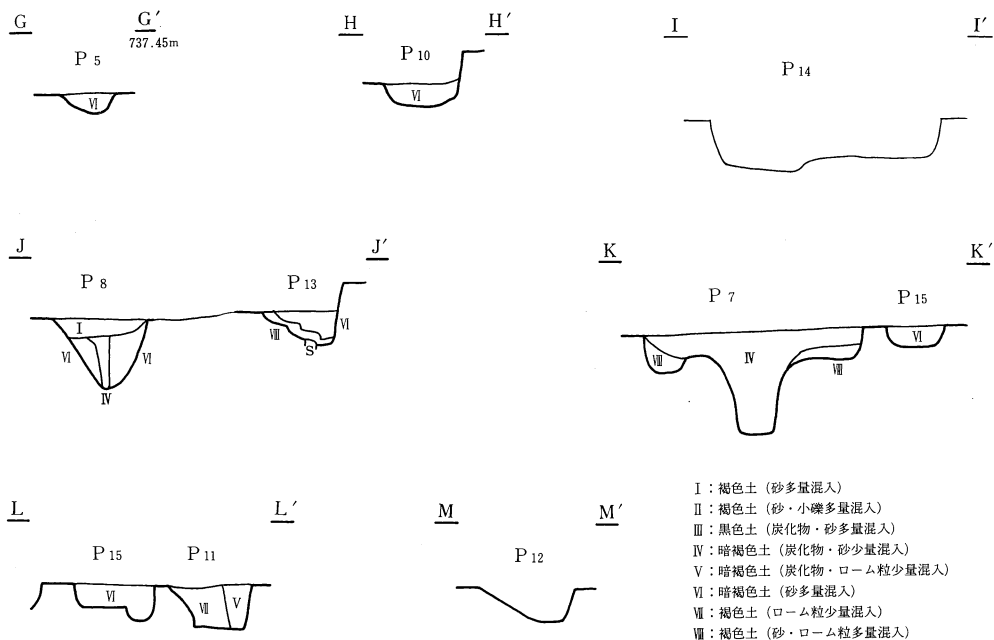
遺物出土状態



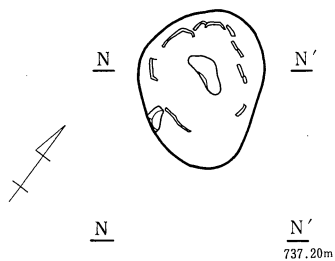
第37図 第15号住居址 (2)



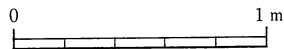
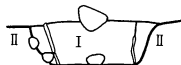
第38图 第17号住居址 (1)



埋 甕

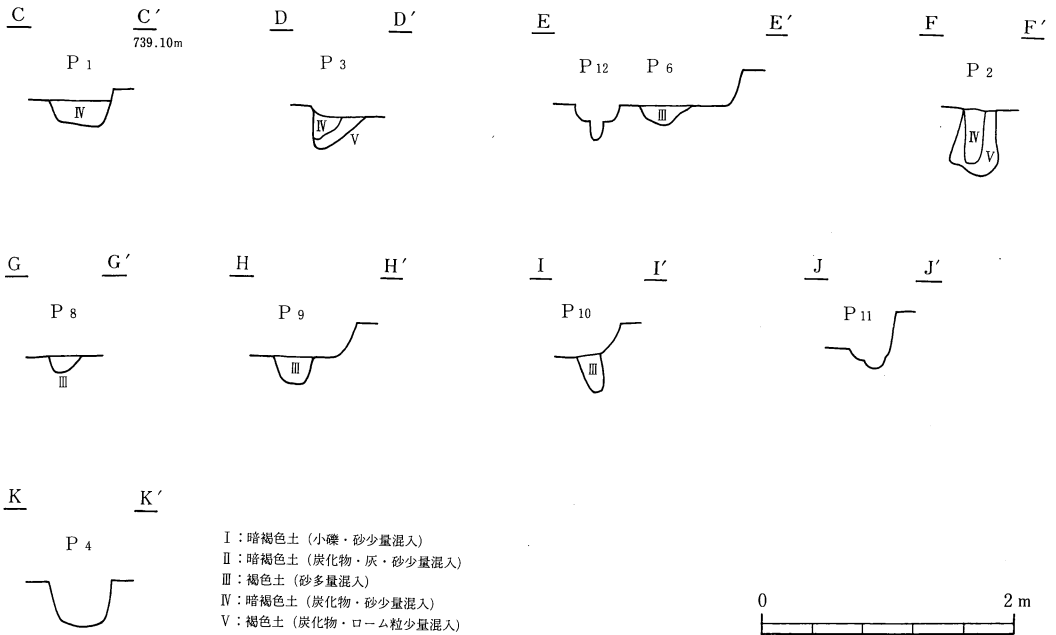
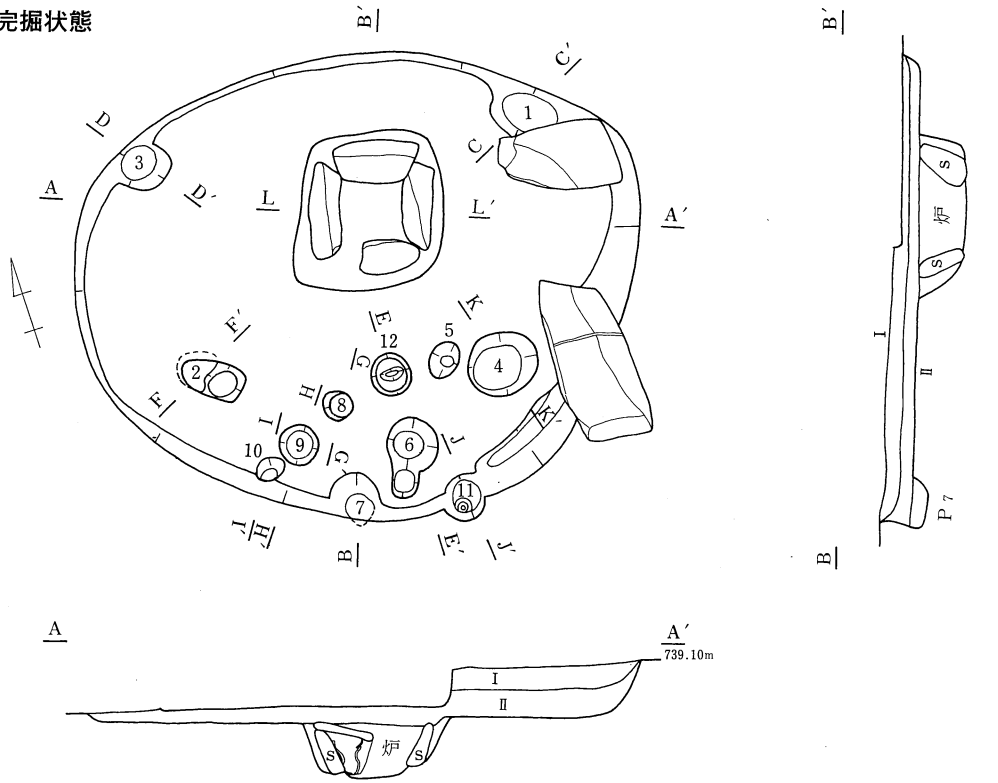


- I : 褐色土 (炭化物・砂・ローム粒少量混入)
- II : 褐色土 (砂・小礫少量混入)



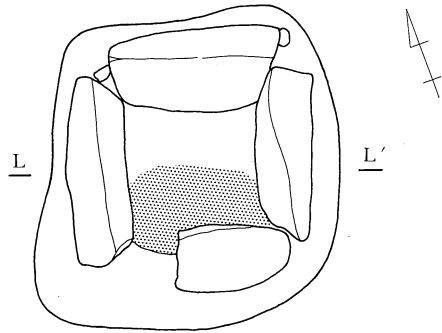
第39図 第17号住居址 (2)

完掘状態



第40図 第23号住居址 (1)

炉

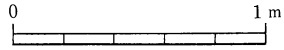
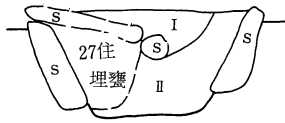


L

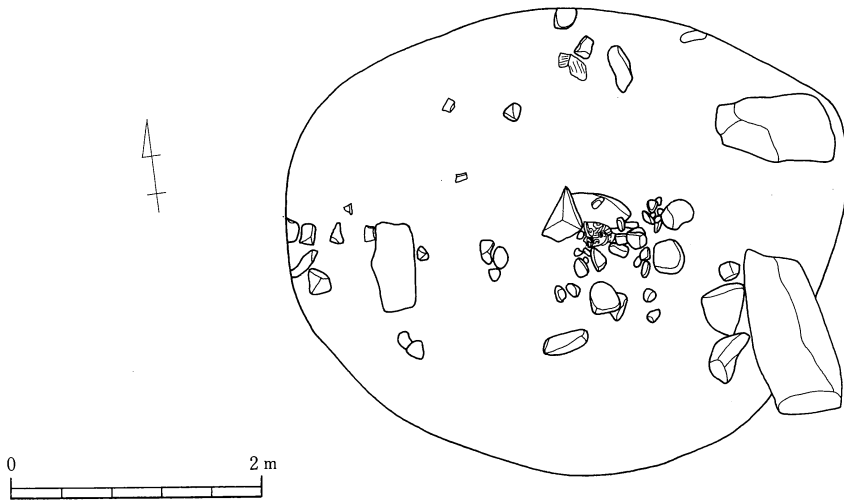
L'

739.00m

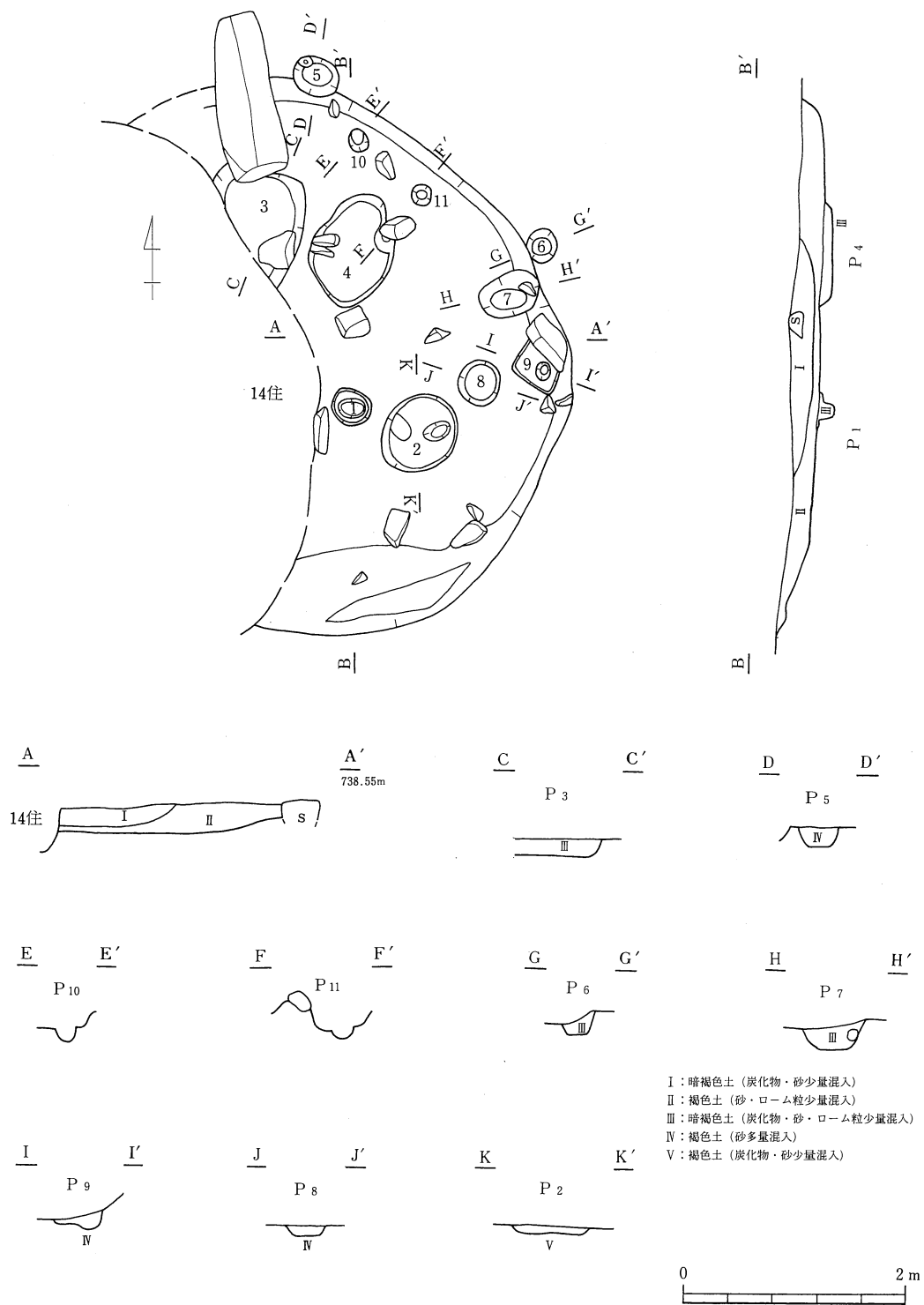
I: 暗褐色土 (炭化物・砂・石英閃緑岩粒少量混入)
 II: 褐色土 (砂・ローム粒少量混入)



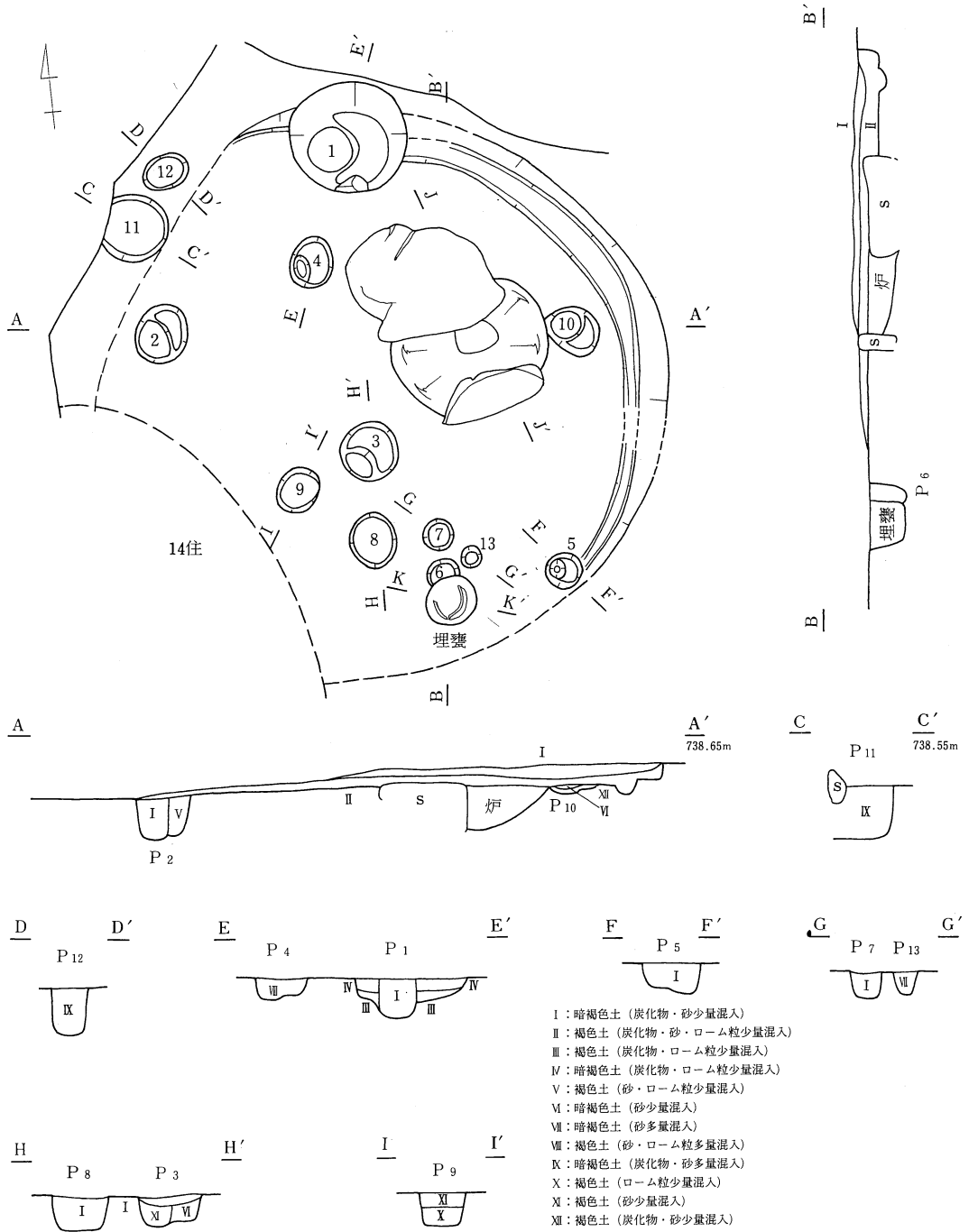
遺物出土状態



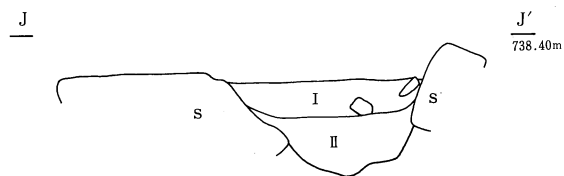
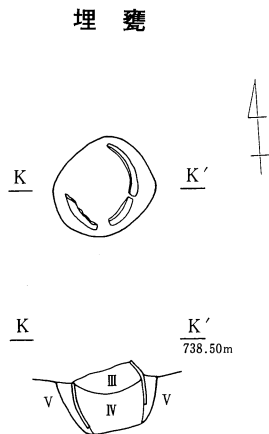
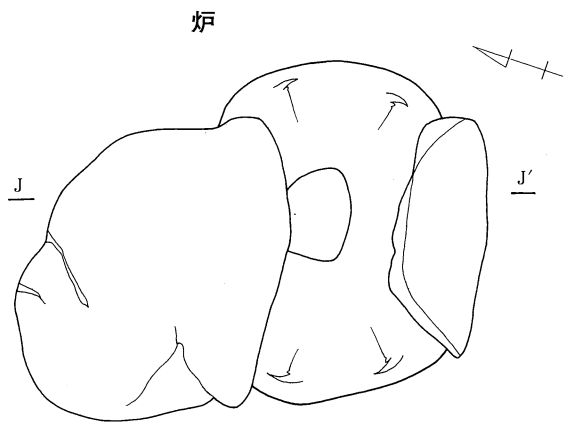
第41図 第23号住居址 (2)



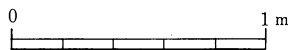
第42図 第31号住居址



第43図 第4号住居址 (1)

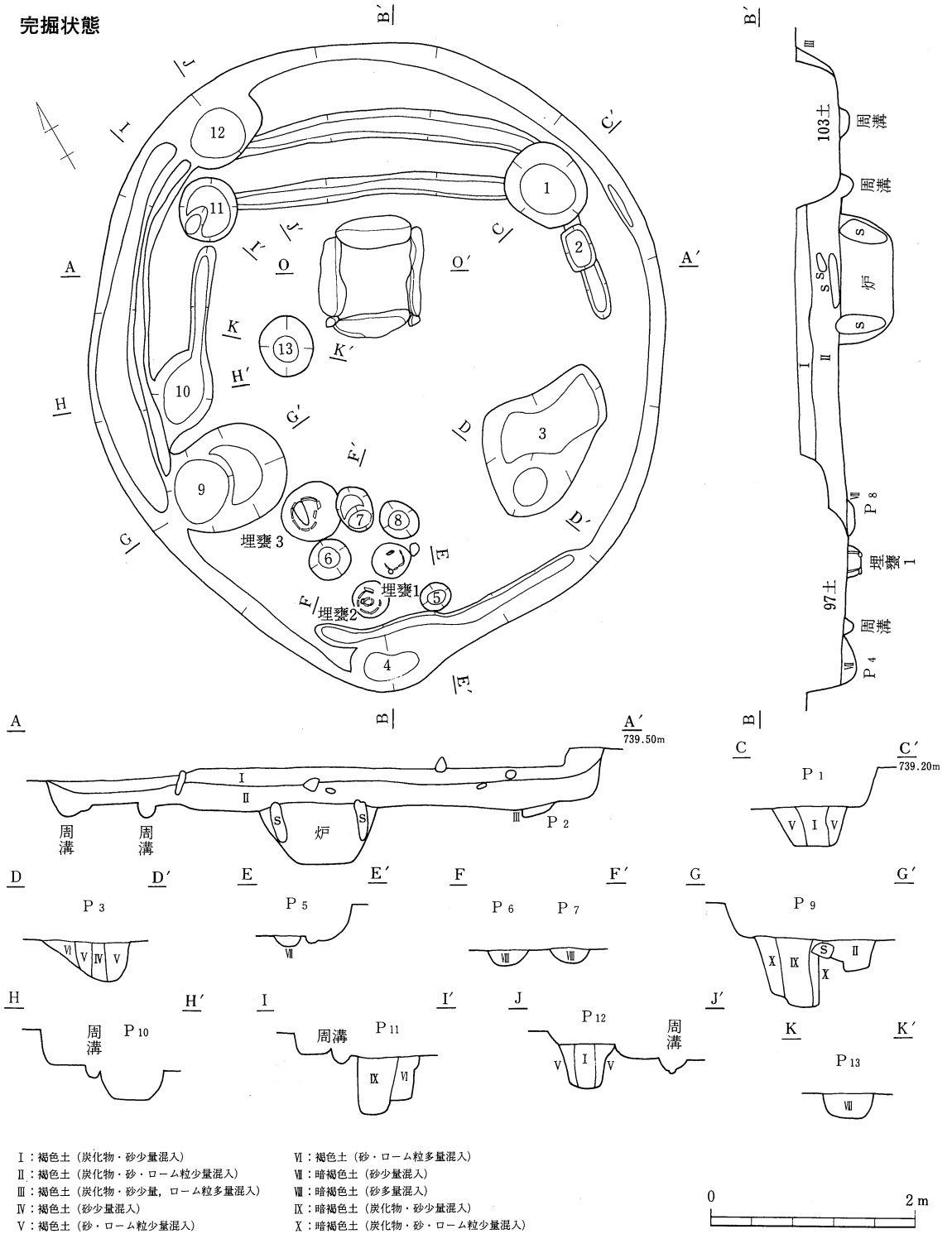


- I : 暗褐色土 (小礫・炭少量混入)
- II : 暗褐色土 (砂多量混入)
- III : 褐色土 (砂少量混入)
- IV : 褐色土 (炭化物・砂少量混入)
- V : 暗褐色土 (砂少量混入)



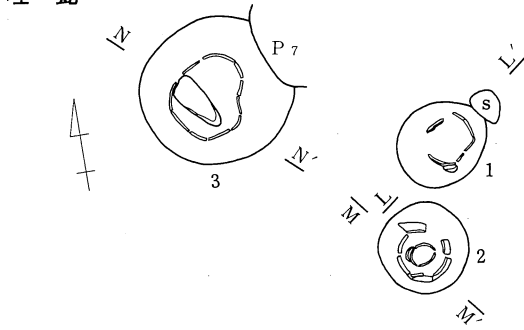
第44図 第4号住居址 (2)

完掘状態

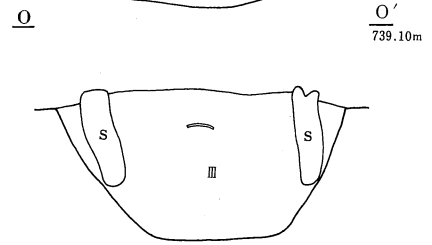
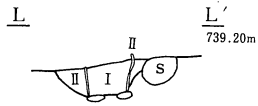
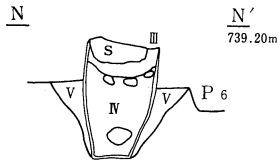
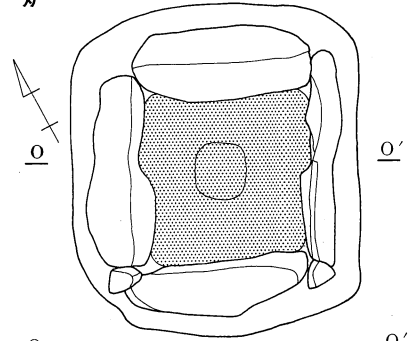


第45図 第24号住居址 (1)

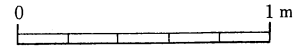
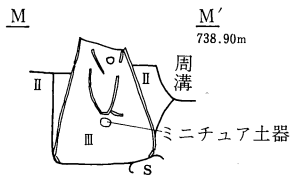
埋 甕



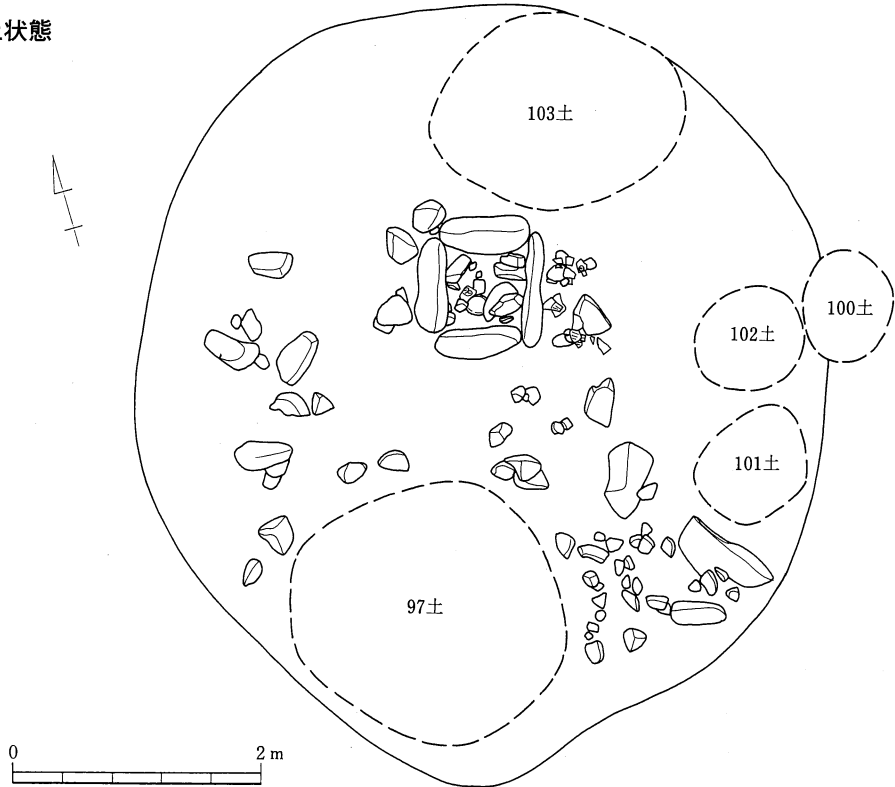
炉



- I : 暗褐色土 (砂・ローム粒少量混入)
- II : 褐色土 (ローム粒少量混入)
- III : 褐色土 (砂少量混入)
- IV : 褐色土 (砂・小礫少量混入)
- V : 褐色土 (砂・ローム粒少量混入)

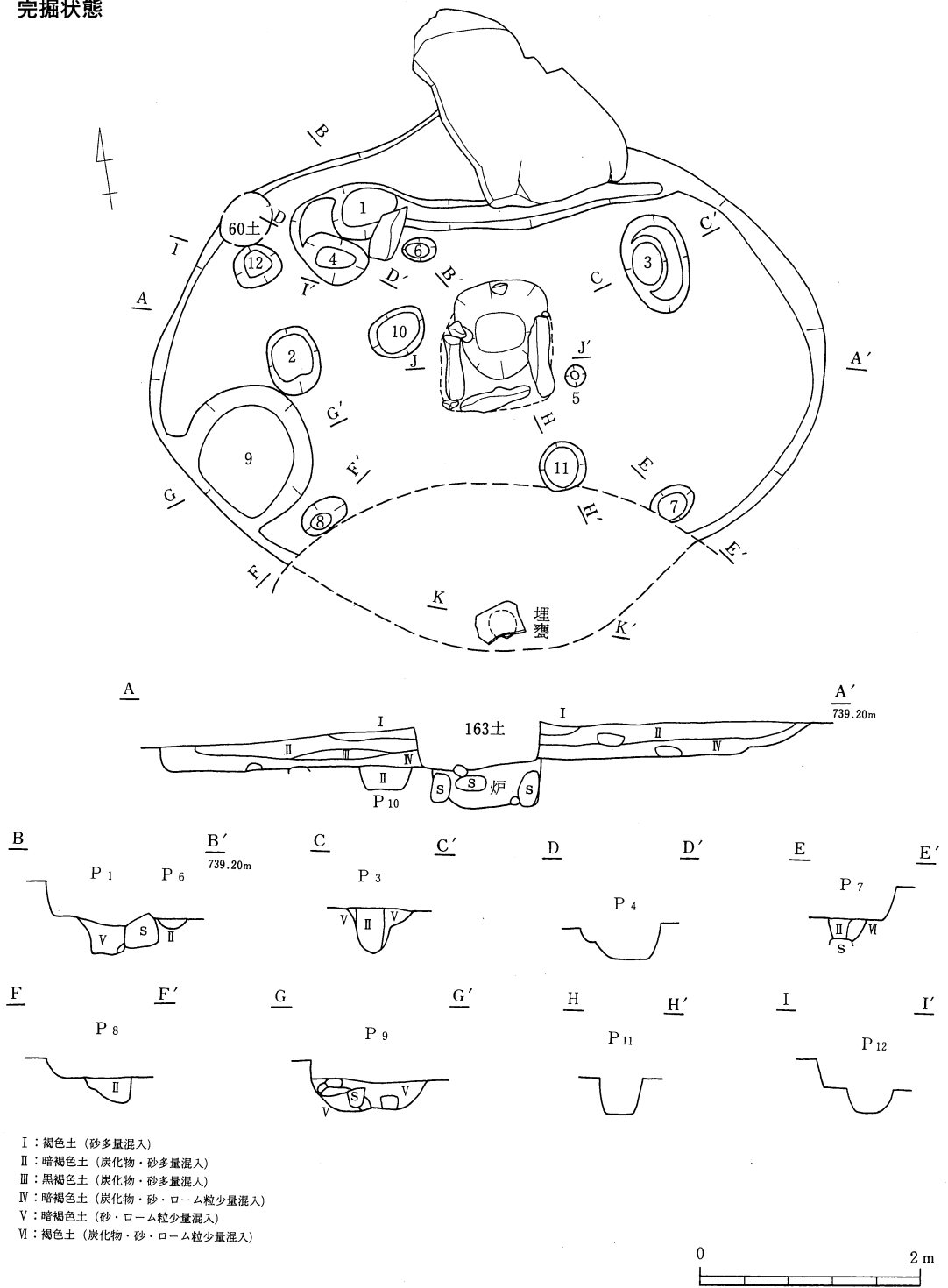


遺物出土状態



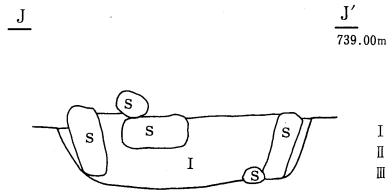
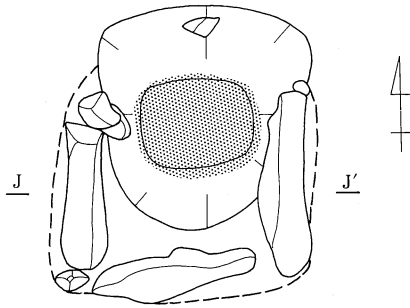
第46図 第24号住居址 (2)

完掘状態

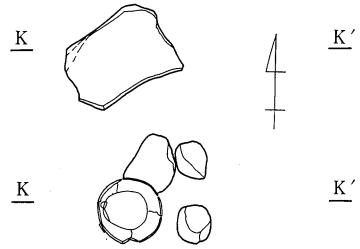


第47図 第27号住居址 (1)

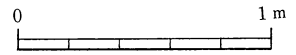
炉



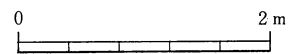
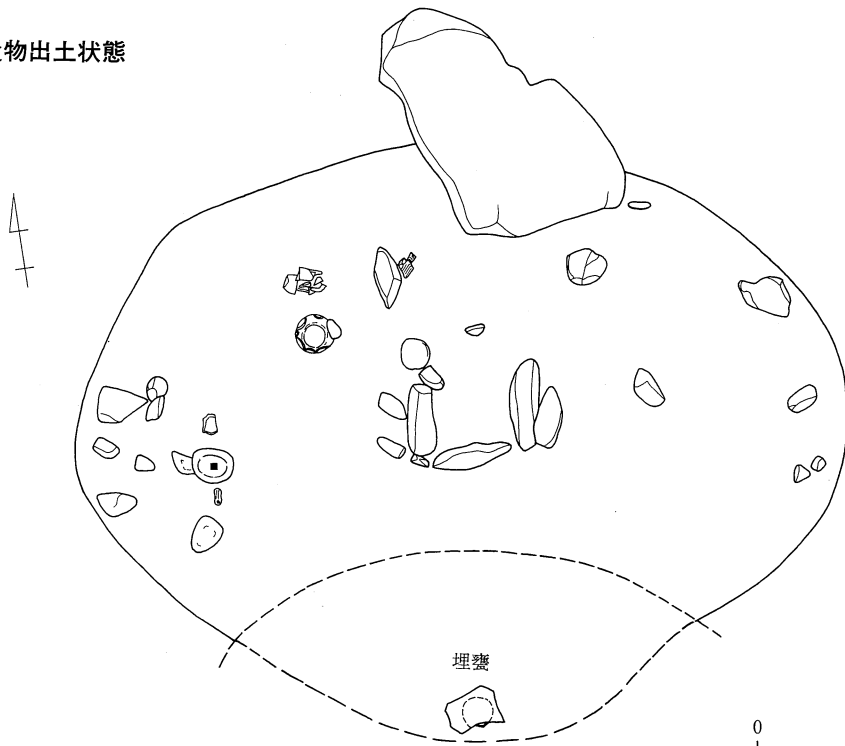
埋 甕



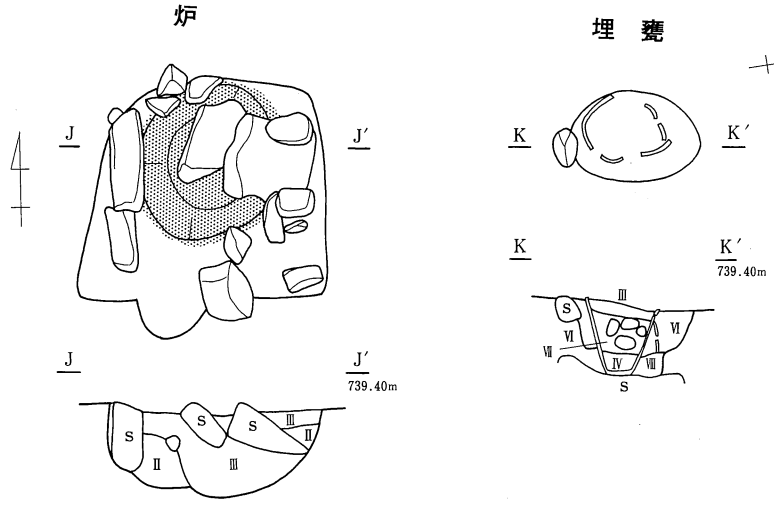
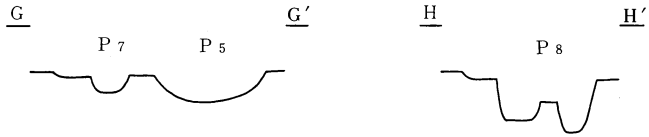
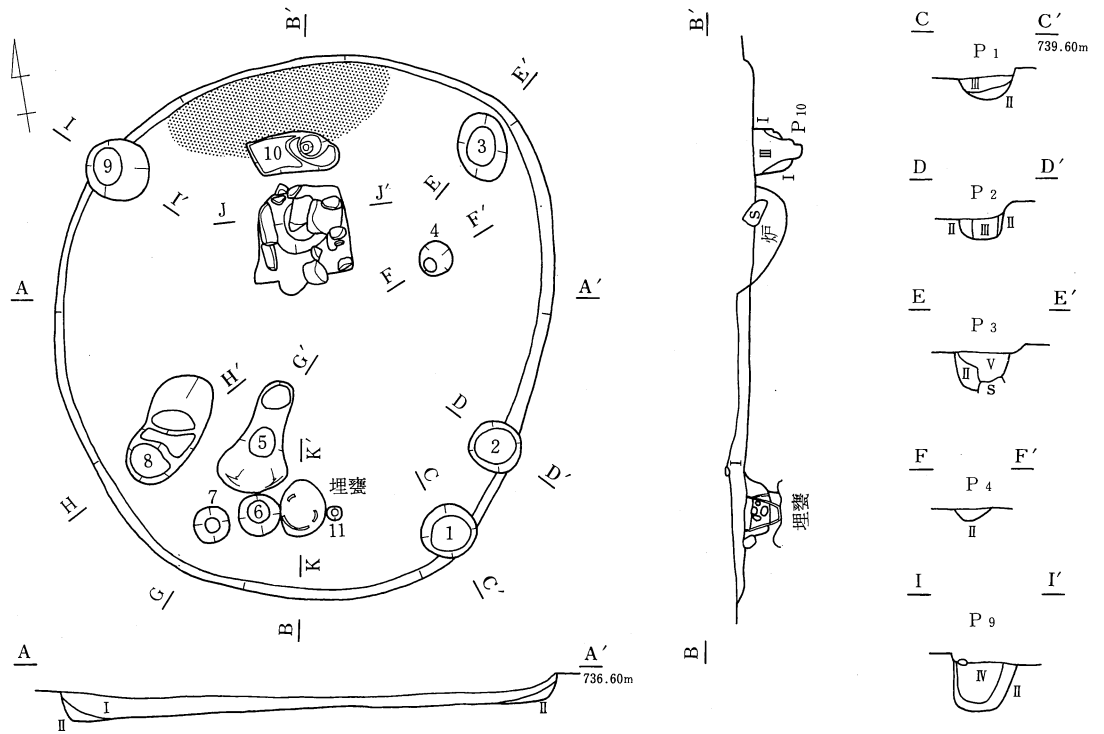
- I：黒色土（炭化物・砂少量混入）
- II：褐色土（ローム粒少量混入）
- III：褐色土（灰・砂少量混入）



遺物出土状態

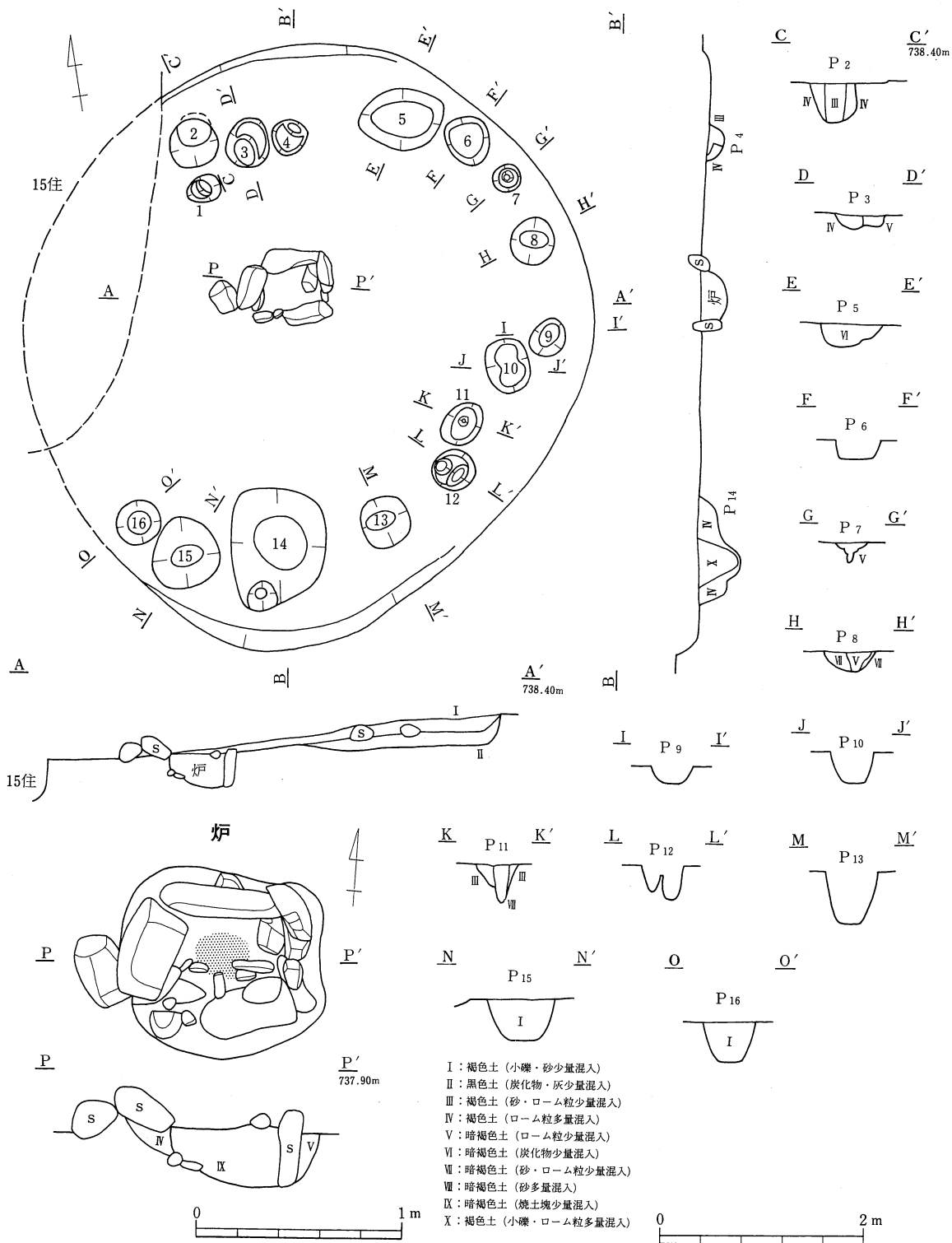


第48図 第27号住居址 (2)

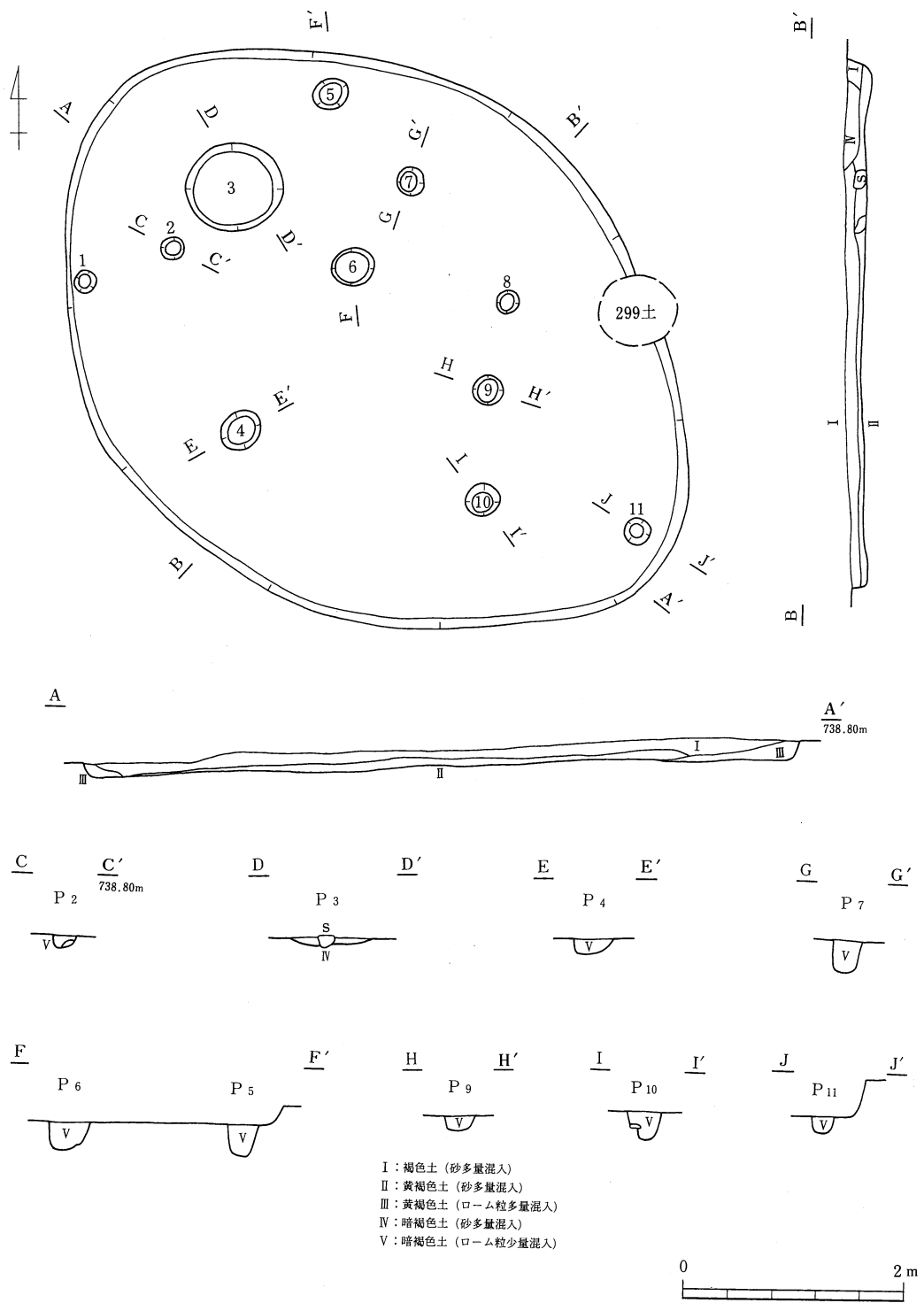


- I: 褐色土 (砂・ローム粒少量混入)
- II: 褐色土 (ローム粒多量混入)
- III: 褐色土 (砂少量混入)
- IV: 褐色土 (炭化物・砂・ローム粒少量混入)
- V: 褐色土 (炭化物・砂少量混入)
- VI: 褐色土 (ローム粒少量混入)
- VII: 褐色土 (炭化物・小礫少量混入)
- VIII: 黄褐色土 (ローム塊多量混入)

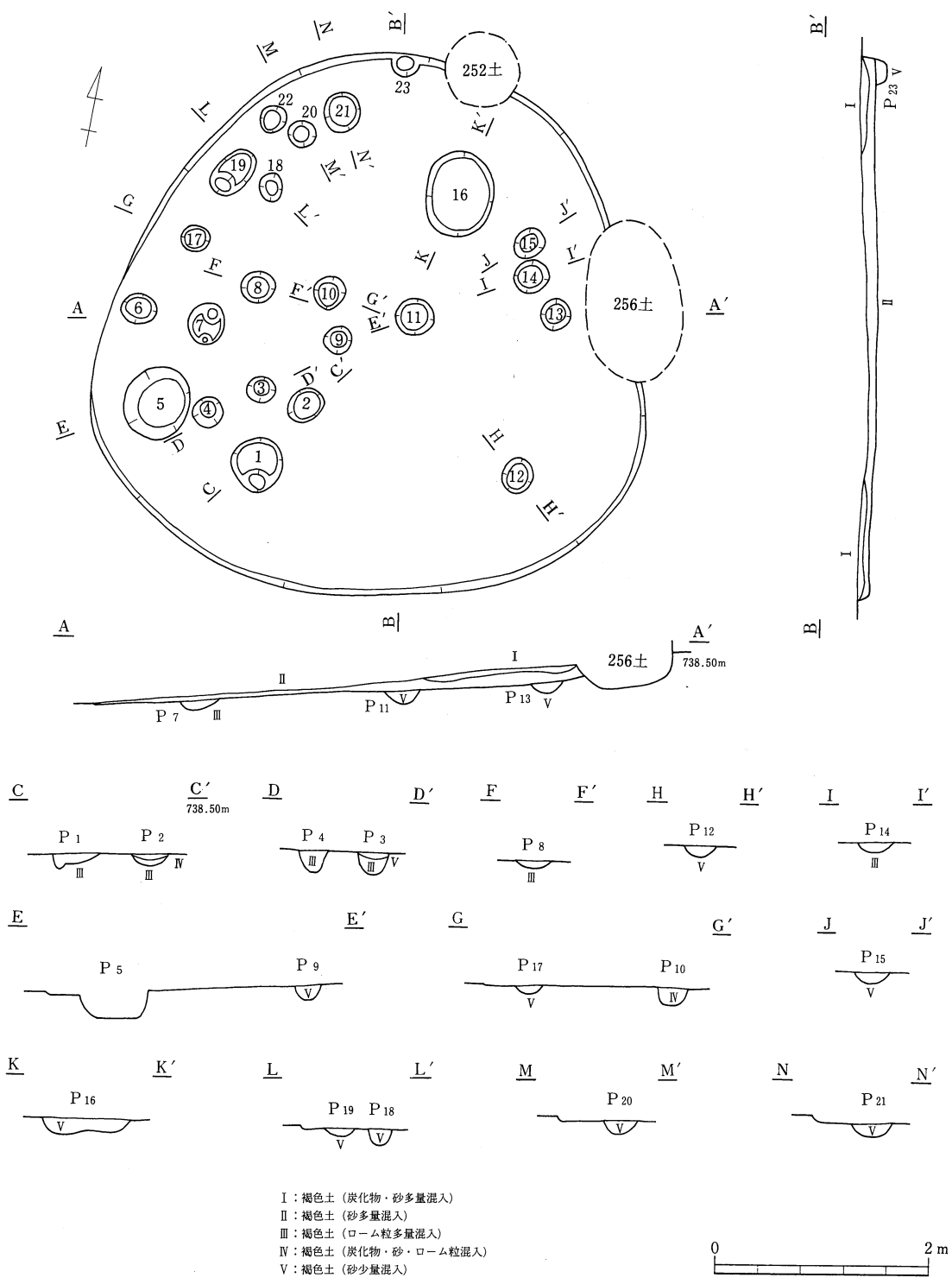
第49图 第25号住居址



第50图 第28号住居址

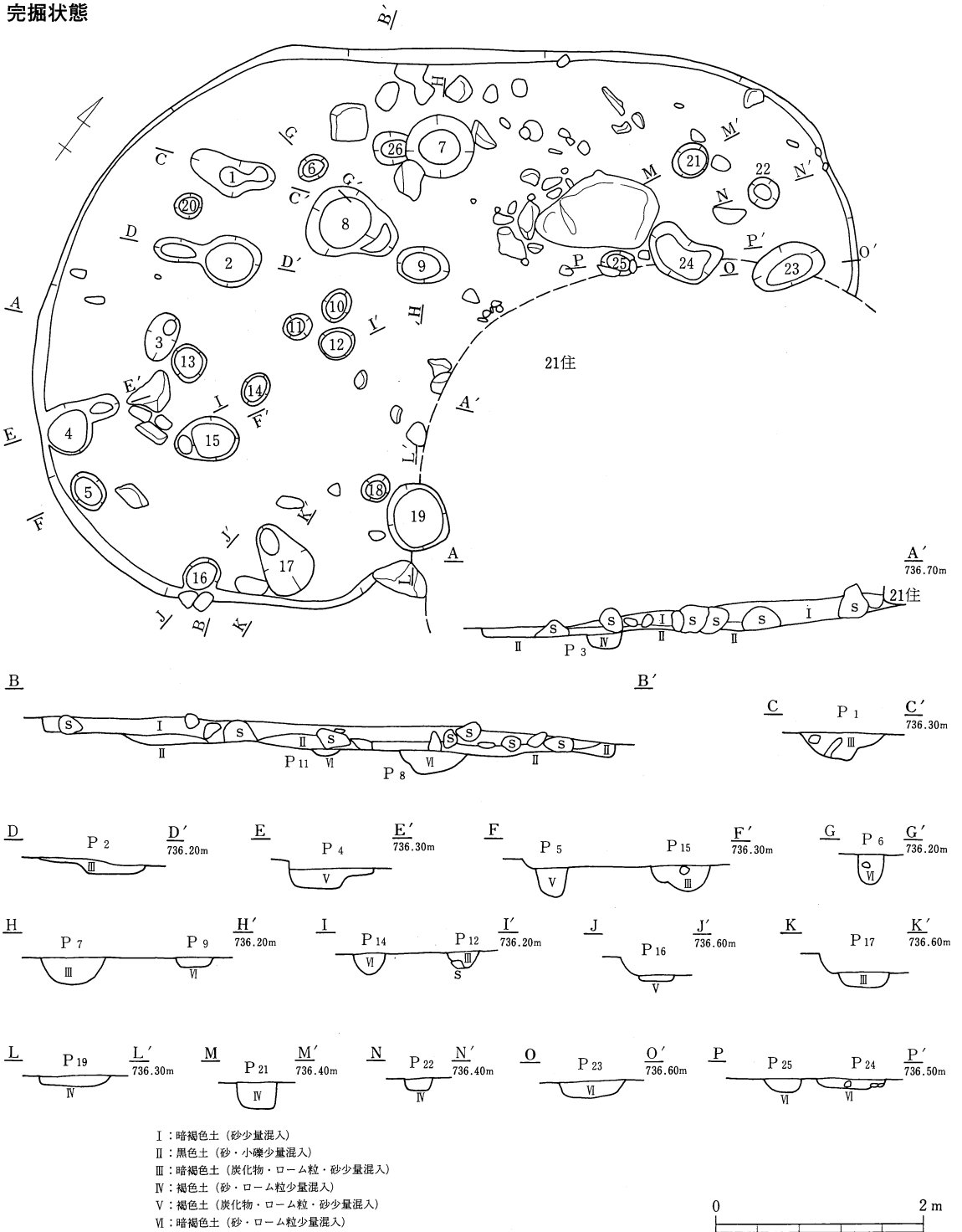


第51图 第6号住居址



第52図 第7号住居址

完掘状態

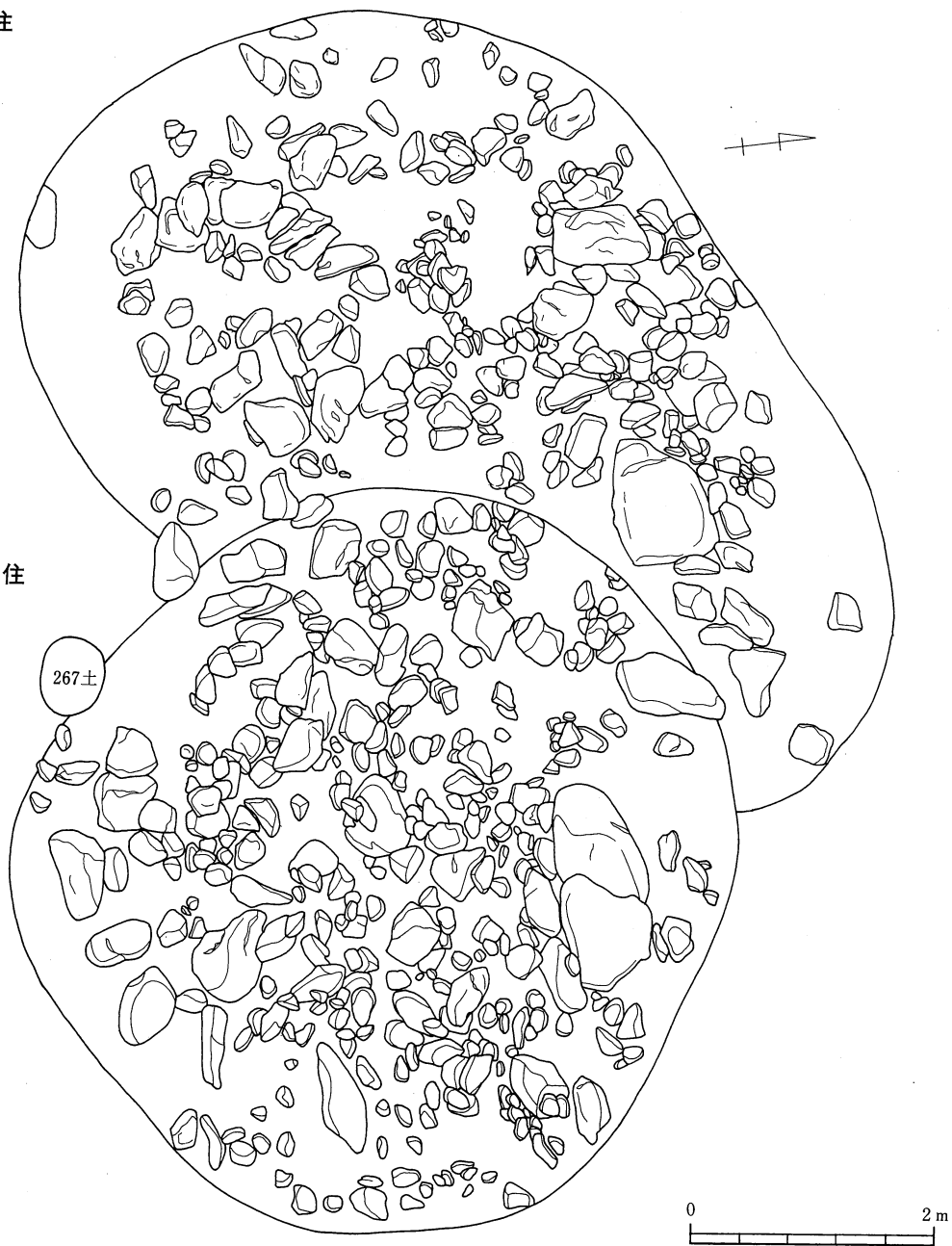


第53図 第22号住居址 (1)

遺物出土状態

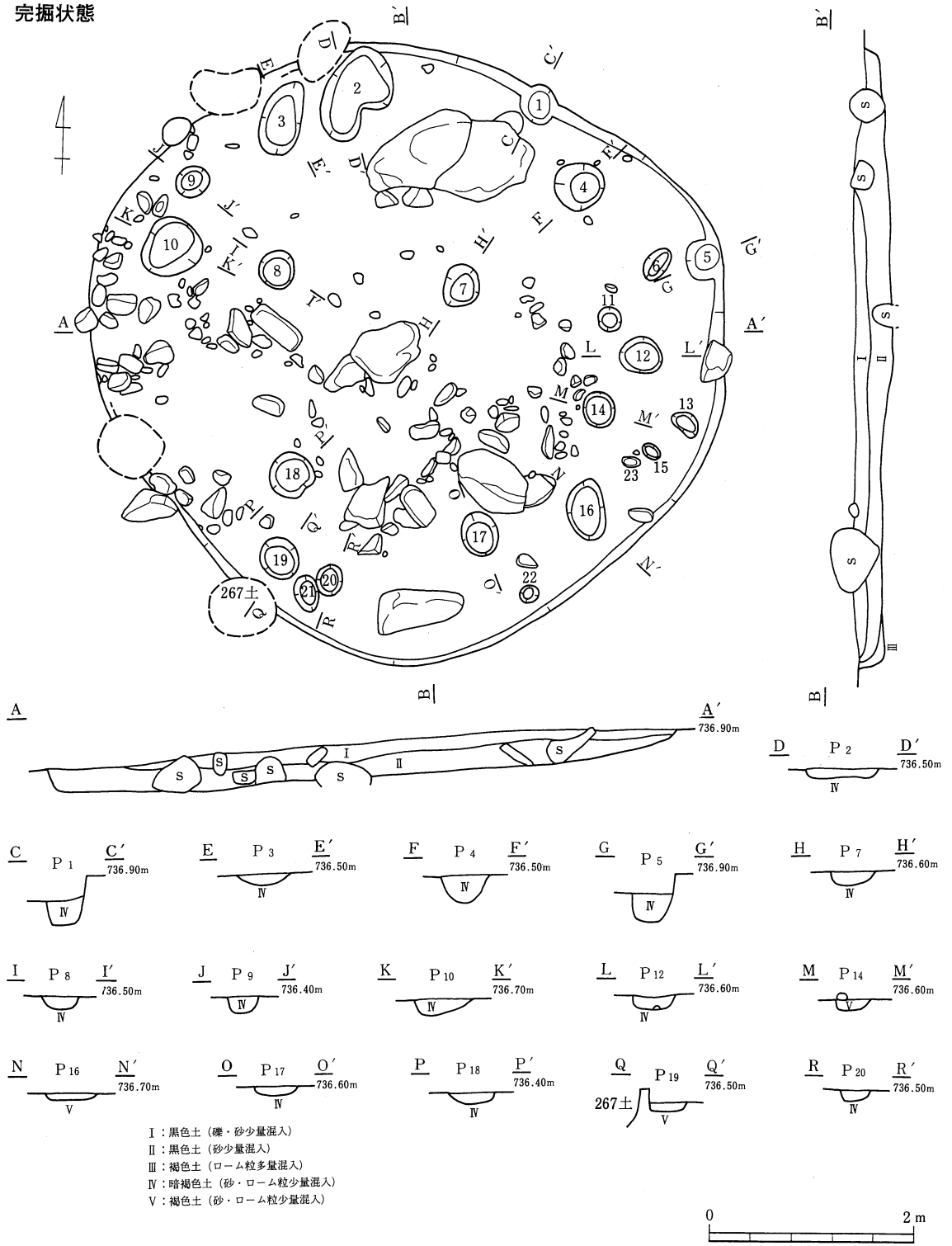
22住

21住



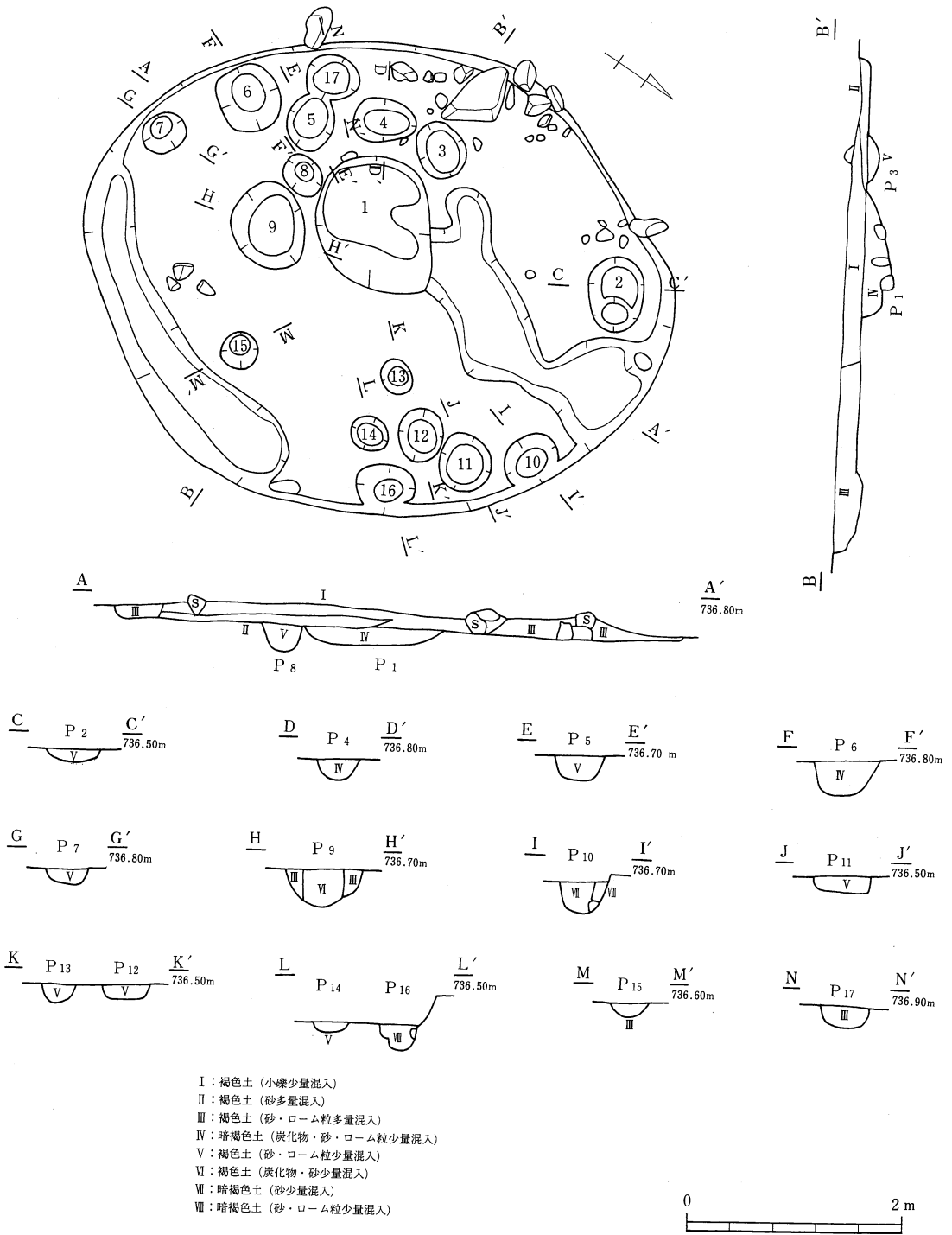
第54図 第22号住居址 (2)・第21号住居址 (1)

完掘状態



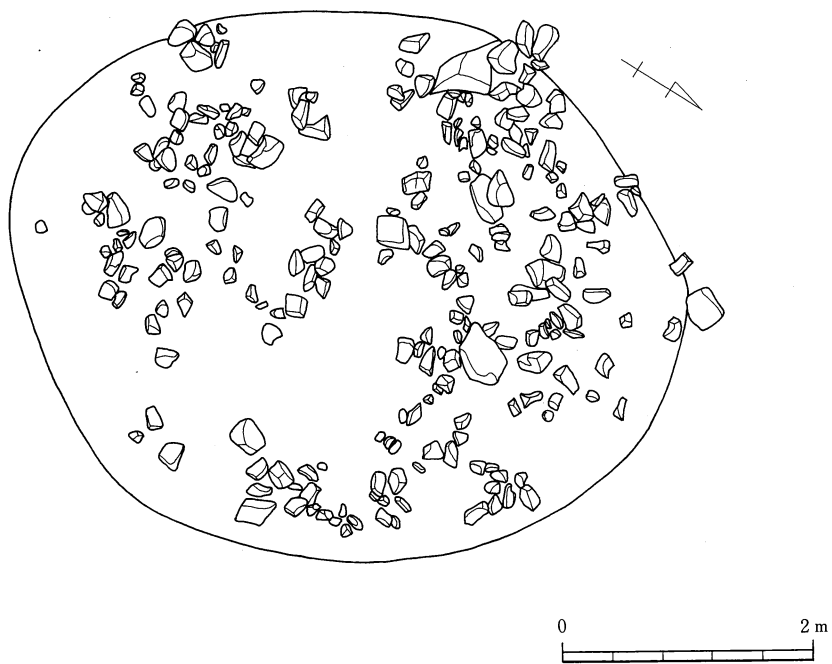
第55図 第21号住居址 (2)

完掘状態



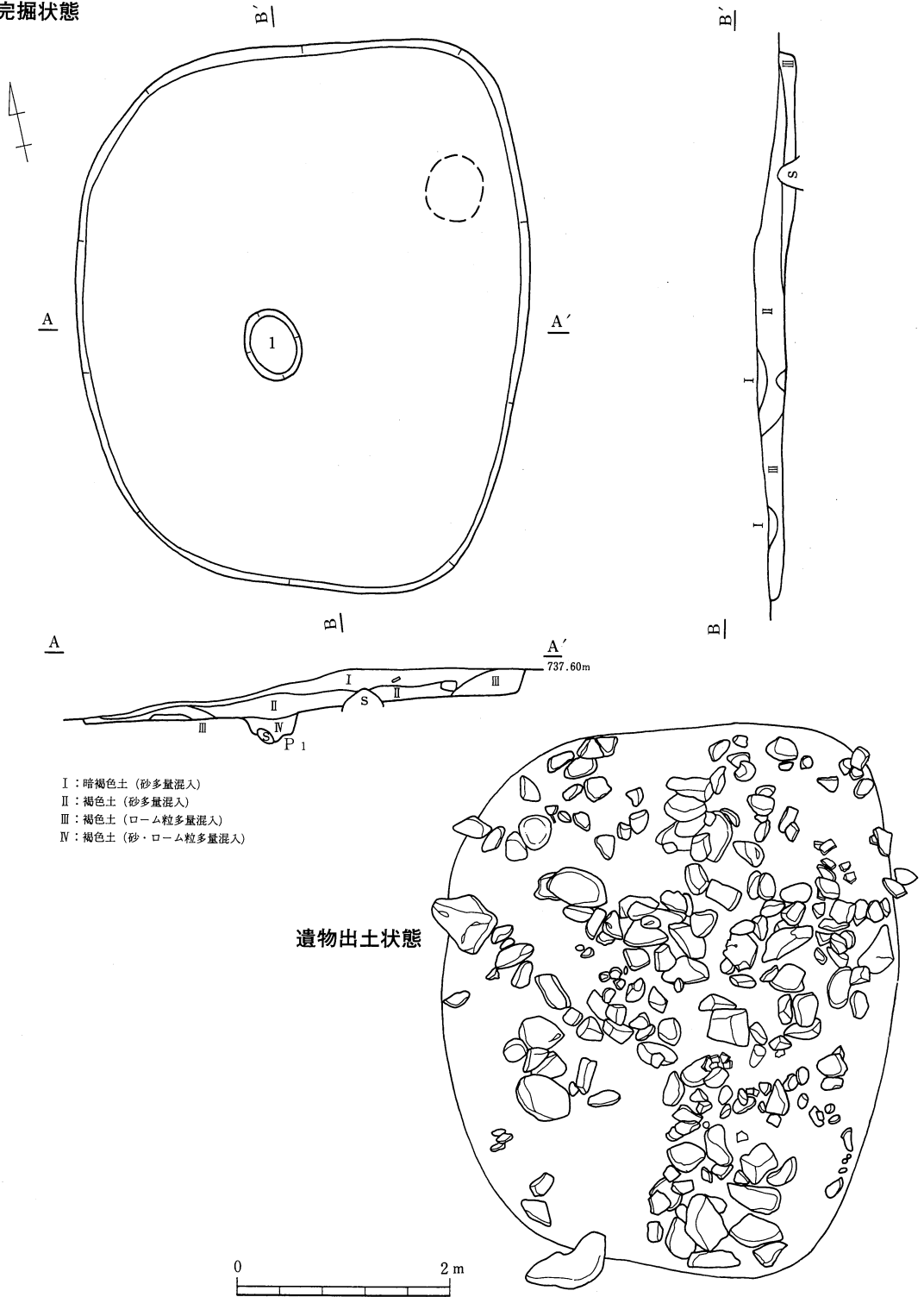
第56図 第20号住居址 (1)

遺物出土状態



第57図 第20号住居址 (2)

完掘状態



- I : 暗褐色土 (砂多量混入)
- II : 褐色土 (砂多量混入)
- III : 褐色土 (ローム粒多量混入)
- IV : 褐色土 (砂・ローム粒多量混入)

遺物出土状態

第58図 第19号住居址

2. 方形柱穴列

今回の調査では発掘中に建物址と推定される柱穴列を数か所確認した。このうち今回方形柱穴列1としたものについて明確にすることができた。しかし他の数か所については、整理の段階で配置や遺物等を検討したが、確定することはできなかった。そのためこれら以外については位置を示すにとどめた。なお遺構の名称は、本報告では「方形柱穴列」としたが、さらなる検討を要するものである。

方形柱穴列1（第59図）

調査区の中央やや北寄りに位置する。第19号住居址に南西隅の柱穴（No.3）の上部を切られる。南北3基の柱穴が東西に2列並んで検出された。南北7.6m、東西4.5mで、主軸はN-10°-Eである。東西1間、南北2間で、北側がわずかに開いている。柱穴の大きさにはややバラつきがあるが、最も深い部分はほぼ均等の間隔になる。各柱穴のデータは下の表に示してある。柱痕はNo.1とNo.2で明瞭に観察された。柱の直径は20cm程度の大形のもので推定される。斜面にあって上部を削平されているため、柱穴以外の施設の存在は不明である。遺物は各柱穴内より少量の土器片が出土している。本址の時期のものと推定されるものの他、中期中葉の土器片が数片混入している。

時期は柱穴内の遺物と他遺構との切り合いより、縄文時代中期後葉Ⅲ期と推定される。

その他、建物址の可能性のある土坑群は調査区の中央部から南西部にかけて分布している。特に第21・22号住居址の南西には直径20cm程の土坑が集中し、部分的に列が認められるものもある。明確な柱痕の検出されたものが少なく、また遺物のないものが多いため、明確ではないが、柵列等の可能性も含めて、再検討を要するものである。

土坑No.	座 標	大 き さ (cm)	平 面 形	断 面 形
		長軸×短軸×深さ		
1	N13 E 8	144×102×66	不 整 形	e
2	N10 E 7	84× 82×54	円 形	c
3	N 6 E 7	61× 52×48	円 形	c
4	N16 E10	174× 90×73	楕 円 形	d
5	N 9 E10	103× 90×78	円 形	d
6	N12 E12	100× 86×60	円 形	e

〔表中の断面形については、土坑の凡例（P103）を参照されたい。〕

3. 土坑（第60～64図）

第2次調査では1078基検出された。調査区の全体に分布するが、特に西側の平坦部に集中している。北東部の住居址群に囲まれた部分と南東部の谷状に傾斜する部分は空白になっていた。報告書作製にあたっては数量があまりに多いため、埋設土器をもつもの、配石状の礫を伴うものなどを抽出・図示し、他については一覧表でデータを提示した。十分な分析には至らなかった。

検出された土坑を時期別にみると、ほとんどが縄文時代のものであるが、古墳時代後期と思われるものが1基ある（第785号土坑）。他には調査区西端部に数基、覆土の状況から中世の土坑墓と思われるものがあったが、遺物がなく、時期は決定できない。縄文時代の土坑の時期別の分布等については、考察の項を参照されたい。以下主要なものについて概観してみたい。

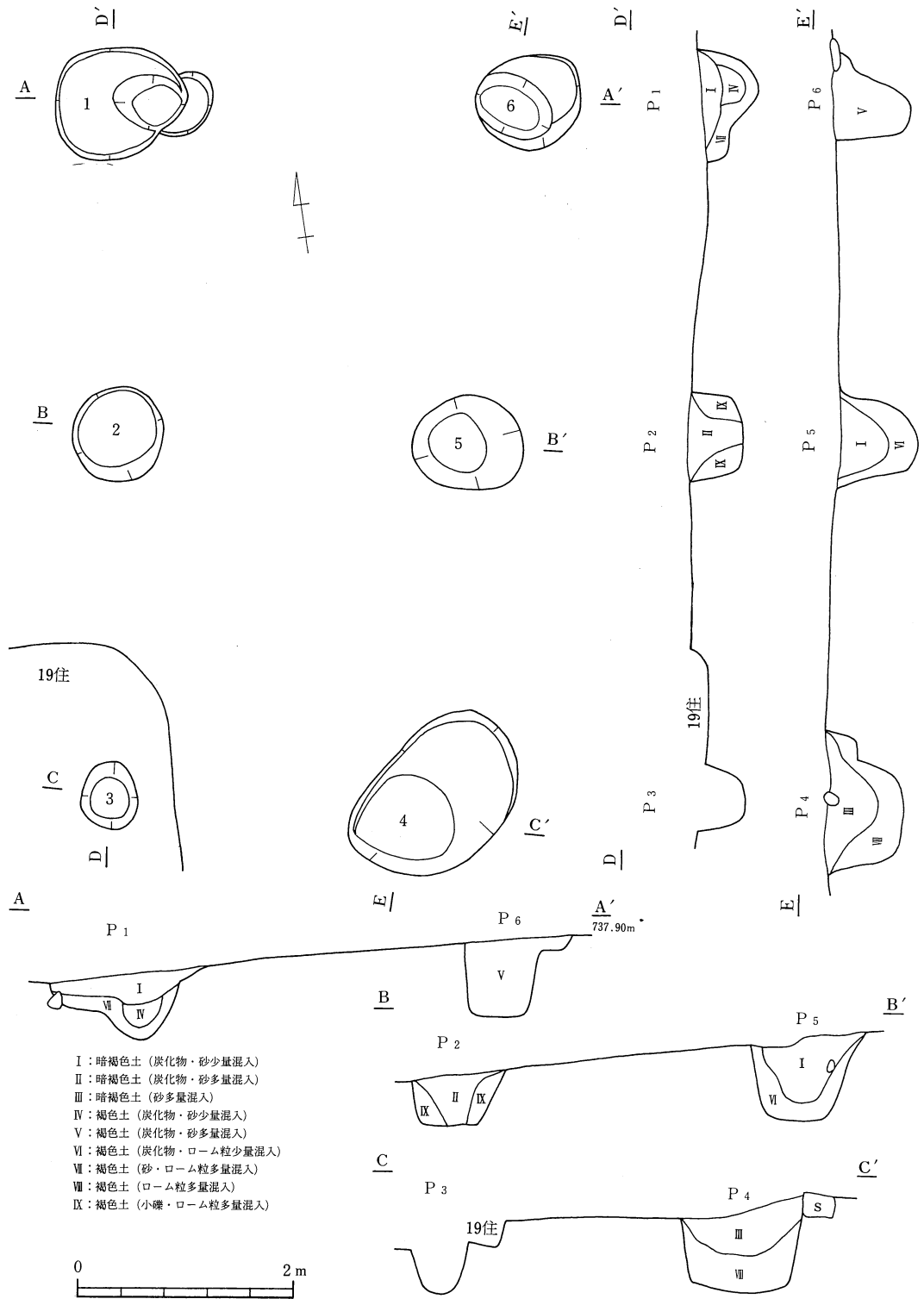
埋設土器をもつものは第60・71・154・1079号土坑の4基である（第60図）。いずれも土器の遺存状態はよくなく、復元・図示できたものは60坑・154坑の2点のみである。154は平出第三類A土器の胴部（第88図129）を正位で埋設している。71は無文の大形の深鉢の底部を正位で埋設している。時期は中期後葉と推定される。

配石状の礫を伴うものは図示したもののほか10数基である。坪ノ内遺跡などにみられた配石を伴う墓と推定される土坑とは様相が異なっており、性格不明なものが多い。第401号土坑など押型文土器を伴うものの中にも多量の礫をもつものがあるが、石の被熱や覆土中の炭などはみられず、この時期の集石炉と考えられるものはない。

十分な分析はできなかったが、近接する坪ノ内遺跡などの土坑群とは様相の異なる部分が多く、今後さらに検討していきたい。

4. 遺物包含層

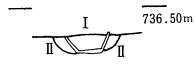
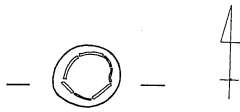
調査区の南東部の地形が谷状に落ちている部分で、検出作業の際に多量の土器が出土している。自然堆積の黒色土中に土器片が散在しており、最終的には整理箱に1箱弱が出土した。この場所は湧水が著しく、また器形を判別できるものや時期的なまとまりが認められないため、出土位置の記録等は行わずに掘り下げを行なった。出土した土器は早期の押型文土器に始まり、前期後葉、中期初頭・中葉・後葉と広い時期の破片がみられる。しかし風化が著しく、遺存状態は良くない。



- I : 暗褐色土 (炭化物・砂少量混入)
- II : 暗褐色土 (炭化物・砂多量混入)
- III : 暗褐色土 (砂多量混入)
- IV : 褐色土 (炭化物・砂少量混入)
- V : 褐色土 (炭化物・砂多量混入)
- VI : 褐色土 (炭化物・ローム粒少量混入)
- VII : 褐色土 (砂・ローム粒多量混入)
- VIII : 褐色土 (ローム粒多量混入)
- IX : 褐色土 (小礫・ローム粒多量混入)

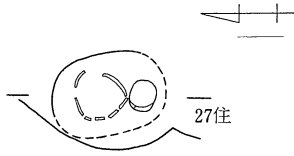
第59図 方形柱穴列

土坑71東埋設土器



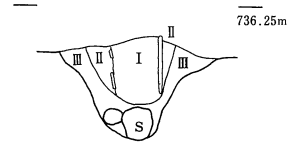
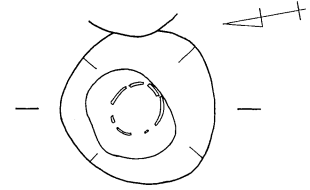
- I : 褐色土 (砂少量混入)
- II : 褐色土 (砂・ローム粒少量混入)

土坑60埋設土器



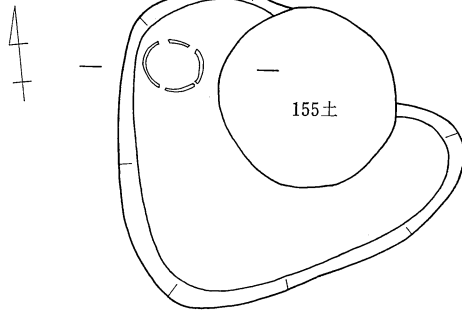
- I : 褐色土 (炭・骨片少量混入)
- II : 褐色土 (砂少量混入)

土坑1079埋設土器

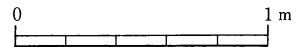


- I : 暗褐色土 (炭少量混入)
- II : 暗褐色土 (ローム粒少量混入)
- III : 褐色土 (砂・ローム粒少量混入)

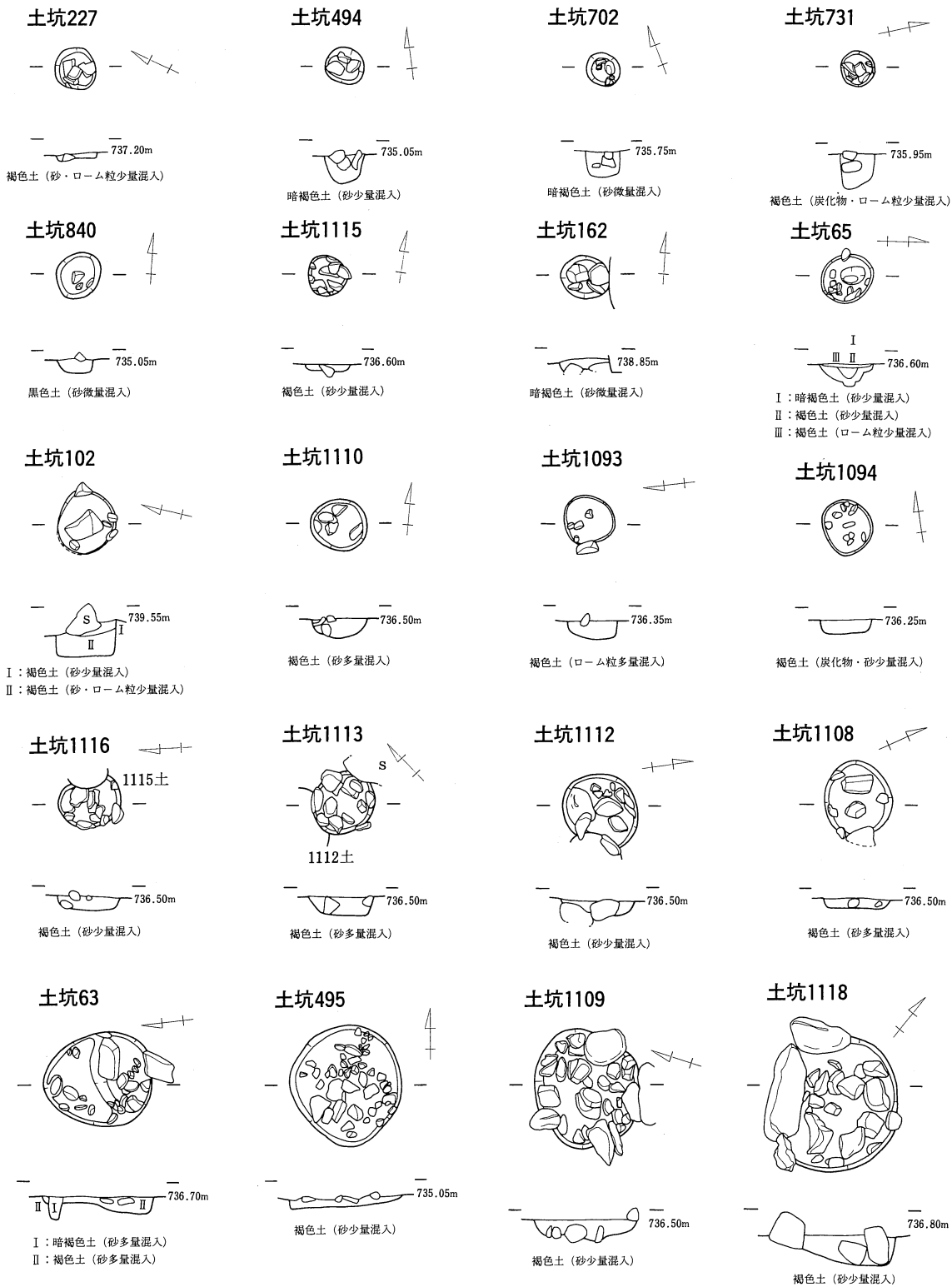
土坑154埋設土器



- I : 褐色土 (砂少量混入,
内部に顔料(?)片混入)
- II : 褐色土 (砂少量混入)

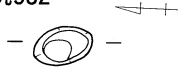


第60図 土坑 (1)



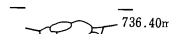
第61図 土坑 (2)

土坑982



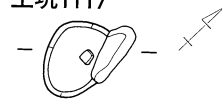
暗褐色土 (小礫・ローム粒少量混入)

土坑979



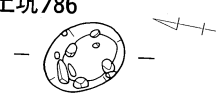
暗褐色土 (砂少量混入)

土坑1117



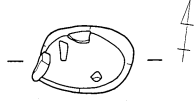
暗褐色土 (ローム粒少量混入)

土坑786

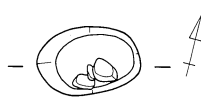


I: 暗褐色土 (炭化物・砂少量混入)
II: 褐色土 (ローム粒多量混入)

土坑290



土坑125



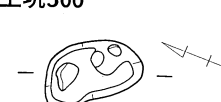
I: 褐色土 (砂多量混入)
II: 褐色土 (砂・ローム粒多量混入)

土坑806



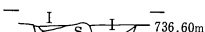
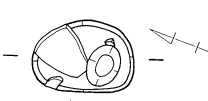
I: 黒色土 (小礫・砂少量混入)
II: 褐色土 (ローム粒多量混入)

土坑300



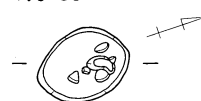
I: 暗褐色土 (炭化物少量混入)
II: 褐色土 (ローム粒多量混入)

土坑268



I: 黒色土 (炭化物少量混入)
II: 暗褐色土 (炭化物・ローム粒少量混入)

土坑285



土坑114



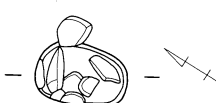
I: 褐色土 (小礫・砂少量混入)
II: 褐色土 (炭化物・砂少量混入)

土坑586



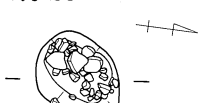
I: 灰色土 (小礫少量混入)
II: 暗褐色土 (砂少量混入)

土坑270



I: 暗褐色土 (砂少量混入)
II: 暗褐色土 (砂・ローム粒多量混入)

土坑235



褐色土 (砂・ローム粒少量混入)

土坑1100



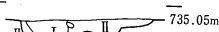
褐色土 (砂多量混入)

土坑150



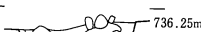
褐色土 (砂少量混入)

土坑496



I: 褐色土 (炭化物・砂少量混入)
II: 褐色土 (砂・ローム粒少量混入)

土坑1095



褐色土 (砂少量混入)

土坑1119

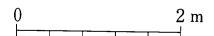


暗褐色土 (ローム粒微量混入)

土坑1102

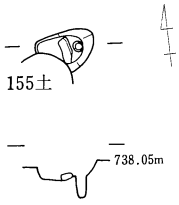


褐色土 (砂多量混入)

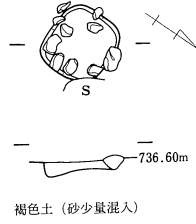


第62図 土坑 (3)

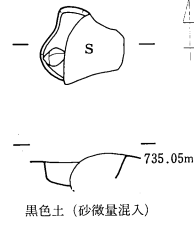
土坑1087



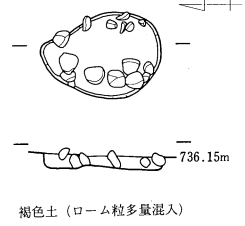
土坑1114



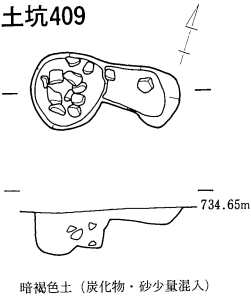
土坑876



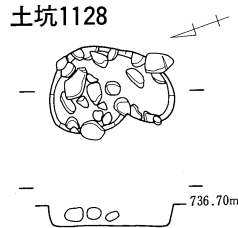
土坑1099



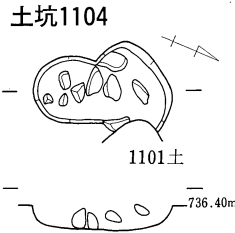
土坑409



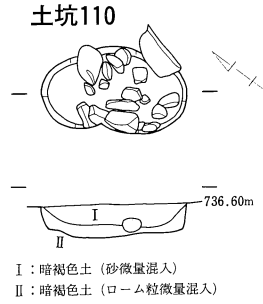
土坑1128



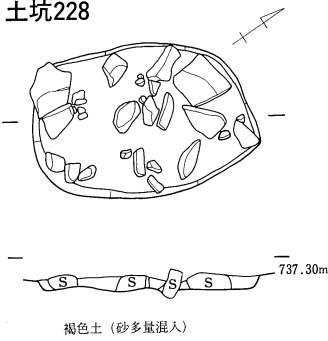
土坑1104



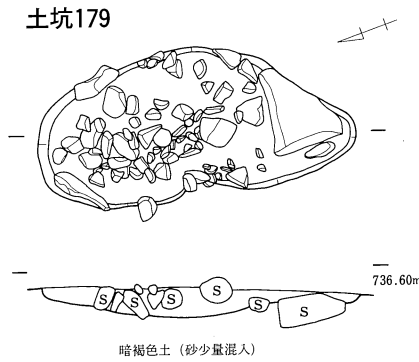
土坑110



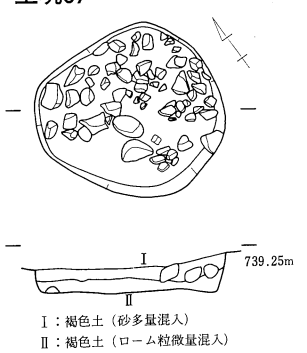
土坑228



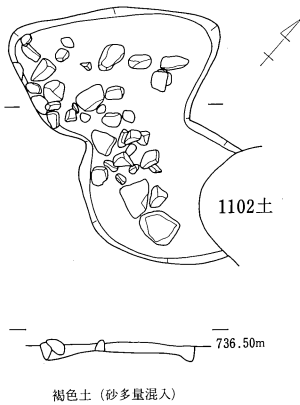
土坑179



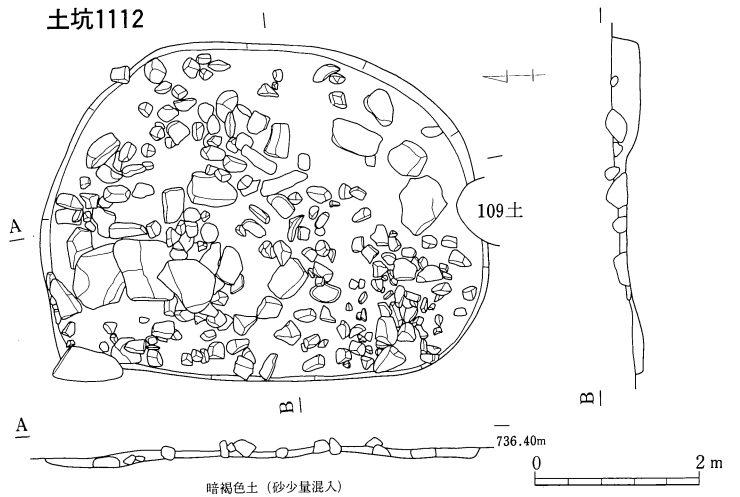
土坑97



土坑1101

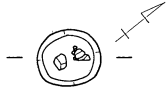


土坑1112



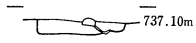
第63图 土坑 (4)

土坑294



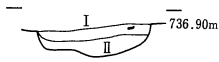
- I : 暗褐色土 (砂少量混入)
- II : 褐色土 (ローム粒多量混入)

土坑226



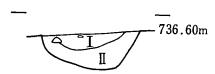
- 暗褐色土 (砂微量混入)

土坑118

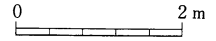


- I : 褐色土 (砂少量混入)
- II : 褐色土 (砂・ローム粒多量混入)

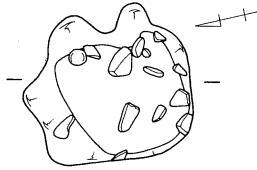
土坑113



- I : 褐色土 (砂多量混入)
- II : 褐色土 (砂・ローム粒多量混入)



土坑584



- I : 黑色土 (炭化物多量混入)
- II : 褐色土 (炭化物・砂・ローム粒少量混入)
- III : 褐色土 (ローム粒多量混入)

第64図 土坑 (5)

凡 例

土坑の分類と一覧表の表記について

1. 座標 座標原点からの距離を示した。1次と2次の調査区を同一原点からの座標で示すことが困難なため、それぞれの調査区内に原点を設定した。1次は調査区の南西隅、2次は調査区の中央に設定した。基点から南北・東西の方位に沿って1×1mの方眼を想定し、各々の北東隅の点の座標をその座標とした。土坑がある方眼の座標を土坑の座標とし、複数にかかる場合は最も多くかかる方眼の座標をとった。複数にはほぼ均等にかかる場合は、北か東側の方眼の座標を採用した。
2. 大きさ 長軸、短軸の長さは平面図上で測った。深さは検出面から最深部までの垂線の長さで表わし、ただし底に石等があり、底が不明の場合は石の上端までとした。検出面が傾斜し、最大値と最小値の差が5cm以上ある場合は、両者の平均値を検出面の高さとした。
3. 平面形 次の5種類に分類した。
 - ・円形 (短径と長径の比が1:1.2以下)
 - ・楕円形 (短径と長径の比が1:1.2以下上)
 - ・双円形 (円形が2つつながった形、繭玉形)
 - ・隅丸方形
 - ・不整形
4. 断面形 次の7種類に分類した。
 - a. 深さと長径の比が1:3以上で、浅く断面形が方形または逆台形のもの。
 - b. 深さと長径の比が1:3以上で、断面が丸みをもつものなどa以外のもの。
 - c. 深さと長径の比が1:3~1:1で、断面形が方形または逆台形のもの。
 - d. 深さと長径の比が1:3~1:1で、断面が丸みをもつものなどc以外のもの。
 - e. 深さと長径の比が1:3~1:1で、底が二段のもの、あるいはピットを有するもの。
 - f. 深さと長径の比が1:1以下で、断面形が方形または逆台形のもの。
 - g. 深さと長径の比が1:1以下で、断面がf以外の形のもの。
5. 時期 埋設土器や器形を復元できる土器があった場合は、その遺物の時期とした。複数の時期の土器片が出土している場合は、明らかに混入と推定される場合を除き、もっとも新しい遺物の時期をとった。遺跡が広い年代に渡っているため、切り合いによる年代決定は行なわなかった。不明としてあるものは、縄文土器が出ているが時期を決定できないものである。遺物がないものは空白になっている。早期は押型文期、早期末葉は早期末~前期初頭を示す。
6. その他 備考欄の記載は以下のようなものを記した。柱痕、配石、埋設土器、焼土を伴う場合。骨、土偶、土製品が出土した場合。石器、石製品は各項の観察表に示した。

平面形、断面形の分類は阿久遺跡(『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書』原村その5)の分類を参考にした。なお欠番となったものについては、一覧表より削除した。

第3表 土坑一覽表

No	座標	大きさ (cm)		平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm)		平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考
		長軸×短軸×深さ	深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる					長軸×短軸×深さ	深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる		
1	N17 E56	82×66×37	e	楕円形	e					28	N38 E25	88×70×17	楕円形	a					
2	N15 E55	86×74×4	a	楕円形	a					29	N40 E27	170×151×10	隅丸方形	b					
3	N19 E54	153×125×19	a	楕円形	a					30	N36 E24	130×122×10	隅丸方形	a					
4	N15 E51	114×100×17	a	不整形	a	>壁4				31	N38 E23	50×39×18	楕円形	d					
5	N16 E49	98×54×16	b	楕円形	b	<P				32	N30 E22	160×142×20	円形	a					
6	N12 E57	132×119×13	a	隅丸方形	a	<1住				33	N31 E21	92×77×25	隅丸方形	b					
7	N27 E39	183×14		不整形		<壁3				34	N45 E21	97×80×12	楕円形	a					
8	N23 E40	47×46×18	d	隅丸方形	d					41	N24 W6	34×32×30	円形	d					
9	N23 E37	72×48×24	a	楕円形	a					42	N25 W3	84×76×19	円形	a					
10	N20 E33	67×61×7	b	円形	b					43	N23 W4	88×80×41	円形	e		>±44			
11	N24 E34	60×55×27	b	円形	b					44	N23 W3	52×31				<±43	中期後葉I		
12	N23 E26	83×65×14	a	楕円形	a					45	N24 W3	84×74×43	円形	c		>±48			
13	N26 E26	140×130×20	b	円形	b					46	N22 W3	29×23×16	楕円形	c					
14	N30 E37	137×134×13	b	円形	b	<±15				47	N25 W2	114×114×38	不整形	a					
15	N32 E36	112×108×10	b	隅丸方形	b	>±14				48	N23 W2	64×60×23	円形	d		<±75	中期後葉		
16	N31 E35	112×94×7	b	円形	b					49	N25 W1	94×64×36	楕円形	e			不明		
17	N20 E20	81×71×14	a	円形	a					50	N26 W1	106×68×17	不整形	b			中期後葉		
18	N17 E24	64×61×14	a	円形	a					51	N25 W1	82×60×17	楕円形	b					
19	N20 E23	73×58×9	a	楕円形	a					52	N27 EW0	88×76×32	円形	e		<±53	中期後葉		
20	N32 E33	(86)×82×12	b	円形	b	<±21				53	N27 EW0	70×64×26	円形	d		>±52			
21	N33 E33	102×84×8	b	楕円形	b	>±20				54	N27 E6	42×37×14	円形	b					
22	N35 E33	226×100×12	b	不整形	b					55	N28 E7	40×39×9	円形	a					
23	N33 E34	37×36×12	b	円形	b					56	N5 W26	40×24×12	楕円形	a			中期後葉III	土器多し	
24	N23 E26	71×55×17	a	楕円形	a					57	N23 E21	82×70×7	円形	a					
25	N37 E27	122×108×13	b	円形	b	>±26				58	N24 E21	74×66×20	円形	b			中期後葉		
26	N35 E26	(276)×190×8	a	不整形	a	<±25				59	N24 E22	72×60×21	円形	a			中期後葉		
27	N38 E26	153×126×26	b	楕円形	b					62	N20 W3	57×45×38	楕円形	e					

No	座標	大きさ (cm)		平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考
		長軸×短軸×深さ	深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる		
63	N20 W2	156×134×32		円形	b			中期後葉	
64	N20 EW0	76×58×12		楕円形	b			中期中葉	
65	N19 W3	76×70×32		円形	e			中期後葉	
66	N18 W4	60×54×35		円形	e			中期後葉III	
67	N17 W4	70×66×11		円形	a				
68	N17 W3	105×82×42		楕円形	d			中期後葉III	
69	N16 W3	63×52×31		楕円形	e			中期後葉	
70	N16 W6	78×76×21		円形	a			不明	
71	N15 W5	120×76×37		双円形	b				
72	N16 W4	54×34×30		楕円形	e				
73	N15 W3	80×78×41		円形	e			中期後葉III	
74	N17 W3	82×73×51		円形	e			中期後葉	
75	N16 W2	41×38×32		円形	e				
76	N17 W1	108×76×5		楕円形	b				
77	N16 W1	92×78×32		円形	e			中期後葉III	
78	N17 E1	93×55×31		不整形	b				
79	N16 EW0	44×44×25		円形	c				
80	N15 EW0	52×46×19		円形	c				
81	N15 EW0	79×54×20		楕円形	b				
82	N21 W2	195×110×48		不整形	b			中期後葉	
83	N16 W2	204×144×17		楕円形	a		<±84		
84	N16 E3	74×67×39		円形	d		>±83	中期後葉	
85	N15 E1	80×62×41		楕円形	e				
86	N15 E2	80×60×42		不整形	e			不明	
87	N15 E3	118×90×7		隅丸方形	b			不明	
88	N16 E5	113×92×16		不整形	b			中期後葉	
89	N15 E17	120×107×26		円形	b			中期後葉	
90	N20 E22	18		楕円形					
91	N19 E22	162×84×24		楕円形	d			中期後葉	
92	N16 E24	75×22							
94	N16 E27	82×60×29		楕円形	d		>±95	中期後葉	
95	N15 E27	24					<±94・96		
96	N16 E28	123×87×17		楕円形	b		>±95		
97	N18 E29	212×202×39		隅丸方形	b		>24住	中期後葉III	土器多量
98	N15 E29	46×42×10		円形	b			中期後葉	
99	N16 E30	45×43×44		円形	d			中期後葉III	
100	N18 E33	86×71×33		楕円形	d		>24住	中期後葉III	土器多量
101	N17 E32	95×76×54		隅丸方形	d		>24住	中期後葉III	
102	N18 E32	90×82×53		円形	c		>24住	中期後葉	
103	N21 E32	206×150×53		楕円形	b		>24住	中期後葉	土器多量
104	N17 E33	85×82×31		円形	d			不明	
105	N17 E33	76×70×23		円形	a				
106	N16 E33	63×43×14		楕円形	b				
107	N15 E33	65×56×35		円形	d			中期後葉	
108	N15 E34	45×40×22		円形	d				
109	N14 W10	112×64×31		楕円形	b			中期後葉	
110	N12 W8	172×100×42		双円形	b				
111	N11 W7	46×42×25		円形	d				
112	N12 W6	59×54×48		円形	d				
113	N13 W4	116×111×42		円形	d			中期後葉	
114	N14 W3	112×90×32		楕円形	b			中期後葉	
115	N14 W1	76×70×18		円形	b				
116	N14 EW0	100×72×41		不整形	d				
117	N13 W1	70×68×17		円形	b			中期後葉	

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	彫形	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	彫形	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる	>切られる、<切れる								>切る、<切られる	>切られる、<切れる		
118	N11 W1	138×92×34	楕円形	b			中期後葉		155	N10 E12	72×70×22	円形	a				
119	N14 EW0	55×55×12	円形	b					156	N11 E13	86×74×23	円形	a				
120	N13 E1	53×51×10	円形	a					157	N11 E14	86×76×38	円形	d			中期後葉III	
121	N13 EWO	70×66×16	円形	a					158	N14 E17	74×50×16	楕円形	b			中期後葉	
123	N10 E1	76×74×33	円形	e		>±122	不明		159	N13 E18	39×38×14	円形	c				
125	N8 EW0	120×79×19	楕円形	a			中期後葉		160	N11 E17	109×76×38	楕円形	d				
126	N9 W1	100×67×16	楕円形	b			不明		161	N8 E17	84×78×10	隅丸方形	a				
127	N8 E2	94×73×22	楕円形	b					162	N11 E22	70×62	円形					
129	N8 E3	44×31×19	楕円形	d			不明		163	N14 E25	143×115×24	楕円形	b		>27住		
130	N9 E2	77×50×27	楕円形	e			不明		165	N10 E28	55×40×20	隅丸方形	d				
131	N10 E3	72×66×23	円形	b			不明		167	N8 E29	42×40×18	円形	d				
133	N12 E2	68×64×29	隅丸方形	g			中期後葉III		168	N15 E28	102×95×32	円形	b			中期後葉III	
134	N11 E3	130×70×13	隅丸方形	b			中期後葉III		169	N14 E30	250×119×39	不整形	b			中期後葉	
135	N13 E3	72×66×21	円形	a		>±136	中期中葉		170		110×40×43	隅丸方形	e			不明	
136	N12 E3	74××36		a		<±135・137			171		18		b				
139	N14 E2	50×38×21	楕円形	d					177	N8 E31	96×60×28	楕円形	b				
140	N12 E3	44×44×12	隅丸方形	a			中期後葉		178	N10 E30	51×48×29	円形	d				
141	N14 E5	55×30×13	楕円形	a					179	N6 W9	371×160×35	不整形	b			中期後葉	
142	N14 E6	78×42×16	楕円形	b					180	N6 W5	100×98×16	円形	b			不明	
143	N13 E5	40×32×15	楕円形	c			不明		181	N4 W9	36×32×13	円形	d				
145	N12 E7	76×56×16	楕円形	a					182	N3 W10	45×45×13	円形	a				
146	N11 E7	69×59×18	隅丸方形	b			中期後葉		183	N3 W5	58×58×36	円形	e				
148	N9 E6	88×75×26	円形	b					184	N3 W7	74×68×41	円形	e			中期後葉	
149	N8 E7	124×60×19	楕円形	b		<19住	不明		185	N4 W5	86×77×35	円形	e			中期後葉	
150	N9 E8	100×78×20	楕円形	b			不明		186	N7 W5	75×62×41	楕円形	e			中期後葉	
153	N11 E12	89×82×26	円形	b			中期後葉		187	N6 W4	68×50×46	楕円形	e			中期後葉III	
154	N10 E12	136×128×22	不整形	b		<±155	中期後葉 I 埋設土器		188	N6 W4	61×58×31	円形	e			不明	

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪郭	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪郭	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる									>切る、<切られる			
189	N6 W3	96×78×48	楕円形	e			不明		217	N2 EW0	44×40×30	円形	c				
190	N6 E1	84×52×41	楕円形	e					219	N7 E1	44×40×14	円形	a				
191	N7 EW0	58×50×19	円形	b					220	N6 E1	46×36×28	楕円形	d				
192	N7 EW0	52×42×12	楕円形	a			中期後葉		221	N7 E2	66×52×26	楕円形	c				不明
193	N5 W4	37×34×13	円形	d					222	N6 E3	92×80×22	円形	a				
194	N5 W3	80×43×22	不整形	b			中期後葉		223	N5 E3	48×40×22	楕円形	d				
195	N6 W2	38×30×21	楕円形	c					224	N3 E1	36×32×13	円形	c				
196	N6 W1	36×36×39	円形	e					225	N2 E1	52×36×21	楕円形	d				中期後葉
197	N6 W1	38×34×40	円形	g					226	N1 E1	106×58×18	楕円形	a				中期中葉
198	N6 EW0	40×34×13	楕円形	b					227	NS0 E1	60×60×8	円形	a				
199	N6 EW0	40×37×10	円形	a			中期中葉		228	N1 E3	267×185×18	隅丸方形	b				不明
200	N6 EW0	72×56×37	楕円形	e					229	N1 E4	66×53×25	楕円形	d				
201	N5 W5	64×52×17	楕円形	a					230	N4 E8	117×78×35	不整形	b		<±231		中期後葉
202	N5 W4	50×46×21	円形	e					231	N5 E8	66×29	不整形			>±230		中期後葉
203	N3 W2	134×110×22	楕円形	b			中期後葉		232	N6 E8	47×47×29	隅丸方形	d				中期後葉II
204	N5 W2	61×58×45	円形	d					234	N4 E8	70×62×16	隅丸方形	a				
205	N5 W3	78×68×23	円形	b			中期後葉III		235	N3 E8	118×92×32	隅丸方形	b				中期後葉
206	N4 W2	30×26×15	円形	c					236	N3 E10	56×51×24	円形	e				中期中葉
207	N4 W2	50×48	円形				早期未葉		237	N2 E10	75×66×14	不整形	b				不明
208	N3 W3	58×56×37	隅丸方形	e			中期中葉		238	N1 E10	60×50×5	楕円形	b				
209	N4 W1	110×96×12	隅丸方形	a			中期後葉		239	N2 E10	69×62×19	円形	b				
210	N3 W2	76×71×40	円形	d					240	N1 E11	58×55×9	隅丸方形	a				
211	N3 EW0	86×57×22	楕円形	b			中期中葉		241	N1 E11	57×53×12	円形	b				中期後葉
212	N1 W3	50×40×34	楕円形	d					242	N2 E11	34×34×12	円形	c				
213	N1 W2	31×30×14	円形	d					243	N4 E11	98×84×27	円形	b				不明
214	N1 W2	87×72×42	楕円形	e			中期中葉		244	N5 E11	50×50×22	円形	c				
215	N1 W1	58×36×24	楕円形	c			中期後葉		245	N6 E12	163×102×16	楕円形	a				中期中葉

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪郭	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪郭	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる	輪郭								>切る、<切られる	輪郭		
246	N4 E13	200×120×20	楕円形	b			不明		273	S5 W6	48×42×19	(円形)	d				
247	N5 E14	148×103×25	楕円形	a			中期後葉		274	S5 W6	45× × 9	(円形)	d				中期後葉 I
248	N4 E12	89×70×18	楕円形	b			中期中葉		275	S5 W6	41×41×12	円形	a				
249	N3 E12	74×20							276	S5 W5	90×79×20	円形	a				
250	N2 E11	62×15					中期後葉 II		277	S6 W5	26×24×8	円形	a				
251	N1 E12	44×44×13	円形	b					278	S5 W4	52×32×30	隅丸方形	c				中期後葉
252	N4 E15	69×68×34	円形	c			中期後葉 V		279	S3 W4	43×36×40	円形	d				中期後葉 III
253	N4 E16	109×96×24	円形	a			不明		280	S3 W3	70×62×25	円形	d				中期後葉 II
254	N5 E16	49×19					中期後葉 I		281	S3 W2	75×58×43	楕円形	c				中期後葉
255	N4 E17	122×86×50	楕円形	e			中期後葉		282	S3 W1	82×66×25	楕円形	b				不明
256	N2 E17	144×80×24	隅丸方形	b			中期後葉		283	S6 W1	118×96×61	不整形	e				中期後葉 III
257	N7 E20	64×60×25	隅丸方形	c					284	S6 EW0	52×38×17	楕円形	b				不明
258	N6 E21	96×66×31	楕円形	b			不明		285	S5 E1	114×82×16	楕円形	a				中期後葉 III
259	N6 E21	88×74×21	楕円形	b					286	S6 E1	86×52×32	楕円形	d				不明
260	N4 E20	95×78×13	楕円形	b			中期後葉		287	S6 E1	54×50×29	円形	c				>±287
261	N3 E21	100×45×34	不整形	d			早期未葉		288	S2 E4	40×32×15	楕円形	c				<±286
262	N4 E22	114×100×14	円形	a			不明		289	NS0 E6	62×56×22	円形	d				
263	N6 E23	44×34×13	楕円形	b					290	S1 E6	102×78×24	楕円形	a				
264	N6 E24	48×46×14	円形	b					291	NS0 E8	40×34×10	円形	b				
265	N6 E25	130×112×30	隅丸方形	a			中期後葉		292	S1 E9	56×54×20	円形	e				
266	N4 E27	52×44×22	円形	e			早期未葉		293	S2 E9	228×106×32	隅丸方形	b				
267	S4 W7	59×48×25	楕円形	d			不明		294	S7 E2	76×66×34	円形	e				中期後葉
268	S5 W8	112×86×44	楕円形	e			不明		295	NS0 E12	46×46×17	円形	c				
269	S5 W9	120×112×26	円形	a					296	S3 E11	176×124×20	楕円形	b				不明
270	S6 W9	110×72×24	楕円形	a			>±271		297	S2 E13	200×170×30	不整形	b				>12住、±297
271	S6 W10	80×60×25	楕円形	b			<±270	早期未土器 I 片	298	S1 E12	46×35×9	楕円形	b				<±296
272	S4 W7	106× ×28 (楕円形)		b			不明		299	NS0 E22	66×56	円形					>6住

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	縮影	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	縮影	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる									>切る、<切られる			
300	S5 W9	122×68×26	楕円形	b					S7 EW0	78×66×31	円形	e			中期後葉		
301	S9 W9	40×38×20	円形	c					S9 W1	70×70×18	円形	a			不明		
302	S12 W10	132×115×43	円形	b			中期後葉III		S9 EW0	46×40×17	円形	c					
303	S13 W8	65×61×27	隅丸方形	d			不明		S9 EW0	47×38×20	楕円形	c			不明		
304	S8 W8	43×42×24	円形	e					S9 E1	62×58×13	円形	b					
305	S8 W6	77× 21		b					S10 EW0	57×34×14	楕円形	a		>±333			
306	S8 W6	35×34×15	円形	c					S10 EW0	70×55×10	隅丸方形	b		<±332			
307	S9 W5	65×57×15	円形	b					S11 EW0	54×50×8	円形	b			中期後葉II		
308	S9 W6	86×77×10	円形	b			不明		S12 W1	110×58×10	楕円形	b					
309	S9 W5	46×44×13	円形	a					S13 W1	36×28×18	楕円形	e		>±337			
310	S9 W5	53×51×16	円形	b					S13 W1	60×57×13	隅丸方形	b		<±336			
311	S9 W4	37×35×12	円形	a					S14 W1	76×75×13	円形	b					
312	S9 W4	39×28×16	不整形	c					S10 E1	92×80×9	円形	b					
313	S8 W5	88×80×10	円形	b					S7 E4	146×82×10	双円形	b			中期中葉		
314	S8 W3	80×48×15	楕円形	b					S9 E18	48	楕円形			>11住、<暗渠			
315	S7 W3	58×42×15	楕円形	b					S9 E18	42×40	円形			>11住	不明		
316	S10 W5	122×117×21	不整形	b			中期後葉		S15 W7	32×30×24	円形	c					
317	S10 W4	108×88×18	不整形	b					S17 W7	69×54×12	楕円形	b					
318	S12 W6	54×54×36	円形	e			中期後葉		S18 W6	116×64×22	楕円形	b					
319	S12 W6	80×72×17	円形	a					S19 W7	91×79×19	円形	b					
320	S13 W6	80×72×15	円形	b			中期中葉		S16 W5	64×63×20	円形	b					
321	S13 W5	70×13							S14 W3	96×76×19	楕円形	b					
322	S13 W6	44×42×15	円形	c					S14 W2	48×44×15	円形	a					
323	S12 W3	64×53×17	楕円形	b					S16 W3	42×36×15	円形	c			不明		
324	S11 W2	20×20×17	円形	c					S16 W3	40×40	円形						
325	S9 W2	21×19×14	円形	c					S17 W4	42×40×15	円形	d					
326	S7 W1	99×75×36	楕円形	e			不明		S17 W4	46×46×13	円形	b					

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	断形	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	断形	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる	>切る、<切られる								>切る、<切られる	>切る、<切られる		
354	S17 W3	78×75	円形				中期後葉II		382	N8 W36	41×40×8	円形	a				
355	S18 W3	32×32×11	円形	c					383	N10 W37	31×29×17	円形	a				
356	S19 W4	88×74×21	円形	b					384	N10 W37	131×110×31	隅丸方形	b				
357	S19 W3	50×44	円形				中期後葉II		385	N9 W36	138×90×12	不整形	b				
359	S14 W2	73×64	円形						387	N10 W36	50×45×13	円形	b				>±389
360	S16 W1	108×75	楕円形				中期後葉III		388	N10 W35	41×30×12	楕円形	a				
361	S17 W1	106×94	円形						389	N11 W36	84×84×39	隅丸方形	d				<±387
362	S16 E1	30×22×23	楕円形	c					390	N12 W35	130×100×45	隅丸方形	e				
363	S15 E2	80×52×22	楕円形	b					391	N11 W34	140×90×32	楕円形	b				
364	S16 E3	69×60×28	円形	d					392	N11 W33	76×75×21	円形	a				
365	S16 E2	66×60×19	円形	b					393	N10 W34	110×76×28	双円形	b				中期後葉
366	S17 E2	60×49×27	楕円形	c					394	N9 W34	120×108×14	不整形	b				中期後葉I
367	N11 W40	106×98×30	隅丸方形	b			中期後葉	早期未葉土器 片I	395	N10 W33	43×40×20	円形	d				
368	N12 W40	52×41×23	楕円形	c					396	N19 W33	26×25×7	円形	a				
369	N12 W39	58×42×9	楕円形	a					397	N10 W32	178×130×22	不整形	b				中期中葉
370	N12 W39	40×40×23	円形	d					398	N9 W30	104×84×9	楕円形	b				
371	N11 W37	234×45	不整形				中期中葉	調査区域外に 延びる	399	N10 W30	42×27×10	楕円形	a				
372	N10 W38	94×69×32	楕円形	d					400	N10 W29	42×33×16	楕円形	e				
373	N9 W39	106×102×17	円形	a					401	N9 W27	(314)×(278)×35	不整形	b				早期未葉
374	N8 W39	68×60×22	円形	b					402	N8 W24	372×306×31	不整形	b				
375	N8 W40	71×27					中期後葉I		403	N7 W27	104×78×35	隅丸方形	d				
376	N7 W42	228×156×31	不整形	b			中期中葉		404	N7 W29	204×140×36	楕円形	a				不明
377	N7 W40	158×114×46	楕円形	b			不明		405	N8 W31	178×138×36	不整形	b				不明
378	N8 W38	34×29×9	円形	a					406	N6 W40	120×72×20	隅丸方形	b				
379	N8 W37	49×36×14	楕円形	a					407	N5 W40	46×32×9	楕円形	a				
380	N8 W37	78×58×23	楕円形	b					408	N5 W40	70×68×19	円形	b				
381								平面図ナシ	409	N5 W40	176×90×51	不整形	b				中期後葉III

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪廓	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪廓	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる	>切る、<切られる								>切る、<切られる	>切る、<切られる		
410	N4 W40	32×28×13	円形	c				437	N5 W38	39×36×12	円形	b					
411	N4 W40	64×48×15	楕円形	a				438	N5 W38	33×28×9	円形	b					
412	N3 W39	76×44×21	不整形	b			中期後葉	439	N5 W37	28×16×10	楕円形	d					
413	N1 W40	102×92×14	隅丸方形	b				440	N7 W35	34×35×11	円形	a					
414	N6 W38	36×32×18	円形	c				441	N7 W36	32×32×14	円形	c					
415	N6 W39	72×49×17	楕円形	b			中期後葉II	442	N7 W36	50×48×10	円形	b					
416	N5 W39	54×34×11	楕円形	b				443	N6 W36	36×28×16	楕円形	d					
417	N5 W39	38×38×13	円形	d				444	N5 W37	23×22×10	円形	c					
418	N5 W39	45×42×16	不整形	d				445	N5 W37	40×36×9	円形	a					
419	N4 W39	36×29×20	楕円形	e				446	N3 W36	32×30×26	円形	d					
420	N4 W39	32×30×13	円形	d				447	N3 W36	31×30×15	円形	c					
421	N4 W38	29×20×16	楕円形	d			不明	448	N3 W35	110×102×16	不整形	a					
422	N4 W38	41×36×23	円形	c				449	N2 W36	156×110×38	楕円形	b			不明		
423	N4 W38	32×25×20	楕円形	d				450	N2 W36	42×34×8	楕円形	b					
424	N3 W38	53×40×21	楕円形	c			不明	451	N1 W35	100×75×32	楕円形	b			>±452	中期後葉III	
425	N4 W38	42×39×12	円形	b				452	N1 W34	91×64×10	楕円形	a			<±451		
426	N2 W38	36×30×25	楕円形	d				453	NS0 W33	140×92×21	不整形	b			>±1067		
427	N2 W38	148×122×25	不整形	b				454	NS0 W32	84×82×16	円形	b			<±455	中期後葉	
428	N1 W39	54×42×13	楕円形	a				455	N1 W32	64×38×24	楕円形	d			>±454		
429	N1 W38	80×73×18	円形	a			中期後葉	456	N2 W33	56×52×26	円形	d					
430	N1 W38	81×54×25	楕円形	b				457	N2 W34	54×36×29	楕円形	e					
431	N1 W37	48×42×19	円形	d				458	N2 W34	41×24×12	楕円形	a					
432	N1 W37	32×23×18	楕円形	d				459	N2 W33	44×43×30	円形	d					
433	N3 W37	69×43×31	不整形	e				460	N3 W35	22×20×9	円形	c					
434	N4 W37	42×34×20	楕円形	c				461	N3 W34	36×32×15	円形	d					
435	N4 W37	86×54×22	隅丸方形	b			中期後葉	462	N4 W33	94×75×24	隅丸方形	a			>±465		
436	N5 W37	36×20×19	楕円形	d				463	N4 W33	14×14×8	円形	d					

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪廓形	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪廓形	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる									>切る、<切られる			
464	N4 W35	60×45×15	隅丸方形	a				491	N4 W31	48×40×38	楕円形	d					
465	N5 W32	86×20	不整形		<±62	不明		492	N4 W30	51×40×14	楕円形	b					
466	N5 W35	60×34×12	楕円形	a				493	N3 W31	40×29×34	楕円形	d					
467	N4 W36	40×32×18	楕円形	d				494	N3 W31	56×50×41	円形	d					
468	N5 W34	46×44×13	円形	b				495	N2 W33	174×160×25	不整形	b					
469	N5 W35	32×28×11	円形	c				496	N3 W30	158×76×40	不整形	b			中期後葉II		
470	N6 W35	34×28×7	楕円形	b				497	N2 W31	28×24×14	円形	c					
471	N7 W34	44×44×13	円形	a				498	N2 W30	38×29×35	楕円形	d					
472	N5 W34	45×30×17	楕円形	d				499	N2 W30	20×20×13	円形	c					
473	N6 W33	48×26×11	隅丸方形	a				500	N2 W31	36×28×12	楕円形	b					
474	N5 W33	50×44×26	隅丸方形	d				501	N2 W30	31×27×23	円形	d					
475	N5 W33	24×21×15	円形	d				502	N1 W29	72×25×16	楕円形	b					
476	N6 W33	74×74×16	隅丸方形	a				503	NS0 W30	44×37×23	円形	c					
477	N7 W33	62×60×9	不整形	b		不明		504	NS0 W30	40×28×16	楕円形	c					
478	N7 W32	90×66×6	楕円形	b				505	N7 W29	52×40×33	隅丸方形	d					
479	N6 W32	42×35×12	楕円形	a				506	N6 W29	102×96×40	円形	c		<±404			
480	N6 W32	30×26×10	円形	b				507	N6 W27	70×70×37	円形	e			不明		
481	N6 W32	42×33×20	楕円形	d				508	N6 W28	50×50	隅丸方形						
482	N6 W32	30×25×9	円形	a				509	N5 W27	58×23		e		<±510			
483	N7 W31	56×45×8	楕円形	b				510	N5 W26	128×124×13	円形	a		>±509			
484	N6 W30	50×44×14	円形	c				511	N5 W28	44×38	隅丸方形						
485	N6 W31	70×39×9	楕円形	b		中期後葉		512	N5 W29	98×86×47	円形	e			不明		
486	N6 W30	30×21×16	楕円形	d				513	N5 W28	60×56	隅丸方形						
487	N6 W31	38×34×7	円形	b				514	N4 W30	62×42×29	不整形	e			不明		
488	N5 W30	62×62×18	隅丸方形	b				515	N4 W29	34×26×25	楕円形	d			中期後葉II		
489	N4 W32	98×74×35	楕円形	e				516	N4 W27	86×78×62	円形	e			中期後葉III		
490	N4 W30	32×28×9	円形	b				517	N3 W26	80×58×19	楕円形	b					

No	座標	大きさ (cm)		平面形状	断面形状	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm)		平面形状	断面形状	切合い		時期	遺物、備考
		長軸×短軸×深さ	深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる					長軸×短軸×深さ	深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる		
518	N5 W25	50×40×14		楕円形	b					545	N4 W16	54×28×12	楕円形	b				不明	
519	N5 W23	69×56×18		隅丸方形	a					546	N4 W16	32×26×10	楕円形	b				不明	
520	N5 W22	84×82×8		円形	b					547	N4 W15	88×53×29	双円形	b					
521	N3 W24	30×28×15		円形	c			不明		548	N4 W14	42×32×30	楕円形	d					
522	N3 W24	24×24×12		円形	d					549	N3 W15	72×40×13	双円形	b					
523	N3 W24	28×25×33		隅丸方形	g					550	N3 W15	35×28×10	楕円形	b					
524	N2 W24	38×37×17		円形	c					551	N3 W15	40×31×15	楕円形	c				中期後葉	
525	N2 W24	82×81×32		円形	e					552	N3 W14	58×34×11	不整形	b					
526	N3 W23	40×11					<±527			553	N2 W14	66×52×39	隅丸方形	c				中期後葉	
527	N3 W23	56×48×11		円形	b		>±526			554	N2 W16	44×39×27	円形	e					
528	N2 W23	33×32×26		円形	e					555	NS0 W31	42×38×22	円形	d					
529	N3 W22	72×30×31		不整形	c					556	N3 W14	35×30×14	円形	c					
530	N1 W29	60×50×10		楕円形	b					557	N3 W14	40×32×32	楕円形	d				不明	
531	N2 W27	36×36×26		円形	d			不明		558	N2 W13	40×36×9	円形	b					
532	N2 W27	43×41×56		円形	f					559	N1 W13	30×30×21	円形	d					
533	N1 W28	41×38×9		円形	b					560	NS0 W11	76×12					>±719<22住	不明	
534	N1 W27	39×35×14		円形	d					561	N1 W13	30×28×18	円形	c			>±562		
535	N1 W27	28×27×16		円形	e					562	N1 W13	27×26×26	円形	b			<±561		
536	N1 W26	44×41×12		円形	b					563	N2 W12	181×20	不整形				<22住		
537	N1 W26	56×46×13		楕円形	b			中期後葉		564	N3 W12	38×37×16	円形	c					
538	N1 W26	30×28×14		円形	d			不明		565	N2 W10	46×40×17	円形	d				不明	
539	N1 W25	66×60×31		円形	e			不明		566	N3 W11	46×42×41	円形	e				中期後葉	
540	N1 W23	33×30×21		円形	d					567	N3 W10	62×55×37	円形	e				中期後葉	
541	N1 W20	58×44×28		楕円形	d		<±659			568	N4 W11	86×76×18	円形	b					
542	N1 W18	32×29×11		不整形	c					569	N4 W11	56×44×18	楕円形	b				中期中葉	
543	N2 W16	28×28×10		円形	d					570	N4 W12	62×51×15	楕円形	b				不明	
544	N3 W17	55×40×14		隅丸方形	b					571	N4 W12	86×61×38	隅丸方形	c				中期後葉	

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる	>切る、<切られる											
572	N4 W13	38×31×25	楕円形	d				599	S2 W32	130×94×62	楕円形	d				不明	
573	N5 W11	90×89×32	円形	d		中期中葉		600	S5 W32	78×48×33	不整形	e				中期中葉	
574	NS0 W38	35×30×15	円形	e				601	S6 W32	24×20×8	円形	a					
575	NS0 W37	33×30×12	円形	d				602	S6 W32	36×28×9	楕円形	b					
576	NS0 W36	33×30×14	円形	c				603	S6 W32	42×38×19	円形	c				不明	
577	NS0 W36	52×48×26	円形	d		中期後葉III		604	S6 W31	47×34×23	楕円形	d					
578	NS0 W36	48×44×29	円形	e		不明		605	S6 W31	48×47×24	円形	e				不明	
579	S1 W35	66×41×22	楕円形	a		不明		606	S6 W30	36×32×10	円形	b					
580	S2 W32	193×169×34	不整形	b				607	S6 W29	70×50×24	楕円形	e				中期後葉	
581	NS0 W32	42×40×24	円形	c				608	S7 W30	50×50×12	円形	b				不明	
582	NS0 W35	42×30×13	楕円形	a		<土582 >土581		609	S5 W31	40×34×12	円形	a				不明	
583	S1 W33	40×36×9	円形	a				610	S4 W31	84×53×23	不整形	b					
584	S2 W33	200×182×36	不整形	b			遺物多量	611	S4 W29	35×29×13	楕円形	c					
585	S2 W36	54×52×27	円形	c				612	S3 W29	68×52×25	楕円形	d				不明	
586	S2 W35	92×68×30	楕円形	b				613	S4 W30	38×38×42	円形	f				不明	
587	S3 W37	40×36×11	円形	b				614	S3 W30	95×94×25	不整形	b					
588	S3 W34	101×70×27	楕円形	b			中期後葉	615	S3 W31	20×20×7	円形	c					
589	S4 W35	86×38×28	楕円形	b			中期後葉	616	S3 W30	30×23×11	隅丸方形	d					
590	S2 W36	66×58×33	隅丸方形	d				617	S2 W32	44×38×18	円形	c					
591	S2 W36	36×34×12	円形	a				618	S1 W32	73×47×49	楕円形	d				中期後葉	
592	S2 W38	36×31×19	円形	c				619	S2 W30	129×87×61	楕円形	d				不明	
593	S2 W38	32×26×13	楕円形	d				620	S2 W30	36×32×26	円形	d					
594	S6 W36	32×22×13	楕円形	d				621	S1 W30	34×29×11	円形	a					
595	S6 W34	40×36×11	円形	b				622	NS0 W30	70×37×22	楕円形	b					
596	S3 W34	46×24						623	NS0 W30	36×29×37	楕円形	f					
597	S3 W33	54×46×20	隅丸方形	d				625	NS0 W29	40×38×21	隅丸方形	d					
598	S2 W33	40×36×45	円形	f			不明	626	NS0 W28	49×42×21	隅丸方形	e					

No	座標	大きさ (cm)		平面形	断面	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm)		平面形	断面	切合い		時期	遺物、備考
		長軸×短軸×深さ	短軸×深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる					長軸×短軸×深さ	短軸×深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる		
627	NS0 W27	28×24×15		円形	c					664	S 1 W24	40×35×20	円形	c					
628	NS0 W28	30×22×12		楕円形	d					665	S 2 W24	20×19×10	円形	d					
629	S 1 W28	24×23×21		円形	d					666	NS0 W23	50×45×20	円形	d					早期未葉
630	S 2 W29	38×34×21		隅丸方形	d			中期後葉		667	S 1 W22	42×40×17	円形	c					
631	S 2 W29	40×27×44		楕円形	f			不明		669	NS0 W20	24×22×25	円形	f			>±541・660		不明
632	S 3 W28	44×39×30		隅丸方形	d			中期中葉		660	NS0 W20	53×40×11	楕円形	b			<±659		
633	S 3 W28	30×30×21		円形	c			不明		661	NS0 W21	30×30×13	円形	d					
634	S 5 W29	80×60×9		隅丸方形	a					662	S 1 W20	30×30×29	円形	c					不明
635	S 2 W28	47×38×14		楕円形	a			不明		663	S 1 W20	36×34×25	円形	c					中期後葉
636	S 5 W29	34×30×20		円形	d					664	S 1 W21	56×28×24	楕円形	d					
637	S 6 W28	30×30×24		円形	c			不明		665	S 2 W20	34×30×24	円形	b					
638	S 6 W29	37×29×10		楕円形	a			早期		666	S 2 W20	58×40×41	隅丸方形	d					不明
639	S 7 W30	38×36×17		円形	d					667	S 3 W21	76×59×29	楕円形	c					中期後葉
640	S 5 W28	56×50×22		円形	c			中期後葉		668	S 2 W22	38×32×12	円形	b					
641	S 6 W27	41×27×8		不整形	b					669	S 3 W20	42×36×22	円形	d					
642	S 5 W26	46×37×14		楕円形	a			不明		670	S 3 W19	35×29×10	楕円形	b					
643	S 6 W26	34×32×17		隅丸方形	c					671	S 4 W19	51×46×20	円形	c					中期後葉
644	S 3 W27	46×40×9		円形	a					672	S 4 W20	47×42×25	円形	e					
645	S 2 W27	82×58×32		楕円形	e					673	S 4 W21	44×23×22	不整形	e					不明
646	S 2 W26	28×23×22		楕円形	d			不明		674	S 4 W21	40×36×10	隅丸方形	a					
647	S 2 W27	30×23×12		楕円形	d					675	S 4 W22	30×23×8	楕円形	b					
648	S 1 W25	44×40×31		円形	c					676	S 4 W22	36×36×24	円形	e					
649	S 1 W26	78×70×28		円形	d			不明		677	S 4 W21	64×40×27	楕円形	e					不明
650	S 1 W27	45×49×36		円形	d					678	S 5 W22	68×52×21	不整形	b					
651	S 1 W28	34×24		楕円形	d					679	S 6 W22	78×63×29	楕円形	e			<±688		
652	NS0 W27	36×36×22		円形	d					680	S 6 W24	40×38×21	隅丸方形	d					
653	NS0 W27	50×40×17		楕円形	d			中期後葉		681	S 6 W24	25×24×9	円形	c					

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	断面	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる	>切る、<切られる		
682	S 6 W23	30×26×10	隅丸方形	b				
683	S 6 W23	26×18×18	楕円形	e				
684	S 6 W23	38×37×18	隅丸方形	c				中期後葉III
685	S 6 W23	24×22×20	隅丸方形	d				中期後葉
686	S 5 W21	50×50×16	円形	a				
687	S 6 W21	58×36×24	楕円形	d				
688	S 6 W22	28×24×29	隅丸方形	g		> ±679		
689	S 6 W21	22×22×5	円形	a			中期後葉	
690	S 6 W21	30×25×12	円形	c				
691	S 6 W21	32×31×21	隅丸方形	d				
692	S 6 W20	68×30×19	双円形	b				
693	S 6 W20	34×32×34	円形	f				中期後葉
694	S 5 W20	80×50×17	楕円形	b			不明	
695	S 1 W18	44×38×40	円形	d			不明	
696	S 1 W19	46×38×24	楕円形	d				
697	S 2 W19	54×39×38	楕円形	e				
698	S 1 W19	28×25×29	円形	f				
699	S 2 W18	30×26×23	円形	d				
700	S 3 W19	18×17×8	円形	c			中期後葉	
701	S 3 W18	28×26×34	円形	f				中期後葉
702	S 4 W18	51×47×35	円形	c			中期後葉	
703	S 4 W19	38×37×17	円形	e			中期後葉	
704	S 6 W19	32×26×20	楕円形	c				
705	S 7 W18	33×32×42	円形	g				不明
706	S 6 W17	86×76×40	円形	e		> ±707・708	中期後葉	中期後葉
707	S 6 W17	92×14				< ±706・912	不明	中期後葉III
708	S 5 W18	48×8				< ±706	不明	
709	S 5 W17	40×40×24	円形	e				
710	S 4 W17	26×25×22	円形	c				
711	S 3 W17	46×36×12	楕円形	a				中期後葉III
712	S 1 W17	97×76×13	不整形	b				中期後葉
713	S 1 W16	58×54×4	円形	b				
714	S 1 W14	55×50×12	円形	b				
715	NS0 W15	50×32×10	楕円形	a				
716	NS0 W15	51×42×29	楕円形	d				不明
717	S 1 W15	54×42×9	楕円形	a				
718	S 1 W15	43×40×9	円形	a			> ±719	
719	S 1 W14	270×53					< 22住、±560・718・746	
720	S 1 W16	72×47×28	楕円形	e				中期後葉
721	S 2 W16	23×18×11	楕円形	c				
722	S 2 W17	35×34×33	円形	d				不明
723	S 2 W16	22×20×7	円形	c				
724	S 3 W16	36×36×26	円形	d				
725	S 2 W15	32×31×16	円形	e				
726	S 2 W15	42×42×8	円形	a				
727	S 2 W15	22×20×32	円形	f				不明
728	S 2 W15	54×30×31	双円形	c				中期後葉
729	S 3 W16	30×26×16	円形	d				
730	S 3 W14	43×37×36	円形	d				中期後葉
731	S 4 W16	52×47×52	円形	g				
732	S 4 W16	51×46×11	円形	a				不明
733	S 4 W16	19×19×25	円形	g				中期後葉
734	S 4 W15	28×27×29	円形	f				中期後葉III
735	S 5 W16	30×28×39	円形	f				

N 0	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考	N 0	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる									>切る、<切られる			
736	S 5 W16	32×29×15	円形	c					763	S 7 W11	34×22×33	楕円形	d				
737	S 5 W15	34×33×30	円形	e					764	S 9 W44	108×85×13	楕円形	a			不明	
738	S 6 W16	31×29×38	円形	f					765	S 10 W45	106×91×39	円形	c			中期後葉IV	
739	S 6 W16	35×34×35	円形	e					767	S 11 W44	109×104×17	円形	b			中期後葉III	
740	S 6 W16	30×30×13	円形	c					768	S 12 W44	50×47×29	円形	d			不明	
741	S 6 W15	43×29×12	楕円形	a					769	S 13 W43	34×32×16	円形	d				
742	S 6 W15	48×38×29	楕円形	e					770	S 11 W42	35×31×32	円形	c			不明	
743	S 6 W15	26×22×19	円形	c					771	S 11 W40	118×86×25	双円形	a			中期後葉V	
744	S 6 W15	24×22×12	円形	e					772	S 9 W39	30×28×12	円形	c				
745	S 6 W15	30×22×22	楕円形	c					773	S 12 W39	160×135×18	円形	b		<土774	中期後葉	
746	S 2 W13	73×14				>土719<29住	中期後葉		774	S 12 W39	82×76×25	円形	a		>土773	中期後葉III	
747	S 3 W14	40×40×12	円形	b					775	S 13 W38	76×67×19	隅丸方形	b				
748	S 3 W14	25×22×13	円形	c					776	S 13 W37	58×55×13	隅丸方形	b				
749	S 3 W12	24×22×22	円形	d					777	S 13 W 7	49×44×36	円形	d				
750	S 3 W14	34×34×48	円形	f					778	S 13 W37	82×64×19	楕円形	b			中期後葉III	
751	S 4 W14	40×34×42	円形	f			中期後葉		779	S 10 W38	79×54×21	双円形	b			中期後葉	
752	S 4 W13	30×26×54	不整形	g					780	S 7 W37	101×84×17	楕円形	b				
753	S 4 W12	88×80×35	隅丸方形	e			不明		781	S 7 W36	21×20×11	円形	c				
754	S 4 W14	30×19×22	楕円形	d			中期後葉		782	S 7 W36	88×66×23	楕円形	a				
755	S 4 W14	20×18×8	円形	c					783	S 8 W37	58×39×20	楕円形	d				
756	S 5 W14	42×34×32	楕円形	c			中期後葉V	遺物多量	784	S 8 W37	49×47×20	円形	d				
757	S 5 W12	64×60×39	不整形	d			不明		785	S 9 W36	74×64×15	隅丸方形	a			古墳時代後期？	土師器蓋破片
758	S 5 W14	53×48×42	円形	e		>土759	不明		786	S 7 W35	99×77×23	楕円形	b				
759	S 6 W14	38×29×13	楕円形	c		<土758			787	S 8 W34	38×38×18	円形	c				
760	S 6 W14	43×39×19	円形	d			不明		788	S 9 W34	70×66×20	円形	a				
761	S 6 W13	38×29×16	楕円形	d					789	S 9 W35	50×38×20	楕円形	d				
762	S 6 W10	96×68×24	楕円形	b					790	S 9 W35	40×40×22	円形	d			中期後葉III	

N o	座標	大きさ (cm)		平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考	断面形	平面形	大きさ (cm)		座標	N o	座標	大きさ (cm)		平面形	断面形	切合い		時期	遺物、備考
		長軸×短軸×深さ	深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる					長軸×短軸×深さ	深さ				>切る、<切られる	>切る、<切られる						
791	S 9 W36	60×48×14		楕円形	b					b	楕円形	72×57×21	S 9 W30	818	S 9 W30				楕円形	b				
792	S 11 W37	42×40×28		円形	c		不明			c	楕円形	46×36×27	S 10 W30	819	S 10 W30				楕円形	e			不明	
793	S 11 W36	33×32×15		円形	c					c	円形	34×31×20	S 8 W30	820	S 8 W30				円形	c				
794	S 11 W37	36×34×10		円形	a					a	楕円形	35×28×17	S 7 W30	821	S 7 W30				楕円形	c				
795	S 11 W36	32×32×8		円形	a					a	円形	44×38×10	S 7 W30	822	S 7 W30				円形	b				
796	S 11 W36	35×30×8		円形	a					a	楕円形	19×15×6	S 8 W27	823	S 8 W27				楕円形	b				
797	S 11 W34	81×76×10		隅丸方形	a					a	円形	30×29×9	S 8 W29	824	S 8 W29				円形	a				
798	S 12 W36	34×34×7		円形	b					b	楕円形	108×90×20	S 8 W28	825	S 8 W28				楕円形	b			中期後葉	
799	S 9 W34	60×56×24		隅丸方形	d					d	円形	20×20×9	S 7 W27	827	S 7 W27				円形	d				
800	S 9 W33	50×79×18		円形	c					c	円形	29×28×8	S 7 W27	828	S 7 W27				円形	a				
801	S 7 W32	42×39×14		円形	b			中期後葉		b	円形	31×28×14	S 8 W27	829	S 8 W27				円形	c				
802	S 8 W32	58×44×14		楕円形	a					a	円形	41×36×18	S 8 W27	830	S 8 W27				円形	d			不明	
803	S 9 W33	33×32		円形							円形	30×27×16	S 8 W27	831	S 8 W27				円形	c				
804	S 10 W32	99×96×34		円形	e			中期後葉		e	楕円形	40×29×28	S 8 W26	832	S 8 W26				楕円形	c			不明	
805	S 10 W33	28×15									円形	32×32×10	S 9 W27	833	S 9 W27			<±806	円形	a				
806	S 11 W33	128×76×23		楕円形	b			不明		b	楕円形	65×48×13	S 9 W28	834	S 9 W28			>±805	楕円形	a			中期後葉III	
807	S 12 W32	66×46×12		楕円形	a					a	隅丸方形	51×40×36	S 9 W29	835	S 9 W29				隅丸方形	e				
808	S 13 W34	38×34×11		円形	b			早期		b	楕円形	29×21×11	S 9 W29	836	S 9 W29				楕円形	d				
809	S 13 W33	50×47×14		円形	a					a	楕円形	34×28×13	S 10 W29	837	S 10 W29				楕円形	d				
810	S 12 W31	74×57×37		楕円形	d			中期後葉		d	楕円形	69×50×28	S 9 W28	838	S 9 W28				楕円形	d			中期後葉	
811	S 11 W31	86×66×13		楕円形	a					a	楕円形	41×32×22	S 10 W27	839	S 10 W27				楕円形	d			不明	
812	S 13 W31	35×30×10		円形	a					a	円形	72×61×20	S 11 W28	840	S 11 W28				円形	b			早期末葉	
813	S 14 W30	38×37×10		円形	a					a	楕円形	113×88×20	S 13 W29	841	S 13 W29				楕円形	b				
814	S 12 W30	42×32×12		楕円形	a					a	円形	42×42×11	S 12 W28	842	S 12 W28				円形	a				
815	S 12 W30	38×27×14		楕円形	c					c	円形	48×47×25	S 12 W25	843	S 12 W25				円形	d			早期	
816	S 10 W30	52×49×26		円形	d					d	隅丸方形	55×52×24	S 13 W25	844	S 13 W25				隅丸方形	d				
817	S 9 W31	48×45×15		円形	d			不明		d														

N 0	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪廓形	切合い		時期	遺物、備考	N 0	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪廓形	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる	>切る、<切られる								>切る、<切られる	>切る、<切られる		
846	S 13 W24	38×36×12	隅丸方形	a	>±845		不明		877	S 10 W21	127×94×29	不整形	b	>±879	中期後葉II		
847	S 12 W24	57×55×35	円形	d		中期後葉		878	S 10 W22	36×31×10	円形	a					
848	S 12 W24	60×52×9	円形	b		不明		879	S 9 W22	44×42×18	円形	d		<±877	早期未葉		
849	S 11 W24	65×60×7	円形	b				880	S 8 W23	82×80×42	隅丸方形	c		>±881	不明		
850	S 11 W25	32×30×14	円形	c				881	S 8 W22	58×47	(楕円形)			<±880	不明		
851	S 11 W24	92×66×13	楕円形	a				882	S 9 W23	44×42×22	隅丸方形	d			不明		
852	S 10 W25	42×34×21	楕円形	c				883	S 8 W23	58×54×19	隅丸方形	b			早期未葉		
853	S 10 W24	86×82×19	円形	b				884	S 8 W24	32×28×21	円形	c					
854	S 10 W24	78×58×40	楕円形	e			不明	885	S 8 W24	48×42×28	円形	d			中期後葉		
855	S 10 W23	90×72×21	楕円形	a	>±856	中期後葉		886	S 8 W25	54×51×11	円形	b					
856	S 10 W23	16×13×18	楕円形	f	<±855			887	S 7 W25	26×20×6	隅丸方形	a					
857	S 10 W23	23×20×6	円形	a				888	S 7 W24	38×28×12	隅丸方形	b					
858	S 11 W22	116×102×20	円形	b		中期後葉		889	S 7 W24	32×25×5	楕円形	a					
863	S 12 W20	38×36×11	円形	a				890	S 7 W23	30×24×14	楕円形	d					
864	S 13 W20	45×43×9	隅丸方形	b				891	S 7 W22	64×49×19	楕円形	b			不明		
865	S 13 W20	44×40×6	円形	a				892	S 7 W22	28×24×15	円形	c					
866	S 13 W19	30×25×8	円形	b				893	S 7 W20	45×42×23	円形	d			不明		
867	S 11 W20	48×42×10	円形	a				894	S 7 W22	51×47×26	円形	d					
868	S 11 W22	44×40×43	円形	d		中期後葉		895	S 7 W21	33×20×26	楕円形	c					
869	S 11 W21	30×25×8	隅丸方形	b				896	S 7 W21	20×18×28	円形	f					
870	S 11 W22	25×24×6	円形	a	>±871			897	S 7 W21	28×22×23	楕円形	c					
871	S 11 W21	44×43×16	円形	d	<±870			898	S 7 W20	39×36×20	円形	d			不明		
872	S 10 W21	46×25×24	楕円形	c				899	S 8 W20	30×30×24	円形	c			不明		
873	S 10 W20	28×26×30	円形	f				900	S 8 W20	42×40×20	円形	c			中期中葉		
874	S 11 W20	26×20×16	楕円形	c				901	S 8 W20	43×29×11	不整形	a			中期後葉		
875	S 9 W20	39×34×21	円形	c				902	S 9 W20	18×18×22	円形	f					
876	S 10 W17	86×10				中期後葉		903	S 9 W20	30×23×22	楕円形	c					

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪形	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	輪形	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる									>切る、<切られる			
904	S 9 W20	29×29×12	円形	c					933	S12 W19	40×39×14	円形	c				
905	S 9 W20	35×30×20	円形	d					934	S11 W18	53×30×23	楕円形	d			不明	
906	S 7 W19	28×24×20	円形	c		中期後葉			935	S12 W19	30×26×11	円形	c				
907	S 7 W19	47×46×51	円形	f		不明			936	S13 W19	42×35×8	楕円形	b				
908	S 7 W19	27×26×13	円形	c					937	S12 W18	55×44×30	楕円形	d				
909	S 7 W18	34×32×10	円形	b					938	S11 W17	35×34×13	円形	c				
910	S 7 W18	35×34×21	円形	c		中期後葉			939	S12 W17	33×32×12	円形	c				
911	S 7 W17	28×28×17	円形	c					940	S12 W16	32×28×11	円形	c				
912	S 7 W16	106×90×14	楕円形	b		>土707	土器多量		941	S11 W16	32×29×13	円形	c				
913	S 6 W15	25×24×18	円形	d					942	S11 W16	34×32×18	円形	c			中期後葉	
914	S 7 W15	42×34×34	楕円形	d					943	S10 W15	37×36×15	円形	c			中期後葉	
915	S 7 W15	44×34×15	楕円形	e					944	S12 W15	50×44×35	円形	c				
916	S 8 W15	55×52×20	円形	e					945	S13 W17	50×50×11	円形	a		>土946		
917	S 7 W15	24×24×18	円形	c					946	S14 W17	154×107×10	楕円形	b		<土945	不明	
918	S 8 W17	57×55×35	円形	e					947	S10 W15	40×32×39	楕円形	c			中期後葉	
919	S 7 W17	28×25×15	円形	d					948	S10 W15	50×37×38	楕円形	c			不明	
920	S 8 W18	45×28×45	楕円形	f					949	S 9 W16	47×30×16	楕円形	c				
921	S 8 W19	28×24×16	円形	c					950	S 9 W15	68×66×17	隅丸方形	b		<土1063	不明	
922	S 8 W18	42×40×39	円形	d					951	S 8 W16	34×28×23	楕円形	e				
923	S 9 W17	58×38×16	楕円形	b		中期後葉			952	S 8 W15	32×27×12	円形	c			不明	
925	S 9 W18	36×33×19	円形	c		中期後葉			953	S 8 W15	33×31×13	円形	c			不明	
926	S 9 W17	46×43×14	円形	a					954	S 8 W15	36×34×26	不整形	d				
927	S 9 W16	50× ×16		b					955	S 9 W15	62×36×25	楕円形	e				
928	S10 W17	34×30×36	円形	f					956	S 7 W14	35×31×14	円形	c				
929	S10 W18	46×46×27	円形	d					957	S 7 W14	46×30×15	楕円形	a				
930	S10 W17	26×26×25	円形	c					958	S 8 W14	41×36×23	円形	d				
932	S12 W19	31×29×10	円形	a					959	S 8 W14	21×20×16	円形	c				

No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	細形	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	細形	切合い		時期	遺物、備考
					>切る、<切られる									>切る、<切られる			
960	S 8 W14	41×34×23	不整形	d				987	S 11 W11	46×42×26	円形	d				中期後葉	
961	S 9 W14	30×28×13	円形	c				988	S 10 W10	48×42×40	隅丸方形	d				不明	
962	S 10 W14	40×38×21	円形	c		不明		989	S 10 W10	36×30×24	楕円形	d					
963	S 10 W14	85×58×22	楕円形	b		中期後葉		990	S 9 W10	77×63×12	楕円形	b					
964	S 11 W14	32×32×28	円形	d		中期後葉		991	S 8 W10	45×45×19	円形	c				不明	
965	S 11 W14	66×43×30	楕円形	e				992	S 8 W10	43×41×40	円形	e					
966	S 7 W13	50×44×21	円形	d		中期後葉		993	S 7 W11	60×56×30	円形	c				不明	
967	S 8 W13	54×47×25	円形	c				994	S 15 W36	58×50×21	円形	e					
968	S 7 W12	88×79×41	円形	d				996	S 15 W31	60×48×14	楕円形	b				中期後葉III	
969	S 8 W12	36×35×13	円形	c		不明		997	S 15 W31	51×39×19	楕円形	c				不明	
970	S 8 W12	30×26×19	円形	c		中期後葉III		998	S 14 W31	24×23×6	円形	b				不明	
971	S 8 W13	70×66×38	円形	d		中期後葉I		999	S 14 W31	51×48×14	円形	a				中期後葉	
972	S 9 W14	36×22×35	楕円形	d	<±973			1000	S 14 W30	66×49×18	楕円形	b				不明	
973	S 9 W13	32×29×35	円形	g	>±972			1001	S 16 W29	54×50×13	円形	a					
974	S 9 W13	48×38×24	楕円形	c	>±975			1002	S 15 W29	44×38×21	円形	c				早期末葉	
975	S 9 W12	61×60×11	隅丸方形	b	<±974	早期末葉		1003	S 14 W28	35×28	楕円形						
976	S 9 W11	120×80×21	楕円形	a		不明		1004	S 14 W27	40×32×10	楕円形	a					
977	S 9 W11	44×32×26	楕円形	d		中期後葉		1005	S 17 W28	216×14						早期末葉	調査区域外に 延びる
978	S 8 W12	26×26×19	円形	c				1006	S 17 W26	114×90×11	楕円形	a					
979	S 10 W12	72×56×18	楕円形	b				1007	S 16 W26	55×42×12	楕円形	a					
980	S 10 W13	66×41×26	楕円形	e		不明		1008	S 16 W25	59×58×15	隅丸方形	a					
981	S 12 W12	58×55×17	円形	b		中期後葉III		1009	S 16 W25	42×40×13	円形	b					
982	S 13 W12	71×43×34	楕円形	e		中期後葉		1010	S 15 W26	38×28	楕円形						
983	S 13 W12	46×44×30	円形	c				1011	S 14 W26	27×24×11	円形	c					
984	S 13 W12	26×26×13	円形	c		不明		1012	S 15 W26	36×33×11	円形	a					
985	S 12 W11	46×42×30	円形	d		中期後葉		1013	S 15 W24	50×39×14	楕円形	a				中期中葉	
986	S 11 W11	76×63×56	楕円形	e		中期後葉III		1014	S 14 W20	38×35×15	円形	c					

N o	座標	大きさ (cm)		平面形	断面形	切合い		遺物、備考	時期	断面	平面形	断面	切合い		遺物、備考
		長軸×短軸×深さ	深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる								
1015	S 14 W21	64×54×13		楕円形	a						楕円形	b			不明
1016	S 17 W24	156×11		不整形		<土1017		中期後葉			不整形	d			
1017	S 16 W22	341×237×27		不整形	b	>土1016					円形	d			
1018	S 18 W19	29×18×18		楕円形	c						円形	c			
1019	S 16 W19	49×48×16		円形	b			不明			円形	e			
1020	S 17 W18	110×95×24		円形	b						楕円形	c			
1021	S 15 W18	58×49×27		円形	c			早期未葉			楕円形	c			
1022	S 16 W18	32×28×18		円形	d			中期後葉			円形	c			
1023	S 15 W17	54×45×25		円形	c			不明			楕円形	c			不明
1024	S 14 W16	34×31×18		円形	c	>土1025					楕円形	f			不明
1025	S 15 W16	64×58×11		隅丸方形	a	<土1024					楕円形	b			
1026	S 17 W16	62×59×16		円形	a			不明			楕円形	c			
1027	S 15 W13	70×58×24		楕円形	d			不明			楕円形	c			
1028	S 16 W13	46×40×31		円形	c			不明			楕円形	c			不明
1029	S 17 W14	101×78×26		楕円形	b						円形	e			
1030	S 17 W14	50×37×27		楕円形	d						円形	c			
1031	S 18 W14	98×80×23		楕円形	a						楕円形	c			
1032	S 14 W11	48×42×20		円形	e			中期中葉			楕円形	d		>土950	中期中葉
1033	S 14 W10	67×63×17		円形	b						円形	d			
1034	S 18 W10	82×73×17		円形	b			不明			円形	b			
1035	S 19 W10	94×76×22		楕円形	a			不明			円形	b			
1036	S 1 W31	38×35×22		円形	e									<土453	
1037	S 5 W27	30×29×25		円形	d						楕円形	e			
1039	S 13 W19	16×16×9		円形	c			不明			楕円形	a			
1040	N 9 E 8	65×64×8		円形	b						双円形	b		<土1076	不明
1041	S 1 EW0	92×72×41		隅丸方形	e			中期後葉			隅丸方形	b			
1042	S 7 W 2	50×42×39		円形	c			不明			115× 13	b			調査区域外に 延びる

No	座標	大きさ (cm)		平面形	輪影	切合い		時期	遺物、備考	No	座標	大きさ (cm)		平面形	輪影	切合い		時期	遺物、備考
		長軸×短軸×深さ	深さ			>切る、<切られる	>切る、<切られる												
1075	S12 W36	66×66×10		円形	a					1106	N15 W8	87×82×16	円形	b				不明	
1076	S14 W41	62×60×17		円形	b	>±1071		中期後葉		1107	N13 W7	92×84×9	隅丸方形	b				中期後葉	
1077	S11 W40	62×50×24		楕円形	c					1108	N13 W9	106×94×14	円形	a				不明	
1079	S10 W18	62×62×39		円形	e	<±929			埋設土器	1109	N11 W9	164×158×32	円形	a				不明	
1080	S7 W15	23×22×10		円形	c					1110	N12 W10	82×74×28	円形	d				不明	
1081	N5 EW0	36×32×16		円形	a					1111	N12 W10	80×68×35	円形	d				中期初頭	
1084	S15 W38	62×52×21		円形	c					1112	N10 W10	116×104×16	円形	a	<±1113				
1085	S14 W37	48×40×14		楕円形	b			不明		1113	N10 W10	84×84×28	円形	b	>±1112			中期後葉	
1086	S14 W36	21×20×13		円形	c					1114	N9 W9	86×80×17	隅丸方形	b				不明	
1087	N10 E13	72×48×22		不整形	a			中期中葉		1115	N8 W10	64×58×8	円形	b	>±1116				
1088	S18 W15	130××28			b			不明	調査区域外に 延びる	1116	N8 W10	88×62×21	楕円形	b	<±1115				
1089	S10 W14	22×22×13		円形	c					1117	N9 W11	98×68×21	楕円形	a				中期中葉	
1090	S5 W16	22×20×20		円形	d					1118	N10 W9	200×178×31	円形	b				不明	
1091	N9 W32	32×20×14		楕円形	c					1119	N6 W6	130×100×19	楕円形	b					
1092	N26 W8	94×82×16		円形	b					1120	S15 W41	160××50		b				早期未葉	調査区域外に 延びる
1093	N28 W7	70×70×20		円形	b			不明		1121	S14 W41	74×64×13	円形	a					
1094	N29 W8	80×70×70		円形	c			中期後葉		1122	S10 W17	28×25×16	円形	c					
1095	N31 W7	140×108×10		楕円形	a					1123	S10 W14	27×26×8	円形	b				中期後葉	
1096	N25 W8	58×48×8		楕円形	a					1125	N16 E8	106×71×18	楕円形	b				中期中葉	
1097	N24 W8	116×72×8		不整形	b					1128	N11 W6	147×104×25	双円形	b				中期後葉	
1098	N24 W9	144×134×13		不整形	b					1129	N8 W5	120×66×38	隅丸方形	b				不明	土器多量
1099	N24 W10	143×102×25		楕円形	a			中期後葉III		1130	N5 W4	54×48×11	円形	a				不明	
1100	N22 W10	96×83×12		円形	a			不明		1131	N4 W3	70×50×45	楕円形	d					
1101	N20 W6	306×199×18		不整形	b	>±1104		中期後葉		1132	S6 W14	32×32×21	円形	d					
1102	N21 W4	168×134×24		不整形	b			中期後葉I		1133	N1 W14	37×32×16	円形	b					
1103		8			b				平面図ナシ										
1104	N20 W10	166×80×16		不整形	a	<±1101													

5. 縄文土器

今回の調査では整理箱（容積34×54×20cm）で約60箱出土している。その時期は早期前半から中期終末まで非常に幅広い。報告書作製にあたっては以下の基準で分類・検討を行なっている⁽¹⁾。時期の区分は早期前半、早期末～前期初頭、前期後葉～中期初頭、中期中葉、中期後葉として各時期ごとに土器の検討を行なった。早期から中期初頭の土器については量が少ないので、全資料をまとめ、分類・検討した。中期中葉・後葉の遺物についても、基本的には全ての資料をさらに段階ごとに細分し、検討を行なった。この時期の資料のうち、住居址等の遺構に伴う一括資料については各々の帰属する段階の中で検討した。ただしそれらの出土状態などに関する記述は各遺構の項で行なっている。なお中期の土器の年代観については、中葉のものは下総考古学会の編年⁽²⁾、後葉のものは長野県史の編年⁽³⁾により時期区分を行なった。

註1. 分類の方法については『梨久保遺跡』（岡谷市教育委員会1986）を参考にした。

2. 下総考古学会1985「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8

3. 長野県史刊行会1988『長野県史』考古資料編全1巻（四）遺構遺物

第1群 縄文時代早期前半の土器（第90図1～34、第93図80・81）

早期前半の土器は67点出土している。ほとんどが押型文土器で、少量の撚糸文土器などがある。遺構に伴うのは土坑から出土した数点のみで、ほとんどが遺構外や後の時代の遺構への混入品であり、調査区のほぼ全域に分布している。いずれも小さな破片であり、器形を復元できるものはない。

第1類 押型文土器（第90図1～31）

61点出土している。全体量は決して多くないが、松本市の発掘調査で出土したものでは比較的まとまった資料といえる。今回は文様と器厚より以下のような分類を行なった。

第1種（第90図1～9）器厚が4～6mmの薄手の山形文土器である。17点のうち9点を図示している。山形文の比較的大きなもの（1～4）と細かいもの（5～9）がある。1・2・4は体部に横位の帯状施文をもつ。1は口唇にも体部と同一の原体による施文が施されている。3・5～9の体部は縦位の帯状施文である。3は樋沢式土器の特徴である口縁に平行する文様帯の下に縦の文様帯をもつ。7～9は胴部下半の破片で文様帯が密着し、単位の判読が困難である。

第2種（10～16）器厚が4～6mmの薄手の楕円文土器である。16点のうち7点を図示している。いずれも楕円文は非常に細かい。小片のため文様帯の判読が困難であるが、横位の帯状施文と推定される。原体はいずれもかなり短いものようである。15・16は楕円の端部が角張り、菱形に近くなっている。

第3種（17・18）器厚が7mm以上の厚手の山形文土器である。3点のうち2点を図示している。17は第1種としたものより胎土中に細かい砂粒を多く含む。18は粗大な山形文を斜めに施している。

第4種（19～28）器厚が7mm以上の厚手の楕円文土器である。23点のうち10点を図示している。

第2種としたものに比べて粗大な楕円文をもつものが多い。26～28の3点は器厚は厚いが、第2種と似た細かい楕円文が施されている。19～21は縦位の密接施文である。22・23・27の3点は横位の密接施文と思われるが、単位の判読は困難である。28は口縁下の屈曲部の破片であるため原体が判別しにくい。上半部に横位施文し、下半部は先端の細いU字状の工具による刺突文が施されている。先端を斜めにした半截竹管状の工具で器面を垂直に刺突したものと思われる。小片のため確実ではないが、2種の文様帯の交互施文と推定される。

第5種 (29・30) 胎土に繊維を含む厚手の楕円文土器である。出土したのは図示した2点のみである。29は粗大な楕円文がわずかに認められる。30は菱形に近い楕円文が施されている。

第6種 (31) かなり崩れた格子目文、あるいは市松文土器である。1点のみ出土した。器厚は薄く、第1・2種に近い。胎土には非常に細かい砂が含まれる。

第2類 撚糸文土器 (第90図32～34)

3点出土している。いずれも遺構外からの出土で、胎土中に繊維を含んでいない。早期末の土器に比べるとやや薄手である。

第3類 田戸下層式土器 (第91図80・81)

2点出土している。80は口縁部の破片である。口縁に連続する刻みを入れ、2条の爪型の刺突と連続する斜めの沈線を施している。下端は屈曲部で折損している。81は80よりやや太く浅い沈線が施されている。2点とも胎土中に微小な穴が見られ、微量の繊維を含んでいた可能性がある。

第1群土器を編年的にみると、1類1種及び2種とした薄手の押型文土器は樋沢式土器の新しい段階に位置付けられるものである。近接する遺跡との比較では、塩尻市向陽台遺跡の土器群に似ているが、同遺跡の資料中には胎土に黒鉛を含むものが多く、本遺跡の資料中にはみられないことから、向陽台遺跡よりも1段階後のものといえよう。樋沢式そのものではなく、その系統上のものと考えたい。2類3種及び4種とした厚手の押型文土器は、細久保式の段階に位置付けられる。4種の中の厚手で細かい楕円文をもつもののうち、27・28の2点は前段階との中間的なものと位置付けられるかもしれない。28は遺存部の下に楕円文の文様体がある交互施文だとすれば、細久保式と考えられる。第2類の胎土に繊維の含まれない撚糸文土器と、第3類の田戸下層式土器は細久保式に伴うものと考えられる。第1類5種の胎土に繊維を含む押型文土器は細久保式期のなかでも新しく、高山寺式に近い段階のものと考えたい。第1類6種は位置は不明である。

第2群 縄文時代早期末葉～前期初頭の土器 (第90図35～第91図72・74～79)

この時期の土器は約200点出土しており、少量ではあるが比較的まとまった資料である。早期前半に比べると土坑からの出土資料が増えるが、大半は遺構外や後の時代の遺構への混入品である。この時期のものと考えられる土坑は、調査区の西側の低くなった部分を中心に分布するが、遺物は調査区のほぼ全域から出土している。出土した土器はいずれも小片で、器形を復元できるものはな

い。今回は施文方法による大別の後、比較的遺存状態の良好なものを抽出し、図化している。概観すると在地の胎土に繊維を含む土器群が主体で、それに少量の東海系の土器群が伴っている。この時期の土器は同じ中山地区の坪ノ内遺跡（松本市教育委員会1990年）や生妻遺跡（同1991年刊行予定）などで近年良好な資料を得ており、それらを参考に位置付けてみたい。

第1類 在地の土器（第89図35～第91図79）

胎土に多量の繊維を含む厚手の土器で、器形はいずれも尖底の深鉢になると思われる。以下施文方法により細分を行なった。

第1種 撚糸文・縄文系土器（第90図35～45）出土量が多いが、大半は小破片である。胴部の破片11点を図示した。35～40は撚糸文施文、41～45は縄文施文である。いずれも厚手で胎土中に少量の繊維を含むが、焼成は良好である。内面の調整は比較的丁寧である。

第2種 絡体圧痕文系土器（46～53）出土量は少なく、図示したものでほとんどである。48・49は口縁部の破片であるが、風化が著しい。46は地文の撚糸文の上に絡体で押圧している。46・47は弾力性をもつ原体をイモ虫状に曲げて押圧している。

第3種 条痕文系土器（54～69）出土量は多く、この時期の大半を占める。条痕が内面のみのも（54・55）、外面のみのも（56～60）、両面に施されたもの（61～67）の3種がある。59の外面には指頭あるいは幅の広い工具によると思われる横方向の不規則なナデがみられる。62・64は他よりやや薄い。63は底部に近い破片で繊維の含有量が非常に少ない。67の内面には規則的は条痕がみられる。

第4種 その他の在地系土器（70～73）出土量は少ない。70は山状の小突起をもつ口縁の破片、71・72は無文土器である。73は沈線の区画内を刺突で埋めている。

第2類 非在地の土器（第91図75～79）

在地以外のもと思われるものを一括した。出土量は少なく、図示した5点のみである。75は上半の屈曲部より上に粗大な刺突文をもつ。下端は条痕端部の盛り上がりの直下で折損している。関東地方の鶴ヶ島台式土器と推定される。77・79は微量の繊維を含む灰色のよく似た胎土で、同一個体と思われる。77は低い隆帯の上と器面に横方向に連続した爪型文が施されている。78は浅い条痕をもつ。79は屈曲した端部とその上に半円形の連続刺突が施される。いずれも茅山下層式に並行する段階の東海地方の資料と思われる。76はわずかに突起する口縁である。断面の丸い工具で口縁の形に平行する横方向の押し引きを行なっている。胎土には多量の繊維が含まれる。この土器の系譜は不明である。

第2群の土器群の編年的位置付けは、遺構外資料が多く共伴関係等の資料の確実性はないが、近年の周辺地域の資料等により、ほぼ同時期に属するものと考えられる。この土器群は共伴する東海地方のものより、早期末葉から前期初頭に位置付けられる。なお本遺跡出土で非在地とした土器群は、他地域そのものではなく、在地で模倣したものと考えられる。

第3群 縄文時代前期後葉の土器（第91図74・82～86）

この時期の土器は破片が数点出土したのみである。今回の調査ではこの時期の遺構は検出されておらず、全て後の時代の遺構覆土への混入品である。点数が少ないので細分は行っていない。

74は2条の隆帯の間を工具でナデ押さえ、隆帯の頂部を半截竹管で連続刺突している。隆帯の上にも沈線のような文様があるが、欠損していてわからない。82～84は地文の半截竹管による沈線文の上に、極細い粘土紐を張り付け、その上に刻みを入れ、結節浮線文としている。83は下半に小さなボタン状の張り付けが加わる。3点の胎土・色調は各々異なるが、同一時期のものと考えられる。時期的には前期末葉に位置付けられる。85は口縁が屈曲し、受け口に近い形態である。文様は半截竹管による縦横の浮線文である。86は地文の半截竹管による沈線の上をヘラ状工具による沈線で切り、区画した部分を三角形または方形に削り取っている。この2点は前の3点と同じか、やや後の中期初頭に近い段階に位置付けられるものと推定される。

第4表 押型文土器観察表

No.	図No.	出土位置	群	類	種	部位	器厚(mm)	文様	器面調整	胎土	備考
1	9	14住覆土	1	1	1	胴	4	山形密接	ナデ	石・砂	早75
2	8	14住覆土	1	1	1	胴	5	山形密接	ナデ	雲	早73
3		169土坑	1	1	1	胴	4	山形帯状	ナデ	石・砂	
4		33住覆土	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石	
5		23住覆土	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石	
6	7	14住覆土	1	1	1	胴下半	6	山形帯状	ナデ	石	早8
7	6	5住覆土	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石	早71
8		390土坑	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石	
9	5	296土坑	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石・砂	早77
10	2	30住覆土	1	1	1	口縁	6	山形帯状	ナデ	石・砂	早10
11	4	14住覆土	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石・砂	早12
12		14住覆土	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石	
13		14住Ps	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石・砂	
14		566土坑	1	1	1	胴	6	山形帯状	ナデ	石・砂	
15	16	2住覆土	1	1	2	胴	5	楕円帯状	ナデ	石・雲	早74
16	14	3住覆土	1	1	2	胴下半	4	楕円密接	ナデ	石・砂	早3、異方向施文
17	11	14住覆土	1	1	2	胴	4	楕円密接	ナデ	石・砂	早79
18	12	5住覆土	1	1	2	胴上半	5	楕円帯状	ナデ	石・砂	早72、屈曲部
19		11住検出面	1	1	2	胴	5	楕円帯状	ナデ	石・砂	
20	15	23住覆土	1	1	2	胴	5	楕円密接	ナデ	石・長	早17
21	10	20住覆土	1	1	2	胴	5	楕円帯状	ナデ	長	早4
22	13	5住覆土	1	1	2	胴	5	楕円帯状	ナデ	雲・砂	早2
23		排土	1	1	2	胴	6	楕円密接?	粗	石・雲	
24		18住覆土	1	1	2	胴	5	楕円帯状	ナデ	石・雲	
25		検出面	1	1	2	胴	6	楕円帯状	粗	石	
26		32住覆土	1	1	2	胴下半	5	楕円帯状	ナデ	石・長	異方向施文

No.	図No.	出土位置	群	類	種	部位	器厚(mm)	文 様	器面調整	胎 土	備 考
27		32住覆土	1	1	2	胴下半	5	楕 円 帯 状	ナ デ	石	
28	3	1087土坑	1	1	1	口 縁	6	山 形 帯 状	ナ デ	石・雲	早76、口縁横位、胴部縦位
29	1	14住覆土	1	1	1	口 縁	6	山 形 帯 状	ナ デ	石・砂	早11、口唇施文
30		14住検出面	1	1	3	胴	7	山 形 帯 状	ナ デ	石・砂	
31	17	56土坑	1	1	3	胴上半	8	山 形 帯 状	ナ デ	石・砂	早 7
32	18	22住床面	1	1	3	胴	8	山 形 帯 状	ナ デ	石・砂	早 9、粗大山形文斜位
33		638土坑	1	1	4	胴	8	楕 円	粗	長	
34		包 含 層	1	1	4	胴	7	楕 円	粗	長	
35	26	808土坑	1	1	4	胴	9	楕 円 帯 状	ナ デ	石	早 6、横位施文
36		1120土坑	1	1	4	胴	7	楕 円	ナ デ	石・雲	
37		排 土	1	1	4	胴	8	楕 円	粗	砂	横位施文
38		排 土	1	1	2	胴	6	楕 円 密 接	ナ デ	石	横位施文
39		24住覆土	1	1	4	胴	9	楕 円 帯 状	粗	石	横位施文
40	22	404土坑	1	1	4	胴	8	楕 円	粗	雲	早78
41	24	404土坑	1	1	4	胴	9	楕 円 密 接	ナ デ	長	早13、輪積痕明瞭
42	20	20住覆土	1	1	4	口 縁	8	楕 円 密 接	粗	砂	早16
43	27	843土坑	1	1	4	胴	10	楕 円 密 接	粗	砂	早18
44	25	401土坑	1	1	4	胴	10	楕 円 帯 状	粗	石・長	早81、横位施文
45		449土坑	1	1	4	胴	8	楕 円	粗	石・長	
46		409土坑	1	1	2	胴下半	6	楕 円 密 接	ナ デ	石	
47		検 出 面	1	1	4	胴	7	楕 円	ナ デ	石	早15
48	28	4 住 炉	1	1	4	胴	8	楕 円・刺 突	ナ デ	石・長	早15
49	23	21住検出面	1	1	4	胴	9	楕 円	ナ デ	石・長	早 5、横位施文
50		排 土	1	1	4	胴	11	楕 円	ナ デ	長	横位施文
51		排 土	1	1	4	胴	9	楕 円	ナ デ	長	横位施文
52		401土坑	1	1	4	胴	9	楕 円	ナ デ	長	
53		401土坑	1	1	4	胴	6	山 形 帯 状	ナ デ	石	
54		401土坑	1	1	2	胴下半	6	楕 円	ナ デ	長	
55		896土坑	1	1	4	胴下半	9	楕 円	ナ デ	長	
56		255土坑	1	1	4	胴	7	楕 円	ナ デ	石・長	
57		404土坑	1	1	4	胴	7	楕 円	ナ デ	長	
58	21	5住覆土	1	1	4	口 縁	10	楕 円	ナ デ	砂	早 1、横位施文
59	19	排 土	1	1	4	口 縁	8	楕 円	ナ デ	石	早14
60	30	371土坑	1	1	5	胴	10	楕 円	粗	織 維	早80
61	29	69土坑	1	1	5	胴	12	楕 円	粗	織 維	早69
62	31	151土坑	1	1	6	胴	6	格 子?	ナ デ	長	早70
63	32	検 出 面	1	2		胴	6	撚 糸	ナ デ	長	早21
64	33	検 出 面	1	2		口 縁	8	撚 糸	粗	雲・長	早22
65	34	排 土	1	2		口 縁	10	撚 糸	ナ デ	織維・砂	早20
66	80	検 出 面	1	3		口 縁	6	連続刺突・沈線	ナ デ	織維?・砂	早68
67	81	22住覆土	1	3		胴	10	沈 線	粗	織維?・雲	早19

第4群 中期初頭の土器（第88図131・134拓影第102～105図）

縄文時代中期の土器は『松本市坪ノ内遺跡』（松本市教育委員会1990）にならって、初頭・中葉・後葉の3段階に区分した。

初頭に比定される土器は少量で、土坑内及び包含層から破片が出土するにとどまっている。

第56号土坑出土土器（拓影280・282）は、縄文を地文とし深い陰刻文や連続刻み目文などがみられ、五領ケ台Ⅱ式の新しい段階に比定される。第179号土坑（302）、第756号土坑（拓影313・314）、第1013号土坑出土土器（320）も五領ケ台Ⅱ式段階に比定されるもので、314は浅鉢である。

遺構に伴わない土器では、沈線文系（三上1987）の131・拓影301・327・335・348。縄文系の93・153・163・拓影322・334・336～339・347があげられる。おおむね五領ケ台Ⅱ式の段階であるが、301は古くなる。また、327は平出三A土器につながるものである。134は浅鉢である。また、328は角押文の施された最終末の土器であり、胴部の装飾によっては中葉Ⅰ期に下がる可能性を持っている。

第5群 中期中葉の土器

第2号住居址出土土器（第65図1～第66図8、拓影第90図87～93）

6は炉体土器で、全面にRL縄文が施されており、五領ケ台式土器の末期から勝坂式土器の初頭の段階と思われる。

覆土中にはⅠ期の新しい段階からⅡ期の土器を主体とし、その前後の土器が混在している。3・5は勝坂式土器系統のⅠ期c段階（寺内1984）の土器である。胎土中には白色の大粒岩石片が多量に入っており、6の胎土に近く勝坂Ⅱ式段階の1・2や斜行沈線文土器とは大きく異なっている。3は指頭圧痕を地文とし、口縁部の突起から舌状に延びる隆線の特徴をしている。5は角押文の施文具が立ちはじめている。図示しなかった破片から、口縁部Ⅰa文様帯には楕円形区画文が一段めぐる。拓影92もⅠ期である。

1・2・拓影88は勝坂式土器系統のⅡ期に比定される。胎土には砂粒を多く含み粗いが、大粒の混和材は入らなくなる。1・2ともに本来の勝坂式土器からは逸脱した文様の構成を取っている。1の菱形の区画文は、多くの場合胴部文様や、他の区画文の一部と組み合わせられて使われることが多い。しかし、全面に菱形区画文が施される例は、東京都西上遺跡など少数に限られる。また、2にみられる胴部に斜めに配置される楕円形区画文は、さらに特異な例と言える。

4・7はⅠ期c段階からⅡ期の古い段階にともなう斜行沈線文土器（寺内1984）である。両者とも横位の細長い楕円形区画文が崩れはじめている。4の胴部に見られる連結部を持つ懸垂文は、仮称“深沢式”土器（高橋1989）の系譜を引くものとして注目される文様である。しかし、本来のものとは異なり、横方向に広くなり崩れる傾向を見せている。沈線はいずれも単沈線である。

8・拓影87・89・90はⅣ期に比定される勝坂式土器であり、凹地となった本住居址への混入品と

考えられる。

5号住居址出土土器（第66図9～第77図56、拓影第92図94～第95図137）

覆土中から中期中葉Ⅲ期の新しい段階～Ⅳ期のまとまった資料が出土している。

9～32は勝坂式土器の中で、横割の区画文などが重畳する土器である。

13・15・16は口縁部文様帯に半楕円形＋三角形区画文（重三角文）の残存する土器である。いずれも隆線上の刻みが認められないか、あるいは非常に限定して使われており、Ⅲ期に比定される。13は隆線脇や区画内を充填する細沈線の特徴としている。15の胴部にはいわゆる象の鼻と呼ばれる抽象文が残存しており、本住居址の中でも古い土器である。16には半截竹管による平行沈線文が認められる。

14・17は口縁部文様帯の半楕円形＋三角形区画文が崩れはじめた土器である。14はⅢ期、17はⅣ期であろう。14に見られる装飾は、基本的には勝坂式土器の系統に属するが、口縁部にみられる突起は斜行沈線文土器の突起が変形したもので注目される。また、口縁部文様帯の集合沈線は、口唇部直下に刺突を入れ、足の長い蓮華文に近い様相を示している。23・26は、口縁部文様帯の区画文が横方向との連絡を弱め、4単位の独立した区画文とその上部に付属する突起を主体とした土器である。隆線上には本格的に刻み目が施されるようになっており、Ⅳ期に比定される。10・27・32には楕円形区画文が一部に認められており、10がⅢ～Ⅳ期、27・32がⅣ期である。

9・12・20・22は一段から数段の楕円形区画文が認められる土器である。9は刻みのない隆線による区画文内にキャピラー文とくさび文が施されており、15・22とともに本住居址では比較的古いⅢ期に属する土器であろう。12・20の隆線上には一部で刻み目がのってきており、Ⅲ期の新しい段階かⅣ期に比定されるものである。

25・30は口縁部がふくらみを持った波状口縁となり、集合沈線で飾られる。松本平においては、この時期の遺跡では確実に一定の割合で認められる類型の一つである。25の胴部区画内にはキャピラー文やくさび文など古い要素が認められるため、Ⅲ期と考えられる。30は隆線上の刻みも多くなり、若干新しくなるであろう。

21・24・28・29・54は胴部上半に、一段の三角形区画の崩れた横方向の隆線文が認められる土器である。23はⅢ期の可能性があるが、他はⅣ期であろう。

31は楕形文を持つ土器で、他の勝坂系統の土器と胎土が異なっている。Ⅳ期かそれよりも新しい段階の土器である。

33～42は勝坂式土器系統の内、縦割区画文土器と胴部文様帯を幅広く取った土器である。

36～38は胴部文様帯を幅広く取る土器でキャピラー文の盛行からⅢ期に比定される。40・41は36～38よりの新しい段階でⅣ期に属すると考えられる。いずれも、口縁部に無文帯を有し、口唇部の一ヶ所に突起を配している。

34・35・39・42・55は隆線脇に半截竹管の腹を使った半隆起線（平行沈線）文によるパネル文が

認められる。ここでも口縁部には無文帯を有し、一ヶ所に突起が認められる。Ⅲ期～Ⅳ期である。

53・56をはじめ勝坂式土器系統の土器に施された縄文は、すべて単節RLである。

43・44は焼町土器（1984野村）である。いずれも文様帯の分割がなくなっており、Ⅲ～Ⅳ期に比定されよう。

45・46・48は平出三A土器である。勝坂式土器や焼町土器とは一見して胎土が異なり、器壁がうすく作られている。45や48はかなり崩れてきてはいるものの、平出三A土器の文様構成をとどめており、Ⅲ期かもしくはより古くなるであろう。48には押し引き文やRL縄文が認められる。43では頸部文様などに変化が現れており、Ⅲ～Ⅳ期と思われる。

47は松本平やその周辺地域で少数ながら点在する類型である。全面にRL縄文が施されており、そのうえに連鎖状隆線だけが認められる。器形は口縁部付近の幅の狭い部分が直に立ち上がり、広い頸部を有するなど平出三A土器との類似が認められる。しかし、胎土は勝坂式土器に近く、器厚も厚くなっている。

49・52は浅鉢である。

拓影で図示した土器は、102がⅡ期である以外は、Ⅳ期を主体としたもので、若干Ⅲ期やⅤ期の土器が混ざるといえる。いずれも、破片では時期を限定することができない。

8号住居址出土土器（拓影第95図154・158）

154は角押文が施されておりⅠ期である。158も近い時期のものであろう。

9号住居址出土土器（拓影第94図140・141・144）

140・144には隆線上に刻みが施されており、Ⅳ期～Ⅴ期と考えられる。141の沈線の一部はくさび状の刺突となっている。

10号住居址出土土器（拓影第94図142・143）

142には蛇行する隆線の脇に2条の沈線がみられ、143には幅の狭い区画の耳部に円形の突起がついている。いずれも、斜行沈線文土器系統か焼町土器の古い段階の破片と考えられる。全体のモチーフがはっきりしないがⅡ期であろう。

11号住居址出土土器（拓影第92図145～149）

146は地文がなくなった口縁部文様帯に鋭い沈線装飾が施されており、五領ヶ台最終末の段階か、胴部の状態によっては中期中葉Ⅰ期の最古の段階になるであろう。147はⅠ期の斜行沈線文土器。148・149はⅣ～Ⅴ期である。

13号住居址出土土器（拓影第94図150～第95図153）

150は角押文の施されたⅠ期である。151・152は角押文と格子目文が認められる。Ⅰ期かあるいは若干古くなるかも知れない。

32号住居址出土土器（第78図58、拓影第94図138・139）

58は口縁部の突起の形状や隆線の形状から斜行沈線文土器か、それに伴出する千曲川水系の土器

であろう。R L 縄文が全面に施されており、隆線脇の角押文は刺突に近くラフになっている。I 期 c 段階か II 期の古い段階に比定されよう。138 は平出三 A 土器、139 は角押文がラフになってくる I 期 c 段階である。

土坑出土土器（第88図127～130・132・133、第89図136）

第154号土坑出土土器（129）は平出三 A 土器の古い段階の土器であり、五領ケ台式平行期まで上がる可能性を持っている。第226号土坑出土土器（128）は III 期～IV 期の縦位区画文土器である。第901号土坑出土土器（136）は指頭圧痕のみの土器で I 期と考えられる。第1087号土坑出土土器（127）は、口縁部文様帯を2段に分帯しようとする徴候が現れており、斜行沈線文土器の成立を考える上で重要な土器である。口縁部 I a 文様帯には変形した蓮華文が認められる。また横位に重なる半截竹管による半隆起線文は、北陸系の土器との関連をうかがわせる。胴部の縄文は R L である。第1099号土坑出土土器（130）は撚糸文を地文としており、IV 期と思われる。

遺構に伴わない土器

I 期では、27号住居址出土の指頭圧痕文を持つ土器。拓影329・330の角押文を伴う土器があげられる。

II 期では、342の勝坂式土器のほか斜行沈線文土器の拓影340がある。

III 期では、349や350。IV 期から V 期にかけては、拓影341・343・344などがあげられる。

（参考文献）

- 高橋 保 1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟県考古学談話会会報』第4号
寺内隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』第7号
寺内隆夫ほか1990 『松本市坪ノ内遺跡』
野村一寿 1984 「塩尻市焼町遺跡第1号住居址出土土器とその類例の位置づけ」『中部高地の考古学』III
三上徹也 1987 「梨久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1

第6群 縄文時代中期後葉の土器

今回の調査で出土した土器の中では時期別では最も多く、全出土量の大半を占める。住居址に伴なう一括資料など良好なものも多い。以下時期別に文様の変化等を追いながら概観してみたい。

1) 中期後葉 I 期の土器

第14、29号住居址の資料が中心である。量的には多くないが、器形を復元できたものが多い。中期中葉末の土器の文様等を残すものや、唐草文系土器群に先行する梨久保 B 式土器が主体で、器形は、ほとんどが深鉢である。

第14号住居址の資料（第79図59-65、拓影第95図155～97図171）は、ほとんどが小破片であるが、良くまとまっている。第79図61や拓影第95図157は口縁部に細い粘土紐を貼り付けた重弧文をもつ。61はキャリパー形の口縁であるが頸部のくびれが少なく、口縁と胴部の最大径差が少ないため、寸づまりの印象が強い。62は頸部が数段にくびれる器形で、その部分の外側に細い粘土紐を格子目状に貼り付けている。このような細い隆帯の貼り付けの多用や、59・61～63・拓影160・161・164・

167・170・171などに見られる胴部の隆帯による区画内の縦横の沈線による充てんは、この時期の特徴である。62は肩部にテラス状の大きな張り出しをもち、その上面に粘土紐を貼り付ける特殊な器形の深鉢である。拓影165・166は胴部下半に前段階から続く櫛形文をもつ。169は斜めの沈線があり、時期は下るものと思われる。

第29号住居址の資料は、本址を切る第18号住居址との時期差が少なく、帰属の決定の困難なものが少なくない。第79図66は、この時期では古い様相をもつ。87の口縁部は隆帯を貼り付けた後、その間に深い沈線を入れている。胴部は深い沈線で器面を埋めている。第79図68・拓影174は前述の169同様、新しい時期のものである。

遺構外の資料には第89図137などがある。137は縦の隆帯から枝別れした部分の脇を、沈線で充てんした後、ナデている。

2) 中期後葉Ⅱ期の土器

第16、18、26号住居址の資料が中心であるが、量的には非常に少なく器形を復元できたものは、ほとんどない。前の段階から発達した唐草文系の土器が主体となる。器種別では深鉢がほとんどで、文様は前の段階の系譜上のものに、区画内の充てんに斜めの沈線が加わり綾杉文に発展する。

第16号住居址の第82図83は唯一器形が復元できたが、時期を決定できる文様はなく、帰属は不明である。拓影の資料も量が少ないので、まとめて概観したい。拓影第96図172・178・182は隆帯による重弧文をもつ。184・193は頸部に隆帯による格子目状の貼付をもつが、前の段階に比べて隆帯は太くなり、粗大化する。174・186・191～193は胴部の充てんに斜めの沈線が加わる資料である。192・194は綾杉文が確立した、Ⅱ期の中では新しい段階の資料である。

3) 中期後葉Ⅲ期の土器

9軒の住居址があり遺物の量は最も多くなる。埋甕をもつ住居址もこの時期に集中しており、埋甕に使われた土器など、器形の復元できたものが多い。前の段階に続いて唐草文系の土器が主体であり、これに加曾利Ⅴ系の土器と、少量の曾利系の土器が伴う。唐草文系の土器は胴部に綾杉文をもつが、新しい段階には序々に崩れはじめる。今回は住居址の切り合いや、土器の文様の変化により、この時期を新旧2段階に細分したが、区分の基準に明確さを欠く部分があり、なお検討を要するものである。

古段階としたものには、第3、15、17、23、31号住居址の資料がある。

第3号住居址の資料(第80図69～76、拓影第97図195～第98図202)は全て唐草文系の土器である。埋甕(第80図74)は地文の条線の上に沈線で文様を描いている。これに対して覆土内や床上から出土したそのほかの土器は隆帯の区画内を沈線の綾杉文で埋めており、両者の使いわけが行なわれている。このような例は同じ中山地区の生妻遺跡(松本市教育委員会1991刊行予定)の第2号住居址にあり、今後の検討を要するものである。他の土器もほとんどが深鉢だが小型のものが多い。第80図73は小型の器台である。円錐状の台の上に円盤が乗るこのようなタイプの器台は類例が少ないも

のである。

第15号住居址の資料（第81図77～第82図82、拓影第98図204～第99図213）には、唐草文系と加曾利E系の土器が混在する。埋甕（第82図81）は加曾利E式土器の第2様式から第3様式の移行期にみられる頸部の無文帯の省略が進行した段階に位置付けられると思われる。上下の文様帯の端部の名残りと思われる隆帯が2本平行して巡り段状になっている。拓影209は地文に縄文をもち、唐草文系と加曾利E系の両方の要素の融合した資料である。

第17号住居址の資料（第82図86・第83図87、拓影第99図214・215）は非常に少ない。埋甕（第83図87）の胴部の文様よりⅢ期としたが、上下が欠損しており明確でない。覆土より出土した86は、口縁の重弧文が、やや崩れているものの、胴部はⅡ期の特徴を残す。この土器は住居址奥側の床よりやや上の礫の固まりの中から出土しており、本址との帰属関係には、やや疑問が残る。そのほかの資料も少なく、この住居の時期については、Ⅱ期あるいはⅢ期の古段階のどちらかと考えたい。

第23号住居址の資料（第86図89～91、拓影第100図232～235）は量的には少ない。本址を切る第27号住居址との時期差が少なく、切り合いの誤認もあり、帰属の微妙な資料もある。第86図89は2単位の把手をもつ。把手の上面には粘土紐を、うず巻き状に貼り付けた後、その接ぎ目に沈線を入れてある。肩部の最大径部に横に区画された文様帯が確立するのも、この段階の特徴である。

第31号住居址の資料（第82図84・85、拓影第100図236・237）は非常に少ない。帰属も第4号住居址との時期差が少なく微妙なものがある。

新段階としたものには、第4・24・25・27号住居址の資料がある。前の段階の土器にみられた深鉢の最大径部の文様帯が消え、胴部と一体化してゆく。また口縁部の文様帯も簡略化され、やがて無文化する。胴部の綾杉文も崩れ、簡略化されてゆくなど、次の段階に向かって省略が進んでゆく。

第4号住居址の資料（第83図92～第84図94・拓影第99図220～231）はほとんどが唐草文系土器である。この住居址は遺構の項で述べたように、1軒のものかどうか疑問が残るものであり、土器にもバラつきがみられる。埋甕（第84図95）は口縁部に沈線と列点による文様を描いている。これは前の段階にみられた隆帯による文様の退化したものと思われる。94は床面直上より出土した。口縁部は沈線による文様をもち、胴部の文様も崩れ始めているが、最大径部の文様帯は残っている。93も胴部の綾杉がしっかりしており古い要素をもつ。これらの資料からみても埋甕が最も新しい要素をもっており、この住居址については再検討の必要があるといえる。

第24号住居址の資料（第84図96～第85図104・拓影第100図238～245）は量が多く、唐草文系、曾利系、加曾利E系の土器が混在している。埋甕1（第84図96）は曾利系、同2（97）は条線が地文の唐草文系、同3（101）は隆帯の間を沈線で埋める唐草文系と、各々異なった土器が使用されている。埋甕2の中に入っていたのは98で、この上に拓影242が入っていた。唐草文系の土器はいずれも胴部にみられる綾杉文が崩れはじめている。99は小型の壺形土器である。胴部は沈線で文様を描いており、3条の沈線の下に4単位のループが描かれている。このループは割り付けがズレてお

り4単位のうち1つは極端に小さくなっている。上部は3条の沈線の上にループをのせ、その上部が三角になり、さらに上へ続いているが折損しており上部の展開は不明である。どのような系統上に位置付けられるのかは不明である。105、106・拓影239～241は加曾利E系の土器である。

第25号住居址の資料（第86図107～109・拓影第101図246・247）は量的には非常に少ない。埋甕（第86図107）は胴部の綾杉文が崩壊し、縦方向の短かい沈線になっている。IV期の土器に極めて近いが、隆帯による区画が、わずかに残るため、Ⅲ期の終わりのものと考えた。108は肩部の文様帯が消滅し、胴部の綾杉も崩れている。

第27号住居址の資料（第86図110～115、拓影第101図248～251）も唐草文系と加曾利E系土器が混在する。埋甕に使用されていた2つの深鉢（第86図110・111）は口縁部と胴部の文様帯が区画される加曾利E式第3様式に位置付けられるものである。拓影249は前述の第25号住居址の埋甕と同様に胴部の綾杉文が崩れ、1方向の短かい沈線になっている。

以上がⅢ期の土器の概観であるが、唐草文系土器のこの段階については、変遷の様子を多くの部分で把握しきっていないため、自分自身混乱している部分が多く、多くの誤認等があると思う。細分にあっても文様帯の変化でなく、断片的な資料からの全体の雰囲気決めてしまった部分があり多くの問題を残してしまった。しかし文中で上げてきたような、口縁部の文様帯の隆帯→沈線→消失という変化、肩部文様帯の確立から崩壊までの変化、それに胴部の綾杉文の変化などを抽出し、それらを組み合わせてゆくことによって変遷が追えると思う。また共伴する土器や、さらに曾利系、加曾利E系以外の例えば東北地方の大木系などの影響等、今後解明してゆくべき点は多い。今後改めて検討し、究明してゆきたいと思う。

4) 中期後葉IV期の土器

中心となる第28号住居址の資料のほか、第19号住居址とした集石、遺構外に若干の資料がある。量的には決して多くないが、比較的良好な資料といえる。この時期には、深鉢の肩部のふくらみが失われ、口縁に向け直線的に開く器形となる。隆帯による区画も退化し、やがて沈線に変わる。前段階で肩部の文様帯や、それが退化した口縁と胴部を区画する隆帯の下に見られた両端が蕨手状に曲がる沈線も退化して短くなり、勾玉状のものになる。またこの文様の施文具も棒などの工具から指頭によるものへ変化する。胴部の綾杉文は完全に崩壊し、短かい沈線による器面の充てんが行なわれるようになる。器形も深鉢のほか、バケツ状の吊手をもつものなどがみられるようになる。

第28号住居址の資料（第87図116～119・拓影第101図252～255）には、これらの要素が良く現われている。第87図117・118はバケツ状の吊手をもつ深鉢の破片である。118は口縁から把手の側面にかけて2列の刺突をもつ。116は肩部が大きく外へ張り出す深鉢である。口縁は数単位の突起をもつと思われる。胴部は指頭によるごく浅く幅の広い沈線と列点状の文様が描かれている。119は地分の縄文の上を沈線で区画し、一部を磨り消している。この時期の加曾利E系の土器である。拓影の資料も指頭による勾玉状の短かい沈線（252）、縦の蕨手状沈線（253）などをもつ。253は波

状口縁の頂部の破片である。

第19号住居址及び遺構外の拓影資料も同様の特徴をもっている。

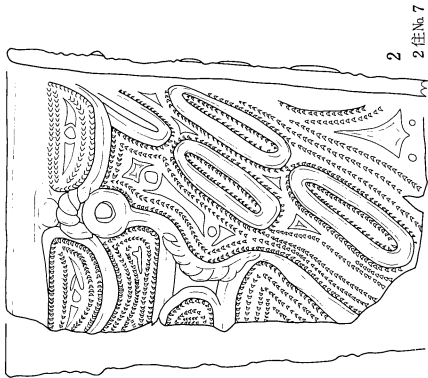
以上中期後葉の土器を見てきたが、Ⅲ期の終わりのところで述べたような様々な問題点がある。

今後改めて唐草文土器を中心に検討したい。

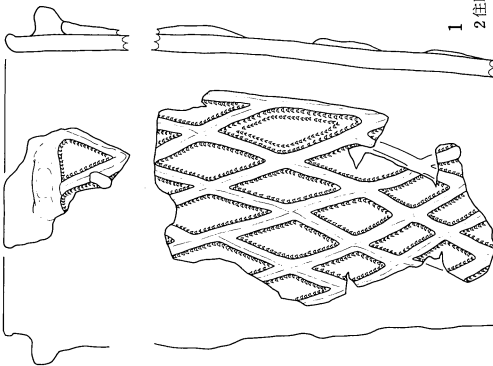
参考文献

- 宮坂光昭ほか 1972 『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
中部高地縄文土器集成グループ 1979 『中部高地縄文土器集成』第1集
島田哲男 1982 「縄文時代中期における松本平」『松本市内田雨掘遺跡』松本市教育委員会
唐木孝雄ほか 1986 『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
三上徹也 1986 「唐草文土器の成立とその分布」『歴史手帖』14-2
百瀬忠幸ほか 1987 『殿村遺跡』山形村教育委員会
唐木孝雄ほか 1987 「上木戸遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2
野村一寿 1988 「中期後葉土器」『長野県史』考古資料編（四）
山本暉久ほか 1988 「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観』2
三上徹也 1988 「唐草文系土器様式」『縄文土器大観』3

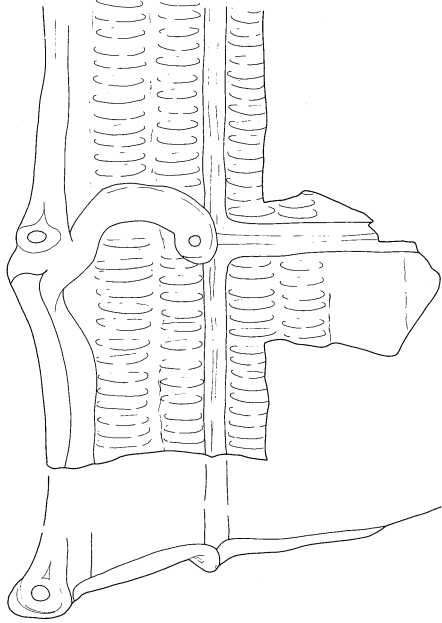
2住



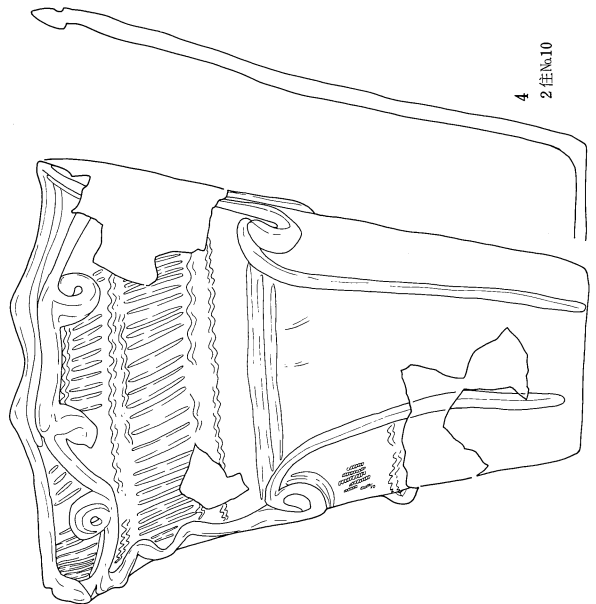
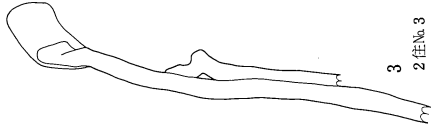
2
2住No.7



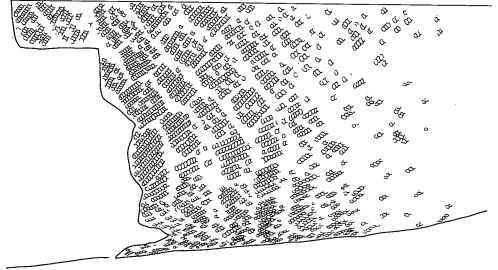
1
2住No.7



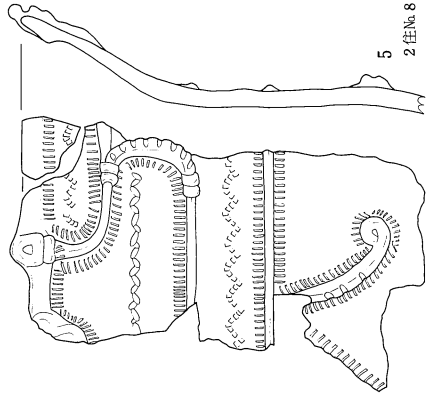
3
2住No.3



4
2住No.10



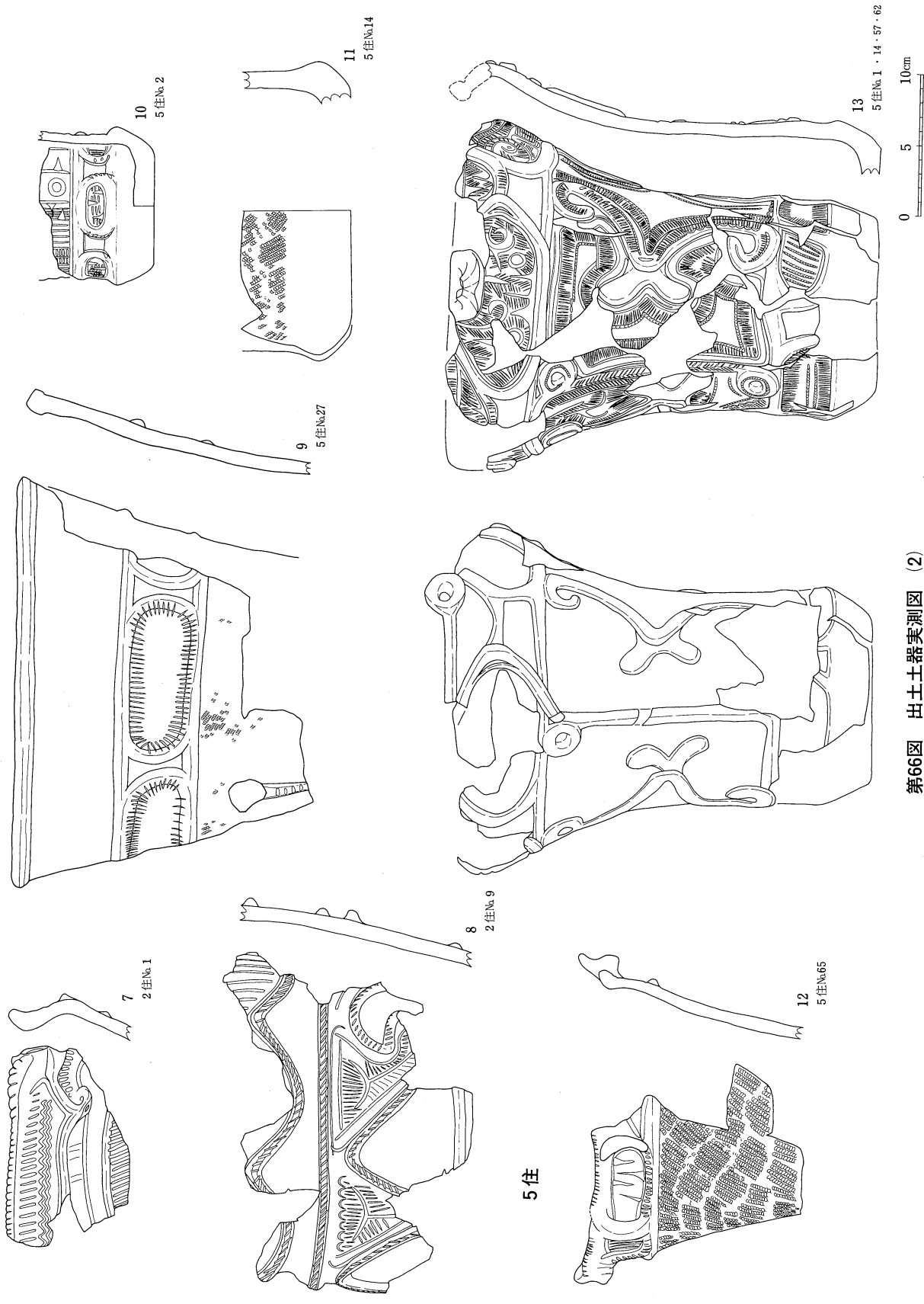
5
2住No.8



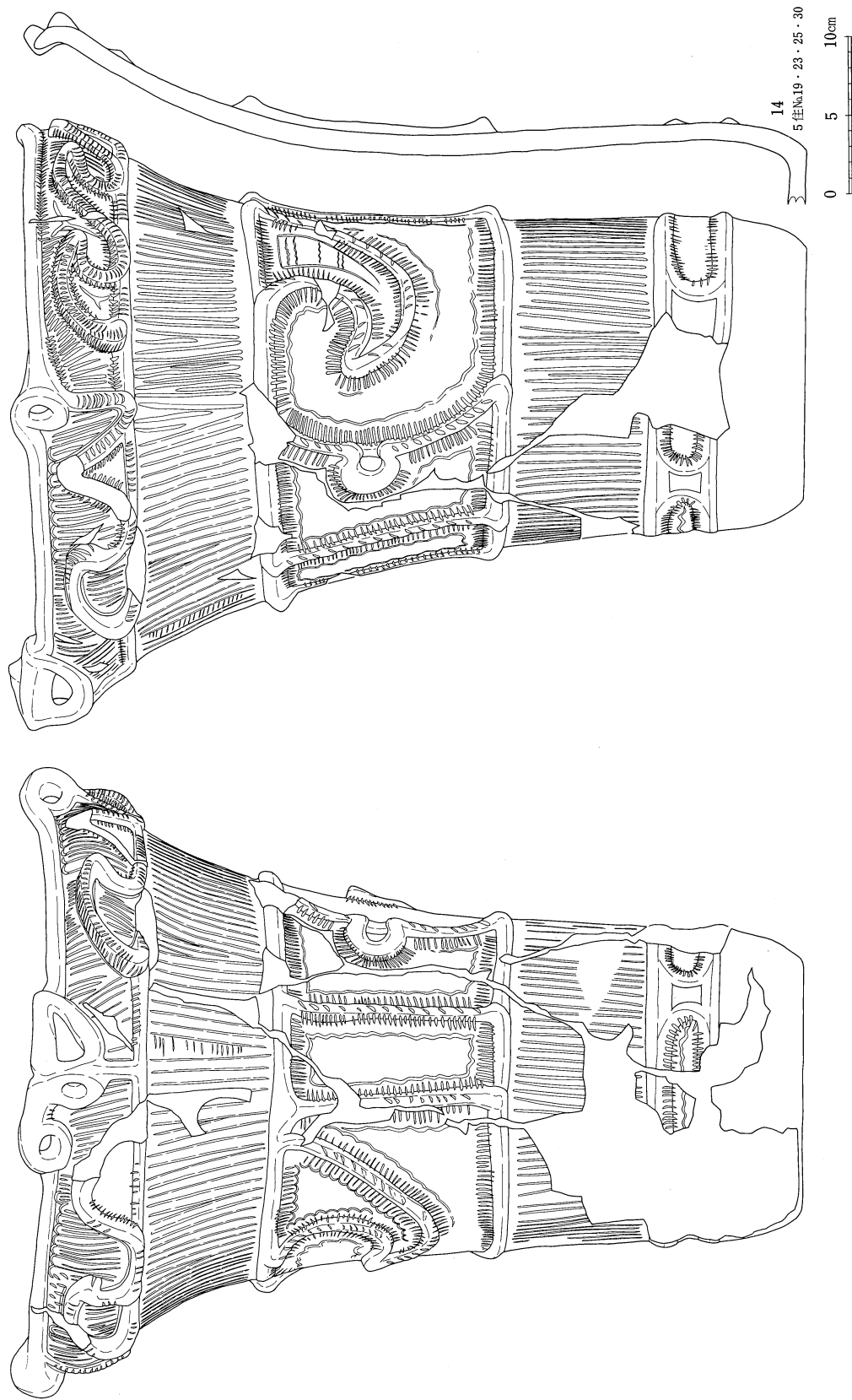
6
埋没土器



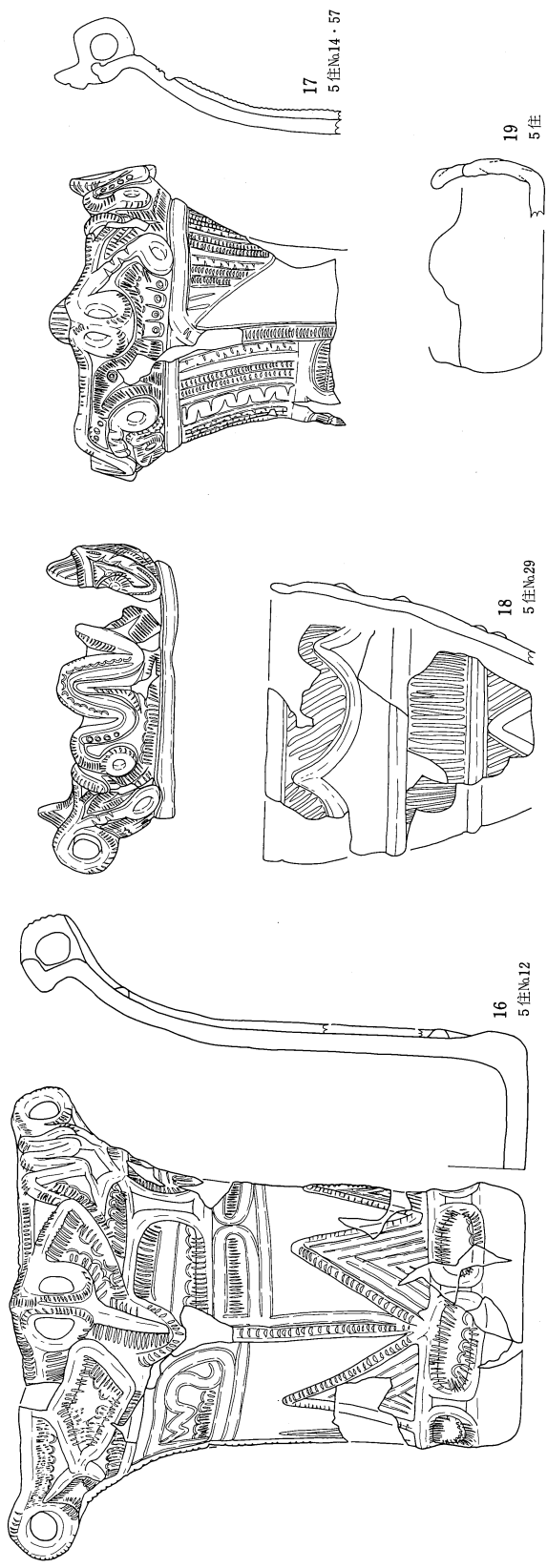
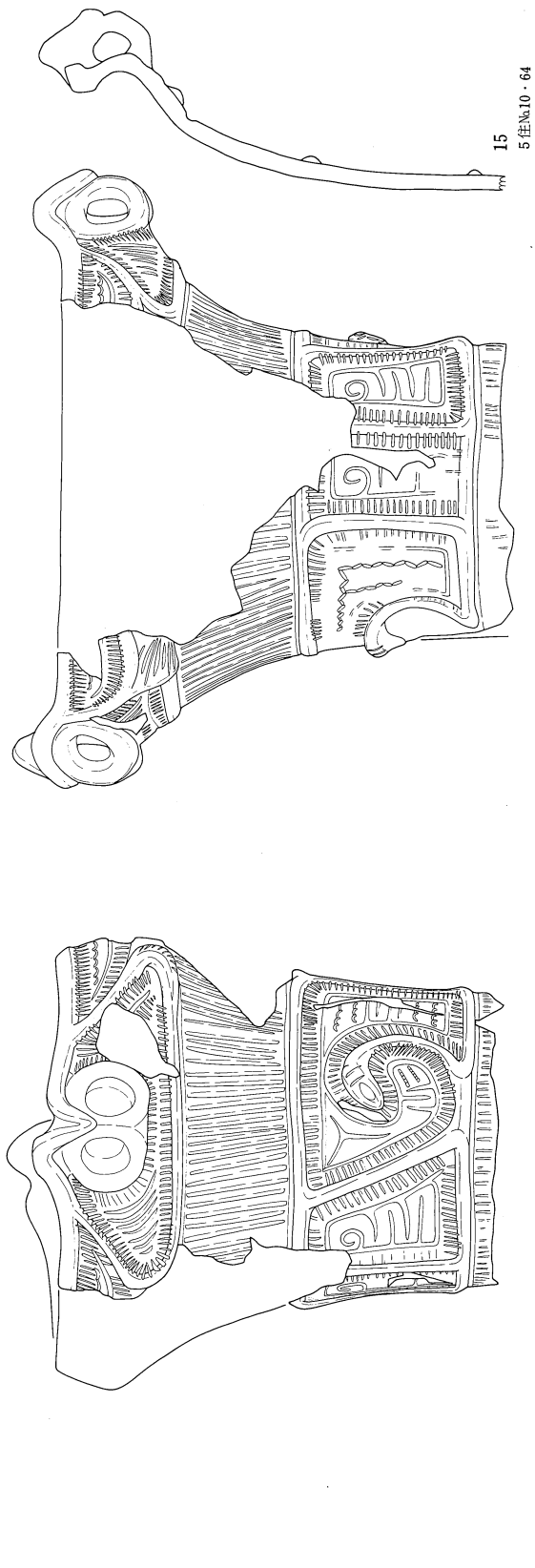
第65图 出土土器实测图 (1)



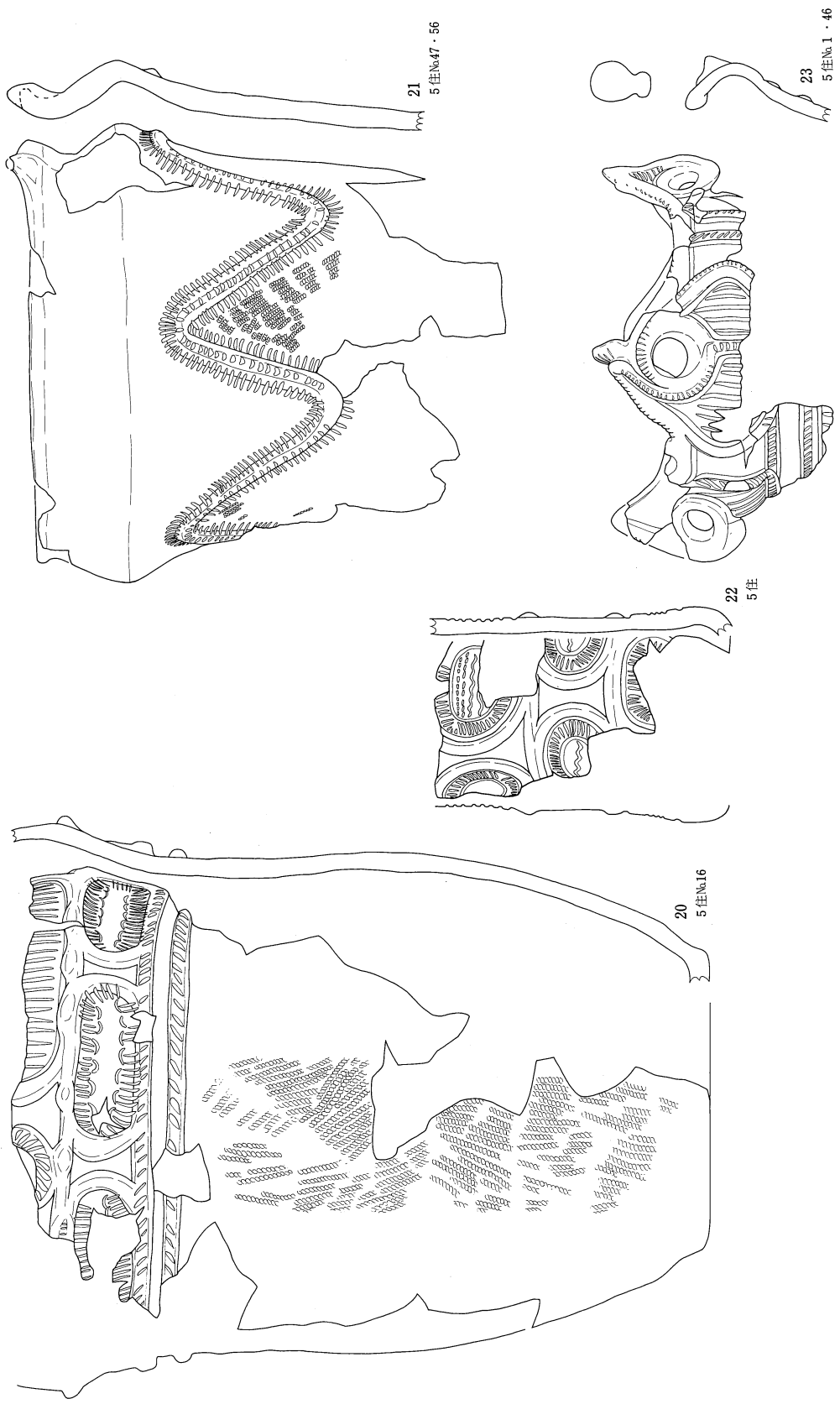
第66图 出土器実測图 (2)



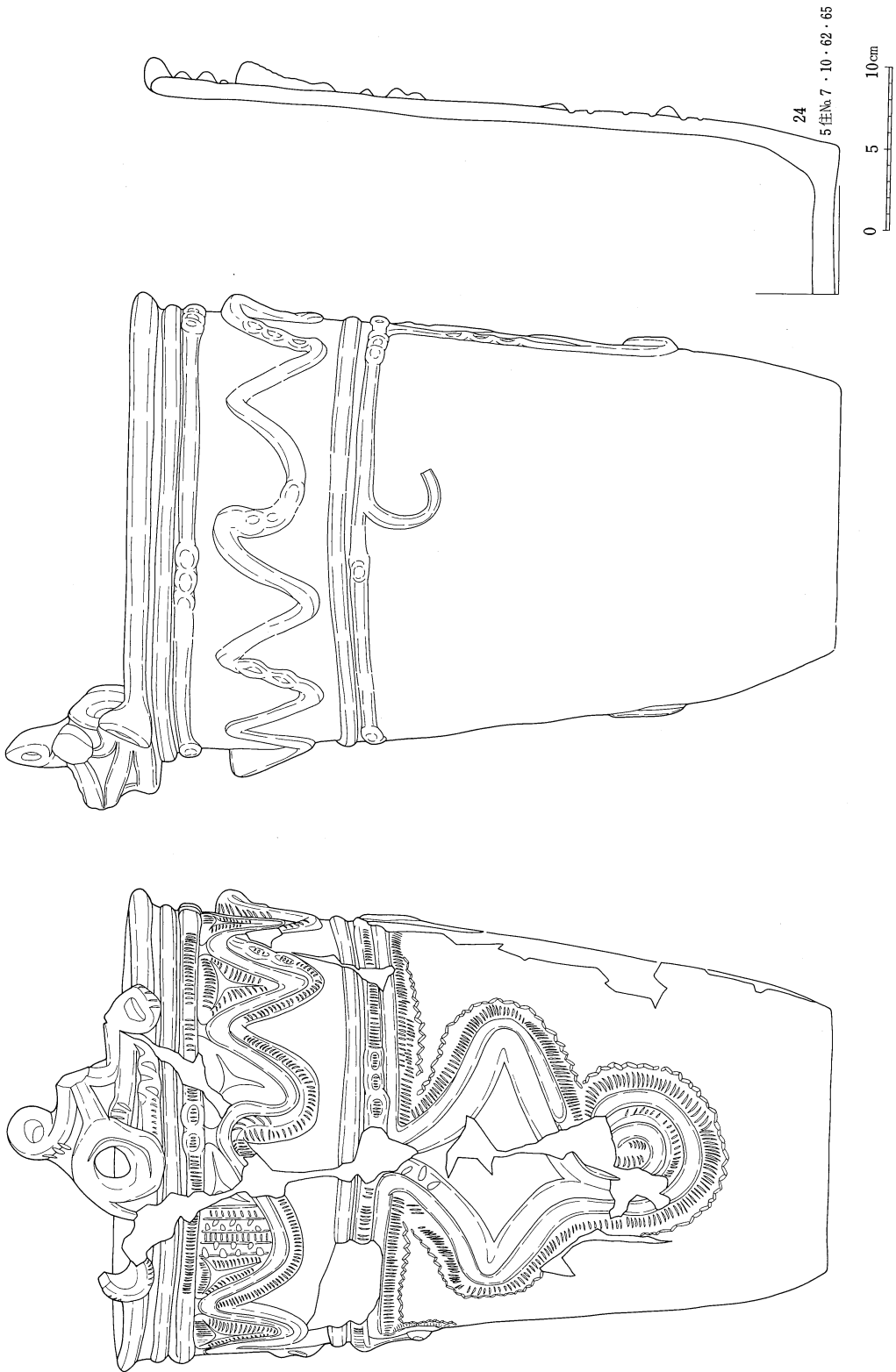
第67图 出土器实测图 (3)



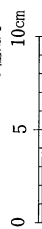
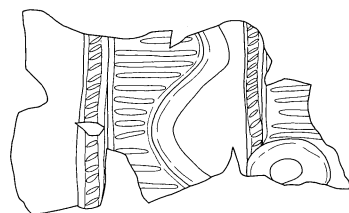
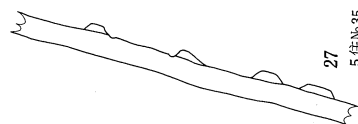
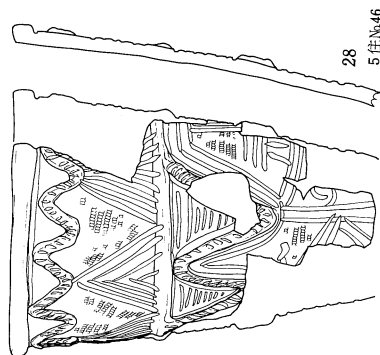
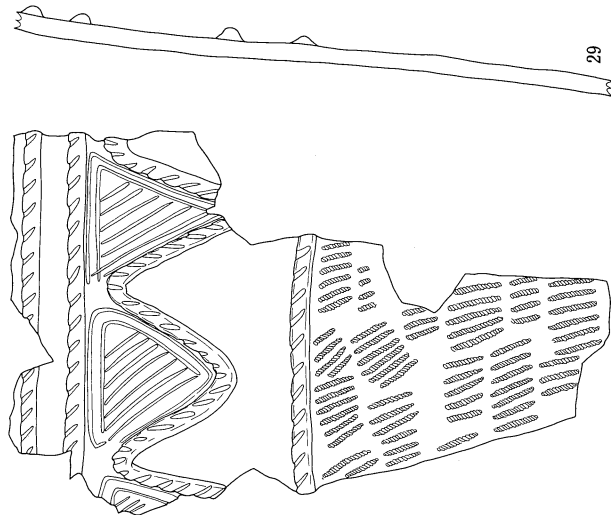
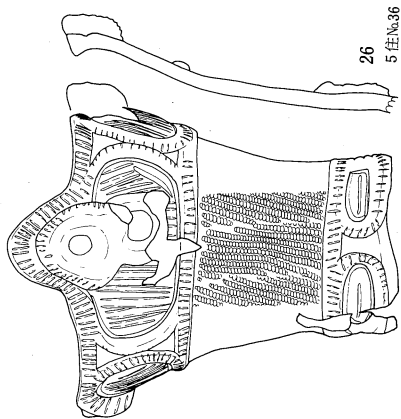
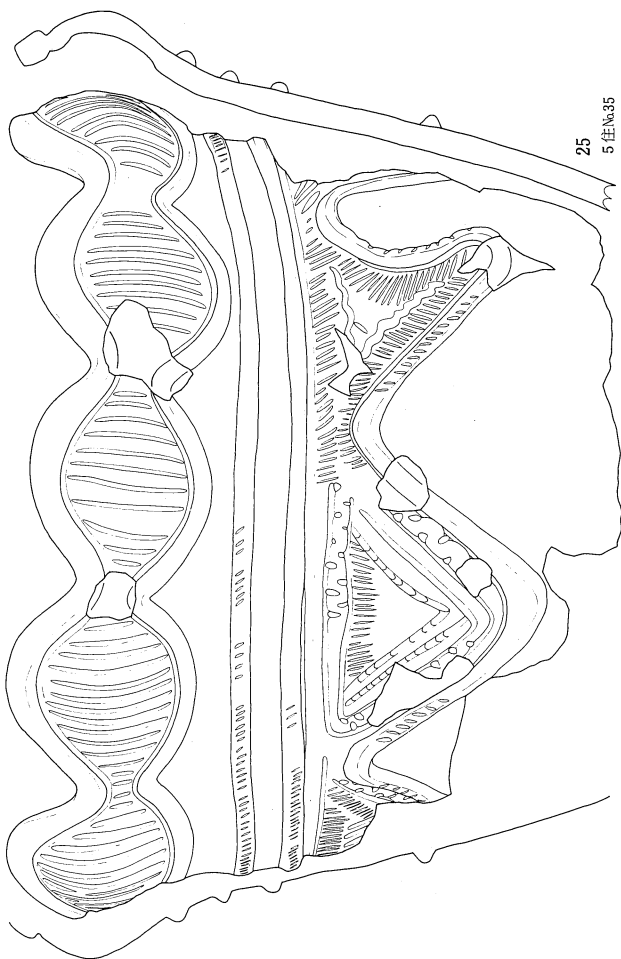
第68图 出土器实测图 (4)



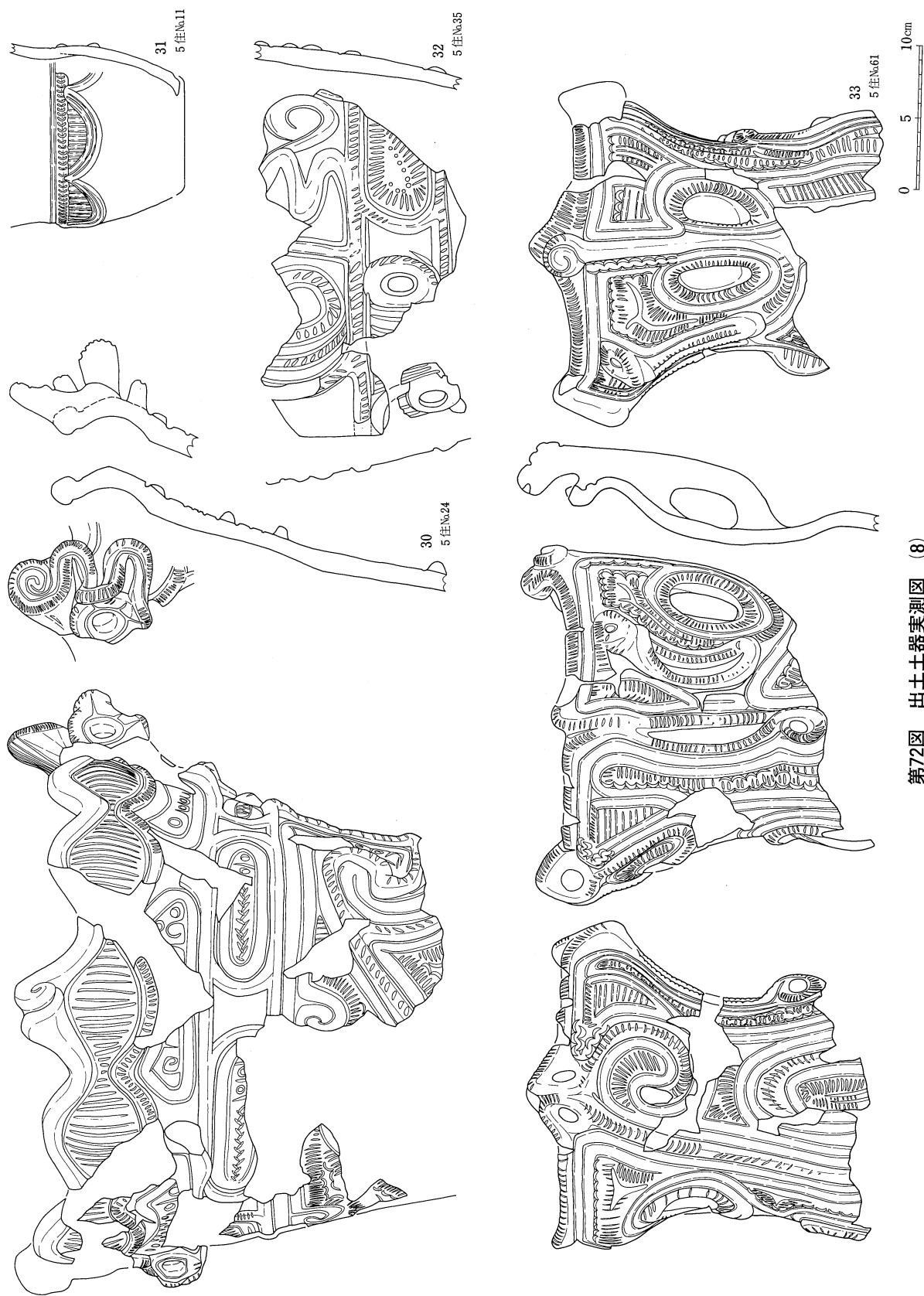
第69图 出土器実測图 (5)



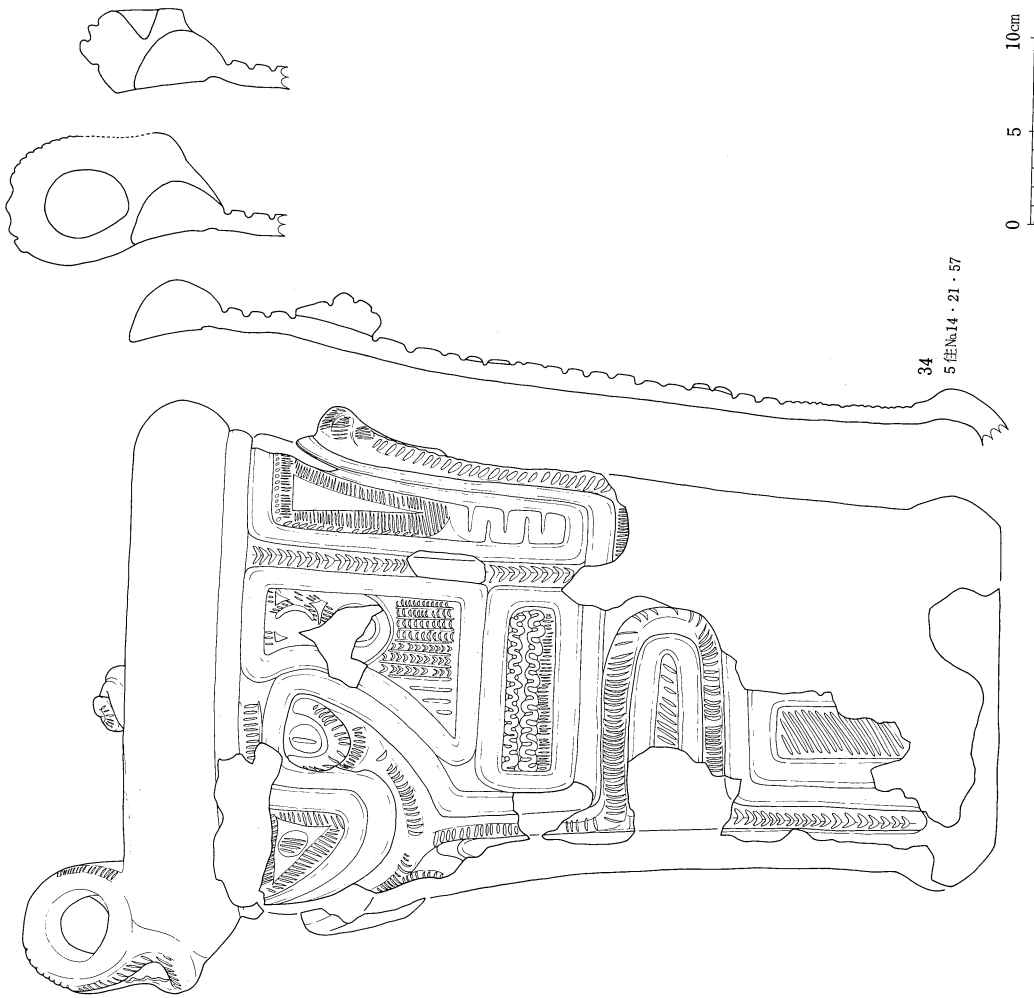
第70图 出土器实测图 (6)



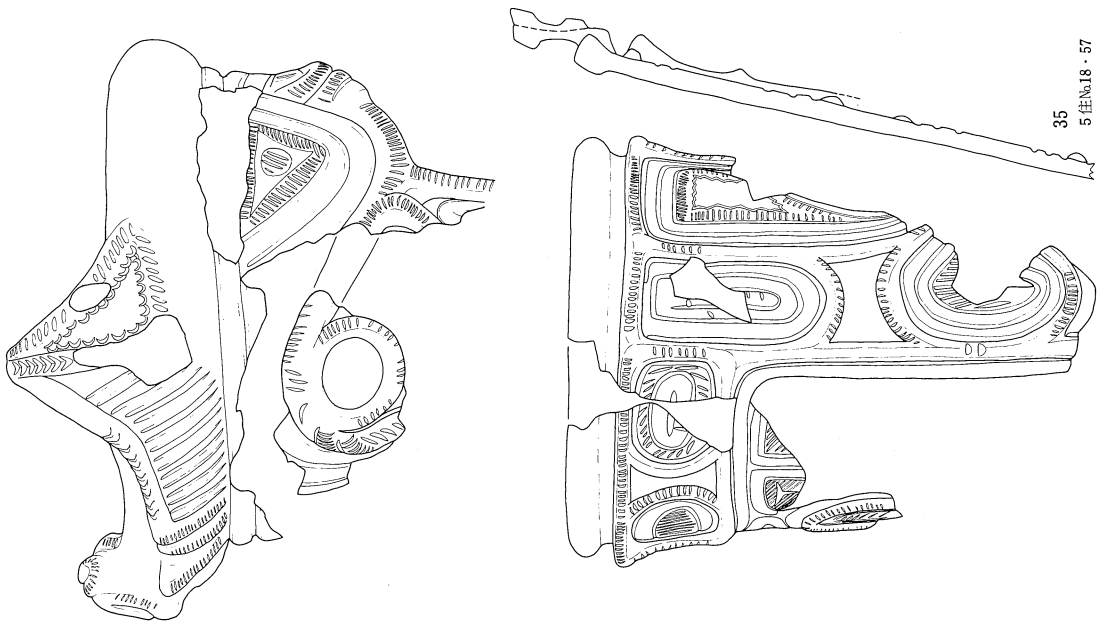
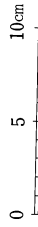
第71图 出土器实测图 (7)



第72图 出土器实测图 (8)

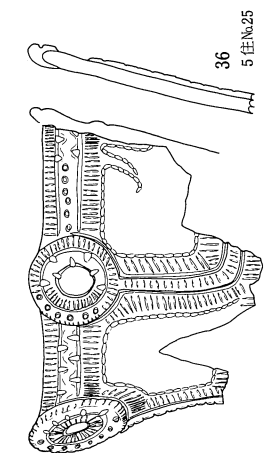


34
5 住No.14・21・57

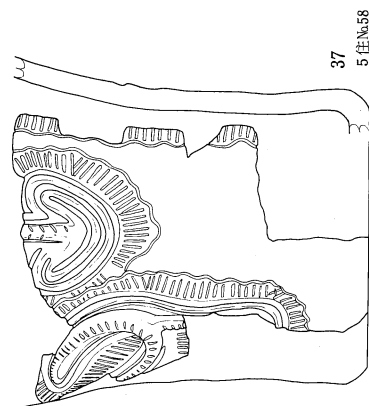


35
5 住No.18・57

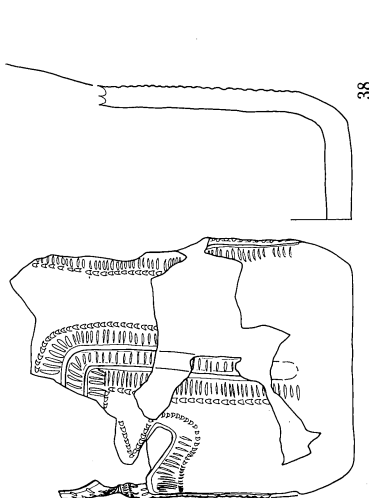
第73図 出土土器実測図 (9)



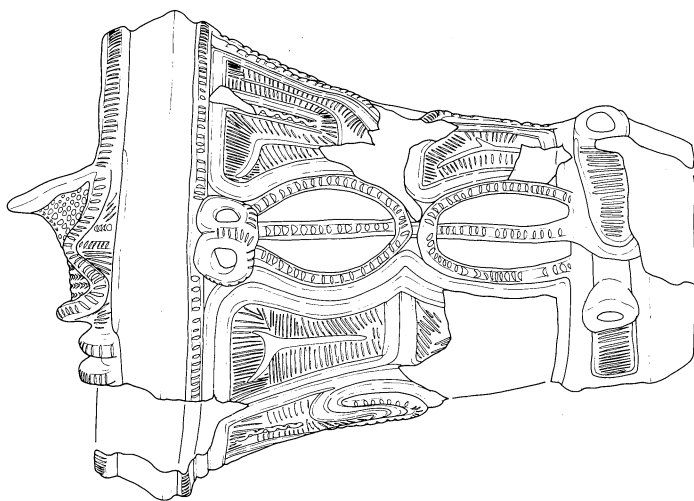
36
5住No.25



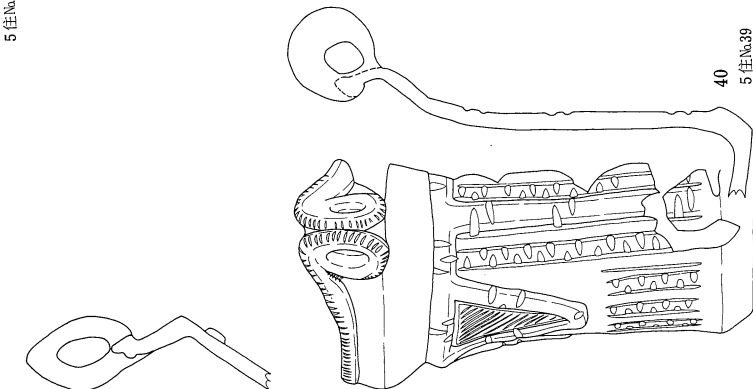
37
5住No.58



38
5住No.25・28



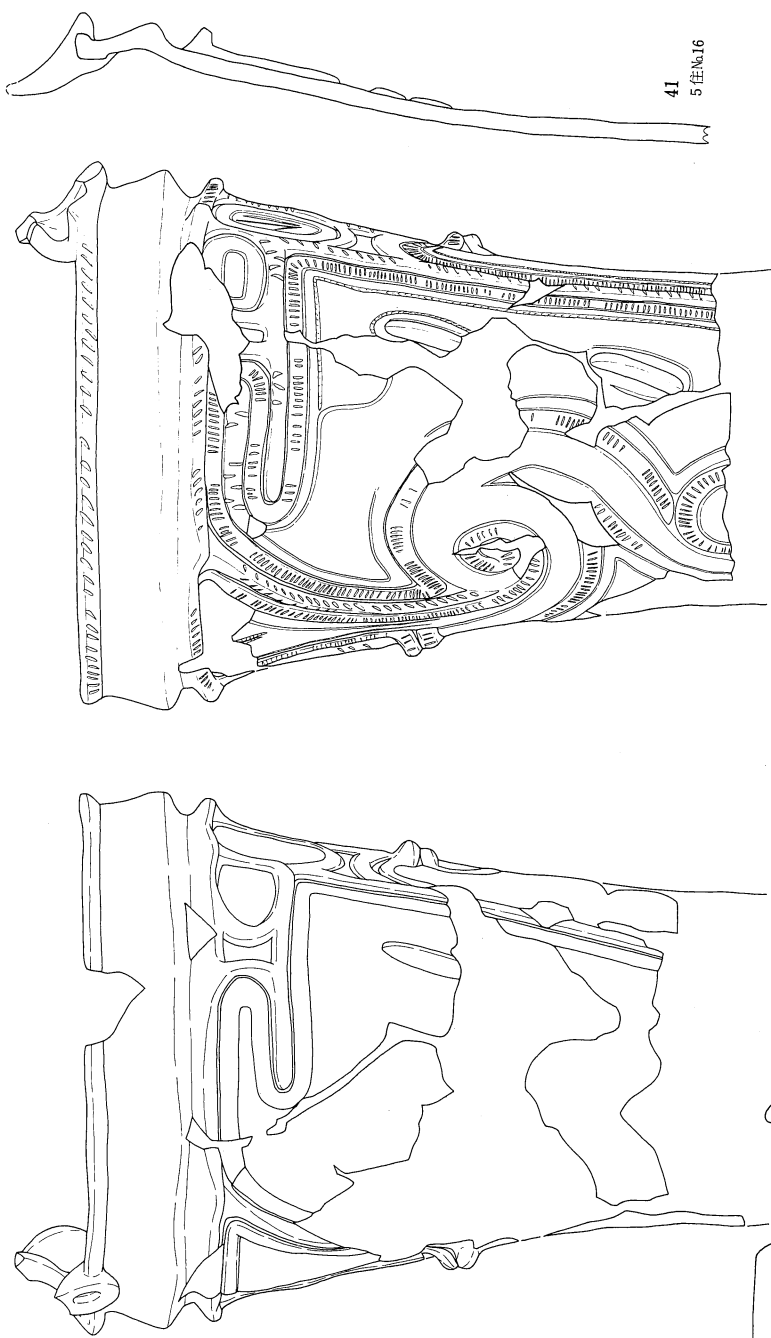
39
5住No.32



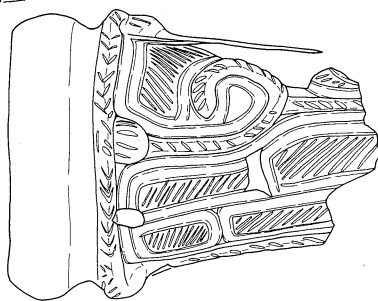
40
5住No.39



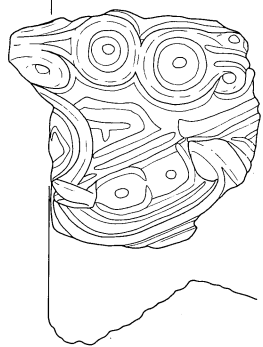
第74图 出土器实测图 (10)



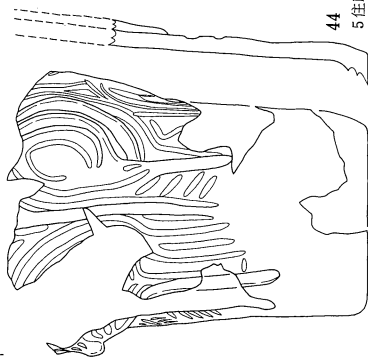
41
5住№16



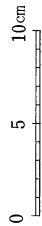
42
5住№15・62



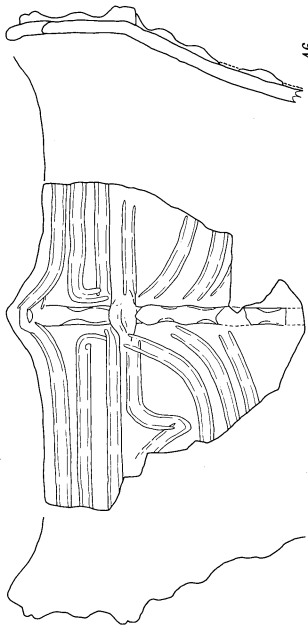
43
5住№11



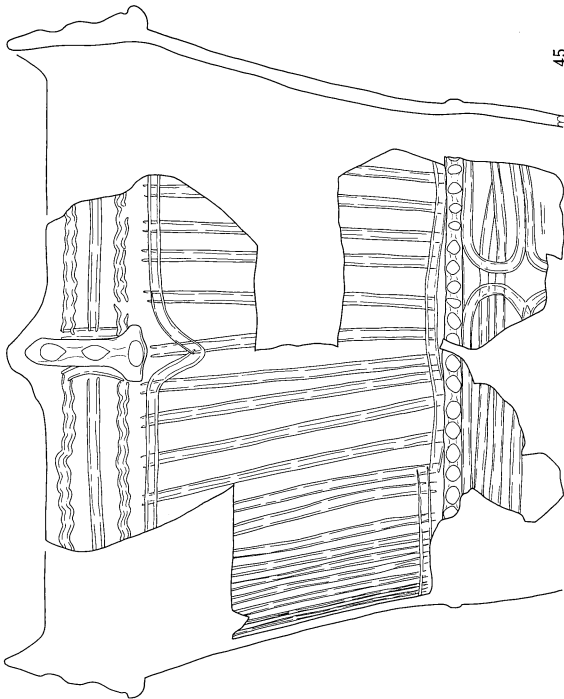
44
5住№8



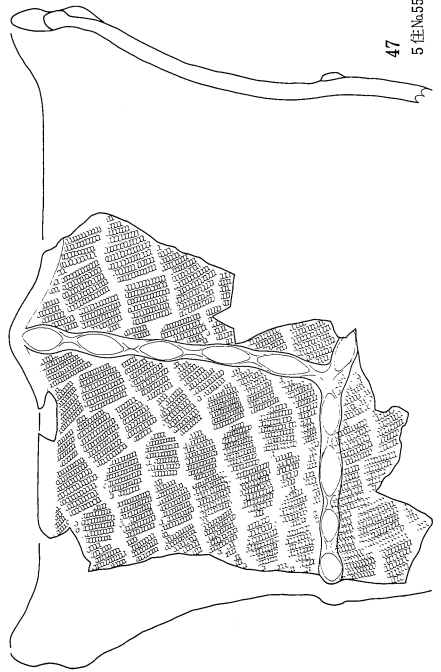
第75图 出土石器实测图 (1)



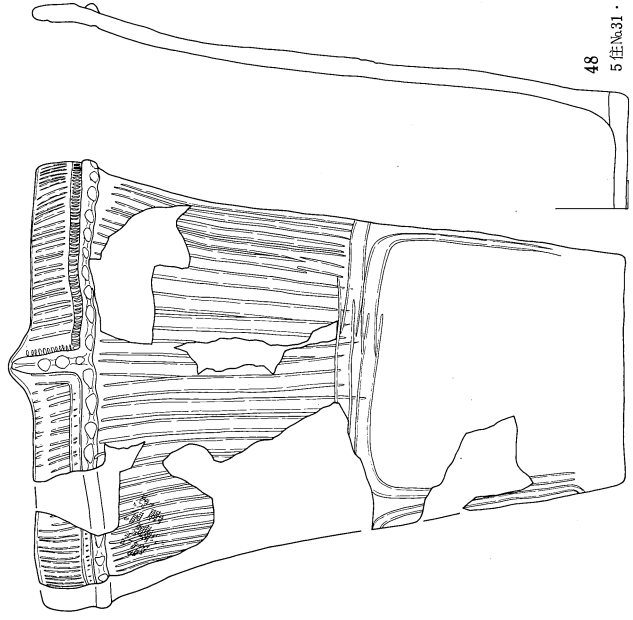
46
5住No.6



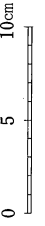
45
5住No.14・57



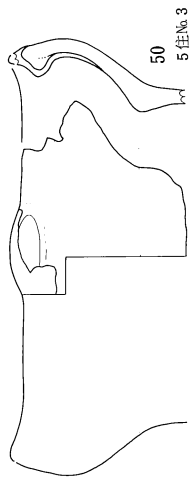
47
5住No.55



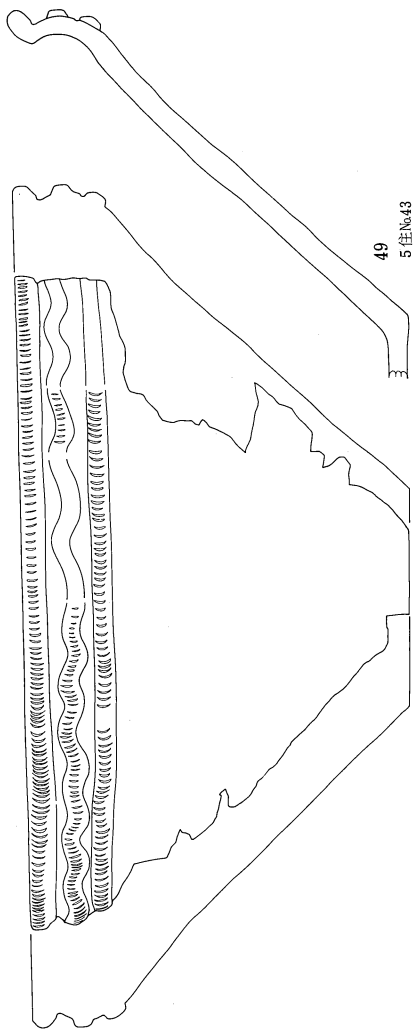
48
5住No.31・42



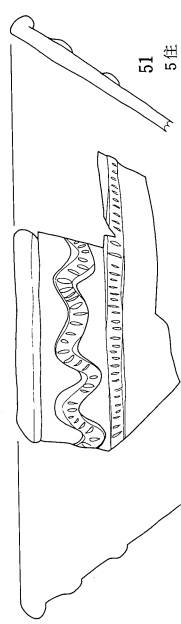
第76图 出土器实测图 (12)



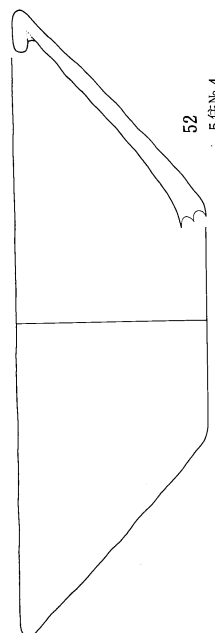
50
5住No.3



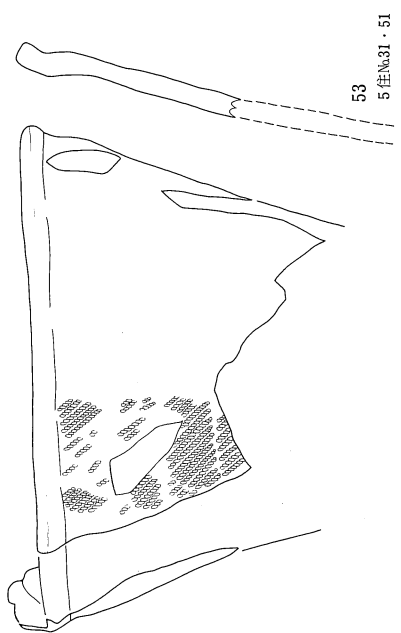
49
5住No.43



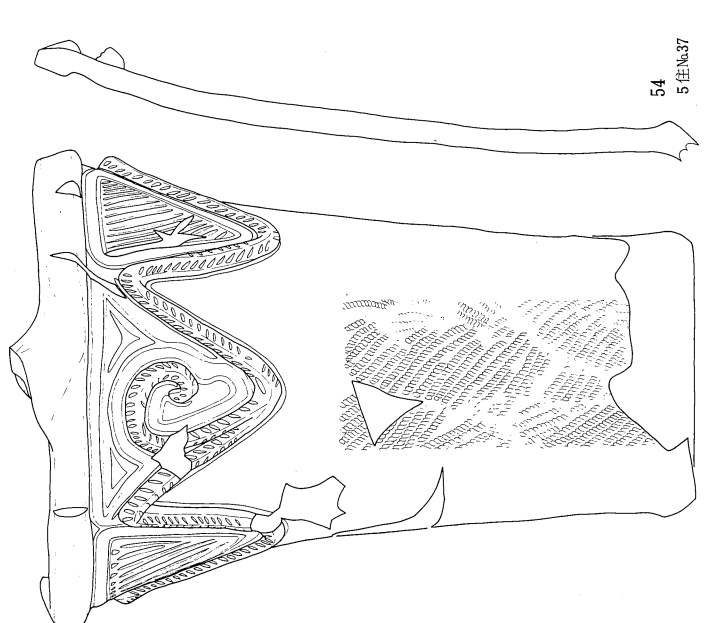
51
5住



52
5住No.4



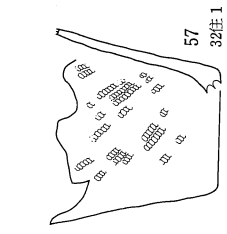
53
5住No.31-51



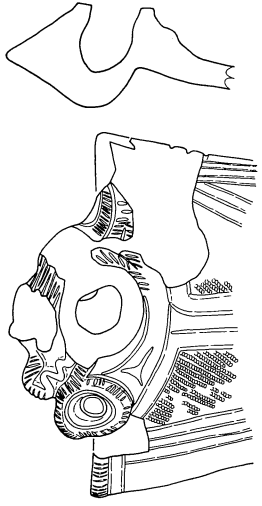
54
5住No.37



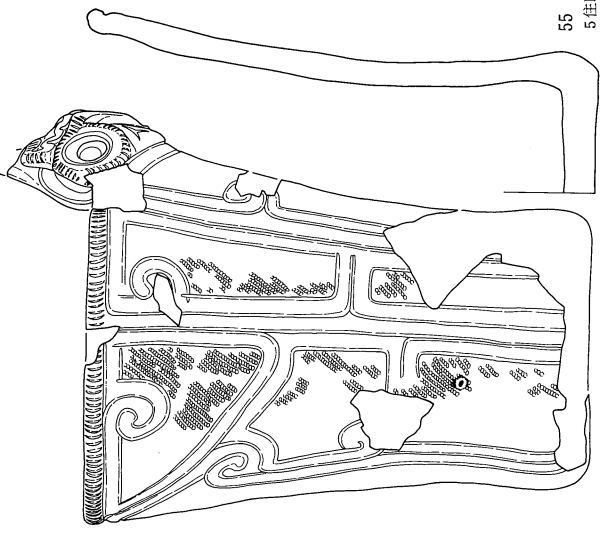
第77图 出土器实测图 (13)



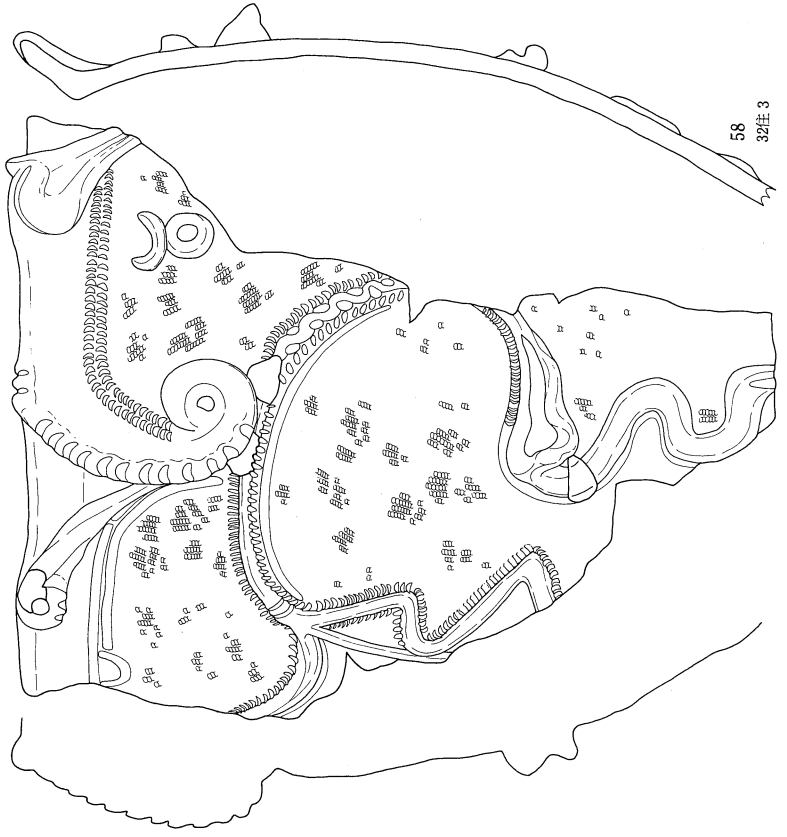
57
32住 1



32住



55
5住No. 9



58
32住 3

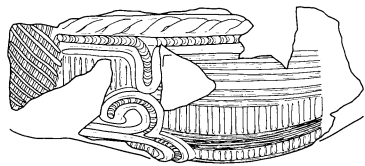


56
5住No. 59

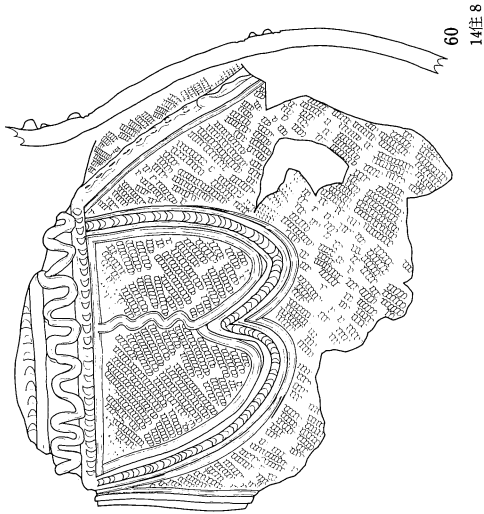


第78图 出土器实测图 (14)

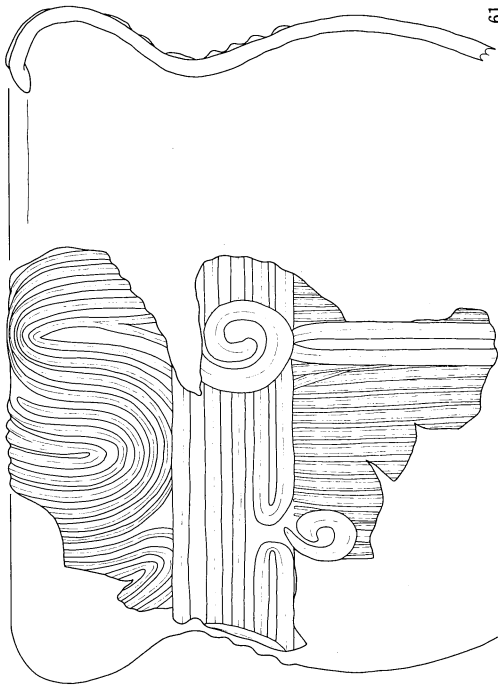
14住



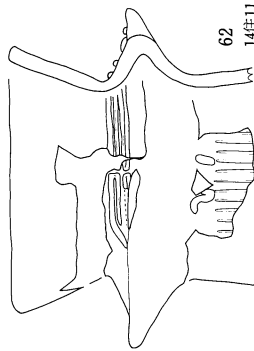
59
14住5



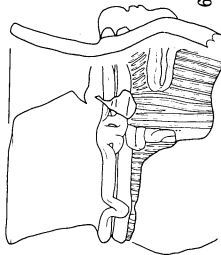
60
14住8



61
14住14



62
14住11

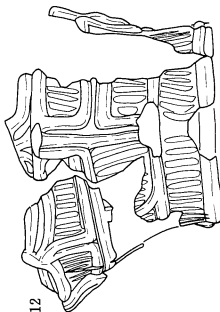


63
14住3

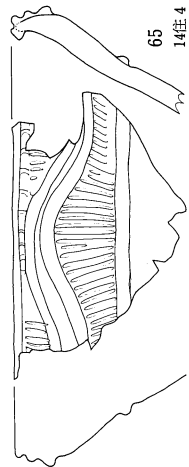
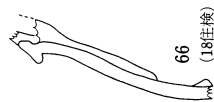
29住



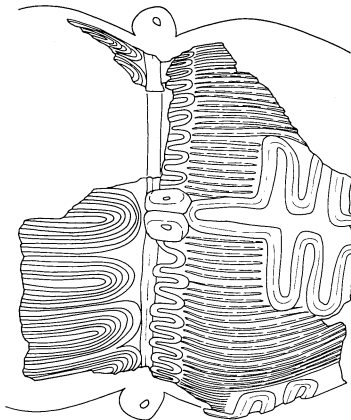
64
14住12



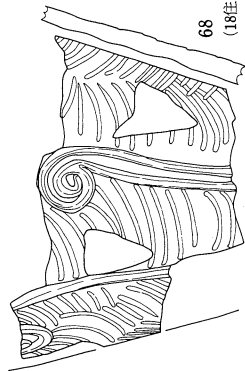
66
(18住棟)



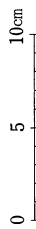
65
14住4



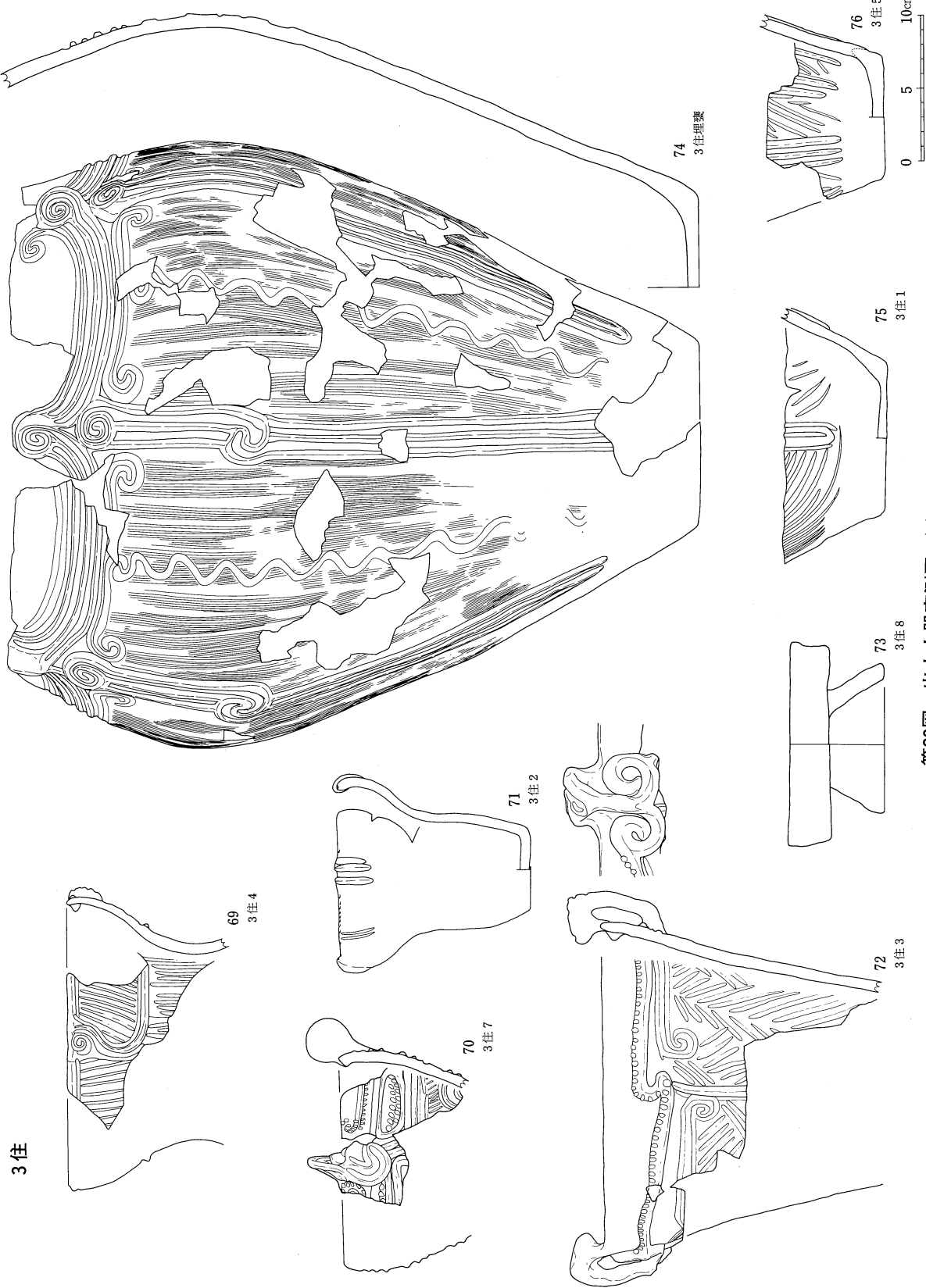
67
(18住38)



68
(18住1)

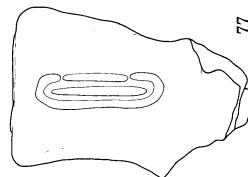
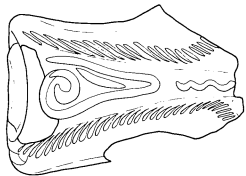
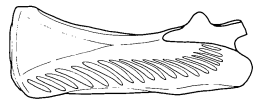


第79图 出土器实测图 (15)

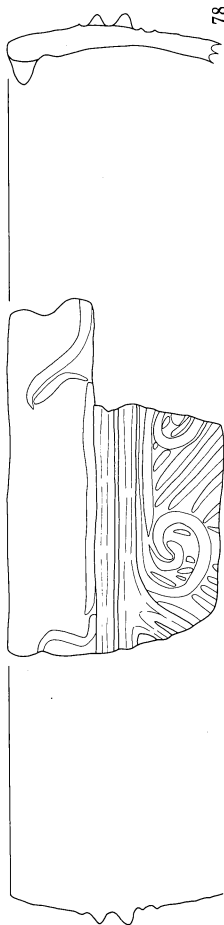


第80图 出土器实测图 (16)

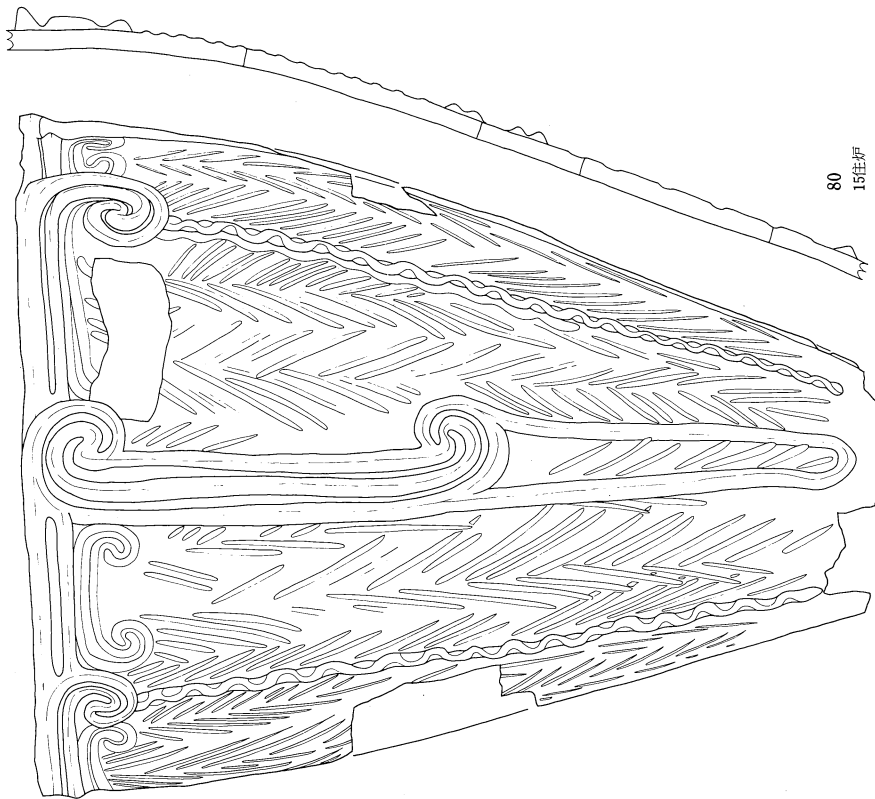
15住



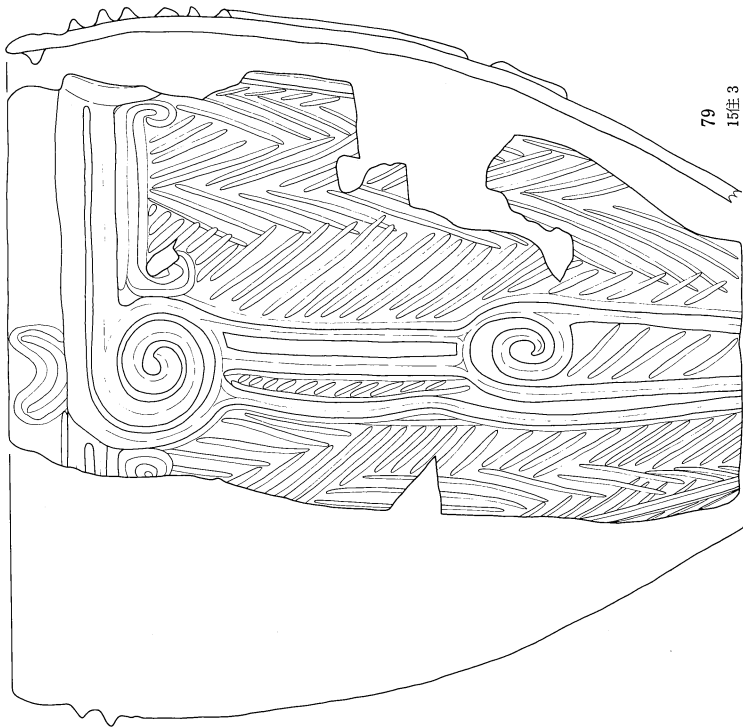
77
15住 2



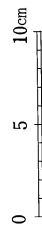
78
15住 4



80
15住 4P

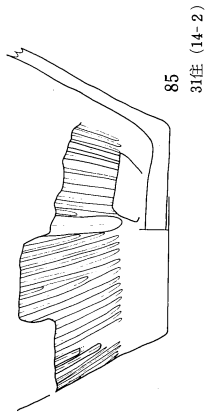
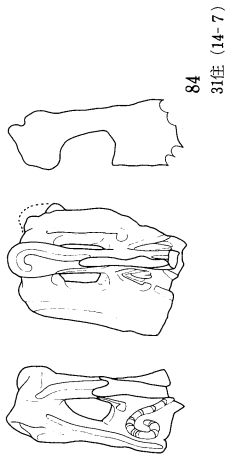


79
15住 3

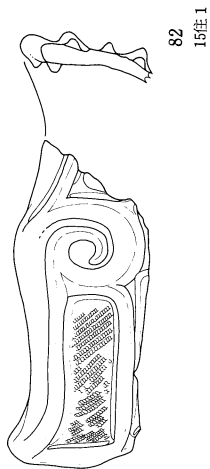
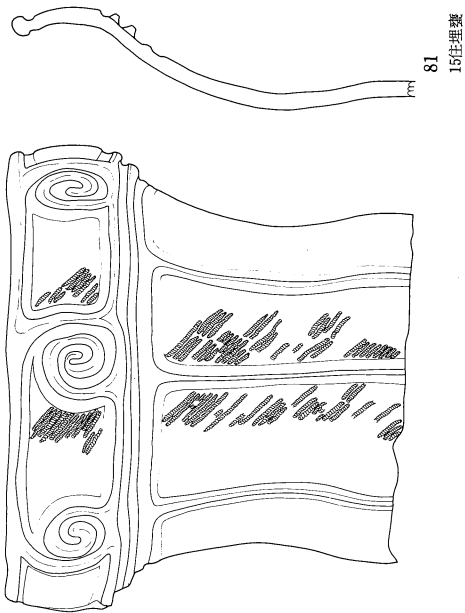
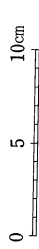
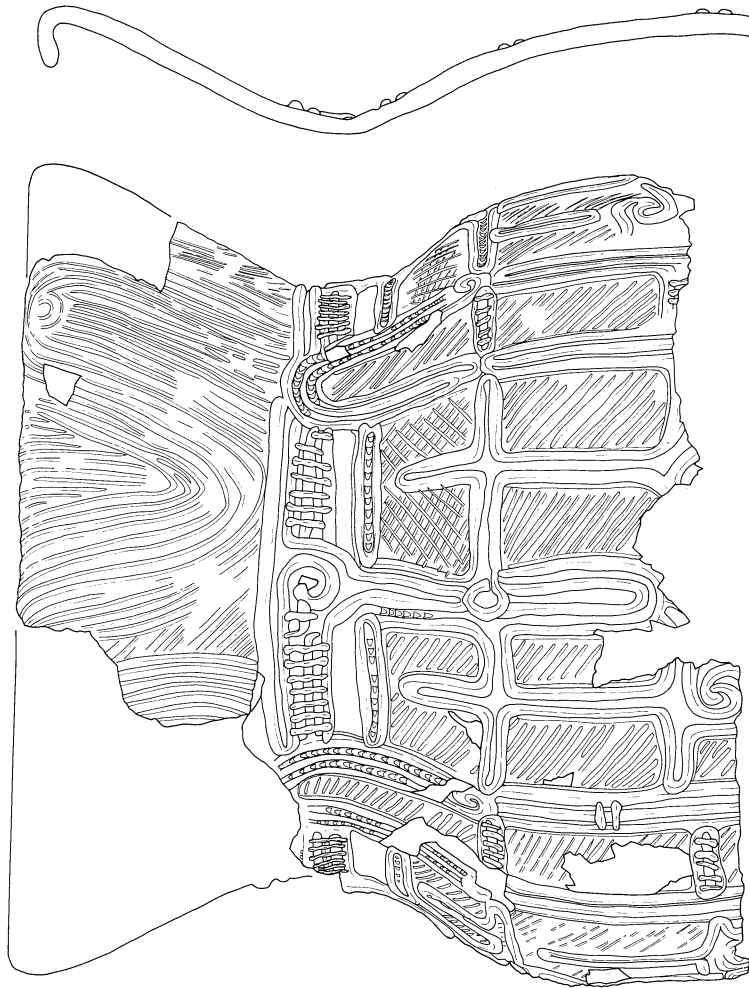


第81图 出土器类测图 (17)

31住



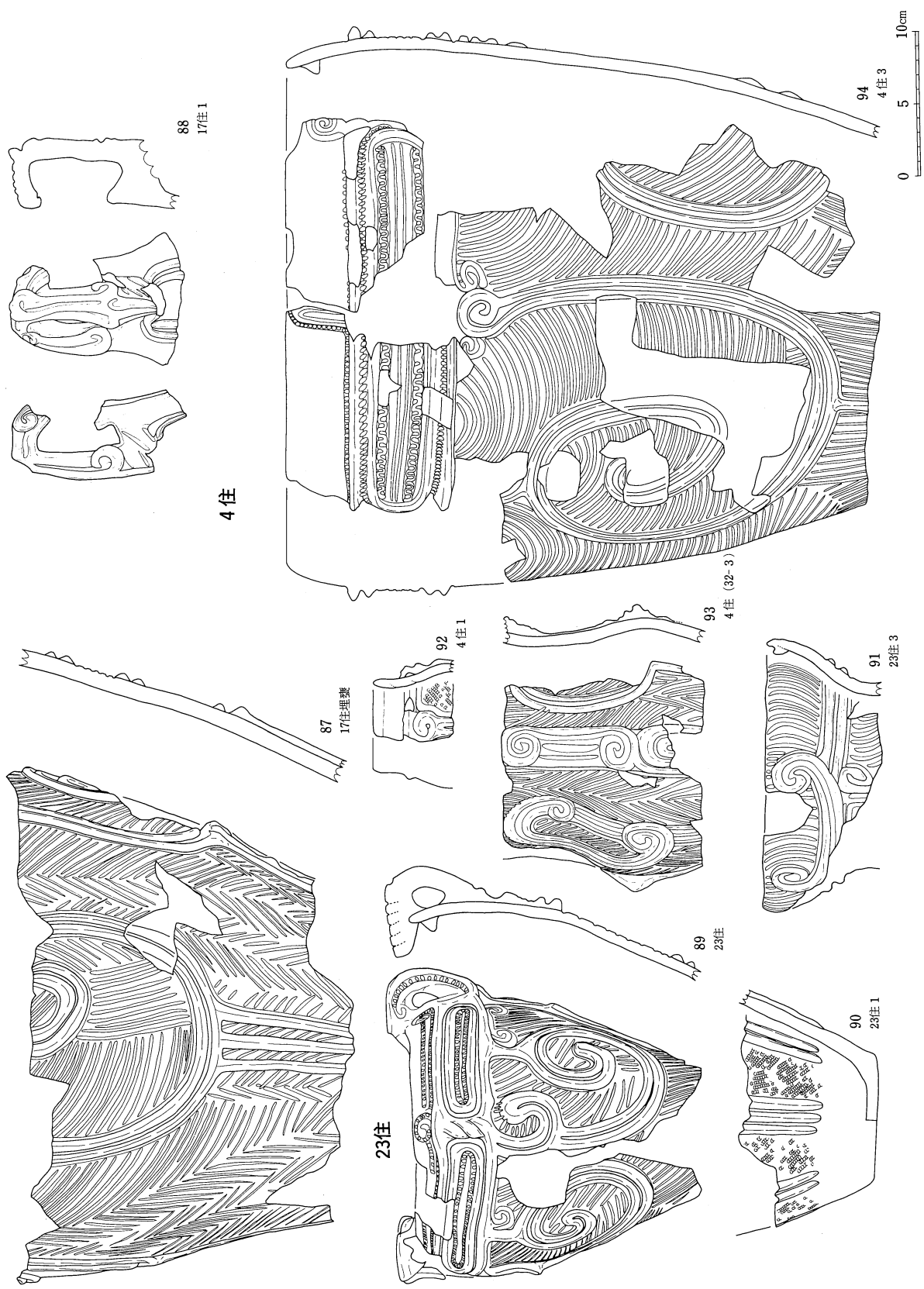
17住



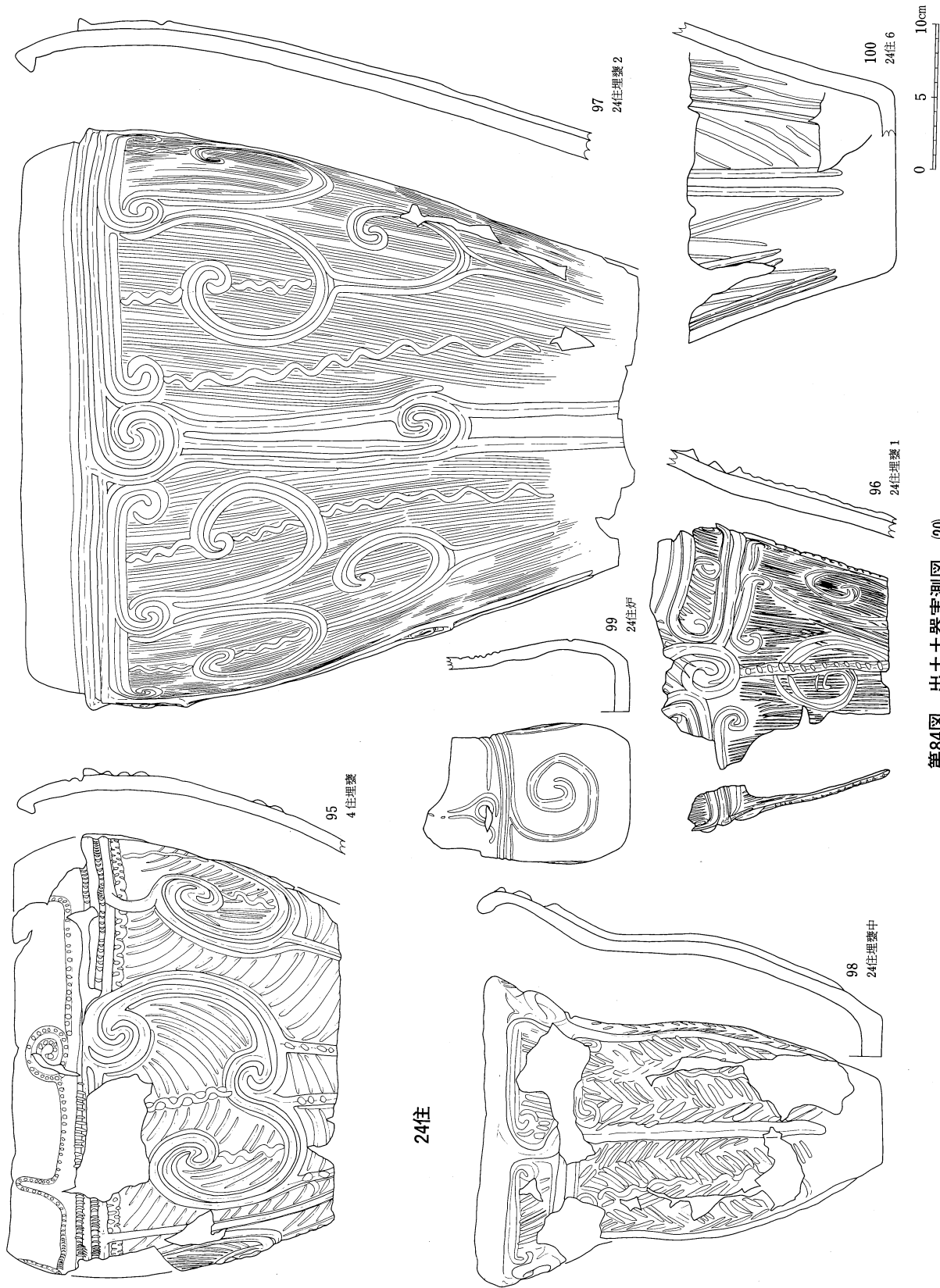
16住



第82图 出土器实测图 (18)

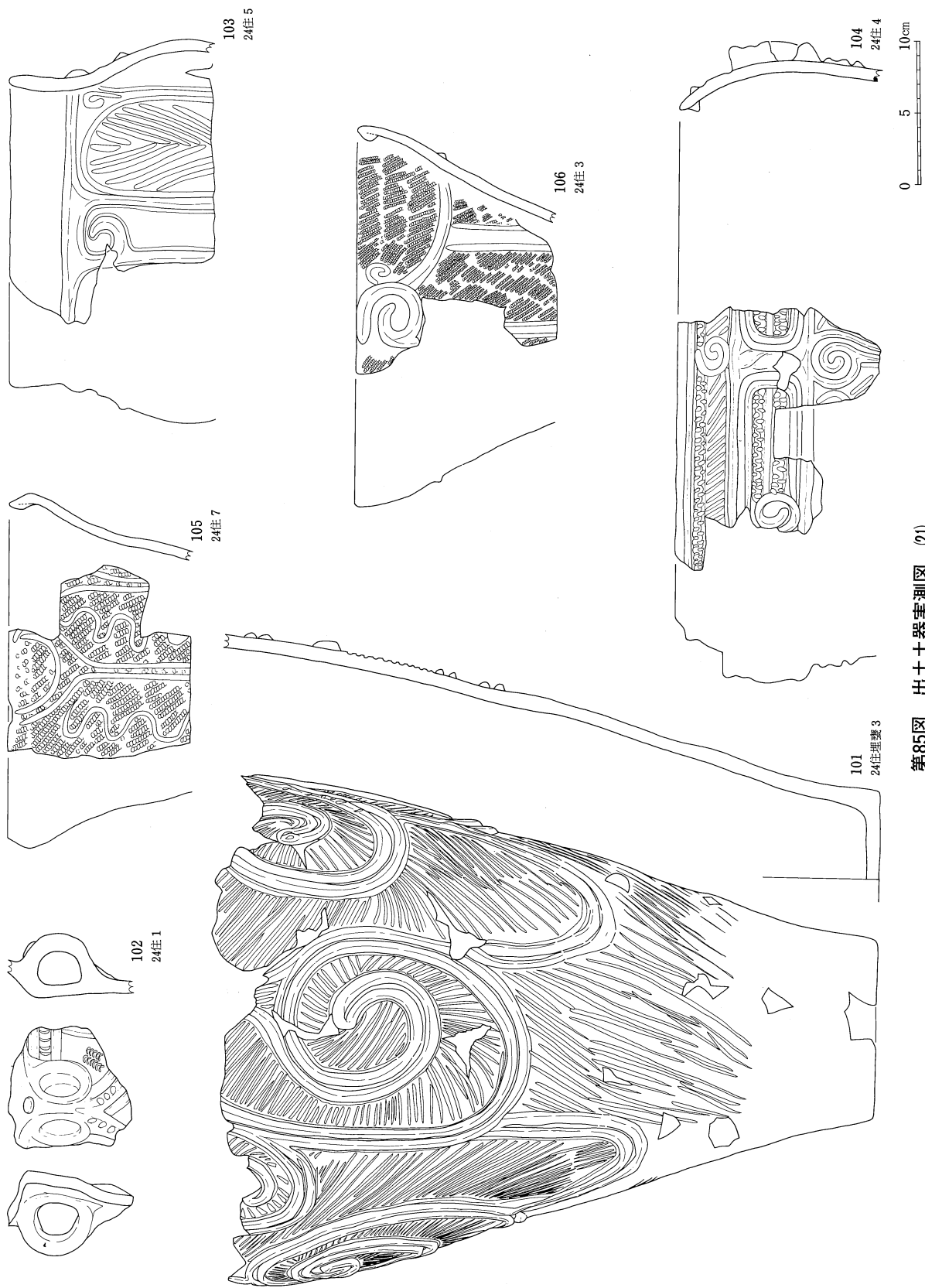


第83图 出土器实测图 (19)



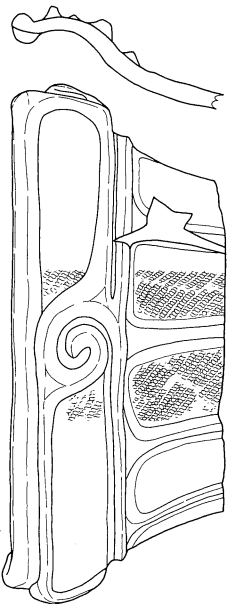
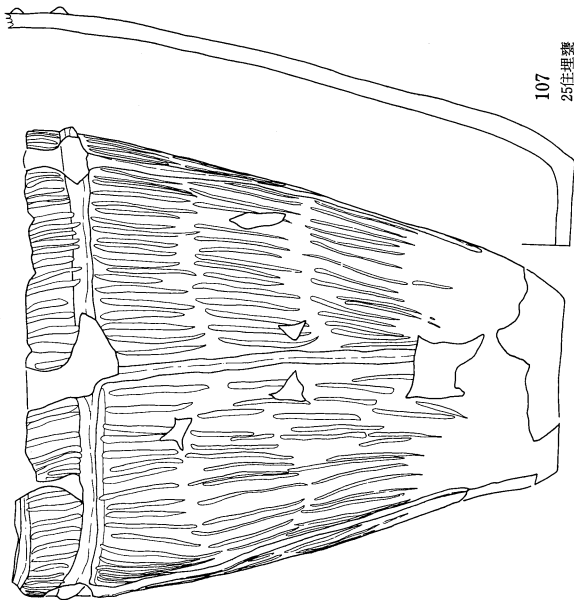
24住

第84图 出土器実測图 (20)



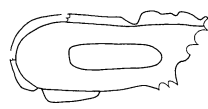
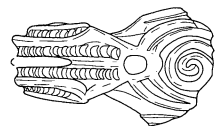
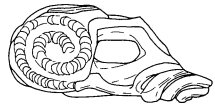
第85图 出土器实测图 (21)

25住



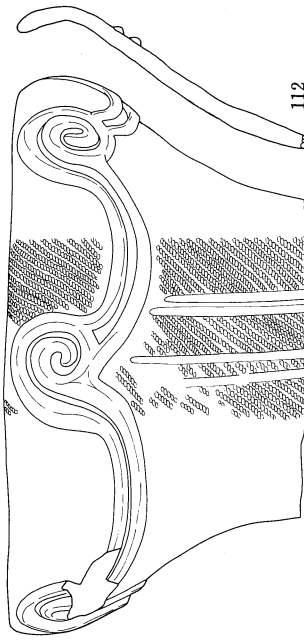
110
27住埋葬1

27住

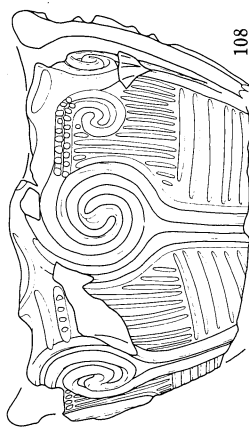


113
27住3

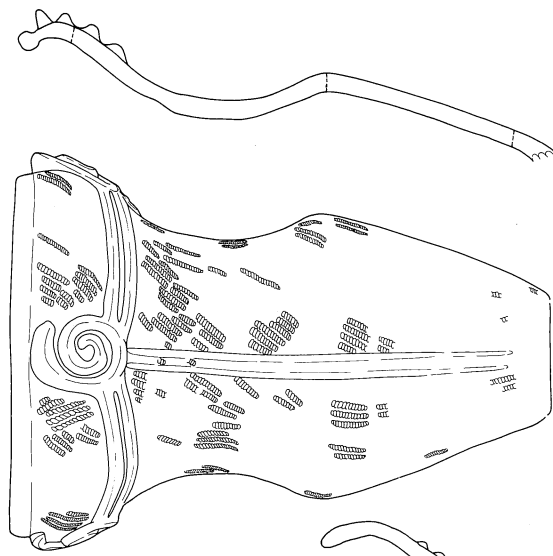
107
25住埋葬



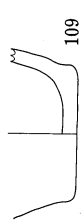
112
27住



108
25住2



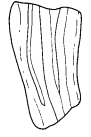
111
27住埋葬2



109
25住1



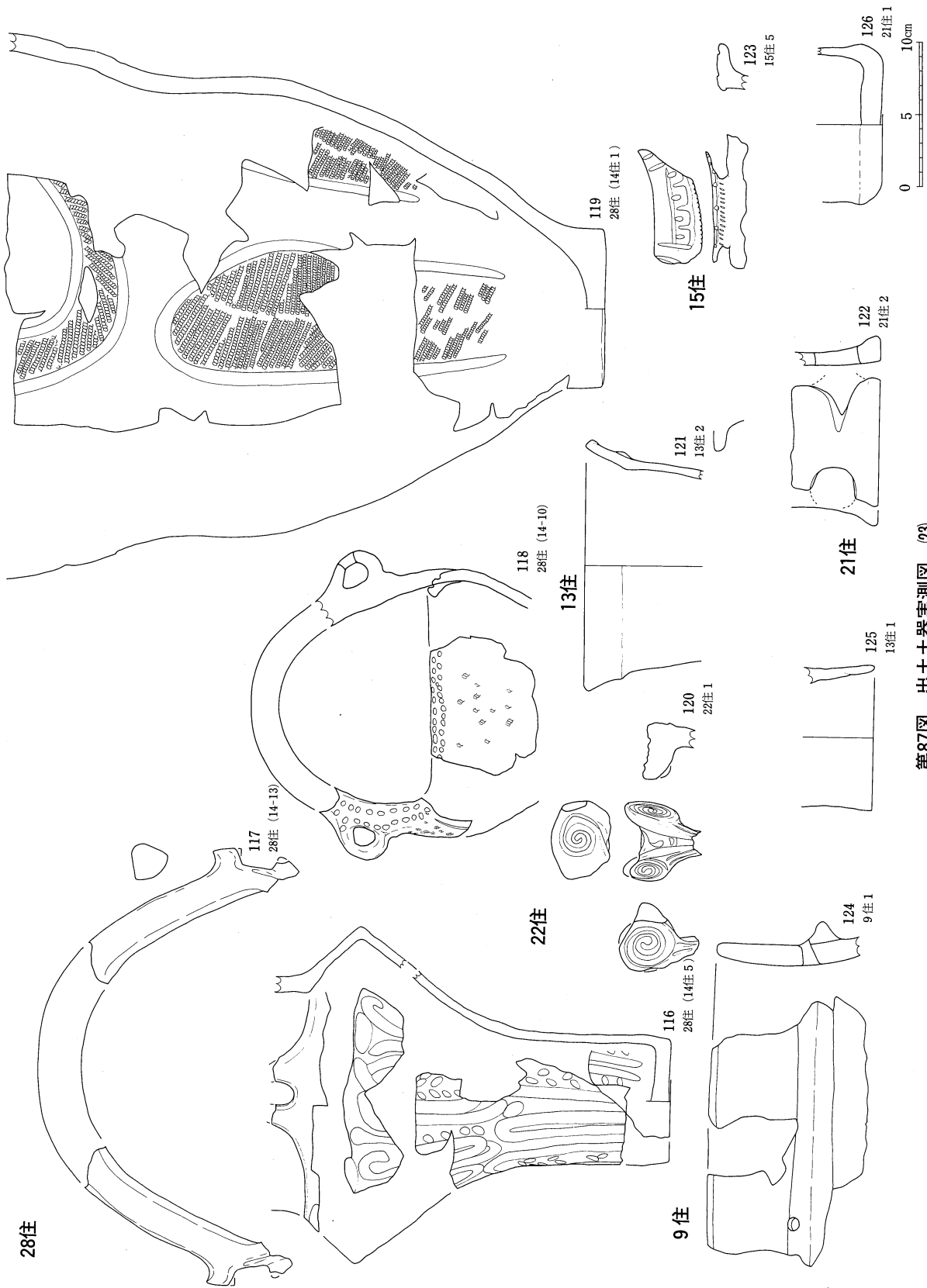
114
27住1



115
27住

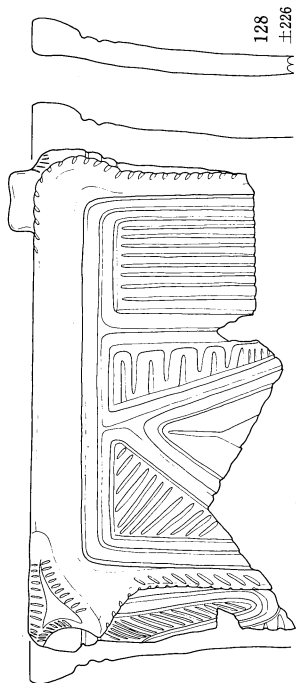


第86图 出土器实测图 (22)

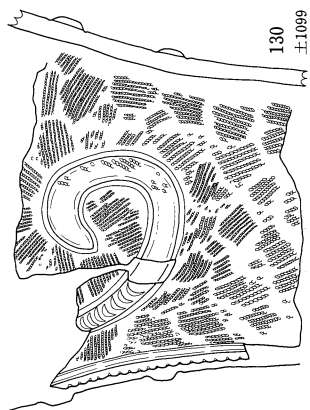


第87图 出土器实测图 (23)

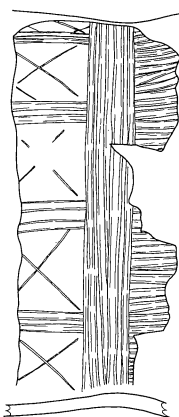
土坑検出面



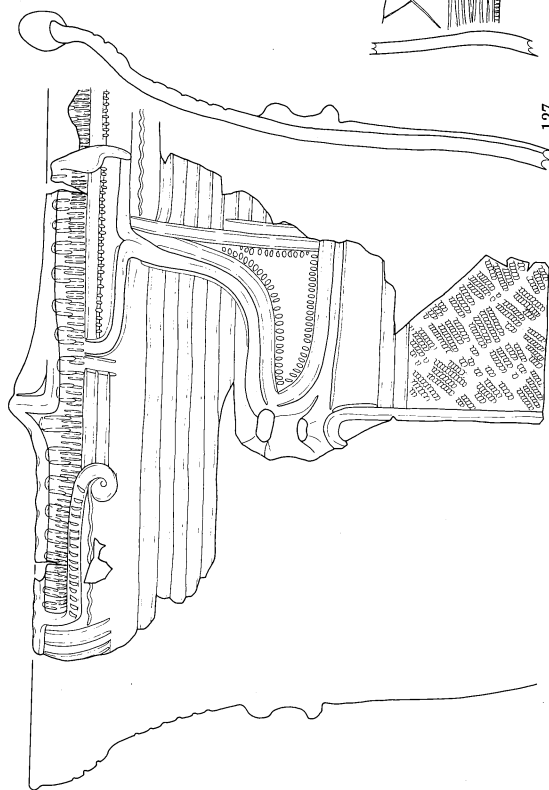
128
土226



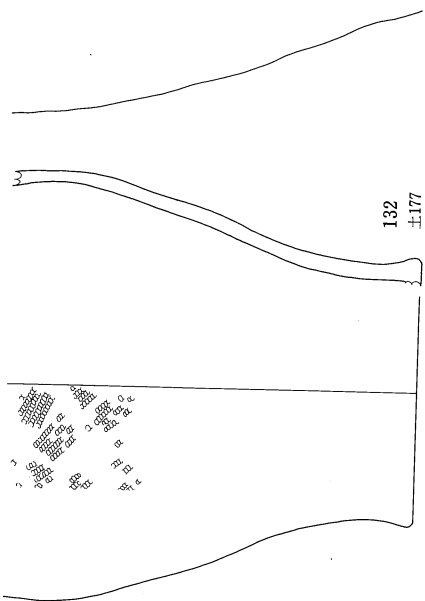
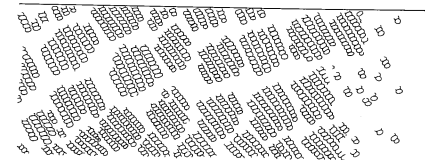
130
土1099



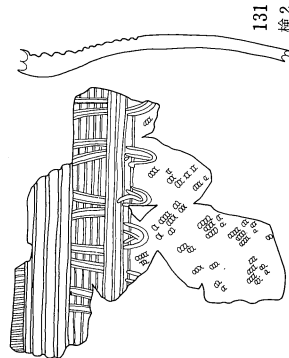
129
土154



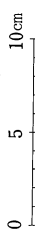
127
土1087



132
土177

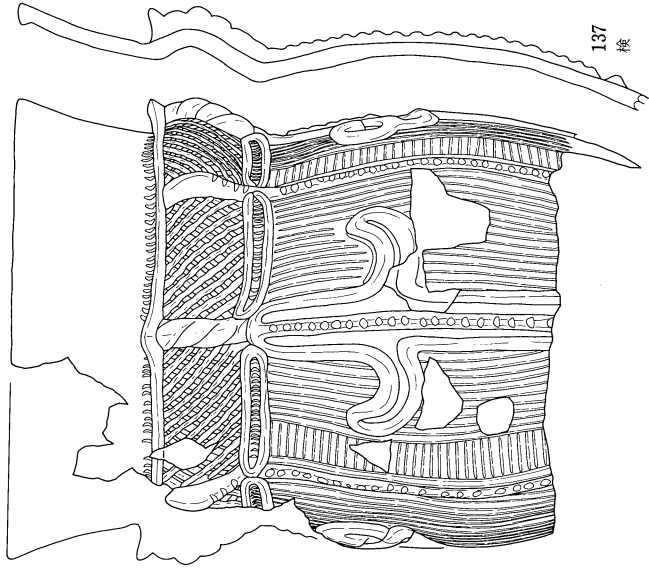


131
棟2

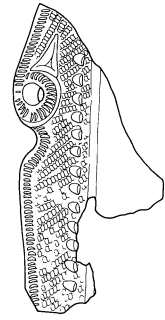


133
土248

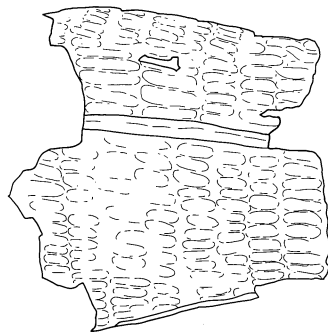
第88図 出土器実測図 (24)



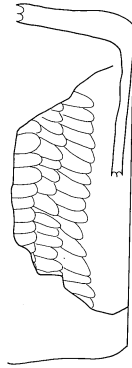
137
検



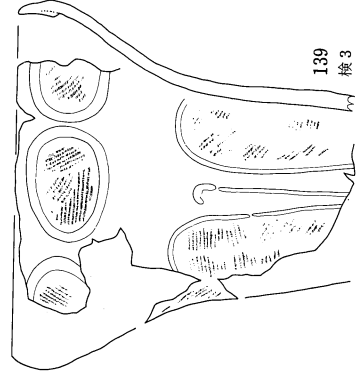
134
検 1



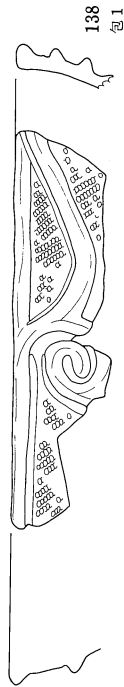
135
27柱フク土



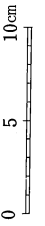
136
±901



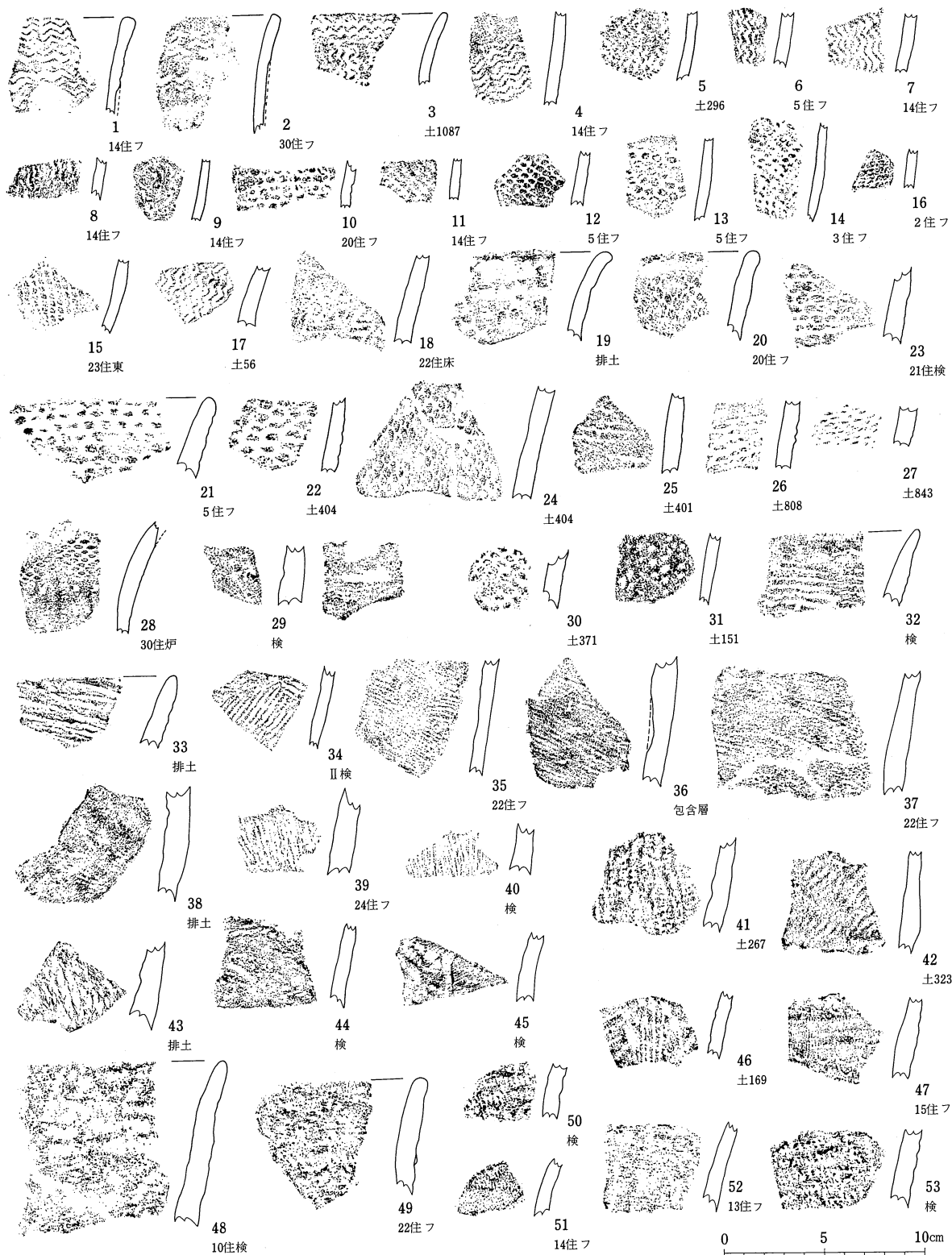
139
検 3



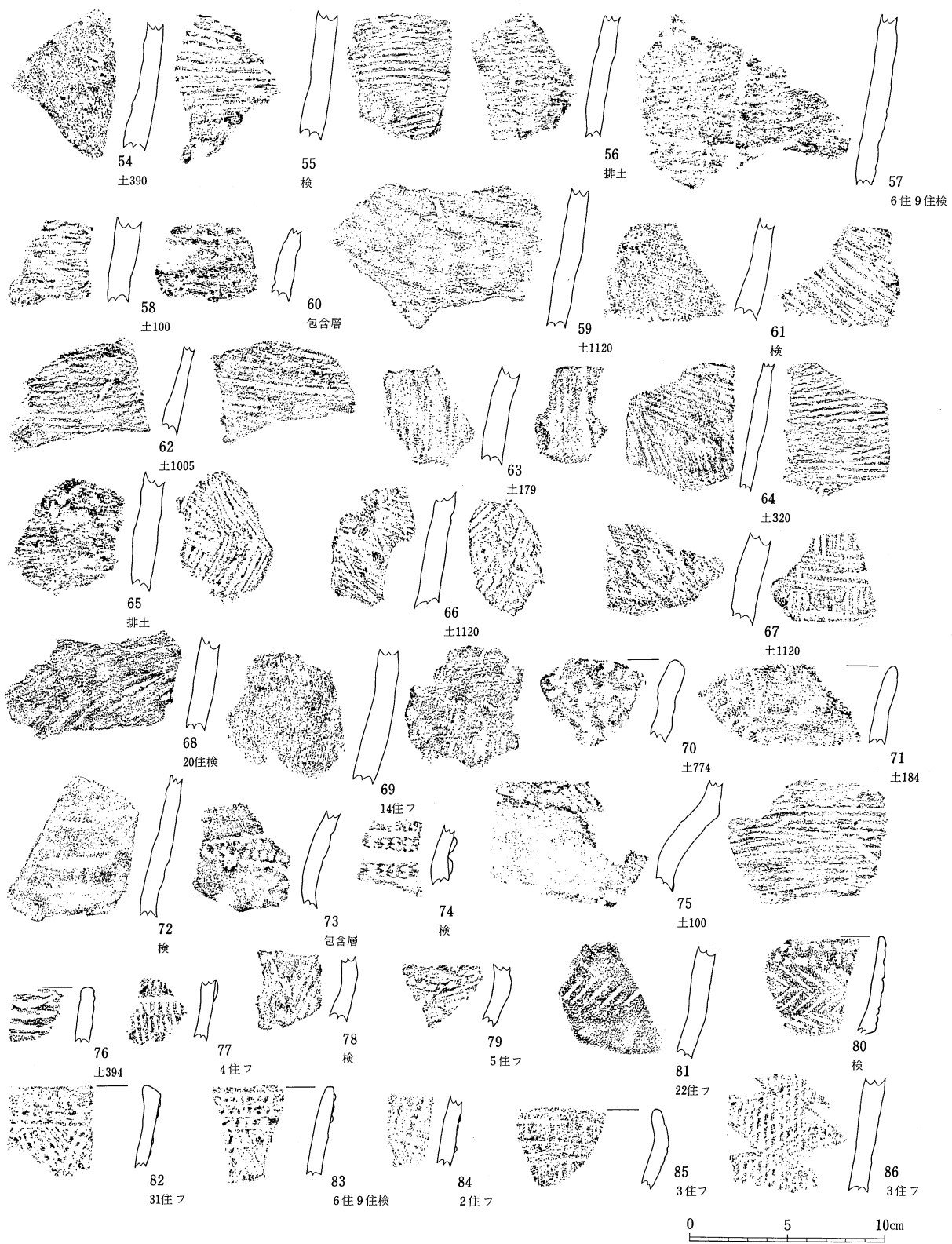
138
包 1



第89図 出土器実測図 (25)



第90図 出土土器拓影 (1)



第91図 出土土器拓影 (2)

2住



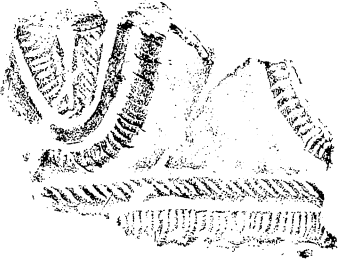
87
2住5



88
2住7



89
2住12



90
2住14



91
2住3



92
2住2

5住



93
2住11



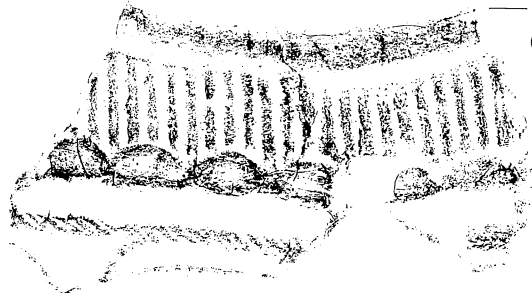
94
5住39



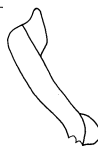
95
5住44



96
5住24



97
5住87



98
5住34



99
5住17



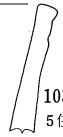
100
5住69



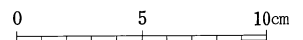
101
5住18



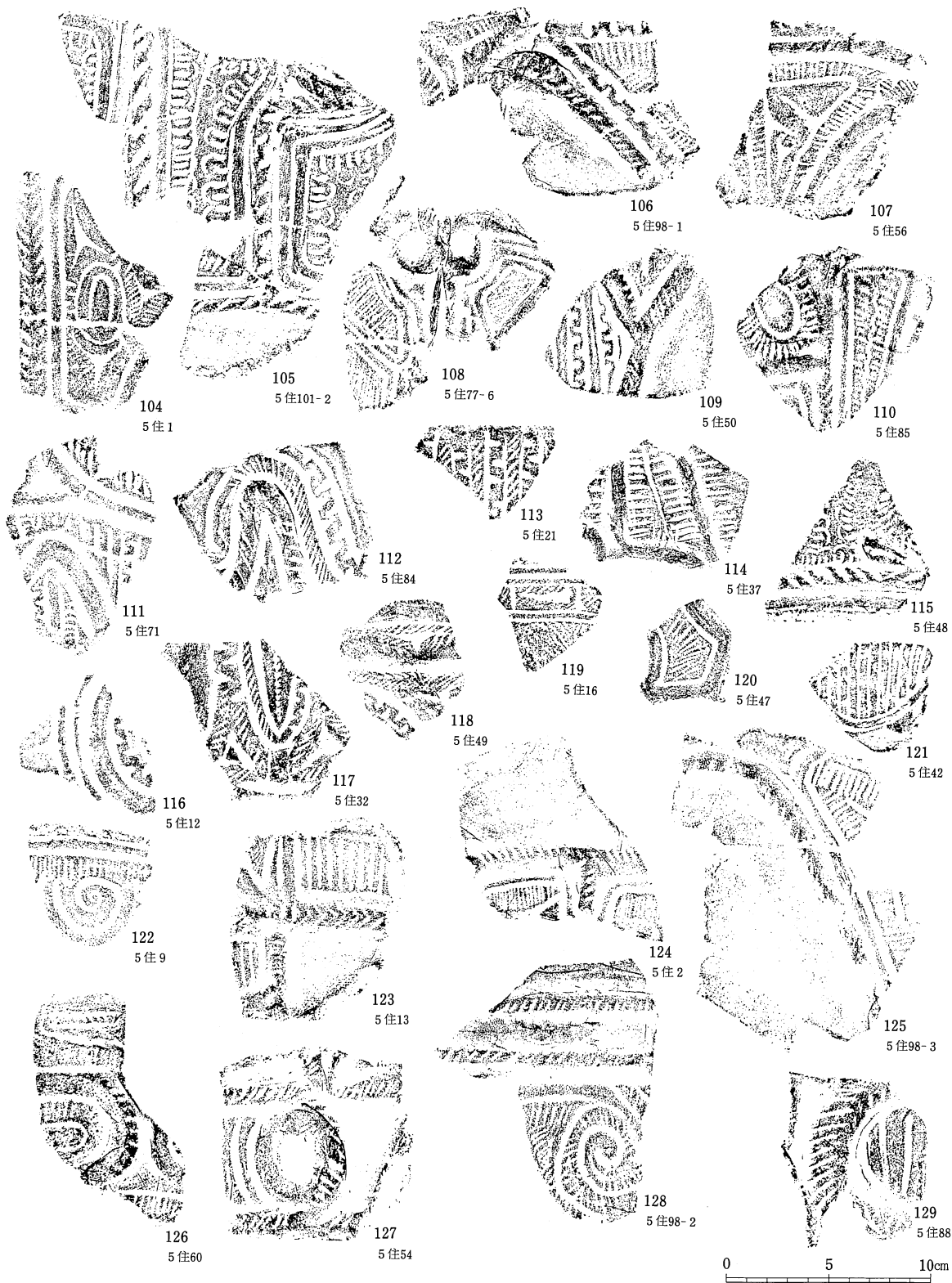
102
5住93



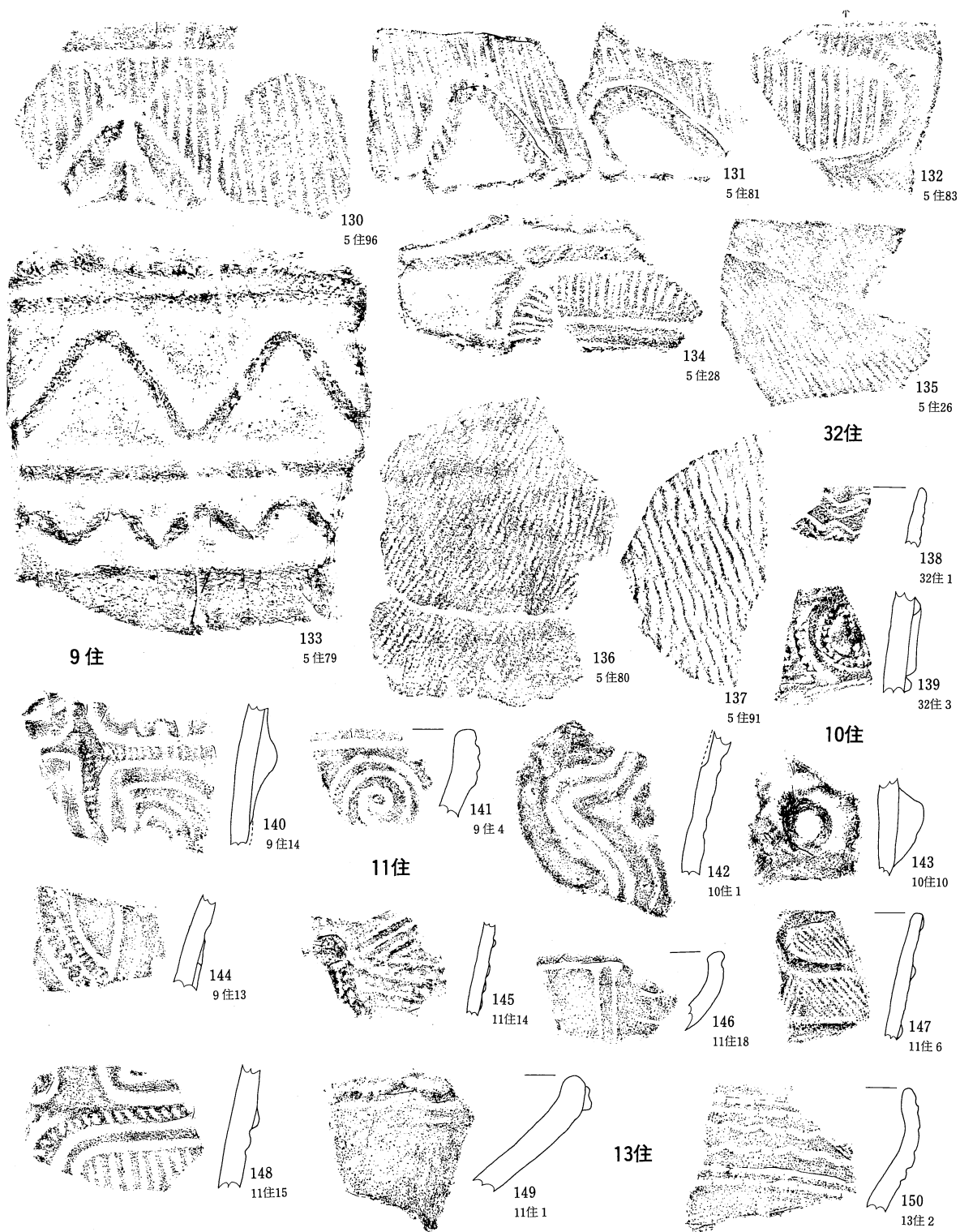
103
5住51



第92图 出土土器拓影 (3)

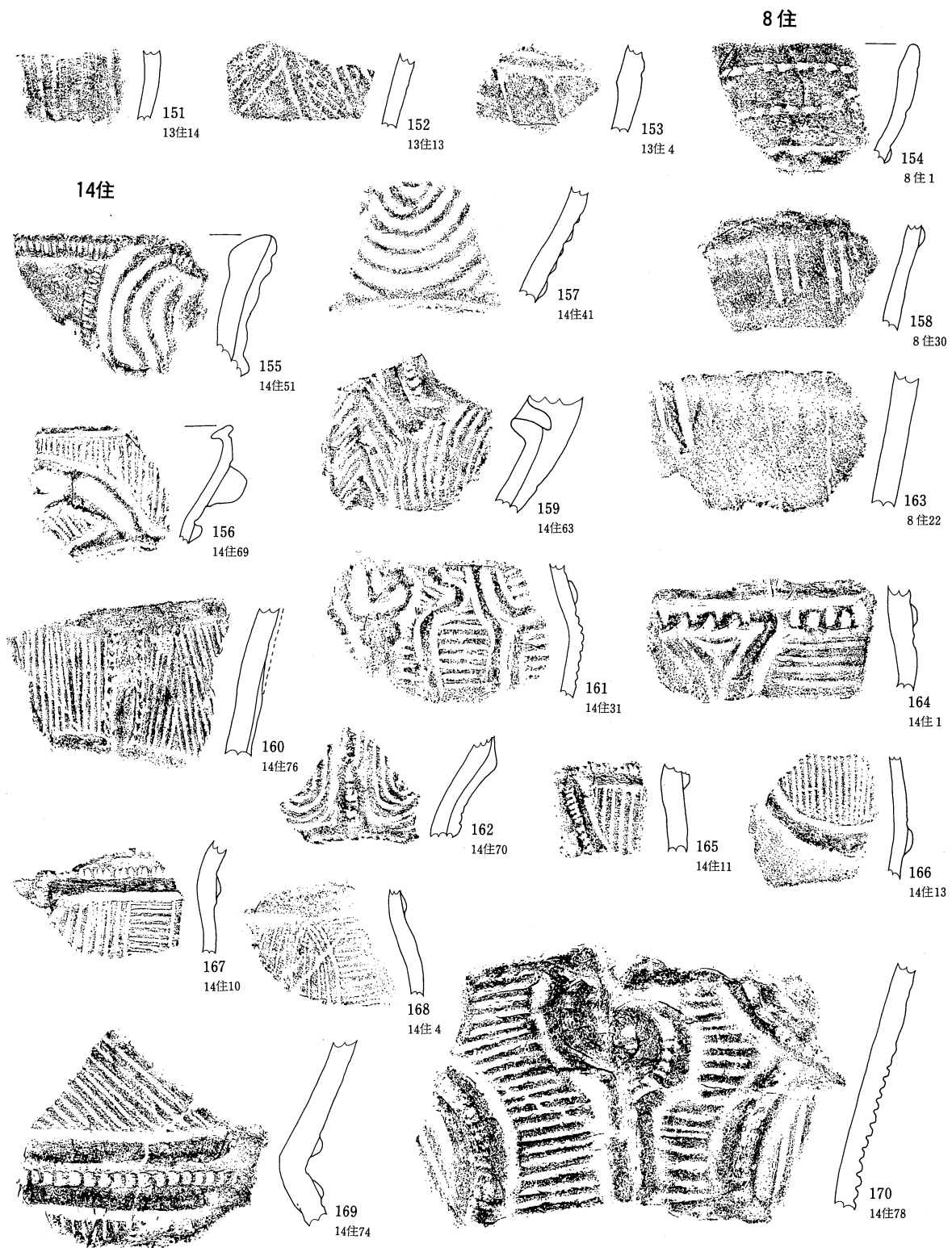


第93图 出土土器拓影 (4)



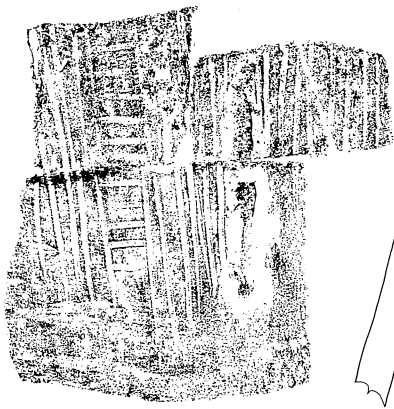
第94图 出土土器拓影 (5)

0 5 10cm



第95图 出土土器拓影 (6)

29住



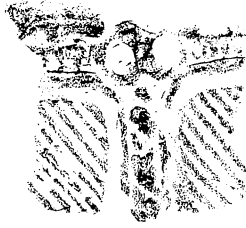
171
14住75



172
29住3



173
29住2



174
29住1

16住



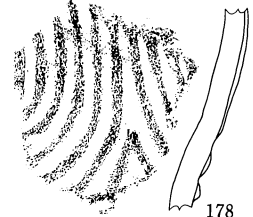
175
16住4



176
16住6



177
16住1

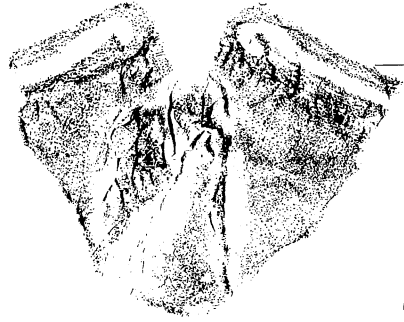


178
16住3

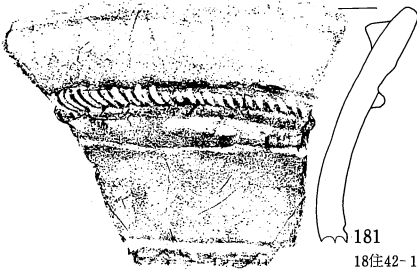
18住



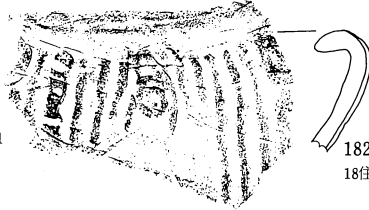
179
18住2



180
18住15



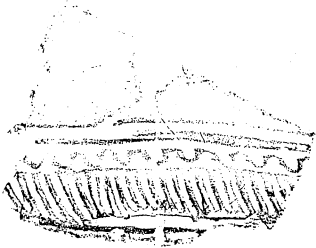
181
18住42-1



182
18住37



185
18住29



183
18住42-2

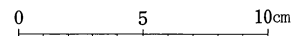


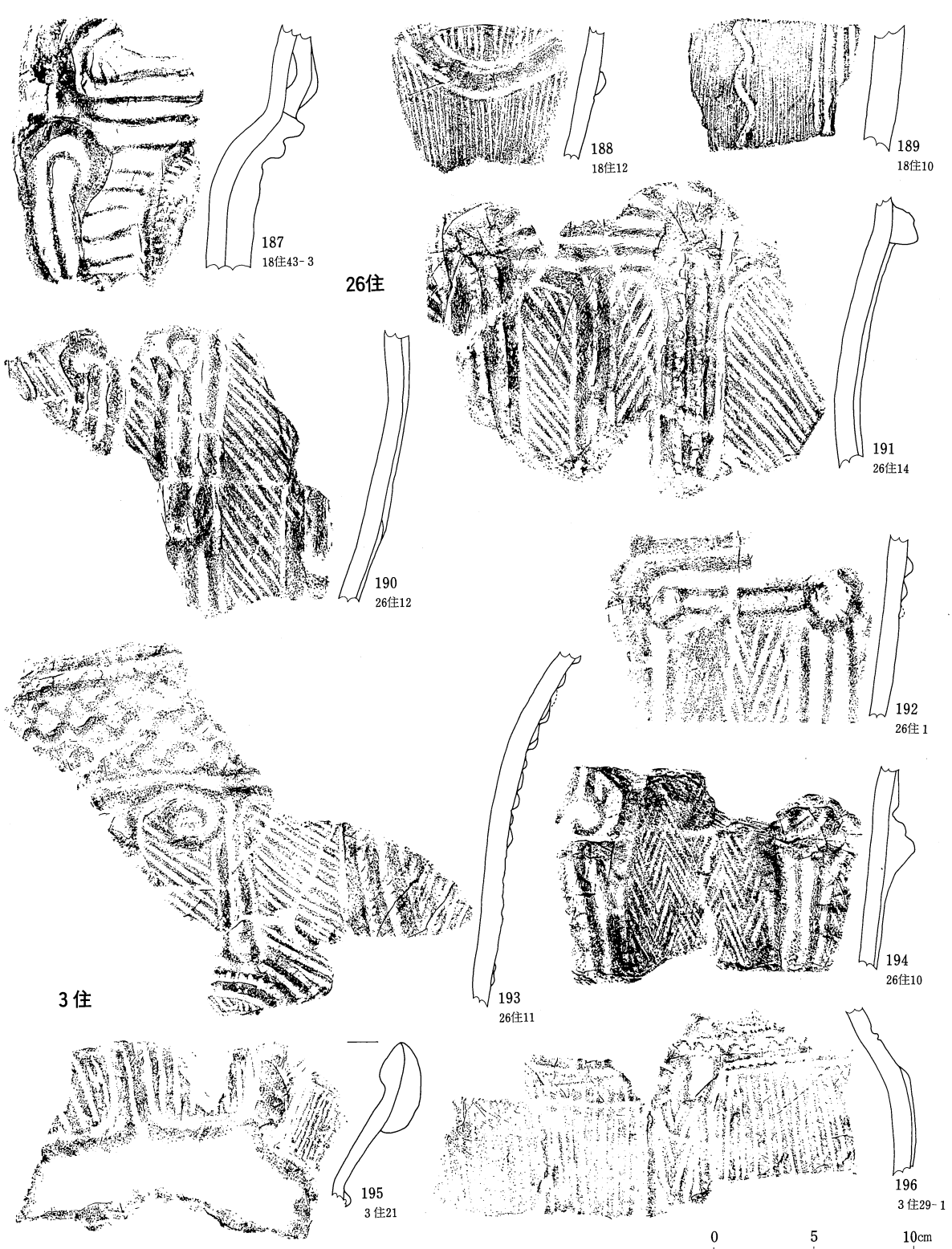
184
18住1



186
18住7

第96图 出土土器拓影 (7)

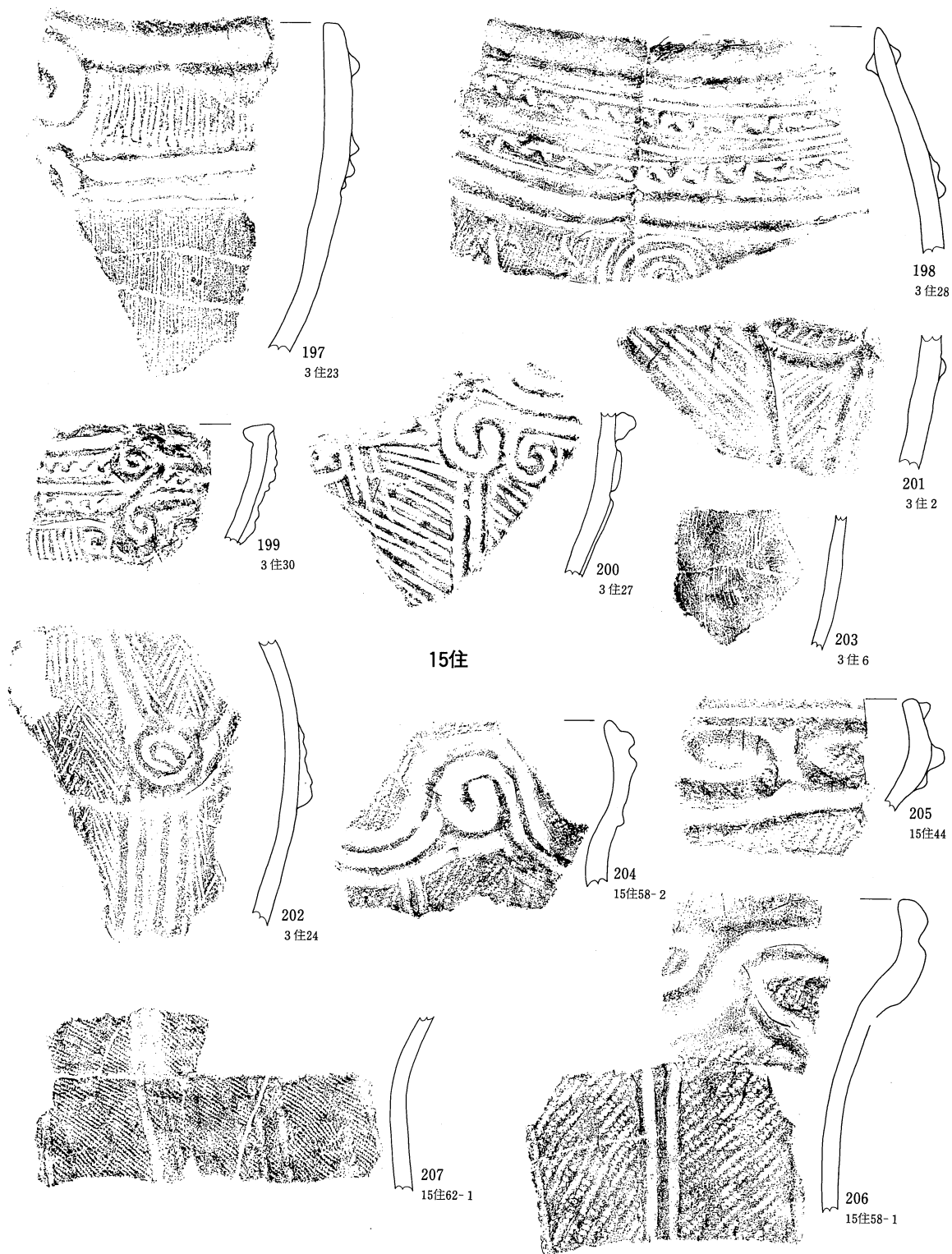




26住

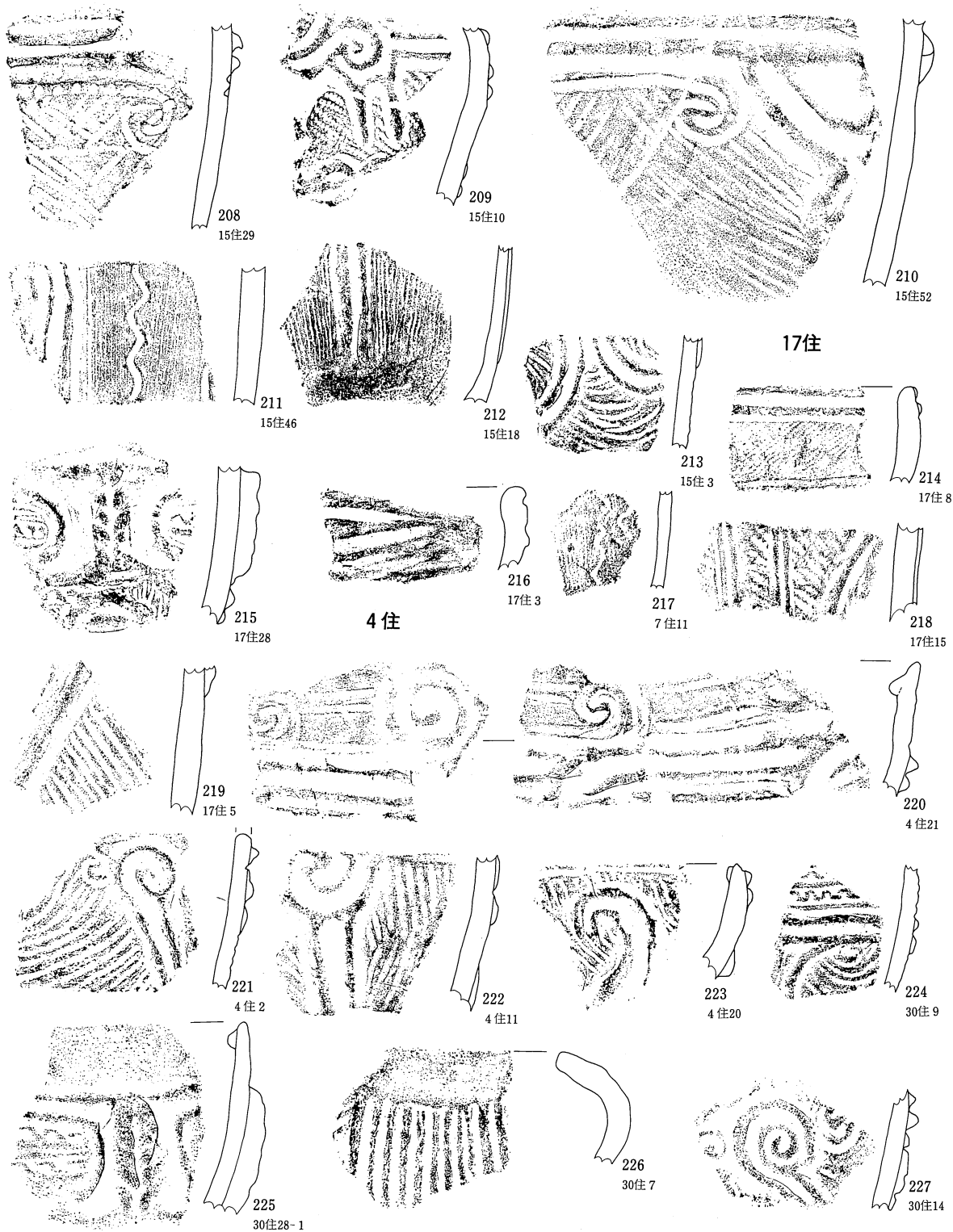
3住

第97图 出土土器拓影 (8)

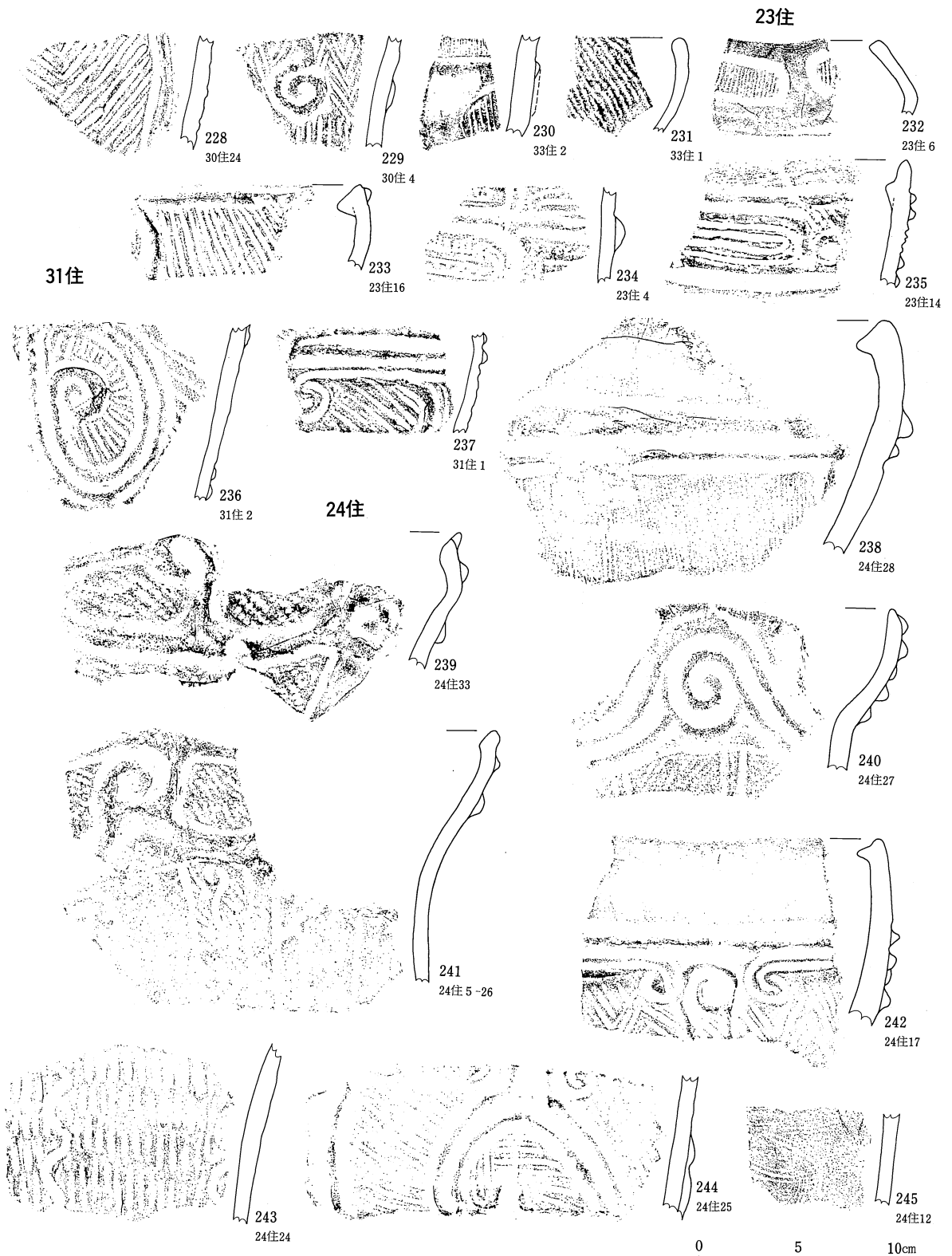


第98图 出土土器拓影 (9)

0 5 10cm

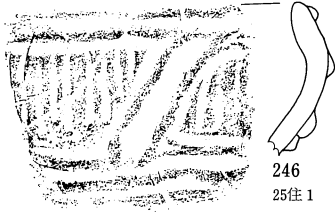


第99图 出土土器拓影 (10)



第100图 出土土器拓影 (1)

25住



246
25住 1



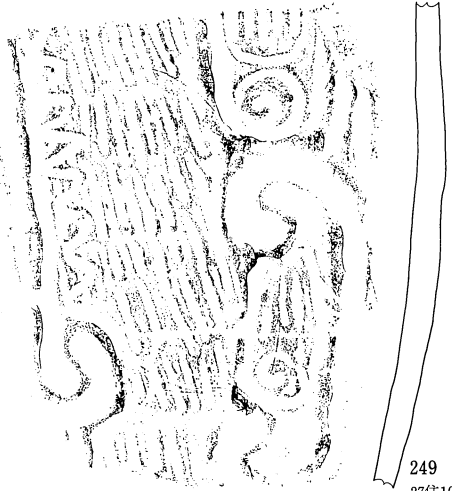
247
25住 2

27住



248
27住12- 8

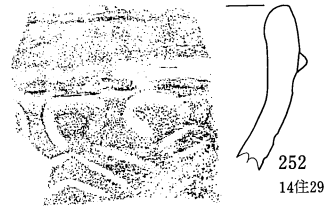
28住



249
27住10



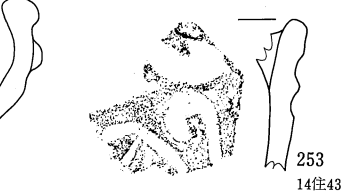
250
27住 2



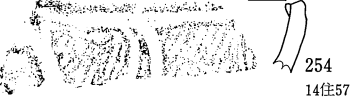
252
14住29



251
27住 7



253
14住43

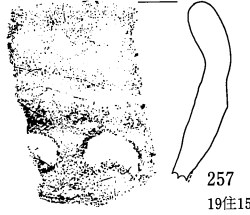


254
14住57

19住



256
19住12

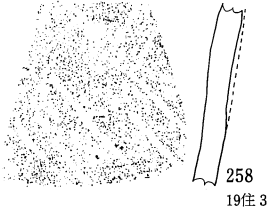


257
19住15



255
14住 9

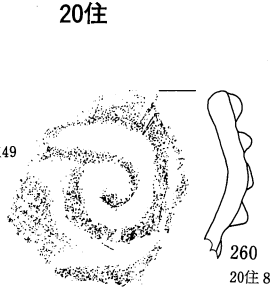
20住



258
19住 3



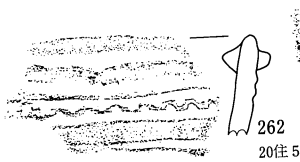
259
19住49



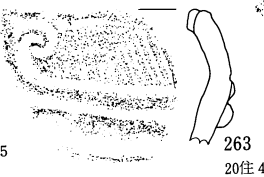
260
20住 8



261
20住 7



262
20住 5



263
20住 4

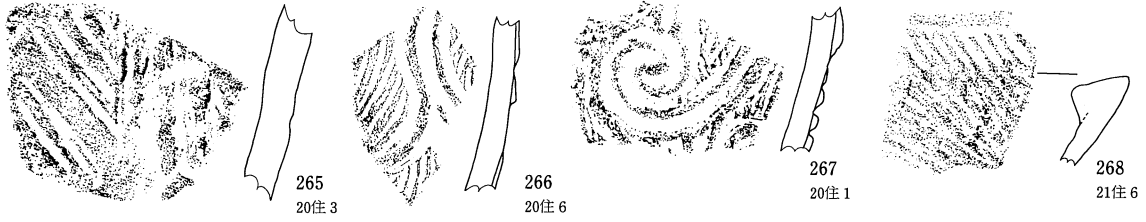


264
20住 2

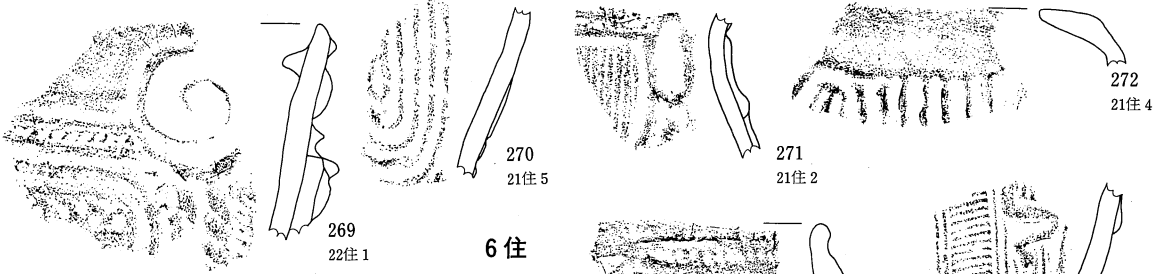
0 5 10cm

第101图 出土土器拓影 (12)

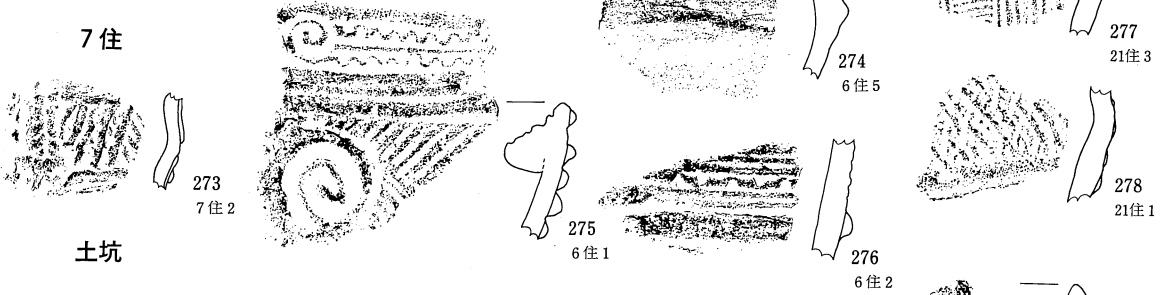
21住



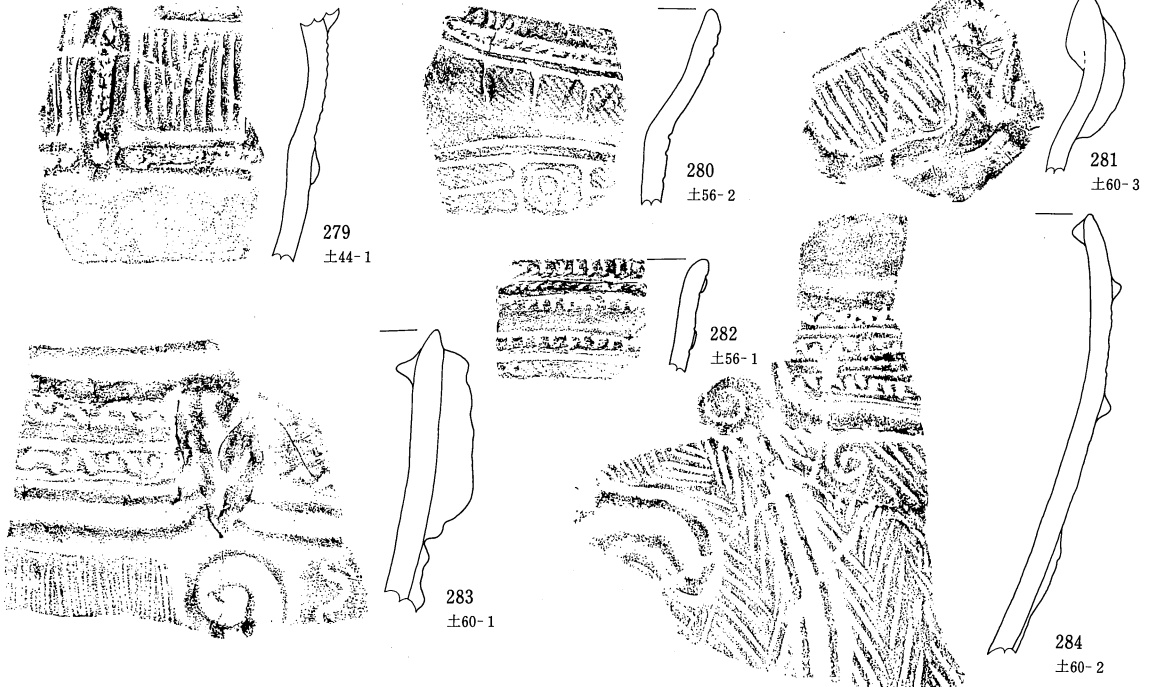
22住



6住

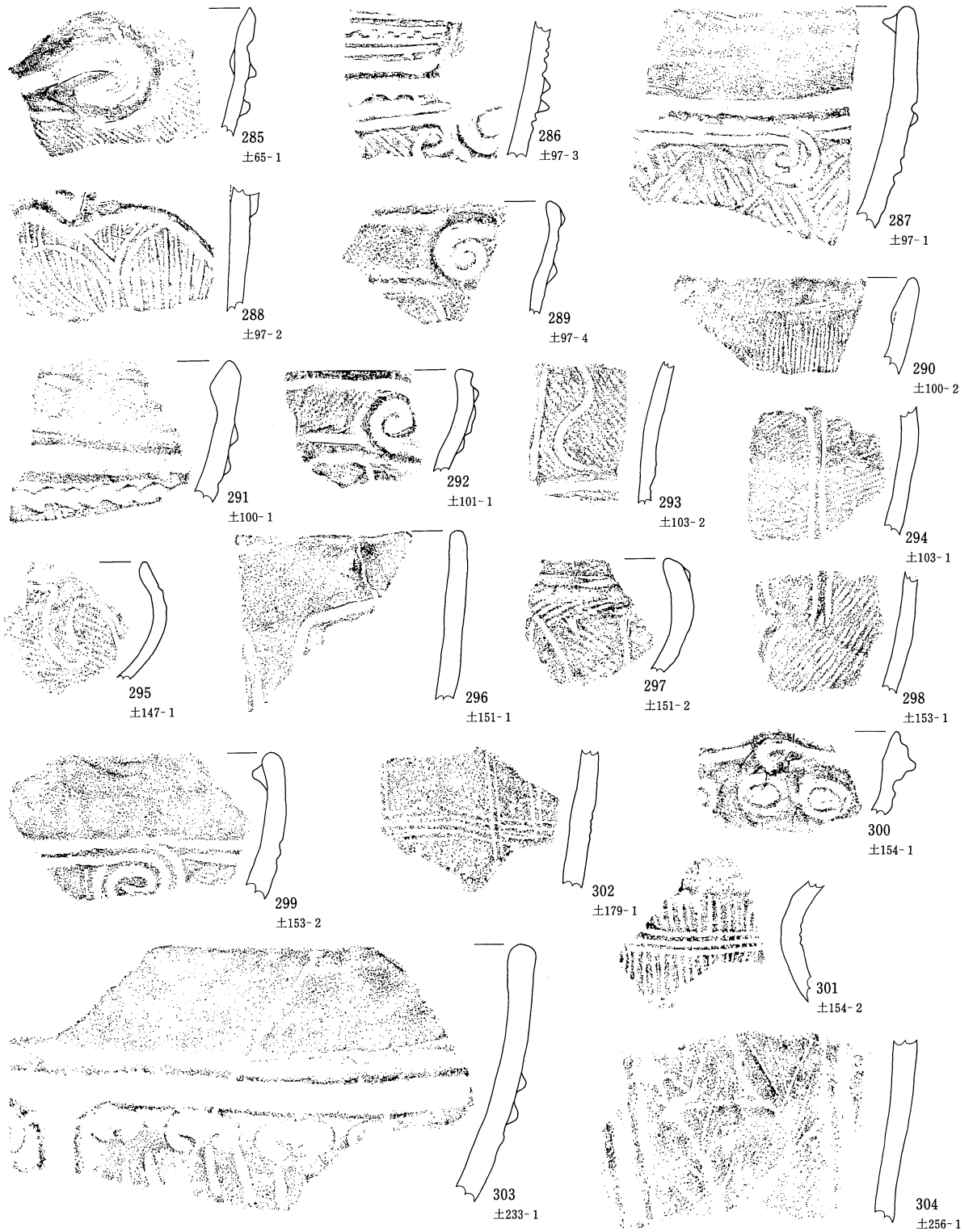


土坑

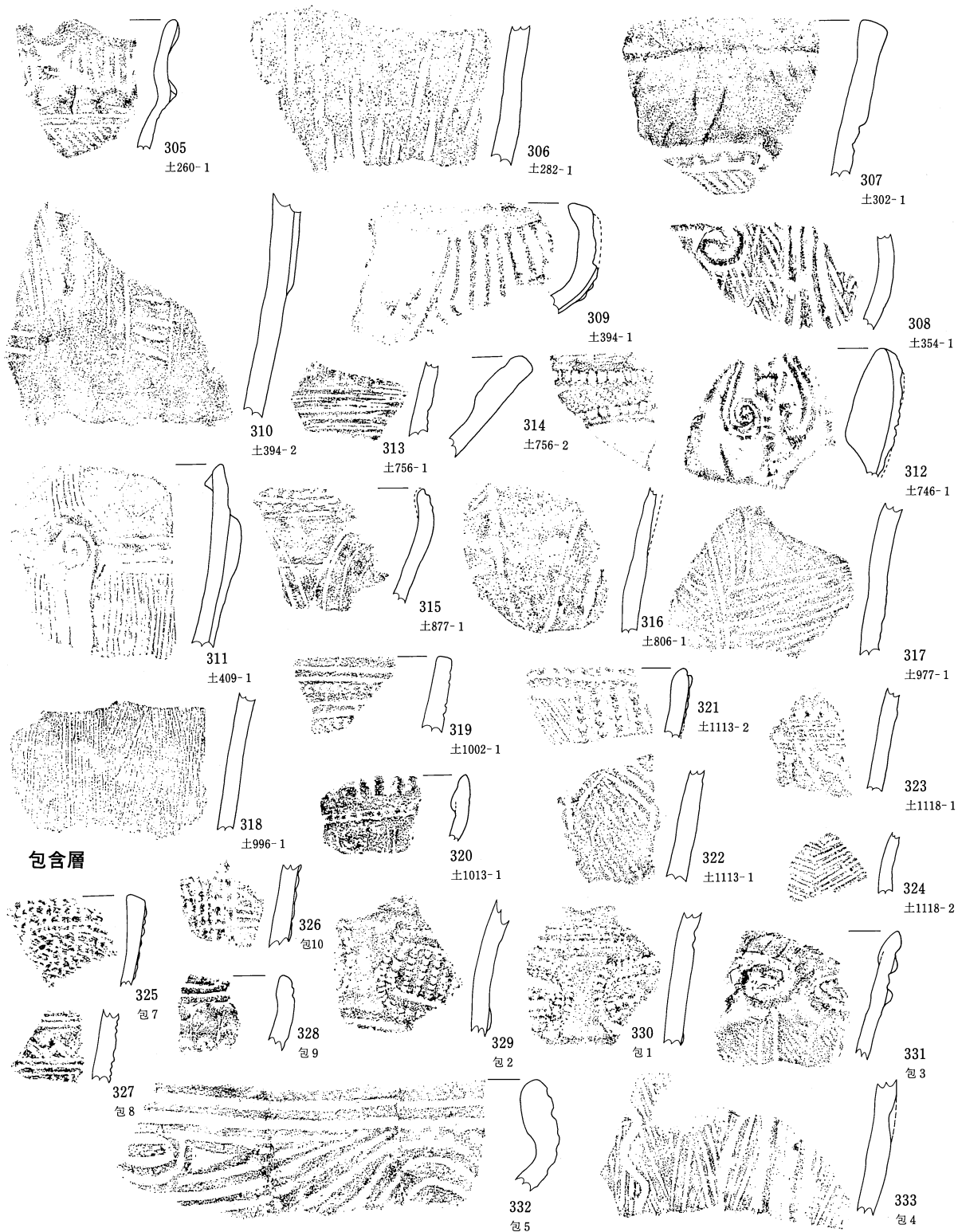


第102图 出土土器拓影 (13)

0 5 10cm



第103图 出土土器拓影 (14)



第104図 出土土器拓影 (15)

検出面



第105図 出土土器拓影 (16)

0 5 10cm

6. 石器・石製品

(1) 石器 (第106～118図)

今回の発掘調査で出土した石器群のうち、定形的な石器と原石・石核の点数 (全体の構成比) は以下のとおりである。

①石槍	5点 (0.7%)	⑦打製石斧	89点 (13.1%)
②石鏃	278点 (40.8%)	⑧磨製石斧	16点 (2.4%)
③石錐	37点 (5.4%)	⑨凹・敲・磨石	85点 (12.5%)
④ピエス・エスキーユ	35点 (5.1%)	⑩石皿	3点 (0.4%)
⑤石匙	17点 (2.5%)	⑪砥石	8点 (1.2%)
⑥スクレイパー	48点 (7.1%)	⑫原石・石核	60点 (8.8%)
		総計	681点 (100.0%)

このほかに2次加工のある剝片、使用痕のある剝片、剝片、碎片等が大量に出土しているが報告書では割愛している。定形的な石器についてはできるだけ多くのデータを提示するため、整理作業は以下の方針で行なった。

- 1) すべての石器について種類毎に出土地点・寸法・重量・石質・破損状況等を一覧表に登載する。
- 2) 実測は完形または全形をうかがえるもの、使用痕を残すもの、特殊なものを中心に行なう。
- 3) 石器の分類及び一覧表中の略号は、昨年度の坪ノ内遺跡の報告書⁽¹⁾に従う。

なお、石質鑑定については森義直氏のご教示を受けている。以下では石器の種類毎にその概要を述べることにする。文中の石器を説明する数字は図番号である。

①石槍 (1～4) 5点出土している。1はチャート製で、基部が破損している。剝離調整は両面加工であるが、身幅の割に横断面は厚い。2は硅質頁岩製で、両端が破損しているが木葉形尖頭器の下半部と考えられる。両面加工が施され薄身であるが、背面側の剝離調整は粗雑である。3は黒曜石製で、三角錐状を呈する。両面加工であるが、背面側の右側辺、腹面側の剝離調整が粗雑なことから未成品の可能性がある。4は黒曜石製で、全長7.23cmの有舌(茎)尖頭器である。身部は木葉形を呈し長3.9cm、幅2.9cmを計り、比較的長く先鋭な茎部は長3.3cmを計る。本資料に類似する石槍は殿村遺跡(山形村)から出土している。⁽²⁾

なお、木葉形を呈する大形尖頭器の2、三角錐状を呈する3は縄文時代にあまり例をみないものである。旧石器～縄文時代草創期の遺物が混入している可能性も考えられる。

②石鏃 (5～48) 278点が出土している。石材は黒曜石製250点、チャート製27点、硅化凝灰質泥岩1点が利用されている。基部は破損品を除いた223点のうち、凹基205点、平基16点、円基と凸基は各1点が出土している。茎部については凹基と凸基(29)の各1点に有茎鏃があるほかは、すべて無茎鏃である。破損状況についてみると、先端や片脚を破損したもの(一覧表のA・B・D類)が多いが、完形品も69点(24.8%)あり注目される。

特徴的なものとして異形石鏃（19）と局部磨製石鏃（13・14・17・18・44～46・48）がある。前者は両側縁が基部寄りて横に張り出す形態を取り、飛行機鏃と呼ばれるものに類似している。後者は早期に特徴的にみられるもので、本遺跡の押型文土器に伴う可能性が高い。これらは長さで幅がほぼ同じ正三角形に近い平面形を呈し、基部のえぐりが比較的浅いものが多く（13・14・17・45）、表面に研磨による線条痕がみられる。研磨は長軸方向に沿って両面に施されるものが大半であるが、44の片面は長軸に直行する方向で研磨が施されている。

③石錐（49～64） 37点が出土している。石材は黒曜石製31点、チャート製5点、珪化凝灰質泥岩製1点が利用されている。形態からみると棒状錐15点、つまみをもつ錐13点、不明9点がある。つまみは明瞭なつまみをもつ52・61・63、錐部から頭部にかけて徐々に幅が増していくため錐部との境界が不明確な51・55がある。なお、60は両側に錐部をもつ特殊なものである。錐部の剝離調整は両面加工31点、片面加工6点で、概して棒状錐の方が剝離調整が丁寧に行なわれている。

使用痕については錐部先端の剝離面の稜に摩耗のあるものが6点（49・50・53・56・57他）ある。このうち49・57については一部の剝離面の中にまで摩耗がおよび、長軸に直行する線条痕がみられる。

④ピエス・エスキーユ（65～72） 35点が出土している。石材はすべて黒曜石である。概ね長さ2cm前後の四辺形を呈し、両極剝離面をもっている。上下端に剝離面をもつものが33点と大半を占め、上下端に加えて片側辺にも剝離面をもつものは2点にすぎない。縁部のつぶれは上縁にあるもの6点、下縁にあるもの5点、上下縁にあるもの10点である。断面形態については、多くは両端が薄くなる紡錘形を呈し、打面としての平坦面をもつ楔形を呈するものは2点出土している。

⑤石匙（73～83） 17点が出土している。これらは黒曜石・チャート製の小形・精製石匙（13点）と砂岩・粘板岩製の大形・粗製石匙（4点）に分類することができる。

小形・精製石匙は横形8・斜形4・不明1点があり、刃部形態は直刃3・外湾刃9・不明1点がある。刃部調整は両面・片面加工ともみられる。片面加工はすべて主要剝離面（腹面）側から剝離が施され、刃部は片刃を呈している。両面加工では背面側の剝離面が刃部を形成しており、腹面側は整形が目的と思われる不連続な剝離が多い。なお、79は長11.8mm・幅24.5mm・厚さ2.0mm・重量0.50gの超小形品である。つまみや刃部の剝離整形は丁寧であるが、一般の石匙と同じ用途で使用されたかは疑問である。土器に対するミニチュア土器のような位置づけの石器であるかも知れない。

大形粗製石匙は横形2・斜形1・不明1点がある。刃部はすべて直刃で、その調整は両面加工2・片面加工1・不明1点である。

⑥スクレイパー（84～104） 48点出土している。これらは小形品と大形品の2種類がある。

小形品は35点出土している。石材は黒曜石製20点、チャート製14点、珪質泥岩1点である。素材剥片は縦長剥片が多い。刃部形態は直刃・外湾刃・内湾刃ともにある。刃部調整は片面・両面加工

ともに17点ずつである。これらは剥片の縁辺部に簡単な連続する剥離を加えて刃部としているものが多い。特徴的なスクレイパーとしては、石刃状剥片を素材にしている98、拇指状の円形搔器の102、黒曜石の縦長剥片の長側辺に刃部をもつ89・93・94・97・100・104がある。

大形品は13点出土している。石材は粘板岩が9点と多く、他に砂質泥岩・硬砂岩が各2点出土している。刃部形態は直刃8・外湾刃5点であり、刃部調整は両面加工7・片面加工6点である。素材となる剥片は不明のもの以外はすべて横長剥片である。特に、横長剥片の幅広の末端に直線的な刃部をもつものが多い(84・86・87)。なお、88は刃部の一部が摩耗しており、使用痕と考えられる。また、上方の剥離面の稜が一部摩耗しており、着柄または皮などが巻かれていた可能性がある。

⑦打製石斧(105~126) 89点が出土している。石材は6種類が利用されているが、粘板岩57点(砂質粘板岩3点を含む)・砂岩21点で9割近くを占めている。このほかに珪質頁岩9点、凝灰質泥岩と砂質凝灰岩が各1点ずつある。

平面形でみると撥形44点、短冊形15点、分銅形8点で、不明22点がある。また、刃部は円刃24点、偏刃19点、直刃4点が確認できた。破損状況を見ると、完形品が29点と全体の3割以上を占めている点の特徴である。また、着柄部分の頭部を残すもの(一覧表のA₁~A₃)は26点あり、刃部を残すもの(B₁~B₃)20点を上回っている。

使用痕については、着柄痕と考えられる胴部のつぶれが15点、使用痕と考えられる刃部の摩耗痕が23点の打製石斧にみられた。このほかに胴部の側縁が摩耗しているもの、頭部に摩耗痕のあるものが各1点出土している。これらは着柄痕と考えられる。

⑧磨製石斧(127~136) 3種類の磨製石斧が16点出土している。

定角式石斧は11点が出土している。石材は硬玉質が7点と多く利用されている。他に砂岩・粘板岩・緑泥片岩・珪化凝灰質泥岩が1点ずつある。いずれも研磨によって面取りされた側面をもち、刃部はわずかに外湾している。形態的には頭部と刃部の幅がほぼ同じで短冊形を呈する128・131、刃部幅が広がって撥形を呈する134・135、中間形の129・133・136がある。

乳棒状石斧は2点出土している。石材は緑泥片岩質と砂質粘板岩が利用されている。127は蛤刃状の刃部で、使用の際の破損品と考えられる。他に破損品を再敲打して整形途上にある未製品がある。

ノミ形石斧は狭長な長方形を呈し、ノミ状の刃部をもつものを仮称したもので、2点出土している。石材は緑色凝灰岩と硬質粘板岩が利用されている。いずれも小形の破損品で全形はうかがえない。

他に硬玉質の刃部片が出土しているが、石材から定角式に属すると考えられる。

⑨凹・敲・磨石(137~155) 85点出土している。石材は7種類が利用されているが、砂岩製40点、溶質凝灰岩製16点・凝灰岩製13点・安山岩製13点で96.5%を占めている。他に砂質凝灰岩・頁岩・珪質頁岩が各1点ある。

使用痕については、単独で使用痕をもつものが凹部10点(11.8%)、敲打痕3点(3.5%)、磨面35点(41.2%)である。2つの使用痕をもつものは、凹部+敲打痕2点(2.3%)、凹部+磨面24点(28.2%)、敲打痕+磨面6点(7.1%)があり、3つの使用痕を併せもつものが5点(5.9%)ある。このことから、凹・敲・磨石は複数の機能をもつものが一般的であったことがうかがえる。

素材については、楕円礫(一覧表のB~D類)37点と棒状礫(G~I類)30点が多い。なお、特殊磨石が15点出土しているがほとんどが後者を素材にしている。

⑩石皿(156・157) 3点出土し、いずれも砂岩製である。156は両面に磨面をもつ石皿である。下半分が破損しているため全形はうかがえないが、片面に彫刻が施されている。施文は敲打によって行なわれ、その後に部分的に研磨が加えられている。文様は隅に直径2~2.5cmの円形のくぼみがあり、さらに側辺に沿って円弧文が巡らされている。この円弧文は側面にも巡らされているが、上面ほど明瞭ではない。磨面は特に彫刻面側が使い込まれている。157は不整形円形を呈し、三方に縁をもつ石皿である。磨面は使い込まれて平滑になっており、中央から掻き出し口にかけて高い勾配を有している。他に破片1点が出土している。

⑪砥石(158~161) 8点出土している。大きさと重量から、手持ち砥石と考えられる小形砥石と置き砥石と考えられる大形砥石に分類できる。

前者は凝灰岩製2、砂岩製1点が出土している。これらは扁平または断面三角形の長方形を呈する礫を素材にしている。なお、161は形態・石材・沈線状の研磨痕などから、古代以降の金属製品用砥石の可能性がある。後者は砂岩製4、花崗岩製1点が出土している。いずれも両面が平らな大形礫を素材にしているが、全形をうかがえるものはない。

⑫原石・石核 すべて黒曜石製で60点(総重量1944.45g)出土している。内訳は原石44点(1426.73g)、石核16点(517.72g)である。原石・石核の大半は石鏃、石錐、ピース・エスキューなどの製作に関するものと考えられる。

原石は6.35~330gまで大小あるが、多くは20~70gの間に集中している。石核も8.30~91.01gまで大小あるが50g未満のものが大半である。剝離はすべて原石の自然面(礫の表皮)を打面にして行なわれている。大形の石核では打面転移が行なわれるものもあるが、多くは原石自体が小さいため素材剝片の獲得には困難なものがあったと思われる。遺構別にみると14軒の竪穴式住居から38点、4基の土坑から6点が出土している。特に、第4・13・15・19・20号住居址から4~5点の原石・石核が出土している点が注目される。原産地から離れた遺跡から出土するこうした原石・石核も集落内での石器生産を反映しているものとして今後注目していく必要がある。

註1 松本市教育委員会 1990 『松本市坪ノ内遺跡』 P.227~234

2 山形村教育委員会 1987 『殿村遺跡』 P.104・180

(2) 石製品(第120図)

竪穴式住居から3点が出土している。1は研磨痕をもつ、横断面がカマボコ状を呈する棒状の石

製品である。研磨は全面に施されているが、特に先端付近の稜線部には研磨によって幅0.1～0.2cm、長さ2.5cmにわたる平坦面が形成されている。2は滑石製の小形品で、研磨によって面取りがされている。表面には顕著な線条痕が観察される。3は石棒の上半部である。横断面は隅丸三角形を呈し、明瞭な研磨痕はみられないが表面は平滑である。

7. 土製品 (第119・120図)

土偶・土製円盤・ミニチュア土器などが総計15点出土している。

土偶(1～6)は7点出土している。遺構別にみると竪穴式住居から5点、土坑から2点が出土している。特に、図番号3の土偶の脚部は第15号住居址と第24号住居址の遺構間で接合したもので注目される。全形をうかがえる土偶はなく、残存部位別にみると両腕部2点、脚部4点である。前者(2・4)は乳房の高さで腕を水平に伸ばしたポーズをとっている。なお、2点とも形態・寸法・破損部分が類似しており興味深い。後者(1・3・5・6)はいずれも沈線または刺突で施文されている。

製作痕としては5点の土偶の破損面に、分割した粘土塊を接合するための芯棒の痕跡がみられる。なお、3は接合部分で破損しており、粘土を巻きつけた芯棒と、そのうえにかぶせた整形・施文用の粘土が明瞭に区別できる。特に、芯棒については端部まで粘土で覆われていて、脚部よりも1cm程突出している。このことは粘土塊同士が芯棒で連結されたのではなく、胴部に脚部をソケット状に差し込んで接合されたものと考えられる。土偶の製作方法のわかる良好な資料である。

土製円盤(7～10)は住居内から5点出土している。文様については10に沈線文が観察できるだけで、他は表面の剝落等で不明である。いずれも周囲を打ち欠いた後に側面を磨いているが、断面が平坦面を呈するほどの研磨ではない。

ミニチュア土器(11・12)は住居内から2点出土している。11は鉢形の完形品である。2段の輪積みによって製作されており、外面には指頭圧痕が多く残されている。12は深鉢形を呈し、胴部に綾杉状の沈線文が施されている。

以上のほかに種類不明の土製品(13)が1点出土している。中空の球状を呈すると思われ、土鈴の可能性はある。

土製品ではないが被熱粘土塊が8点出土している。遺構別にみると第17号住居址から3点、第18号住居址から4点、第97号土坑から1点である。いずれも不定形な塊状を呈し、大きさは親指大から7cm大までである。表面には指頭圧痕が観察されるが、第97号土坑の粘土塊にはさらに細い棒状工具による刺突が20ヶ所以上みられる。

こうした被熱粘土塊は近接する坪ノ内遺跡(松本市教育委員会1990)からも出土しており、最近各地で類例が増加している。性格等については不明な点が多いが今後注意していかなければならない遺物である。

第5表 石器一覧表

① 石槍

NO	図 NO	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損状況	備 考
1	1	11住検	4.10	2.23	1.05	9.45	チャート	完形	
2	2	21住〃	(4.17)	(4.13)	(1.10)	(19.50)	硅質頁岩	両側欠	
3	3	土117	(7.50)	(2.70)	1.50	(25.50)	黒曜石	基部欠	未成品？
4		〃1134	(3.50)	1.97	1.30	(10.20)	チャート	先端欠	未成品
5	4	検	7.23	2.91	0.97	14.55	黒曜石	完形	

② 石鏃

NO	図 NO	分 類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損 状況	備 考
		基 部	茎 部	側 縁								
1		平	無	IV	2住	2.50	(1.90)	0.72	(2.95)	チャート	B	
2		凹	〃	?	〃	(1.92)	(1.57)	0.39	(0.85)	黒曜石	C	
3		〃	〃	V	〃	2.87	(2.04)	0.80	(3.85)	〃	B	未成品
4		?	?	?	〃	2.66	1.91	0.59	2.60	チャート	O	〃
5		凹	無	IV	3住炉	(2.23)	(1.43)	(0.23)	(0.60)	黒曜石	H	
6		〃	〃	III	〃 No2	1.80	(1.28)	0.30	(0.45)	〃	B	
7		〃	〃	I	〃 P5	(1.75)	(1.38)	(0.39)	(0.95)	〃	E	
8		〃	〃	V	3住	(1.86)	(1.06)	0.19	(0.30)	〃	B	
9		〃	〃	〃	〃	1.55	(1.12)	0.20	(0.30)	〃	〃	
10		円	〃	〃	〃	(2.99)	(2.33)	0.62	(3.15)	〃	〃	未成品？
11		凹	〃	?	〃	(1.66)	(1.32)	0.41	(0.95)	〃	A	未成品
12	5	〃	〃	V	〃	2.17	1.30	0.34	0.70	〃	O	
13	6	〃	〃	〃	〃	2.54	1.46	0.27	0.75	〃	〃	
14		〃	〃	〃	〃	(1.54)	1.32	0.23	(0.45)	〃	A	
15		?	?	?	〃	-	-	-	(0.10)	〃	F	
16	7	平	無	I	4住P13	2.73	1.85	0.56	3.20	チャート	O	未成品
17		凹	?	?	〃 〃	(1.52)	(1.33)	(0.30)	(0.65)	黒曜石	E	
18		?	〃	〃	〃 〃	(1.91)	(1.76)	(0.34)	(1.25)	〃	F	未成品
19	8	凹	無	I	〃 〃	(2.39)	(0.97)	(0.35)	(0.85)	〃	H	
20	9	〃	〃	IV	4住	1.34	1.48	0.28	0.40	〃	O	
21		〃	〃	?	〃	(1.90)	(1.33)	0.40	(0.70)	〃	C	
22		平	〃	IV	〃	(1.45)	1.42	0.31	(0.65)	〃	A	
23		凹	〃	〃	〃 検	(1.48)	(1.41)	0.29	(0.55)	〃	D	
24		〃	〃	〃	5住 No17	1.37	1.35	0.39	0.50	〃	O	未成品
25		〃	〃	V	〃 〃	1.55	1.10	0.27	0.40	〃	〃	
26		〃	〃	〃	〃 〃	(2.00)	(1.78)	0.34	(1.05)	〃	D	
27		〃	〃	〃	〃 〃	(1.97)	(1.50)	0.30	(0.75)	〃	〃	
28	10	〃	〃	IV	〃 床	(2.29)	(1.51)	0.33	(0.80)	〃	B	
29		〃	〃	V	〃 〃	2.09	1.73	0.43	0.95	〃	O	未成品
30		〃	〃	〃	〃 〃	(2.16)	(1.47)	0.52	(1.15)	〃	B	
31		〃	〃	〃	〃 〃	(1.94)	(1.29)	0.18	(0.45)	〃	〃	
32		〃	〃	IV	5住	(1.85)	(1.60)	0.35	(0.90)	〃	D	
33		〃	〃	V	〃	(2.54)	(1.13)	(0.36)	(0.80)	〃	H	
34		〃	〃	I	〃	(1.53)	1.30	0.29	(0.65)	〃	B	
35		〃	〃	IV	〃	(1.44)	1.39	0.28	(0.55)	〃	A	
36		〃	〃	〃	〃	(1.93)	(1.38)	0.30	(0.60)	〃	B	
37		〃	〃	V	6住	(1.74)	(1.41)	0.32	(0.75)	チャート	〃	
38		〃	〃	〃	〃	1.41	1.34	0.18	0.30	黒曜石	O	
39	11	〃	〃	IV	7住	2.37	1.50	0.34	0.95	〃	〃	
40	12	〃	〃	〃	8住	1.77	1.72	0.32	0.70	〃	〃	
41	13	〃	〃	III	〃	1.40	1.41	0.15	0.25	〃	〃	局部磨製
42		平	〃	V	〃	1.98	(1.48)	0.57	(1.45)	〃	B	

NO	図 NO	分類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損 状況	備考
		基部	茎部	側縁								
43		凹	無	?	8住	(1.62)	(1.49)	0.44	(0.90)	黒曜石	D	
44		〃	〃	IV	〃	2.38	1.60	0.40	1.30	チャート	O	
45		〃	〃	〃	〃	2.23	(1.26)	0.26	(0.50)	黒曜石	B	
46		〃	〃	V	〃	(2.02)	(1.49)	0.34	(0.95)	チャート	〃	
47		〃	〃	III	9住	2.04	(1.12)	0.27	(0.45)	黒曜石	〃	
48		〃	〃	?	〃	(1.64)	(1.18)	0.29	(0.45)	〃	C	
49		〃	〃	I	〃	1.60	1.21	0.41	0.75	〃	O	
50		〃	〃	III	〃 検	(2.29)	(1.26)	0.34	(0.65)	〃	D	
51		〃	〃	V	10住	1.49	1.34	0.21	(0.35)	〃	B	
52		〃	〃	〃	〃 検	(2.44)	(2.10)	0.56	(1.95)	〃	D	
53		〃	〃	IV	〃 〃	(1.53)	1.64	0.27	(0.75)	〃	A	
54		平	〃	〃	11住	(1.45)	(1.87)	(0.34)	(0.85)	〃	D	
55		凹	〃	V	〃	(1.30)	1.33	0.30	(0.50)	〃	A	
56		〃	〃	?	〃 検	(2.26)	(1.44)	0.33	(0.65)	〃	C	
57		〃	〃	III	13住	2.12	(1.53)	0.34	(0.80)	〃	B	
58		?	?	?	14住	(2.06)	(1.23)	0.25	(0.50)	〃	F	
59		〃	〃	〃	〃	—	—	—	(0.40)	〃	E	
60		〃	〃	〃	〃	(1.70)	(1.49)	(0.33)	(1.00)	チャート	F	
61		〃	〃	〃	〃	2.21	1.91	0.75	2.65	黒曜石	O	未成品
62		凹	無	IV	〃	(0.90)	(1.75)	(0.35)	(0.35)	〃	D	
63		〃	〃	III	〃	1.68	(1.23)	0.30	(0.35)	〃	B	
64		〃	〃	V	〃	1.96	1.13	0.50	0.85	〃	O	
65	14	〃	〃	III	〃	1.21	1.22	0.12	0.15	〃	〃	局部磨製
66	15	〃	〃	V	〃	(1.50)	(2.05)	(0.23)	(0.70)	〃	A	
67	16	〃	〃	〃	〃	(2.58)	(1.70)	0.41	(1.35)	〃	B	
68		平	〃	IV	〃	(1.91)	1.18	0.42	(0.95)	〃	A	
69		?	?	?	〃	1.84	1.66	0.52	1.50	〃	O	未成品
70		凹	無	V	〃	2.63	1.75	0.27	(1.00)	チャート	B	
71		?	?	?	〃	(1.92)	1.43	0.59	(1.55)	黒曜石	A	未成品
72		凹	無	IV	〃	(2.34)	(1.38)	0.45	(0.90)	〃	C	
73		〃	〃	V	15住	(1.74)	(0.83)	0.28	(0.30)	チャート	H	
74	17	〃	〃	IV	〃	(0.92)	(1.20)	0.14	(0.15)	黒曜石	D	局部磨製
75		平	〃	〃	〃	(1.34)	1.73	0.27	(0.75)	〃	A	
76		凹	〃	III	〃	(1.39)	1.43	0.33	(0.45)	〃	〃	
77		〃	〃	I	〃	2.13	1.30	0.43	0.95	〃	O	
78		〃	〃	IV	〃	(1.97)	(1.52)	0.30	(0.65)	〃	D	
79		〃	〃	〃	〃	(2.14)	(1.02)	(0.28)	(0.45)	〃	H	
80		〃	〃	〃	〃	(1.66)	(1.31)	0.26	(0.40)	〃	D	
81		?	?	?	〃	(1.25)	(1.18)	(0.25)	(0.40)	〃	F	
82		凹	無	IV	15住検	(2.90)	(2.01)	0.56	(2.40)	〃	D	
83		〃	〃	V	〃 〃	1.29	0.94	0.28	0.30	〃	O	
84		〃	〃	IV	16住 P 3	1.98	1.17	0.30	0.50	〃	〃	
85		〃	〃	〃	〃 〃	2.13	(1.20)	0.38	(0.70)	〃	A	
86		平	〃	〃	〃 〃	(2.08)	(1.67)	(0.53)	(1.45)	〃	〃	再加工
87		凹	〃	〃	〃 検	(1.70)	(0.81)	(0.23)	(0.20)	〃	H	
88		?	?	?	〃 〃	2.40	1.83	0.48	1.50	〃	O	未成品
89		凹	無	IV	〃 〃	1.73	(1.29)	0.32	(0.45)	〃	B	
90		〃	〃	〃	17住 P 1	2.03	(1.30)	0.27	(0.65)	チャート	〃	
91		?	?	?	〃 P 12	1.78	1.20	0.37	0.70	黒曜石	O	未成品
92		凹	無	〃	17住	(2.23)	(1.47)	0.43	(1.05)	〃	C	
93		〃	〃	IV	〃	2.48	(1.41)	0.37	(1.10)	チャート	B	

NO	図 NO	分 類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損 状況	備 考
		基 部	茎 部	側 縁								
94		凹	無	V	18住検	(2.35)	(2.00)	0.48	(1.70)	黒曜石	D	
95		〃	〃	IV	〃 〃	(1.48)	1.80	(0.23)	(0.30)	〃	E	
96		〃	〃	〃	〃 〃	(2.15)	(1.54)	0.36	(0.90)	〃	D	
97		〃	〃	〃	19住	(1.63)	(1.10)	0.49	(0.75)	〃	〃	
98		〃	〃	〃	〃 検	(1.98)	(1.57)	0.38	(1.00)	〃	〃	
99	18	平	〃	III	〃 〃	1.73	1.44	0.31	0.50	〃	O	局部磨製
100		〃	〃	IV	〃 〃	(1.94)	1.31	0.33	(0.80)	〃	A	
101		凹	〃	V	20住P10	2.89	(1.63)	0.53	(1.50)	〃	B	
102		?	?	?	20住	(2.06)	2.18	0.44	(1.75)	〃	A	未成品
103		凹	無	IV	〃 検	1.63	(1.32)	0.30	(0.40)	〃	〃	
104	19	〃	〃	II	21住No.1	2.60	(1.65)	0.33	(1.00)	チャート	E	異形石鏃
105	20	〃	〃	III	21住	(2.24)	(1.26)	0.34	(0.65)	黒曜石	D	
106		〃	〃	IV	〃	(1.14)	(1.05)	0.27	(0.35)	〃	C	
107		〃	〃	?	〃	(1.76)	(1.22)	0.32	(0.55)	〃	〃	
108		平	〃	IV	〃	1.98	1.64	0.50	1.40	〃	O	
109		凹	〃	〃	〃	1.37	1.32	0.28	0.35	〃	〃	
110		〃	〃	〃	〃	(1.88)	1.47	0.56	(1.10)	〃	D	
111		〃	〃	〃	〃	(2.82)	(2.08)	0.73	(3.15)	〃	B	
112		〃	〃	〃	〃 検	2.10	(1.60)	0.23	(0.60)	〃	〃	
113	21	〃	〃	〃	〃 〃	(2.23)	2.05	0.53	(2.50)	〃	A	
114		?	?	〃	〃 〃	(2.92)	(1.76)	0.80	(2.70)	〃	B	
115		〃	〃	?	〃 〃	(1.66)	(1.38)	(0.37)	(0.65)	〃	F	
116		〃	〃	〃	〃 〃	(2.05)	(1.39)	0.30	(0.85)	チャート	G	
117		凹	無	IV	〃 〃	2.06	1.30	0.37	0.65	黒曜石	O	
118		〃	〃	〃	〃 〃	(1.93)	1.54	0.40	(0.90)	〃	A	
119	22	〃	〃	〃	〃 〃	1.73	1.39	0.29	0.45	〃	O	
120		平	〃	〃	22住	2.34	1.91	0.84	3.35	〃	〃	
121	23	凹	〃	〃	〃	(1.85)	(1.73)	0.26	(0.60)	〃	B	
122		〃	〃	III	〃	2.03	1.54	0.35	0.65	〃	O	
123		〃	〃	IV	〃	1.64	(1.63)	0.48	(0.85)	〃	B	
124		?	?	〃	〃	(2.18)	(1.51)	(0.35)	0.90	〃	〃	未成品
125		凹	無	〃	〃	1.73	(1.64)	0.43	(0.70)	〃	〃	
126		〃	〃	〃	〃	(1.10)	(1.37)	(0.26)	(0.30)	チャート	D	
127		〃	〃	〃	〃 検	(1.57)	(1.40)	0.30	0.60	〃	〃	
128		〃	〃	〃	〃 〃	2.37	1.30	0.29	0.80	〃	O	
129		〃	〃	〃	23住	(1.91)	(1.73)	(0.85)	(1.55)	黒曜石	D	
130		〃	〃	〃	〃	1.86	(1.23)	0.31	(0.45)	〃	B	
131		〃	〃	〃	〃	(1.12)	1.37	(0.20)	(0.30)	〃	A	
132		?	?	?	〃	(1.96)	(1.46)	(0.24)	(0.70)	〃	F	
133		〃	〃	〃	〃	2.78	(2.12)	0.73	(3.70)	〃	B	未成品
134		凹	無	IV	〃	(1.28)	(1.45)	0.28	(0.50)	〃	〃	
135		?	?	V	〃	(1.85)	(1.09)	(0.22)	(0.40)	〃	F	
136	24	〃	〃	〃	〃	(3.52)	(2.28)	(0.71)	(4.90)	〃	〃	未成品
137		凹	無	〃	〃	(1.97)	(1.57)	0.46	(1.15)	〃	D	
138		〃	〃	〃	〃	(1.93)	(1.78)	0.29	(0.85)	〃	〃	
139		〃	〃	〃	〃	(1.13)	(1.52)	(0.22)	(0.35)	〃	A	
140		〃	〃	〃	〃	2.04	(1.47)	0.30	(0.55)	〃	B	
141		〃	〃	IV	〃	(1.13)	1.57	0.27	(0.35)	〃	A	
142		〃	〃	〃	〃 検	(1.94)	(1.27)	0.35	(0.70)	〃	D	
143		?	?	?	〃 〃	(1.82)	(1.23)	(0.27)	(0.55)	〃	F	
144		凹	無	V	24住	(1.60)	(1.94)	(0.43)	(1.45)	〃	D	

NO	図 NO	分 類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損 状況	備 考
		基 部	茎 部	側 縁								
145		?	?	?	24住	(1.14)	(1.43)	(0.41)	(0.50)	黒曜石	F	
146		凹	無	IV	〃	(2.03)	3.00	(0.43)	(2.20)	〃	A	未成品
147		〃	〃	?	25住埋甕	(2.37)	(1.44)	0.46	(0.95)	〃	C	
148		〃	〃	IV	26住P 7	(1.95)	(1.43)	0.35	(0.70)	〃	B	
149		〃	〃	〃	26住	(1.70)	(1.19)	0.21	(0.40)	〃	〃	
150		〃	〃	?	〃	(1.66)	(1.56)	0.37	(1.00)	〃	G	未成品
151		〃	〃	V	〃	(1.52)	1.90	0.35	(1.00)	チャート	A	
152		〃	〃	?	28住P 8	(1.65)	(0.93)	0.27	(0.30)	黒曜石	C	
153		〃	〃	V	29住	(2.14)	1.53	0.47	(1.25)	〃	A	
154		〃	〃	IV	30住炉	0.99	1.03	0.20	0.15	〃	O	
155		〃	〃	〃	〃 P 1	1.81	1.15	0.24	0.45	〃	〃	未成品 側縁つぶれ
156	25	〃	〃	V	〃 P 9	1.41	1.42	0.22	0.40	〃	〃	
157		?	〃	IV	〃 〃	(1.26)	(1.58)	0.36	(0.70)	〃	E	
158		凹	〃	V	〃 〃	(2.20)	(1.77)	0.24	(0.50)	〃	B	
159		?	?	?	〃 〃	2.12	1.87	0.53	1.75	〃	O	未成品
160		〃	〃	〃	〃 〃	-	-	-	(0.35)	〃	D	
161	26	凹	無	IV	30住	(1.24)	1.63	1.24	(0.70)	〃	A	
162		〃	〃	〃	32住	(1.36)	1.21	0.24	(0.35)	〃	〃	
163		〃	〃	?	〃	(2.31)	(1.40)	0.35	(0.90)	〃	C	
164		〃	〃	IV	土48	(1.57)	1.30	0.25	(0.35)	〃	A	
165		〃	〃	?	土56	(1.21)	(1.25)	(0.19)	(0.25)	〃	E	
166		〃	〃	V	土58	(2.08)	(1.27)	(0.28)	(0.70)	〃	D	
167		?	?	?	土93	3.10	2.48	0.99	7.30	チャート	O	未成品
168		凹	無	IV	土97	(1.95)	(1.34)	0.28	(0.85)	黒曜石	D	
169		〃	〃	V	〃	(2.53)	(1.65)	0.60	(2.05)	〃	B	未成品?
170	27	〃	〃	?	土101	(1.86)	(1.17)	(0.25)	(0.55)	チャート	C	
171		?	?	〃	土103	2.69	1.70	0.52	1.85	黒曜石	O	未成品
172		凹	無	〃	土113	(2.09)	(1.65)	0.63	(1.80)	〃	C	
173		?	?	〃	土151	3.17	2.40	0.83	6.40	チャート	O	未成品
174		凹	無	〃	土154	(1.36)	(1.33)	0.31	(0.40)	黒曜石	G	
175		〃	〃	IV	土167	2.45	(1.66)	0.24	(0.65)	〃	B	
176		?	?	?	土169	2.04	1.40	0.50	1.25	〃	O	未成品
177		〃	〃	〃	土179	(2.21)	(1.84)	0.33	(1.10)	〃	F	
178		〃	〃	〃	〃	(2.25)	1.46	(0.55)	(1.60)	〃	E	未成品
179		凹	無	〃	〃	(2.13)	(1.85)	0.47	(1.70)	〃	G	
180		〃	〃	〃	土180	(2.02)	(1.30)	0.26	(0.55)	〃	C	
181		〃	〃	IV	土190	1.68	(1.38)	(0.40)	(0.60)	〃	A	
182	28	〃	〃	〃	土214	2.10	1.25	0.37	0.90	〃	O	
183		〃	〃	〃	土258	(1.75)	(1.29)	0.27	(0.50)	〃	D	
184		〃	〃	V	土271	(1.75)	1.67	0.45	(1.35)	〃	A	
185	29	凸	有	III	土272	2.25	(1.15)	0.63	(1.35)	〃	B	
186	30	凹	無	IV	土273	1.63	1.35	0.38	0.65	〃	O	
187		〃	〃	〃	土285	(1.28)	1.44	0.24	(0.45)	〃	A	
188	31	〃	〃	〃	土286	1.93	1.34	0.38	0.75	〃	O	
189		〃	〃	III	土297	(2.30)	(1.26)	0.30	(0.70)	〃	D	
190	32	平	〃	IV	〃	1.85	(1.66)	0.42	(0.90)	〃	B	未成品
191		?	?	?	〃	2.72	2.06	0.70	3.75	〃	O	〃
192		〃	〃	〃	土335	-	-	-	(0.15)	〃	G	残片
193		凹	無	〃	〃	(1.25)	(1.17)	0.34	(0.40)	〃	〃	
194		〃	〃	IV	土347	1.85	(1.70)	0.45	(0.85)	〃	B	
195		?	?	?	土390	(2.34)	(1.30)	0.64	(1.55)	〃	D	

NO	図 NO	分 類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損 状況	備 考
		基 部	茎 部	側 縁								
196		凹	無	V	±390	(1.75)	(1.05)	0.47	(0.55)	黒曜石	B	
197		〃	〃	〃	±394	(2.16)	(1.55)	0.40	(1.35)	〃	C	
198	33	〃	〃	IV	±401	1.53	1.42	0.19	0.35	〃	O	
199		?	?	?	〃	(1.80)	(1.11)	(0.30)	(0.45)	〃	C	
200		凹	無	III	〃	(2.14)	(1.36)	(0.25)	(0.55)	チャート	D	
201		〃	〃	?	〃	3.20	2.19	1.23	5.09	黒曜石	O	未成品
202	34	平	〃	V	±403	(1.76)	1.71	0.30	(1.00)	〃	A	
203		凹	〃	〃	±404	2.20	1.56	0.67	1.70	〃	O	
204		〃	〃	IV	±539	(1.85)	(1.58)	0.25	(0.55)	〃	D	
205		〃	〃	?	±569	(1.42)	(1.14)	0.30	(0.40)	〃	C	
206	35	〃	〃	IV	±584	(2.31)	(1.40)	0.35	(0.95)	〃	D	
207		?	?	?	±680	(2.40)	(1.57)	(0.52)	(1.60)	〃	G	
208		〃	〃	〃	±705	2.39	1.80	0.80	2.60	〃	O	未成品
209	36	平	〃	IV	±708	2.37	(2.04)	0.85	(3.50)	〃	B	
210		凹	無	〃	±756	(1.76)	(1.35)	0.21	(0.40)	〃	D	
211		〃	〃	V	±773	(2.73)	(1.62)	0.35	(1.25)	〃	B	
212	37	〃	〃	IV	〃	1.55	1.32	0.31	0.40	〃	O	
213	38	〃	〃	〃	〃	1.20	1.28	0.36	0.50	〃	〃	
214		〃	〃	〃	±779	(1.16)	(1.10)	0.23	(0.30)	〃	D	
215		?	?	?	±810	(2.86)	(1.71)	(0.30)	(1.30)	〃	F	未成品
216	39	凹	無	V	±825	2.90	1.41	0.19	0.50	チャート	O	
217		〃	〃	IV	〃	(2.17)	(1.39)	0.48	(1.25)	黒曜石	D	
218		〃	〃	?	±859	(2.09)	(1.47)	0.47	(1.25)	チャート	C	
219		〃	〃	IV	±877	(1.29)	1.38	0.27	(0.35)	黒曜石	A	
220		?	?	?	±881	2.57	2.13	1.11	4.50	〃	O	未成品
221		凹	無	IV	±882	2.92	1.85	0.50	1.55	〃	〃	
222		〃	〃	〃	±912	1.65	1.16	0.29	0.40	〃	〃	
223		〃	〃	?	±937	(1.89)	(1.40)	0.37	(0.90)	〃	C	
224		〃	〃	IV	±952	(1.94)	(1.22)	0.23	(0.40)	〃	D	
225		〃	〃	〃	±994	2.19	1.40	0.38	0.70	〃	O	
226		?	?	?	±1019	(1.85)	(0.94)	(0.31)	(0.50)	〃	F	
227		〃	〃	〃	±1052	3.01	2.51	0.91	4.10	チャート	O	未成品
228		凹	無	〃	±1088	(1.40)	(1.41)	0.36	(0.60)	黒曜石	G	
229		〃	有	IV	±1117	(2.08)	(1.40)	0.40	(1.15)	チャート	B	
230		〃	無	I	±1130	(1.50)	1.35	0.50	(0.55)	黒曜石	A	
231		〃	〃	IV	検	1.67	(1.33)	0.50	(0.80)	〃	B	
232	40	〃	〃	〃	〃	1.25	1.20	0.17	0.20	〃	O	
233		〃	〃	〃	〃	(1.40)	(1.08)	0.32	(0.30)	〃	D	
234		〃	〃	〃	〃	(1.83)	(1.44)	0.35	(0.55)	〃	〃	
235		〃	〃	〃	〃	(2.31)	(1.52)	0.30	(0.70)	〃	C	
236		〃	〃	〃	〃	1.98	1.49	0.40	0.75	〃	O	
237		〃	〃	?	〃	(1.73)	(1.26)	0.32	(0.50)	〃	G	
238		〃	〃	IV	〃	(1.45)	(1.41)	0.28	(0.45)	〃	D	
239		〃	〃	V	〃	(1.49)	(1.40)	0.31	(0.55)	硅化凝灰質泥岩	〃	
240		〃	〃	?	〃	(1.36)	(0.89)	0.31	(0.30)	黒曜石	E	
241		〃	〃	IV	〃	(1.72)	(1.25)	0.21	(0.40)	〃	B	
242		?	?	?	〃	2.29	1.92	0.60	2.55	〃	O	未成品
243		〃	〃	〃	〃	(1.73)	(1.09)	(0.21)	(0.45)	〃	E	
244	41	凹	無	V	〃	(1.93)	(1.42)	0.28	(0.65)	〃	D	
245	42	?	?	?	〃	4.13	2.45	0.45	4.80	チャート	O	未成品
246		〃	〃	V	〃	(2.28)	(1.96)	0.32	(1.55)	〃	F	

NO	図 NO	分類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損 状況	備考
		基部	茎部	側縁								
247		?	?	?	検	(1.60)	(1.01)	(0.33)	(0.45)	黒曜石	F	
248		凹	無	IV	〃	2.24	1.82	0.54	2.60	〃	O	未成品
249		〃	〃	〃	〃	(1.43)	(1.25)	0.28	(0.45)	〃	E	
250		平	〃	〃	〃	(1.67)	(1.55)	0.49	(0.90)	〃	D	
251		?	?	?	〃	(2.06)	(1.14)	(0.26)	(0.35)	〃	F	
252		凹	無	〃	〃	(1.74)	(0.96)	0.30	(0.35)	〃	C	
253		〃	〃	〃	〃	(1.62)	(1.21)	0.32	(0.50)	〃	〃	
254		?	?	?	〃	(2.20)	(1.91)	(0.36)	(1.30)	〃	F	
255	43	凹	無	I	〃	1.44	1.25	0.19	0.30	〃	O	
256	44	?	?	?	〃	(1.65)	(1.20)	(0.30)	(0.50)	〃	F	局部磨製
257	45	凹	無	III	排土	1.65	1.57	0.12	0.30	〃	O	〃
258	46	〃	〃	V	〃	1.67	1.53	0.17	0.35	〃	〃	〃
259	47	〃	〃	IV	〃	(2.76)	(1.77)	0.43	(1.45)	〃	D	
260	48	〃	〃	〃	〃	2.13	1.49	0.38	0.70	〃	O	局部磨製
261		?	?	?	〃	(1.78)	(1.31)	(0.29)	(0.50)	〃	F	未成品
262		凹	無	III	〃	(1.60)	(1.30)	0.37	(0.50)	〃	B	
263		〃	〃	V	〃	(2.19)	(1.46)	0.31	(0.65)	〃	D	
264		〃	〃	IV	〃	(1.97)	(1.32)	0.40	(0.60)	〃	B	
265		〃	〃	?	〃	(2.45)	(1.57)	0.50	(1.30)	〃	C	
266		〃	〃	〃	〃	(1.42)	(1.47)	0.23	(0.45)	〃	G	
267		?	?	〃	〃	1.45	1.40	0.34	0.60	〃	O	未成品
268		凹	無	〃	〃	(1.56)	(1.22)	0.28	(0.35)	〃	C	
269		〃	〃	IV	〃	1.97	1.45	0.24	0.50	〃	O	
270		〃	〃	〃	〃	1.65	1.58	0.29	0.50	〃	〃	
271		〃	〃	〃	〃	1.60	1.26	0.34	0.40	〃	〃	
272		〃	〃	V	〃	(1.49)	(1.40)	0.14	(0.25)	〃	B	
273		?	?	?	〃	—	—	—	(0.10)	〃	E	
274		〃	〃	〃	〃	—	—	—	(0.15)	〃	〃	
275		凹	無	IV	〃	(1.93)	(1.32)	0.23	(0.50)	〃	C	
276		〃	〃	〃	〃	(1.17)	1.22	0.33	(0.30)	〃	A	
277		?	?	?	〃	(1.62)	(1.08)	(0.21)	(0.35)	〃	F	
278		凹	無	V	〃	2.16	1.75	0.31	0.70	〃	O	

③ 石錐

NO	図 NO	分類		出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損 状況	備考
		形態	調整								
1	49	?	両	2住	(2.22)	(0.76)	(0.53)	(0.95)	黒曜石	頭部欠	錐部摩耗
2	50	棒	〃	4住	3.12	1.05	0.54	1.75	〃	完形	〃
3		〃	片	5住 No17	3.85	1.27	0.65	2.55	〃	〃	
4		〃	両	5住	2.45	1.11	0.34	0.95	〃	〃	
5	51	つ	〃	〃	(2.65)	(1.14)	(0.43)	(1.30)	〃	上端欠	
6	52	〃	片	6住	1.75	1.20	0.48	0.80	〃	完形	
7		〃	両	7住	(3.44)	(1.37)	(0.56)	(2.15)	硅化凝灰質泥岩	頭部欠	
8		〃	〃	14住 No10下	(2.23)	1.07	0.73	(1.60)	黒曜石	錐部欠	
9	53	〃	〃	15住	2.17	1.33	0.45	1.15	〃	完形	錐部摩耗
10		棒	片	16住 検	2.58	0.58	0.28	0.40	〃	〃	
11		〃	両	19住 〃	(2.48)	0.86	0.65	(1.00)	〃	頭端欠	
12		〃	〃	〃 〃	(2.66)	0.87	0.39	(0.80)	〃	〃	
13		つ	〃	21住	(3.09)	1.87	0.67	(3.70)	チャート	錐部端欠	
14	54	?	〃	〃	1.95	0.89	0.58	1.00	黒曜石	完形	
15		〃	〃	〃	(2.04)	(0.63)	(0.38)	(0.55)	〃	両側欠	
16	55	つ	〃	22住 P 5	3.54	1.17	0.51	1.75	〃	完形	
17		棒	片	30住 P 9	1.98	0.94	0.52	0.75	〃	〃	
18		〃	両	30住	(2.75)	(0.82)	(0.43)	(1.10)	〃	片側辺欠	

NO	図 NO	分 類		出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破 損 状 況	備 考
		形態	調整								
19		つ	両	土100	(2.90)	(1.40)	(0.55)	(1.40)	黒曜石	頭部欠	
20		?	〃	土179	(2.30)	(0.99)	(0.65)	(1.35)	〃	〃	
21	56	〃	〃	〃	(2.87)	(0.77)	(0.70)	(1.45)	〃	〃	錐部摩耗
22		棒	〃	土297	(2.38)	0.84	0.34	(0.60)	〃	上端欠	〃
23	57	〃	〃	土599	2.72	1.88	0.75	1.70	〃	完形	〃
24		つ	〃	土979	(3.11)	1.50	(0.69)	(2.55)	〃	錐部端欠	
25		棒	片	土1005	3.49	1.04	0.71	1.90	〃	完形	
26		?	両	検	(1.84)	(0.64)	(0.35)	(0.50)	〃	両側欠	
27	58	棒	〃	〃	2.42	0.75	0.46	1.00	チャート	完形	
28	59	〃	〃	〃	2.80	0.67	0.37	0.60	黒曜石	〃	
29	60	つ	〃	〃	3.36	1.50	0.76	3.10	チャート	〃	両端に錐部
30	61	〃	〃	〃	(3.44)	(2.15)	(1.05)	(5.07)	〃	縦半欠	
31	62	棒	片	〃	(2.21)	0.60	0.44	(0.50)	黒曜石	錐部端欠	
32	63	つ	両	〃	2.03	1.33	0.24	0.75	〃	完形	
33		〃	〃	排土	2.77	1.23	1.12	3.25	〃	〃	
34	64	?	〃	〃	(3.45)	(1.35)	(0.82)	(4.25)	チャート	上部欠	
35		〃	〃	〃	(1.55)	(0.79)	(0.43)	(0.50)	黒曜石	頭部欠	
36		〃	〃	〃	(1.37)	(0.59)	(0.38)	(0.35)	〃	〃	
37		棒	〃	〃	(2.00)	0.87	0.54	(0.95)	〃	錐部欠	

④ ピエス・エスキーユ

NO	図 NO	分 類		出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破 損 状 況	備 考
		剥離	縁部								
1	65	I	○	2住	2.28	1.72	0.80	2.55	黒曜石		
2	66	〃		3住	2.13	1.15	0.93	2.40	〃		
3		〃	△	〃	2.02	1.51	0.84	2.80	〃		
4		〃		〃	2.16	2.20	0.55	3.20	〃		
5	67	〃	△	4住	1.73	1.58	0.56	1.65	〃		
6		〃		5住	1.52	0.97	0.41	0.70	〃		
7		〃		〃	2.40	1.38	0.60	2.30	〃		
8		〃		〃	1.51	0.65	0.45	0.70	〃		
9		〃		6住	1.80	0.94	0.75	1.20	〃		
10		〃	△	9住	1.82	1.53	0.65	1.70	〃		
11		〃		11住検	1.94	1.19	0.68	1.50	〃		
12	68	〃	○	14住	1.35	0.98	0.49	0.85	〃		
13		〃	▽	〃	3.49	1.46	0.98	4.90	〃		
14		〃	▽	15住	1.20	1.16	0.40	0.55	〃		
15		〃	○	18住検	1.77	1.66	0.74	2.15	〃		
16		〃	○	〃	1.04	1.26	0.48	1.00	〃		
17		〃	▽	21住	2.20	1.19	1.14	2.50	〃		
18		〃	▽	24住埋甕	2.00	0.55	0.39	0.50	〃		
19		〃	○	30住	2.05	1.83	1.38	4.65	〃		
20		〃		32住	1.52	1.30	0.60	1.35	〃		
21	69	〃	○	土207	2.72	1.52	1.06	3.10	〃		
22	70	〃		土233	2.09	1.77	0.97	2.20	〃		
23		〃	○	土256	1.60	1.00	0.75	1.10	〃		
24		〃	△	土569	2.32	1.82	0.79	3.05	〃		
25		〃	△	土970	1.70	2.50	0.83	1.60	〃		
26	71	II		土1095	2.50	3.04	1.16	8.50	〃		
27		I	○	土1125	2.00	1.53	0.80	2.20	〃		
28		〃	○	検	2.43	1.68	1.19	3.90	〃		
29		〃		〃	2.17	1.60	0.63	1.85	〃		
30		〃	○	〃	1.97	2.16	0.96	4.60	〃		
31		〃	△	〃	1.49	1.16	0.53	1.00	〃		
32		〃	▽	〃	2.20	1.50	0.92	2.70	〃		
33	72	〃		〃	2.01	1.40	0.70	1.85	〃		
34		〃		〃	2.84	0.78	0.38	1.05	〃		
35		II		排土	1.33	1.14	0.35	0.60	〃		

⑤ 石匙

No.	図 No.	分類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
		分位置	刃部	調整								
1	73	横	直	両	5住 No.60	5.45	(9.09)	1.58	(49.75)	粘板岩	ほぼ完形	
2	74	〃	〃	〃	11住 検	2.60	3.25	0.66	4.45	チャート	完形	
3		〃	外	片	14住 No.18	(4.36)	(3.60)	0.71	(10.20)	〃	刃部欠	
4	75	斜	〃	〃	〃	5.17	2.17	0.74	9.14	硅化凝灰質泥岩	完形	
5	76	〃	〃	〃	〃	5.14	4.24	0.93	18.55	チャート	〃	
6	77	?	?	?	15住	(5.82)	(5.13)	(0.81)	(27.90)	砂岩	刃部欠	
7		横	外	両	21住 検	3.05	5.06	1.42	13.75	チャート	完形	
8	78	〃	直	片	〃 〃	3.34	(3.83)	0.51	(6.50)	〃	片側欠	
9		斜	〃	両	23住	(3.20)	(3.47)	0.66	(6.45)	〃	刃部欠	
10	79	横	外	〃	26住	1.18	(2.45)	0.20	(0.50)	黒曜石?	ほぼ完形	
11		〃	〃	片	土 179	1.90	2.30	0.45	1.60	チャート	完形	
12	80	斜	直	〃	土 510	(9.71)	7.87	1.08	(71.45)	砂岩	つまみ端欠	未成品?
13		横	外	両	検	4.07	4.40	0.89	13.45	黒曜石?	完形	〃 ?
14		?	?	?	〃	(2.55)	(1.97)	(0.62)	(2.65)	チャート	刃部欠	
15	81	横	外	両	〃	2.80	4.82	0.73	8.95	〃	完形	
16	82	斜	〃	〃	排土	3.39	(5.00)	0.70	(15.40)	〃	刃部欠	
17	83	横	直	〃	不明	5.94	8.23	1.02	(47.10)	粘板岩	ほぼ完形	

⑥ スクレイパー

No.	図 No.	分類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
		刃部	調整	素材								
1		直	両	?	3住 検	9.59	6.16	1.14	79.50	粘板岩	完形	
2		〃	〃	縦	5住 P16	3.58	1.50	0.55	2.20	黒曜石	〃	
3		内	片	〃	5住	5.35	4.23	1.16	28.15	チャート	〃	
4		直	両	横	5住 検	6.49	(7.27)	1.83	(80.20)	硅質粘板岩	片側端欠	
5	84	〃	〃	〃	〃 〃	4.70	14.57	1.15	84.60	粘板岩	完形	
6		〃	〃	?	6住	3.48	4.33	1.02	16.00	チャート	〃	
7	85	外	〃	横	〃	3.71	7.08	0.86	21.30	粘板岩	〃	
8	86	直	〃	〃	14住 No.14	4.71	11.04	0.84	54.70	〃	〃	
9		〃	〃	縦	14住	3.92	2.84	0.95	9.15	チャート	〃	
10	87	〃	〃	横	〃	5.18	9.58	1.33	52.30	粘板岩	〃	
11		外	片	〃	〃	3.60	(7.80)	0.64	(18.15)	〃	片側端欠	
12		?	〃	?	〃	(1.49)	(2.07)	(0.29)	(1.25)	黒曜石	〃	
13	88	外	両	横	〃	4.57	(7.72)	1.25	(60.40)	砂質泥岩	〃	刃部摩耗
14		〃	〃	?	15住 検	6.82	8.28	1.67	103.80	チャート	完形	
15		直	片	〃	〃 〃	2.67	2.91	0.76	3.80	黒曜石	〃	
16	89	外	〃	縦	17住 P 5	3.87	1.76	2.05	3.65	〃	〃	
17		〃	両	横	〃	3.73	5.53	1.36	28.10	チャート	〃	
18		直	片	〃	〃	4.12	6.30	0.55	15.30	粘板岩	〃	
19		〃	〃	縦	〃 検	(4.26)	2.94	0.56	(3.20)	黒曜石	片側端欠	
20	90	外	両	?	19住 検	5.00	3.29	0.72	13.45	チャート	完形	
21		〃	片	〃	20住 P 6	5.25	2.50	1.22	13.50	黒曜石	〃	
22	91	〃	〃	縦	20住	4.74	3.03	0.94	13.30	チャート	〃	
23	92	〃	〃	?	〃	(7.86)	(7.21)	(2.32)	(132.60)	硬砂岩	片側欠	
24	93	内	〃	縦	〃	3.71	2.08	1.00	5.90	黒曜石	完形	
25		〃	〃	横	〃	3.00	3.20	0.84	7.50	〃	〃	
26		外	〃	縦	21住	(5.43)	2.74	1.24	(20.85)	チャート	片側端欠	
27		〃	両	?	23住	(3.18)	(3.26)	(0.90)	(12.65)	〃	片側欠	
28		?	?	〃	30住 炉	(3.69)	(1.81)	(0.59)	(3.25)	硅質泥岩	残片	
29		外	両	〃	〃 〃	(2.69)	(3.93)	(0.42)	(2.30)	チャート	片側欠	
30		直	〃	縦	〃 P 9	3.41	3.09	0.52	4.35	黒曜石	完形	
31	94	外	〃	〃	〃 〃	4.57	2.48	0.55	5.40	〃	〃	
32		直	〃	?	31住	(2.73)	(1.73)	(0.40)	(1.40)	〃	片側欠	

NO	図 NO	分 類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損 状況	備 考
		刃部	調 整	素 材								
33		内	片	縦	32住	4.05	2.80	1.18	9.15	黒曜石	完形	
34	95	直	〃	横	土 47	4.71	6.10	1.61	43.65	チャート	〃	
35		〃	〃	?	土 157	7.05	9.92	2.10	164.90	硬砂石	〃	
36		内	両	〃	土 233	7.26	4.74	1.11	27.00	チャート	〃	
37	96	外	〃	縦	土 294	2.65	5.02	0.98	12.70	黒曜石	〃	
38	97	〃	片	〃	土 856	5.81	3.04	0.95	14.50	〃	〃	
39		直	両	〃	土 877	(3.28)	(1.46)	0.36	(1.45)	〃	片欠	
40		〃	片	?	土 1019	2.18	2.15	0.79	3.05	〃	完形	
41	98	内	両	縦	検	9.09	2.35	1.61	22.50	〃	〃	石刃状剥片
42	99	外	〃	横	〃	2.84	4.27	1.15	18.15	チャート	〃	
43	100	内	片	縦	〃	(4.97)	(1.51)	(1.37)	(7.40)	黒曜石	片欠	
44	101	外	〃	?	〃	7.62	8.98	1.36	115.46	粘板岩	完形	
45	102	〃	〃	〃	〃	2.01	1.88	0.60	2.35	黒曜石	〃	
46	103	〃	両	〃	〃	(5.30)	(3.52)	1.25	(23.90)	チャート	片欠	
47	104	直	片	縦	排 土	4.87	2.07	0.99	7.20	黒曜石	完形	
48		〃	〃	横	〃	4.19	(10.32)	(0.79)	(40.95)	砂質泥岩	片欠	

⑦ 打製石斧

NO	図 NO	分 類		出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	使 用 頭部	痕 刃部	破損 状況	備 考
		平面	刃部										
1		撥	円	2住	7.87	(4.13)	1.10	(36.10)	砂岩		●	B ₁	
2		分	〃	〃	11.83	4.81	2.08	151.00	〃	○		O	
3		撥	?	〃 検	(7.43)	(5.57)	(1.48)	(72.00)	〃			A ₁	
4		?	〃	3住 P11	(8.60)	(6.23)	(1.23)	(93.00)	凝灰質泥岩			C	
5		〃	〃	〃	(6.38)	(4.07)	(1.02)	(32.40)	砂質凝灰岩			A ₂	
6		撥	円	〃	(6.80)	4.70	(1.81)	(77)	硅質頁岩		●	B ₂	
7	105	〃	偏	〃	11.58	8.61	2.06	183.50	砂岩		●	O	未成品
8		?	?	〃	—	—	—	(15.40)	粘板岩		●	E	残片
9	106	撥	偏	4住No.4	(14.65)	5.44	1.56	(150.70)	砂岩			B ₃	
10	107	〃	円	〃	14.52	7.10	2.51	298.50	〃			O	
11		?	?	5住No.33	(8.39)	(4.44)	(1.95)	(79.00)	粘板岩			C	未成品?
12		撥	偏	〃 No.49	(8.41)	5.39	1.36	(76.40)	〃		●	B ₃	
13	108	短	円	〃 No.54	12.29	4.26	1.95	131.70	砂岩	○		O	
14	109	〃	?	5住	(9.14)	(3.45)	(1.44)	(71.30)	〃		●	C	
15		〃	偏	〃	(6.88)	(3.81)	(1.36)	(42.00)	粘板岩			B ₂	
16		?	?	6住 P3	(7.43)	(3.66)	(0.97)	(29.50)	硅質頁岩			C	
17		〃	〃	11住No.3	10.06	5.27	2.30	142.70	粘板岩			O	未成品
18		撥	〃	〃 No.4	11.46	6.19	2.49	246.20	〃			〃	〃
19		〃	〃	〃 検	(11.38)	(4.49)	(1.86)	(101.40)	〃			A ₃	
20	110	〃	偏	〃	(10.71)	5.36	1.45	(87.70)	砂岩			B ₃	
21		?	?	13住	(5.50)	(5.46)	(0.81)	(35.40)	粘板岩			A ₁	
22		撥	円	〃	10.74	4.67	1.61	115.00	〃	○	●	O	
23		短	?	14住	(9.59)	(4.25)	1.84	(96.00)	〃	○		A ₃	
24		撥	偏	〃	8.67	5.59	1.69	115.60	〃			O	
25		〃	?	〃	(8.46)	(4.23)	(1.90)	(92.80)	砂岩			A ₃	
26		?	〃	〃	(6.53)	(6.32)	(1.69)	(89.30)	粘板岩			C	
27	111	短	偏	〃	17.30	6.05	1.67	211.00	〃			O	
28		撥	円	〃	(6.04)	5.14	1.86	(86.70)	〃		●	B ₂	
29		〃	?	15住No.10	(12.83)	(4.60)	(1.98)	(112.00)	〃	○		A ₁	
30		〃	〃	15住	(6.45)	(3.88)	(1.59)	(45.40)	〃	○		A ₂	
31		〃	偏	〃	9.30	7.94	2.40	192.90	砂岩			O	未成品?
32		〃	〃	〃	(9.39)	4.73	(1.28)	(60.80)	粘板岩	○		B ₃	

NO	図 NO	分類		出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	使用痕			破損 状況	備考
		平面	刃部							頭部	胴部	刃部		
33		分	?	15住	(8.02)	(5.55)	(1.74)	(97.10)	粘板岩				A ₂	
34	112	撥	偏	〃	9.35	5.68	1.40	74.70	砂岩				O	
35		短	?	〃 検	(11.87)	(5.17)	(2.94)	(251.80)	硅質頁岩				C	
36		?	〃	〃 〃	(5.98)	(3.31)	(1.10)	(28.70)	砂質粘板岩				A ₁	
37	113	分	円	〃 〃	11.49	5.59	1.15	97.20	粘板岩				O	
38		短	?	16住〃	(6.06)	(3.93)	(2.14)	(93.80)	〃				A ₃	
39		?	〃	〃 〃	(4.97)	(3.50)	(1.51)	(40.30)	〃		○		A ₁	
40		〃	直	19住〃	(10.53)	(8.87)	(3.11)	(385)	〃				B ₂	
41	114	分	円	〃 〃	18.50	7.55	2.44	355	砂岩				O	
42	115	短	直	〃 〃	11.84	4.68	3.98	267.70	砂質粘板岩		○	●	〃	
43	116	〃	円	20住〃	9.54	4.95	1.78	106.80	粘板岩				〃	
44	117	撥	直	21住〃	12.91	4.43	1.92	139.30	〃				〃	
45	118	分	偏	22住	10.07	5.16	1.24	80.20	〃			●	〃	
46		撥	円	23住No14	9.97	4.33	1.34	68.70	〃			●	〃	
47		分	?	23住	(6.81)	(3.87)	(1.25)	(40.80)	硅質頁岩				A ₁	
48	119	撥	円	〃	(8.49)	4.16	1.32	(54.80)	粘板岩				B ₃	
49		?	直	24住	(7.65)	(5.40)	(1.16)	(62.80)	〃			●	B ₂	
50	120	分	円	〃	10.60	4.90	2.29	154.00	〃		○	●	O	
51	121	撥	〃	26住	14.72	6.71	2.72	335	〃		○	●	〃	
52		〃	偏	〃	(6.52)	4.23	(0.83)	(35.10)	〃			●	B ₃	
53		〃	?	27住	(7.70)	(5.06)	(0.90)	(44.10)	〃				A ₂	未成品?
54		?	〃	〃	(4.28)	(5.56)	(1.83)	(39.30)	〃				A ₁	
55		撥	〃	〃	(11.60)	(8.08)	(3.12)	(355)	砂岩		○		A ₂	
56	122	〃	偏	30住No.1	9.12	7.00	1.79	106.70	〃				O	
57	123	短	〃	〃 No.2	(15.39)	(7.80)	3.60	(620)	〃				B ₃	
58		?	?	30住	(6.64)	(4.46)	(2.00)	(65.30)	粘板岩				A ₁	
59		〃	?	32住	—	—	—	(15.40)	砂岩			●	E	残片
60		撥	偏	±60	(8.94)	5.01	(1.40)	(66.30)	粘板岩				B ₃	
61		?	円	〃	(5.38)	(5.54)	(1.00)	(42.00)	砂岩			●	B ₁	
62		〃	?	±125	(6.85)	(4.80)	(1.32)	(48.40)	粘板岩				C	
63		短	円	±147	10.10	3.16	1.07	49.80	〃			●	O	
64		?	?	±157	—	—	—	(25.00)	硅質頁岩				E	残片
65		短	円	±209	8.21	3.72	1.18	45.90	粘板岩				O	
66	124	撥	偏	±394	9.28	4.75	1.49	82.60	〃		○	●	〃	
67		?	?	±517	(9.86)	(3.98)	(0.76)	(36.00)	〃				E	未成品?
68		撥	円	±713	(9.23)	5.26	1.43	(97)	〃				B ₃	
69	125	〃	〃	±716	9.05	9.65	1.50	89.00	砂岩			●	O	
70		〃	〃	±945	(7.17)	4.45	(0.94)	(35.30)	粘板岩				B ₂	
71		〃	?	±1127	(6.02)	(4.65)	(2.76)	(101.10)	〃				A ₁	
72		〃	偏	検	9.24	3.98	1.13	53.60	〃		○	●	O	
73		短	?	〃	(7.01)	(3.75)	(1.25)	(50.80)	〃				C	
74		?	円	〃	(8.52)	(6.25)	(1.60)	(107.50)	〃			●	B ₂	
75		撥	?	〃	(7.15)	(6.26)	(2.25)	(127)	硅質頁岩				C	
76		?	偏	〃	(6.87)	(4.21)	(1.15)	(48.60)	粘板岩				B ₂	
77		短	円	〃	10.34	3.80	1.62	83.70	〃				O	
78		撥	〃	〃	(7.16)	(4.83)	(1.75)	(74.00)	硅質頁岩				B ₂	
79		〃	?	〃	(6.70)	(3.92)	(1.66)	(55.70)	粘板岩				C	
80		〃	〃	〃	(7.43)	(2.44)	(0.74)	(16.20)	砂岩				A ₁	
81		〃	〃	〃	(7.41)	(4.19)	(1.95)	(75.20)	硅質頁岩	●			〃	
82		分	〃	〃	(6.64)	(3.74)	(1.74)	(50.40)	粘板岩				〃	
83		撥	〃	〃	(9.74)	(4.67)	(0.89)	(53.50)	〃		●		A ₃	

NO	図NO	分類		出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	使用痕			破損 状況	備考
		平面	刃部							頭部	胴部	刃部		
84		?	?	検	(6.59)	(3.88)	(1.21)	(48)	硅質頁岩				A ₁	
85		撥	偏	〃	10.01	5.04	1.90	90.60	粘板岩				O	
86		短	?	〃	(8.04)	(2.80)	1.31	(51.40)	〃		○		A ₃	
87		撥	〃	〃	(6.89)	(4.19)	(1.21)	(41.20)	〃				A ₂	
88		〃	〃	排土	(8.17)	(4.25)	(1.61)	(71.20)	砂質粘板岩				A ₃	
89	126	〃	円	〃	11.46	8.18	2.40	304	砂岩			●	O	

⑧ 磨製石斧

NO	図NO	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	残存 状況	備考
1		?	5住	—	—	—	(3.10)	硬玉質	E	残片
2		定角?	6住	11.05	6.52	2.40	238.10	砂岩	O	未成品
3	127	乳棒	9住	(8.78)	(4.79)	(2.77)	(136.10)	緑泥片岩質	B ₁	
4	128	定角?	11住 検	(11.41)	4.09	(1.75)	(115.20)	硬玉質	C	
5	129	定角	14住 No.6	(5.64)	3.70	(1.14)	(45.20)	〃	B ₃	
6		〃	14住	—	—	—	(7.50)	粘板岩	E	残片
7	130	ノミ	〃	(3.65)	(2.07)	(0.84)	(10.10)	緑色凝灰岩	B ₂	
8		乳棒	20住	(10.90)	(4.38)	(4.04)	(220.10)	砂質粘板岩	C	未成品
9	131	定角	24住 No.5	10.60	(4.26)	2.01	(183.70)	硬玉質	A ₁	
10		〃	26住	—	—	—	(11.50)	緑泥片岩	E	残片
11	132	ノミ	土 406	(3.22)	(1.28)	(0.28)	(2.45)	?	〃	
12	133	定角?	検	5.35	3.80	0.97	35.20	硅化凝灰質泥岩	O	未成品
13	134	定角	南側包含層	6.73	3.79	1.31	57.80	硬玉質	〃	
14	135	〃	排土	(9.55)	(4.33)	1.98	(142.30)	〃	A ₃	
15	136	〃	〃	(10.54)	(5.59)	2.21	(265.70)	〃	〃	
16		〃	〃	—	—	—	(10.75)	〃	E	残片

⑨ 凹・敲・磨石

NO	図NO	使用痕			素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損 状況	備考
		凹部	敲打	磨面									
1	137	○(2+2)		○	C	2住 No.1	10.10	8.10	3.79	380	安山岩	完形	
2	138	○(1+2)		○	G	3住 No.10	(9.49)	(7.05)	(4.51)	(475)	溶質凝灰岩	1/2欠	特殊磨石
3				○	?	3住	(9.48)	(3.63)	(6.27)	(216)	〃	3/4欠	
4		○(1+1)			C	〃	(10.35)	6.94	3.56	(375)	砂岩	1/4欠	
5				○	B	5住 No.41	15.40	9.68	4.96	1000	溶質凝灰岩	完形	
6		○(2+2)	○		〃	5住	(11.40)	(8.90)	(5.69)	(570)	砂岩	1/3欠	
7		○(1+1)		○	G	〃	(9.30)	(6.60)	(5.94)	(535)	〃	2/3欠	特殊磨石
8				○	〃	9住 No.5	(10.60)	(6.24)	(5.58)	(525)	〃	〃	〃
9		○(2+1)			H	14住	18.90	5.10	2.90	445	硅質頁岩	完形	
10	139	○(2)		○	B	〃	8.84	6.35	4.85	335	溶質凝灰岩	〃	
11				○	C	〃	(5.60)	(6.87)	(3.37)	(140)	〃	1/2欠	
12				○	?	〃	(9.23)	(3.16)	(1.45)	(45)	頁岩	残片	
13		○(2+1)		○	G	15住	(8.80)	(5.33)	(3.05)	(270)	砂岩	1/2欠	
14				○	〃	16住 P.3	(5.33)	(6.45)	(4.95)	(285)	〃	両側欠	特殊磨石
15				○	E	18住 検	(6.50)	(8.77)	(5.75)	(470)	安山岩	1/2欠	
16	140	○(1)	○	○	B	20住 No.1	10.27	7.76	5.00	520	〃	完形	
17		○(2+2)			C	20住	(10.40)	(8.90)	(3.55)	(380)	砂岩	1/2欠	
18		○(2+1)		○	E	〃	(6.67)	(6.70)	(4.97)	(259)	凝灰岩	1/4欠	
19		○(2)	○		B	21住	9.93	7.86	5.39	550	砂岩	完形	
20		○(2+2)	○	○	〃	〃	11.49	8.63	4.87	620	〃	〃	
21				○	E	〃	7.86	6.70	4.82	355	〃	〃	
22				○	I	〃 検	(8.30)	(7.56)	(6.84)	(365)	〃	2/3欠	特殊磨石

NO	図 NO	使 用 痕			素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損 状況	備 考
		凹部	敲打	磨面									
23		○ (2+1)			C	21住 検	10.30	8.00	2.54	290	砂岩	完形	
24			○		H	〃 〃	(6.80)	(5.23)	(1.96)	(95)	〃	両側欠	
25				○	I	22住	(9.40)	(5.88)	(4.72)	(350)	〃	1/2欠	特殊磨石
26				○	〃	〃	14.54	4.82	3.10	290	〃	完形	
27				○	E	〃 検	8.56	7.50	4.64	320	〃	〃	
28		○ (2+2)		○	〃	23住 No.6	9.74	9.62	6.62	785	溶質凝灰岩	〃	
29		○ (2+2)			G	〃 No.8	16.20	4.50	3.27	410	砂岩	〃	
30	141	○ (1+1)		○	B	24住 P.2	(9.99)	8.31	4.43	(420)	凝灰岩	1/5欠	
31	142			○	〃	〃 No.7	11.55	8.69	5.31	695	〃	完形	
32	143	○ (1)			E	〃 No.8	9.25	8.18	6.07	525	〃 ?	〃	
33		○ (2+2)		○	C	24住	9.01	8.62	3.55	345	凝灰岩	〃	
34		○ (1)		○	E	25住 No.3	9.05	8.68	4.28	460	安山岩	〃	
35	144	○ (1+1)		○	F	27住 炉	8.28	7.29	3.70	310	砂岩	〃	
36		○ (1+1)		○	B	27住	(8.00)	(6.37)	(5.24)	(360)	溶質凝灰岩	1/2欠	
37		○ (2+1)			H	28住 炉	(15.10)	5.90	(2.37)	(340)	砂質凝灰岩	1/6欠	
38	145	○ (2×3+1)			?	29住	9.30	6.73	3.93	295	凝灰岩	完形	
39	146	○ (2)	○	○	G	30住 No.3	11.37	7.33	7.43	995	砂岩	〃	
40	147	○ (2+2)		○	B	31住	12.03	10.12	4.19	815	〃	〃	
41				○	〃	〃	(13.06)	(6.94)	(3.49)	(460)	〃	1/2欠	
42				○	H	33住	9.10	3.58	2.00	109	〃	完形	
43				○	?	土48	—	—	—	(168)	〃	残片	
44				○	B	〃	18.20	8.63	5.35	1100	凝灰岩	完形	
45				○	〃	土56	(7.22)	(8.61)	(4.90)	(500)	砂岩	1/2欠	
46				○	A	土97 No.5	8.61	7.95	7.56	730	安山岩	完形	
47		○ (2+1)		○	C	土157	(6.20)	(7.50)	(3.05)	(195)	砂岩	1/2欠	
48		○ (2)	○	○	〃	土179	9.23	7.40	3.53	350	〃	完形	
49		○ (2)		○	B	〃	8.63	7.41	4.12	320	溶質凝灰岩	〃	
50				○	?	土237	—	—	—	(26)	砂岩	残片	
51	148	○ (1+1)		○	C	土302	7.95	6.36	3.48	228	凝灰岩	完形	
52				○	〃	土323	(6.75)	(5.40)	(2.29)	(109)	砂岩	1/2欠	
53				○	〃	土328	(9.03)	(8.23)	(2.46)	(201)	〃	〃	
54				○	G	土401	(7.20)	(4.80)	(3.77)	(162)	〃	残片	
55	149			○	B	土404	14.05	6.79	4.12	595	〃	完形	特殊磨石
56			○	○	?	土405	—	—	—	(410)	〃	残片	
57			○		C	土568	5.21	4.24	3.26	99	溶質凝灰岩	完形	
58		○ (2+1)			B	土831	10.21	8.61	5.47	520	凝灰岩	〃	
59		○ (2)		○	E	土885	(8.60)	(5.10)	(4.20)	(260)	安山岩	1/2欠	
60		○ (1+1)		○	B	土1122	9.80	9.42	5.40	735	〃	完形	
61	150			○	G	検	14.65	5.29	4.94	630	砂岩	〃	特殊磨石
62				○	C	〃	(7.69)	(6.68)	(3.69)	(223)	溶質凝灰岩	1/2欠	
63				○	B	〃	9.51	8.17	4.07	455	〃	完形	
64				○	G	〃	14.49	6.83	5.30	900	安山岩	〃	
65	151	○ (1+2)	○	○	E	〃	8.62	7.75	4.71	420	溶質凝灰岩	〃	
66				○	B	〃	13.60	(7.48)	5.32	(680)	凝灰岩	1/5欠	
67				○	?	〃	—	—	—	(196)	溶質凝灰岩	残片	
68	152		○	○	I	〃	(10.20)	(6.81)	(5.60)	(520)	砂岩	1/2欠	特殊磨石
69	153	○ (1)		○	G	〃	(10.69)	(5.94)	(5.70)	(490)	〃	〃	
70		○ (2)		○	C	〃	12.16	8.56	3.84	555	溶質凝灰岩	完形	
71		○ (1+1)		○	I	〃	(10.22)	(5.31)	(5.25)	(495)	砂岩	1/2欠	特殊磨石
72			○		A	〃	10.81	8.40	5.10	620	凝灰岩	完形	
73				○	I	〃	(7.80)	(5.70)	(5.10)	(267)	砂岩	両側欠	

NO	図 NO	使 用 痕			素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損 状況	備 考
		凹部	敲打	磨面									
74		○ (2×3)			G	検	14.03	5.09	5.00	515	凝灰岩	完形	
75				○	〃	〃	(10.80)	(7.13)	(5.97)	(615)	安山岩	1/3欠	
76		○ (1)		○	I	〃	12.77	(7.15)	(5.20)	(640)	〃	片側縁欠	特殊磨石
77				○	〃	〃	(12.40)	(9.54)	(6.84)	(900)	溶質凝灰岩	1/2欠	〃
78				○	〃	排 土	(9.79)	(6.78)	(5.29)	(455)	砂岩	〃	
79	154	○ (1)		○	D	〃	9.48	7.65	4.45	420	凝灰岩	完形	
80		○ (4+3)		○	H	〃	18.70	7.60	2.51	550	安山岩	〃	
81			○	○	B	〃	9.03	(6.94)	4.93	(400)	溶質凝灰岩	1/4欠	
82	155		○	○	G	〃	(9.21)	(6.53)	(6.70)	(600)	砂岩	1/3欠	特殊磨石
83				○	I	〃	(6.93)	(6.01)	(5.52)	(280)	安山岩	残片	〃
84				○	〃	〃	(7.20)	(5.35)	(4.93)	(265)	砂岩	〃	
85				○	G	〃	(8.36)	(6.70)	(6.36)	(555)	安山岩	両側欠	

⑩ 石皿

NO	図 NO	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損状況	備 考
1		3住 No.11	—	—	—	(1200)	砂岩	残片	
2	156	15住 P8 No.1	(22.60)	(27.40)	(8.30)	(7450)	〃	1/2欠	
3	157	27住 No.7	(32.70)	31.70	11.50	(13600)	〃	ほぼ完形	

⑪ 砥石

NO	図 NO	素材	砥面	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損状況	備 考
1		D	(1)	5住 床	(11.13)	(16.30)	(3.48)	(765)	砂岩	?	
2		A	(1)	15住 No.11	(15.50)	(15.90)	(3.61)	(1650)	〃	〃	
3	158	〃	(4)	〃	(6.51)	(4.22)	(0.76)	(27)	凝灰岩	1/3欠	
4	159	E	(3)	22住	(6.17)	(4.08)	(1.90)	(69)	砂岩	1/2欠	
5	160	A	(2)	〃 検	19.80	(16.00)	2.40	(1200)	〃	1/4欠	
6		D	(2)	24住No.1 炉	—	—	—	(900)	〃	残片	
7		〃	(1)	27住 No.3	(15.21)	(9.89)	(4.07)	(1100)	花崗岩	〃	
8	161	B	(4)	排 土	(5.23)	(4.16)	(1.70)	(43)	凝灰岩	?	

⑫ 原石・石核

NO	図 NO	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損状況	備 考
1		2住	4.85	4.19	1.15	17.75	黒曜石		
2		3住 P 5	3.94	2.41	1.60	12.35	〃		石核
3		〃	3.76	2.82	1.90	24.50	〃		
4		4住 P 10	4.15	2.56	1.55	14.40	〃		石核
5		〃 P 13	3.93	3.24	1.73	16.60	〃		
6		〃 〃	3.99	1.83	1.07	9.60	〃		
7		〃 〃	3.70	2.69	1.80	21.90	〃		
8		〃 〃	3.20	3.34	1.62	12.35	〃		
9		5住 検	4.52	2.97	2.13	26.70	〃		
10		〃 〃	4.53	4.10	1.72	33.25	〃		
11		12住 〃	10.10	5.89	5.91	330	〃		
12		13住	3.98	2.92	2.63	38.55	〃		
13		〃	6.25	5.10	2.07	62.80	〃		
14		〃	5.92	3.58	3.04	67.95	〃		
15		〃	6.10	3.90	2.63	76.40	〃		
16		14住 P 18	3.72	2.87	1.87	24.60	〃		
17		14住	3.88	3.58	1.66	24.65	〃		

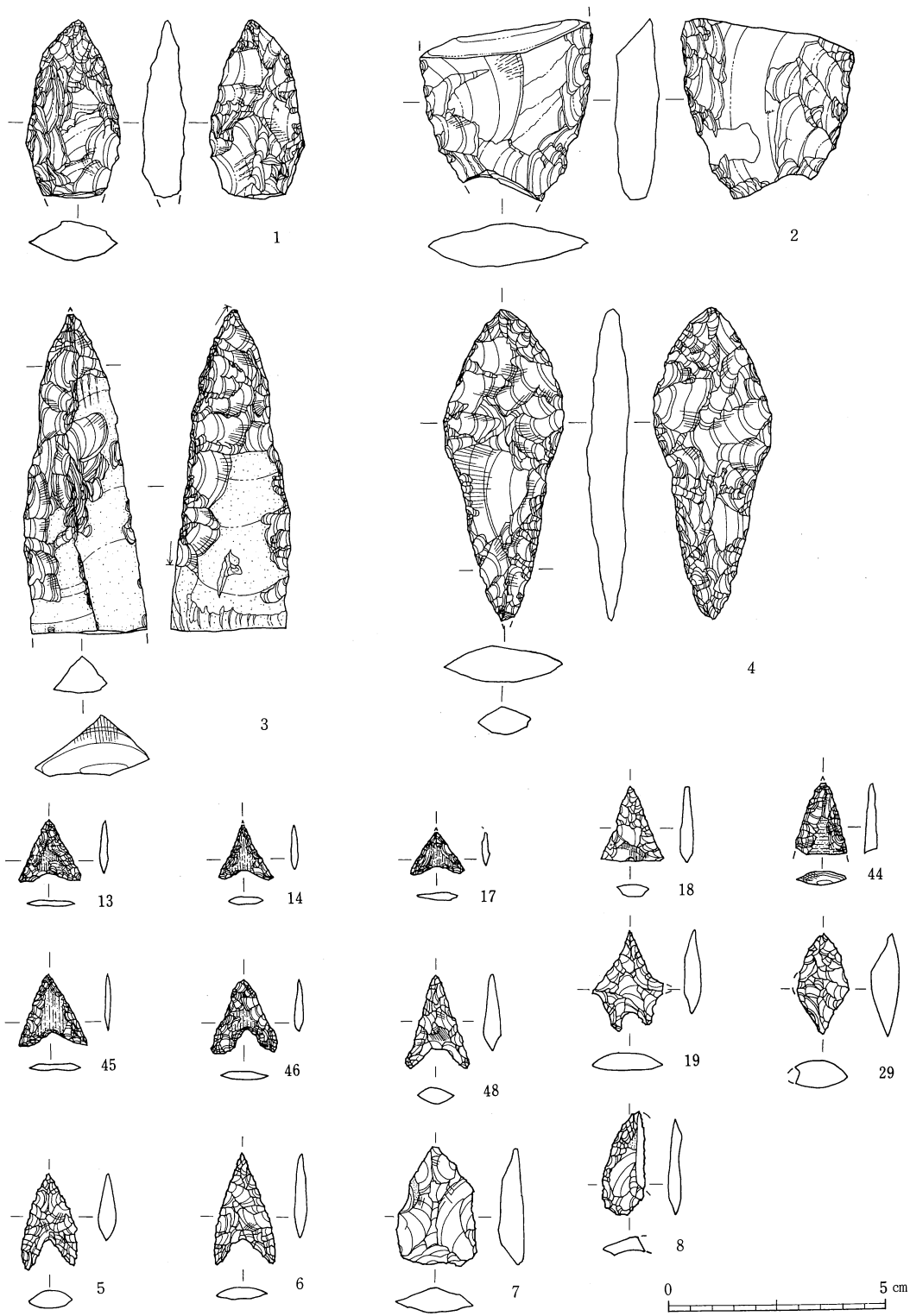
NO	図 NO	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	破損状況	備 考
18		14住	3.64	2.10	1.33	8.30	黒曜石		石核
19		15住	3.97	2.98	1.74	25.02	〃		
20		〃	3.74	2.88	0.78	8.60	〃		
21		〃	4.01	3.13	1.56	21.75	〃		石核
22		〃 検	4.68	3.65	1.90	29.55	〃		
23		17住 〃	5.18	3.28	1.78	27.70	〃		石核
24		19住	3.76	2.29	2.14	19.70	〃		
25		〃 検	3.61	3.45	1.58	14.00	〃		
26		〃 〃	3.65	3.53	2.91	39.80	〃		
27		〃 〃	6.25	3.05	1.80	19.15	〃		
28		20住 〃	4.24	3.24	0.90	13.25	〃		
29		〃 〃	3.70	3.00	1.81	17.50	〃		
30		〃 〃	4.62	3.12	3.47	53.60	〃		石核
31		〃 〃	3.98	3.62	1.10	16.30	〃		
32		21住	5.24	4.70	3.19	91.01	〃		石核
33		〃	3.10	2.21	1.80	11.45	〃		
34		〃	4.00	3.08	1.89	19.35	〃		
35		24住 No.9	8.08	4.30	1.50	50.04	〃		石核
36		24住	4.34	3.01	2.37	29.40	〃		〃
37		〃	3.58	2.64	2.84	31.70	〃		〃
38		25住 P 2	5.00	3.40	2.47	48.35	〃		
39		土60	5.70	4.40	2.04	34.45	〃		石核
40		土97 No.6	5.72	2.38	0.83	10.06	〃		
41		土534	4.66	2.61	0.80	9.30	〃		
42		〃	4.08	5.80	0.78	6.95	〃		
43		〃	2.60	2.32	0.93	6.35	〃		
44		土537	5.71	2.52	1.90	25.06	〃		
45		検	4.07	3.40	2.55	38.65	〃		
46		〃	3.68	3.22	2.37	23.00	〃		
47		〃	8.81	2.10	1.46	24.55	〃		
48		〃	4.09	2.44	2.10	20.06	〃		
49		〃	4.90	4.10	2.29	40.09	〃		
50		〃	6.62	3.44	1.07	23.25	〃		
51		〃	3.67	2.97	2.70	34.85	〃		石核
52		〃	2.53	2.46	1.89	10.01	〃		〃
53		〃	3.98	3.13	1.93	26.40	〃		〃
54		〃	4.75	2.66	1.62	20.05	〃		
55		〃	4.85	3.43	2.04	29.90	〃		
56		〃	3.92	3.09	2.17	22.45	〃		
57		〃	4.31	3.10	2.34	40.01	〃		石核
58		〃	3.25	3.01	2.93	31.75	〃		〃
59		南側包含層	4.06	3.32	1.53	20.09	〃		
60		排土	3.61	3.34	2.55	34.30	〃		

第6表 石製品一覧表

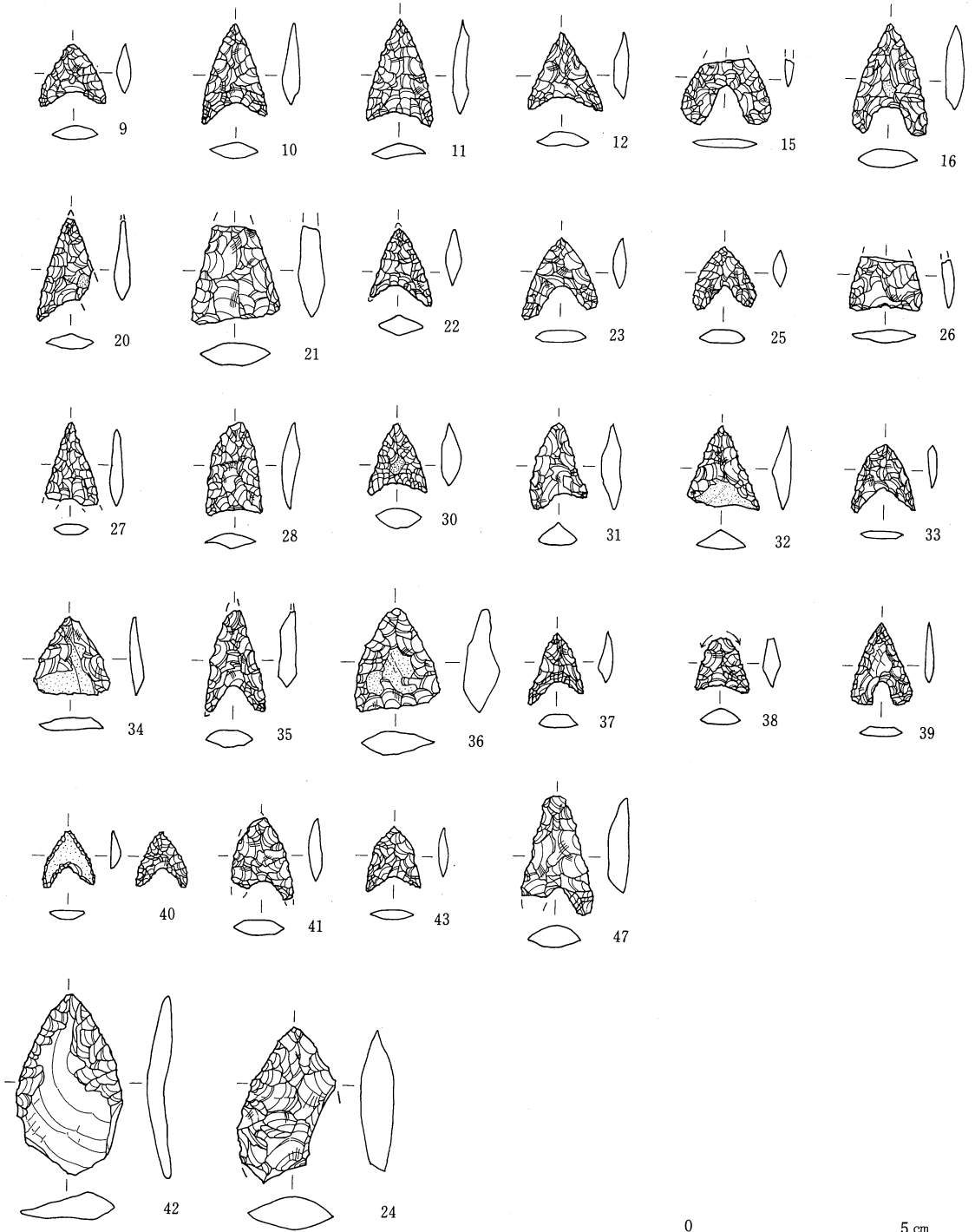
NO	図 NO	種類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	1	不明	4住	(10.90)	(1.69)	(1.20)	(31)	砂岩	1/2欠	
2	2	〃	7住	(1.45)	(1.10)	(0.71)	(2)	滑石	完形	未成品?
3	3	石棒	27住 No.2	(21.70)	(8.90)	(7.27)	(2200)	砂岩	1/2欠	

第7表 土製品一覧表

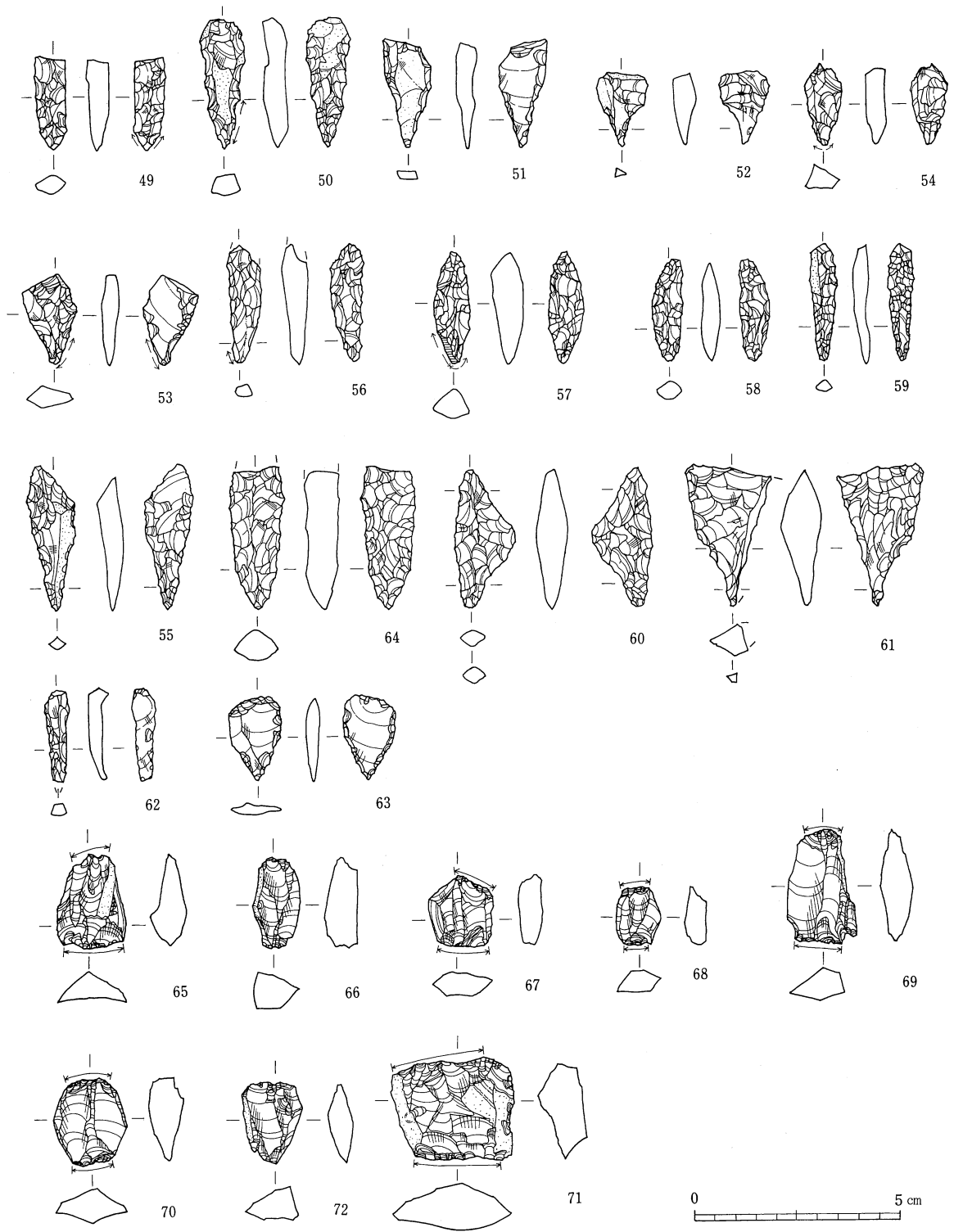
NO	図 NO	種類	出土地点	長さ 口径 (cm)	幅 底径 (cm)	厚さ 器高 (cm)	重さ (g)	残存状況	備考
1	1	土偶	3住	(3.3)	(3.2)	(4.5)	(34.5)	片脚	芯棒痕1
2	2	〃	5住	(2.5)	(6.4)	(2.0)	(28.2)	両腕	〃
3	3	〃	15住	(9.7)	(4.1)	(8.6)	(196.7)	片脚	〃
4			24住						
5	4	〃	19住 検	(2.4)	(6.4)	(1.7)	(20.1)	両腕	〃
6	5	〃	土226	(3.6)	(3.3)	(6.0)	(71.7)	片脚	〃
7	6	〃	土228	(2.8)	(3.9)	(3.8)	(29.7)	〃	
8	7	土製円盤	2住	3.6	4.0	(0.7)	10.9	ほぼ完形	表面剥落
9	8	〃	3住	3.7	3.9	0.8	9.2	完形	
10	9	〃	8住	5.4	5.6	1.1	37.1	〃	
11	10	〃	21住	4.1	4.2	0.8	14.7	〃	
12		〃	26住	3.6	3.7	(1.3)	14.5	ほぼ完形	表面剥落
13	11	ミニチュア土器	24住埋甕2内	4.8	3.6	0.7	41.5	完形	鉢形、手づくね
14	12	〃	30住 No.2	—	3.9	—	(47.2)	底~胴部	深鉢形
15	13	不明	18住	—	—	—	(11.7)	不明	
16		被熱粘土塊	17住	5.9	4.4	3.3	58.9		
17		〃	〃	5.2	4.9	3.6	53.4		
18		〃	〃	5.5	3.5	3.2	43.1		
19		〃	18住	7.2	6.7	3.0	83.2		
20		〃	〃	6.0	4.1	3.6	60.5		
21		〃	〃	5.8	4.8	3.8	64.1		
22		〃	〃	4.2	2.9	2.8	23.1		
23		〃	土97	3.5	2.1	2.0	8.6		棒状工具による刺突



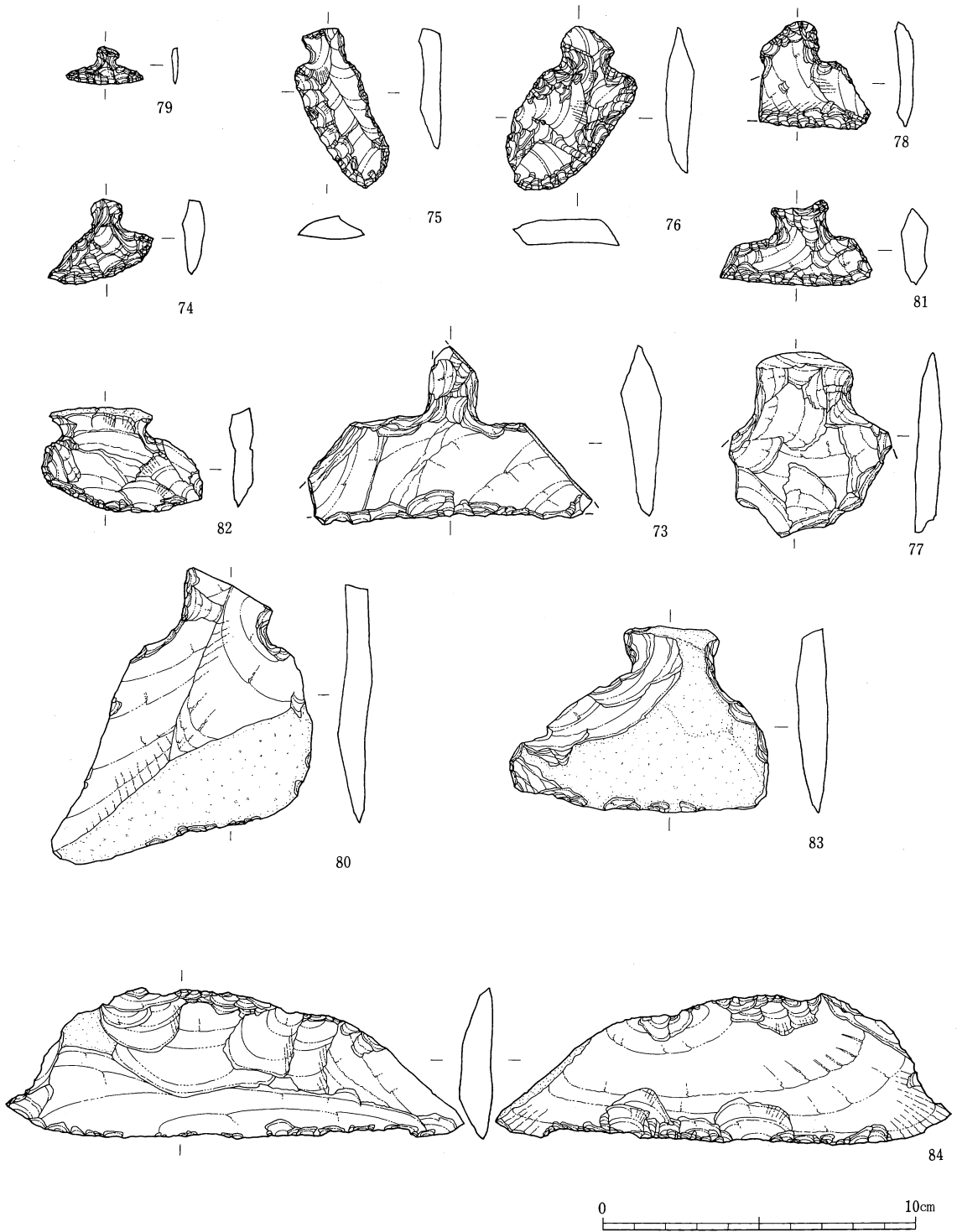
第106図 石器 (1) 石槍 (1~4), 局部磨製石鏃 (13·14·17·18·44~46·48)
石鏃 (5~8·19·29)



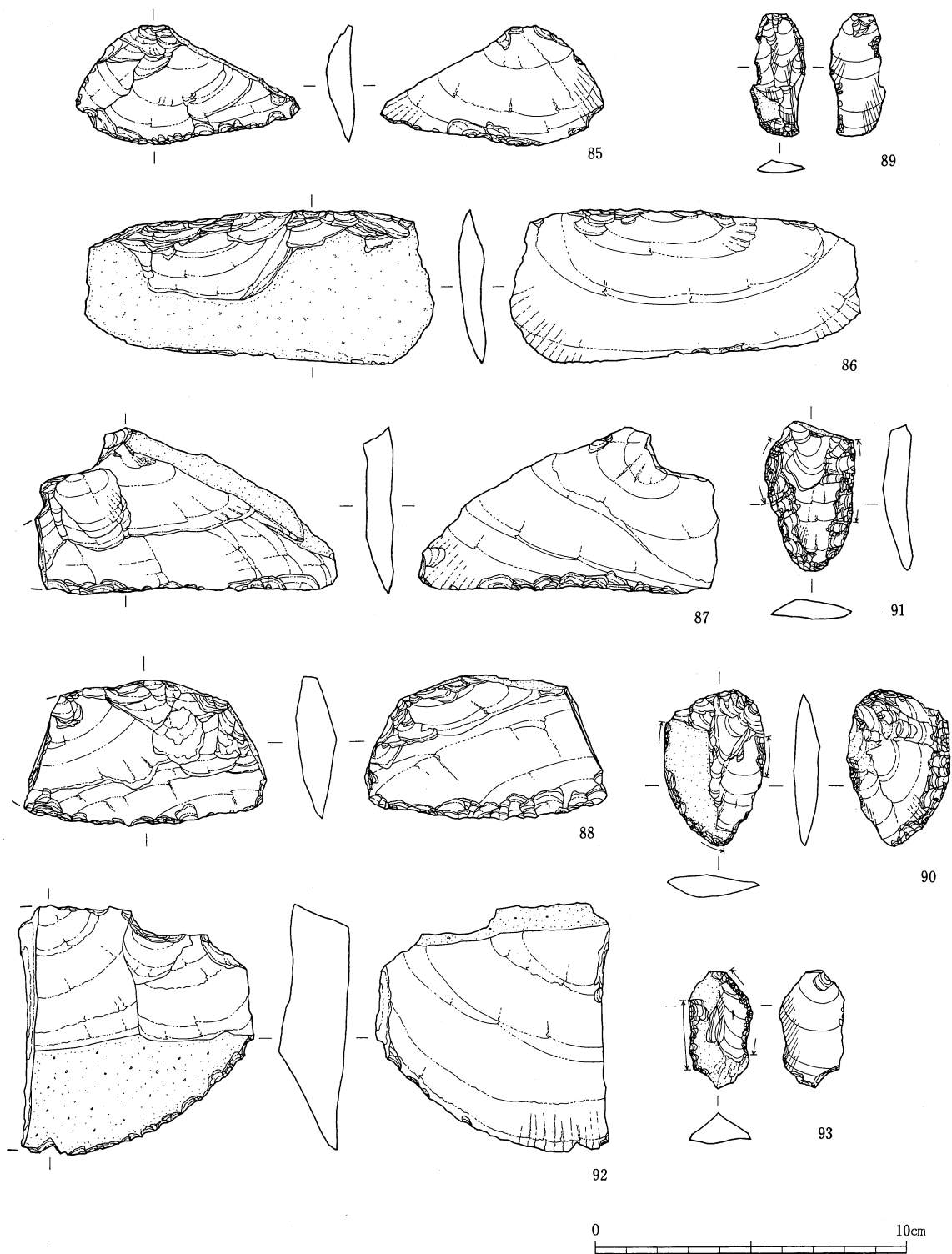
第107图 石器 (2) 石鏃 (9~12·15·16·20~28·30~43·47)



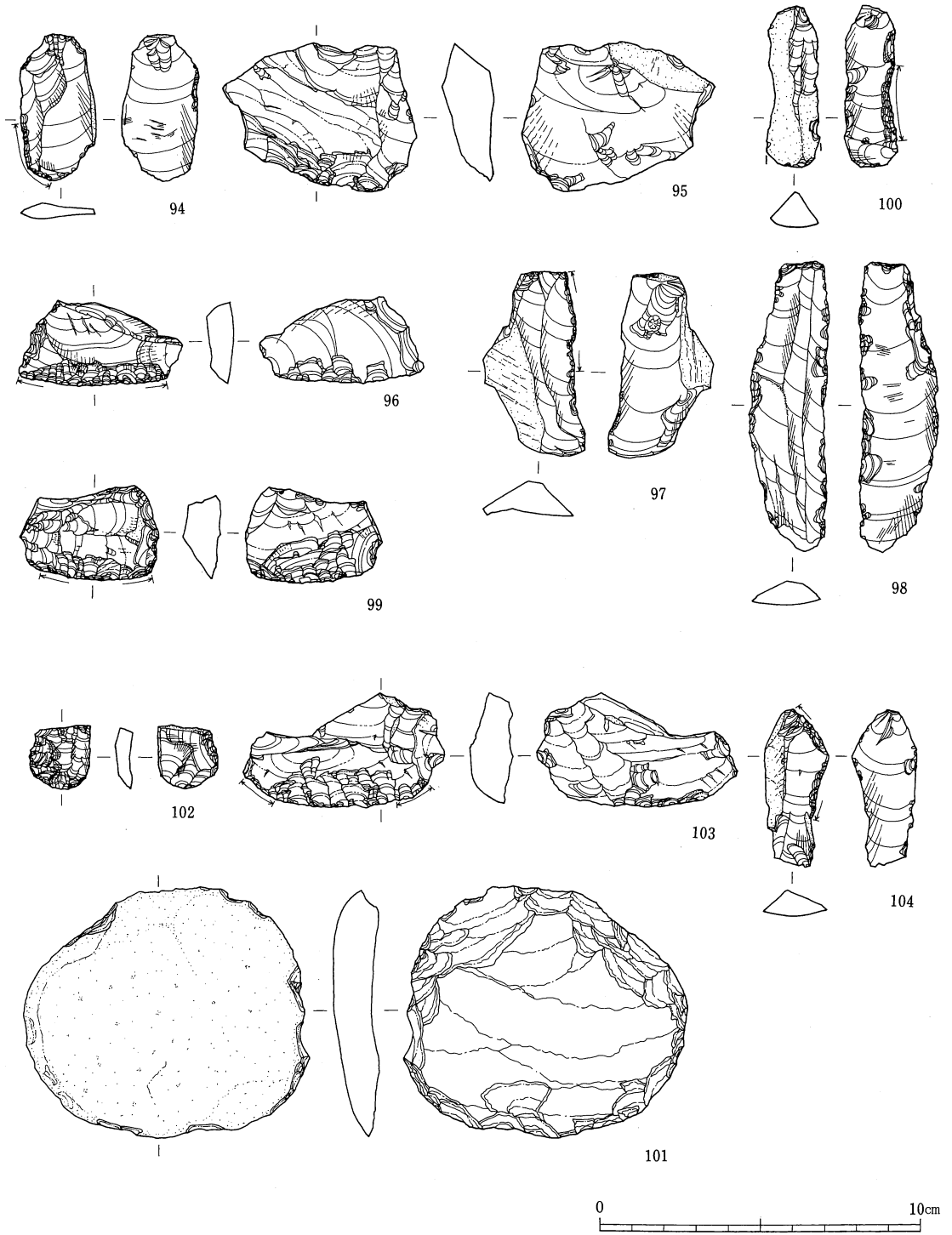
第108図 石器 (3) 石錐 (49~64), ピエス・エスキュー (65~72)



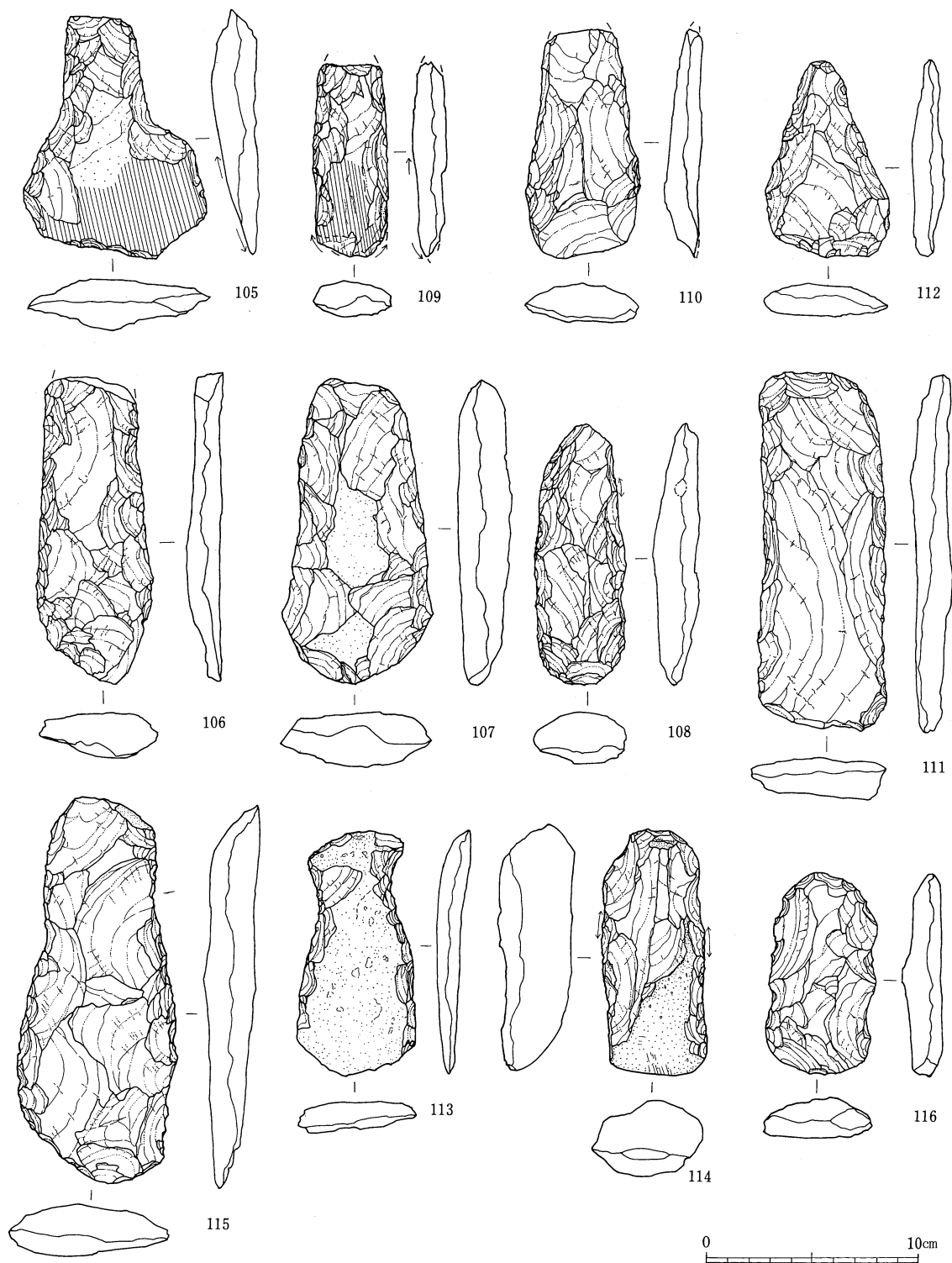
第109図 石器 (4) 石匙 (74~83), スクレイパー (84)



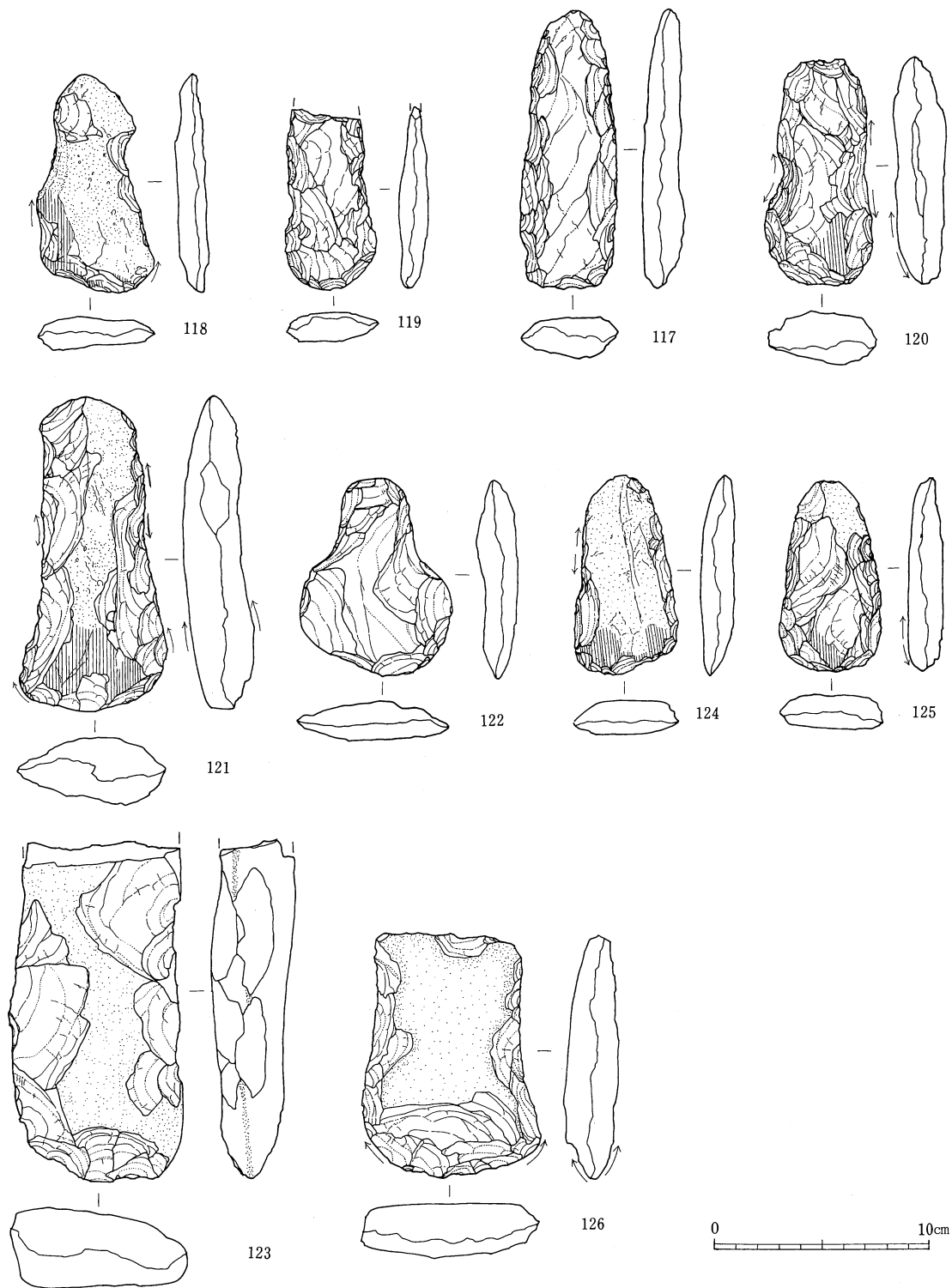
第110図 石器 (5) スクレイパー (85~93)



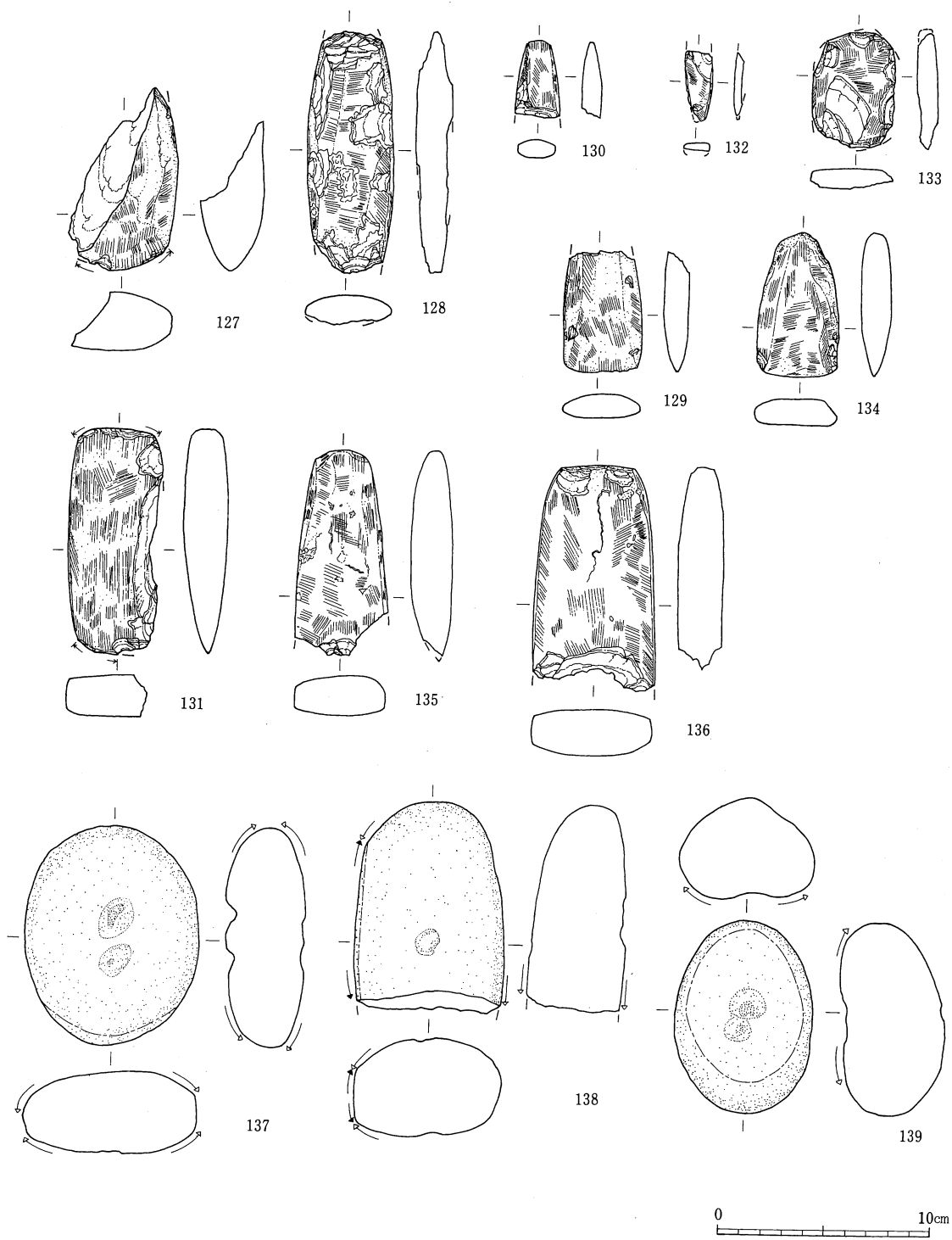
第111図 石器 (6) スクレイパー (94~101)



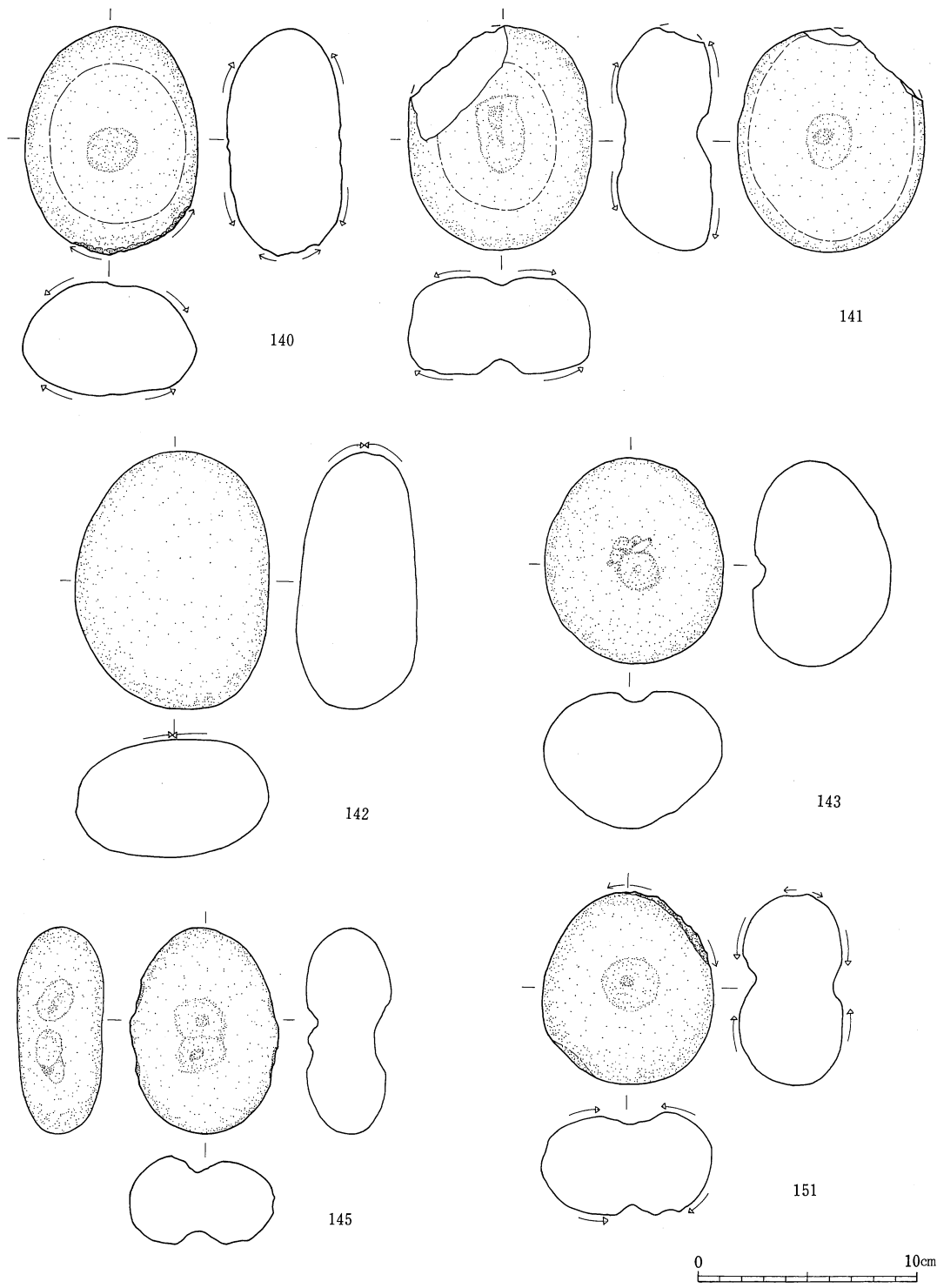
第112图 石器 (7) 打製石斧 (105~116)



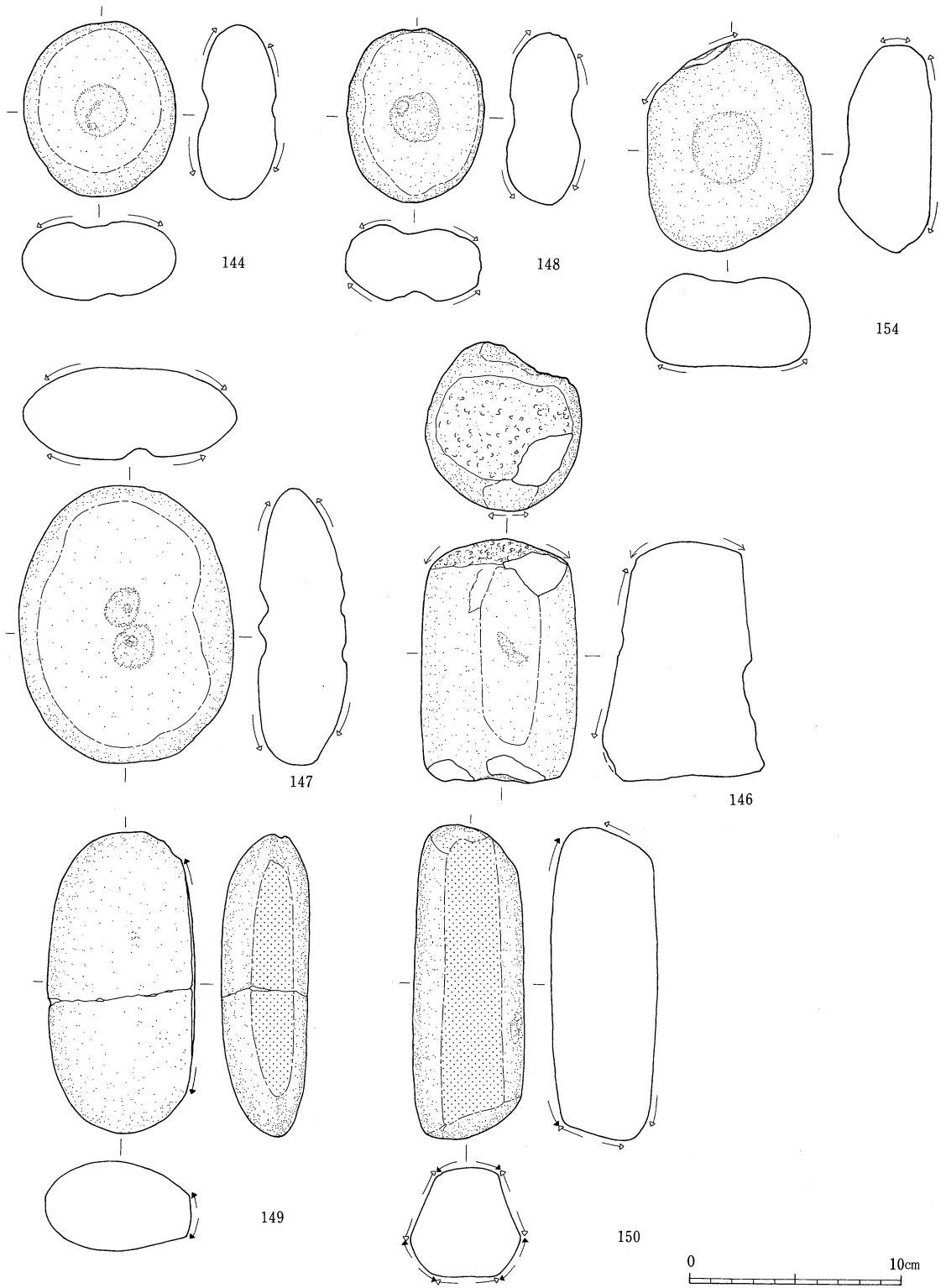
第113图 石器 (8) 打製石斧 (117~126)



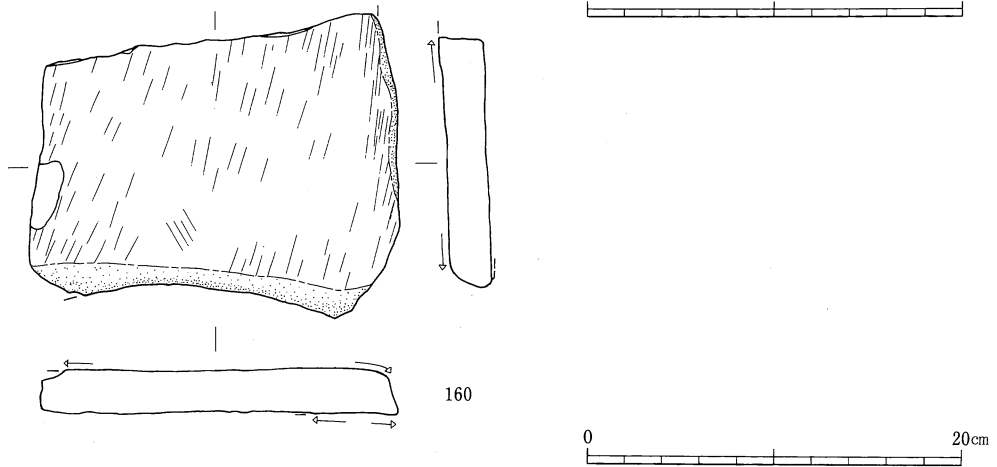
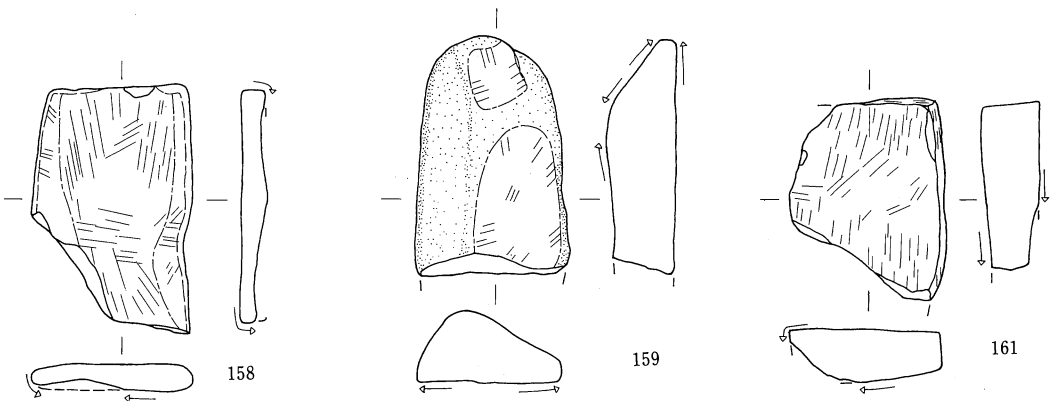
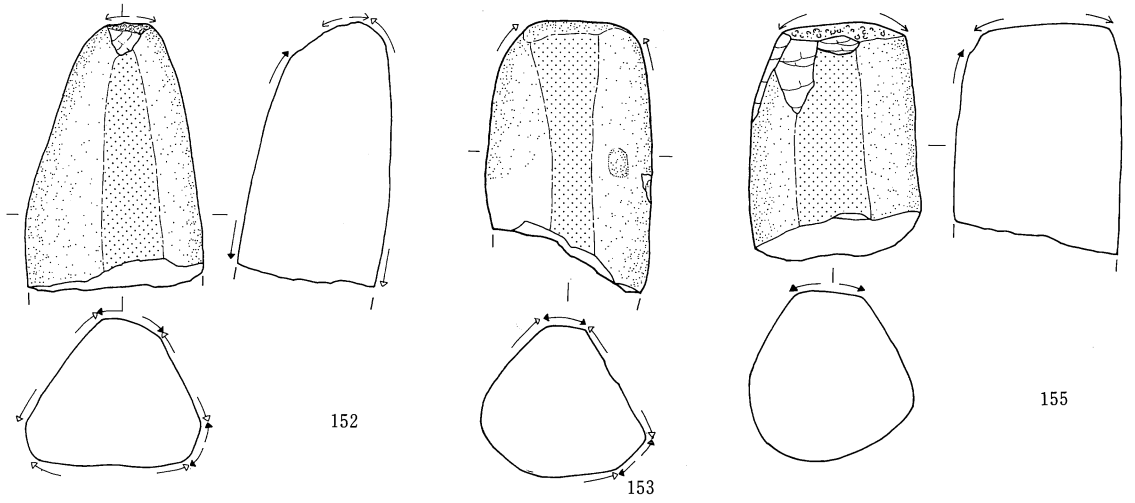
第114图 石器 (9) 磨製石斧 (127~136), 凹·敲·磨石 (137~139)



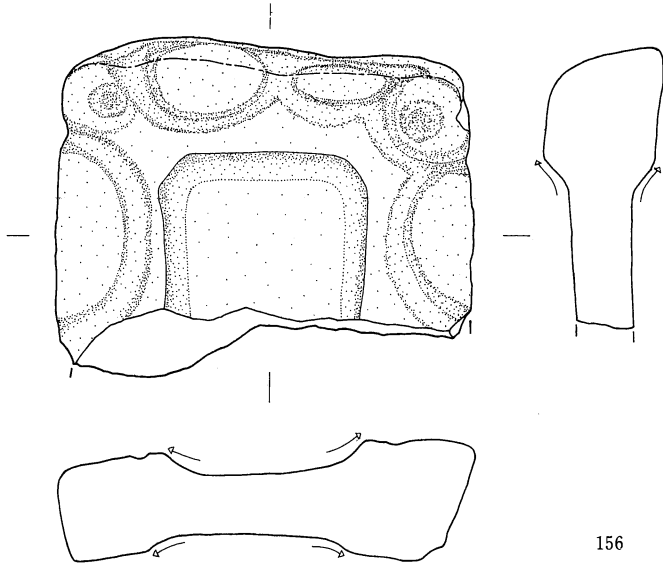
第115图 石器 (10) 凹·敲·磨石 (140~143·145·151)



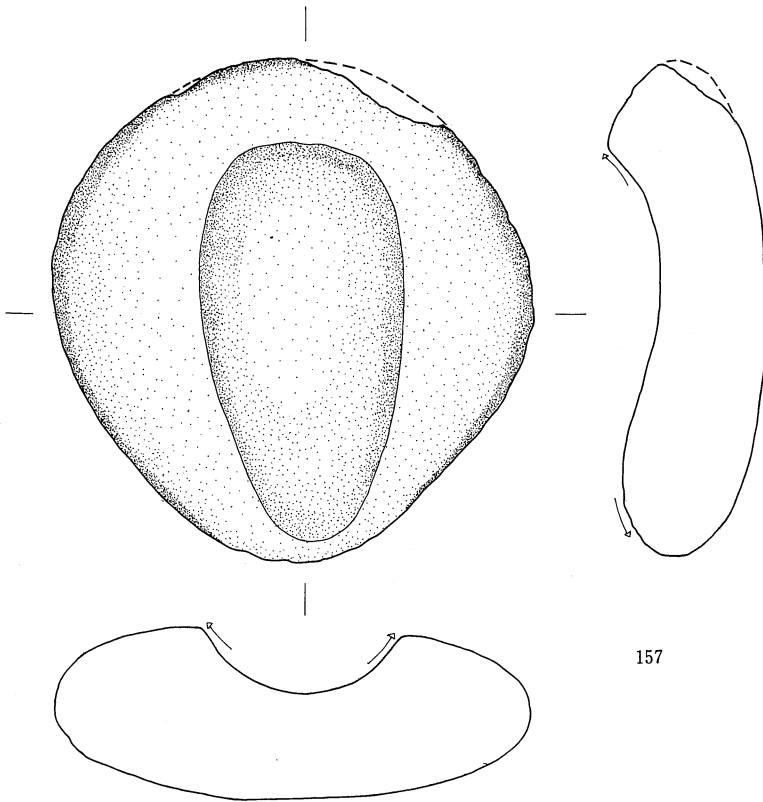
第116图 石器 (11) 凹·敲·磨石 (144·146~150·154)



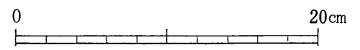
第117图 石器 (12) 凹·敲·磨石 (152·153·155), 砥石 (158~161)



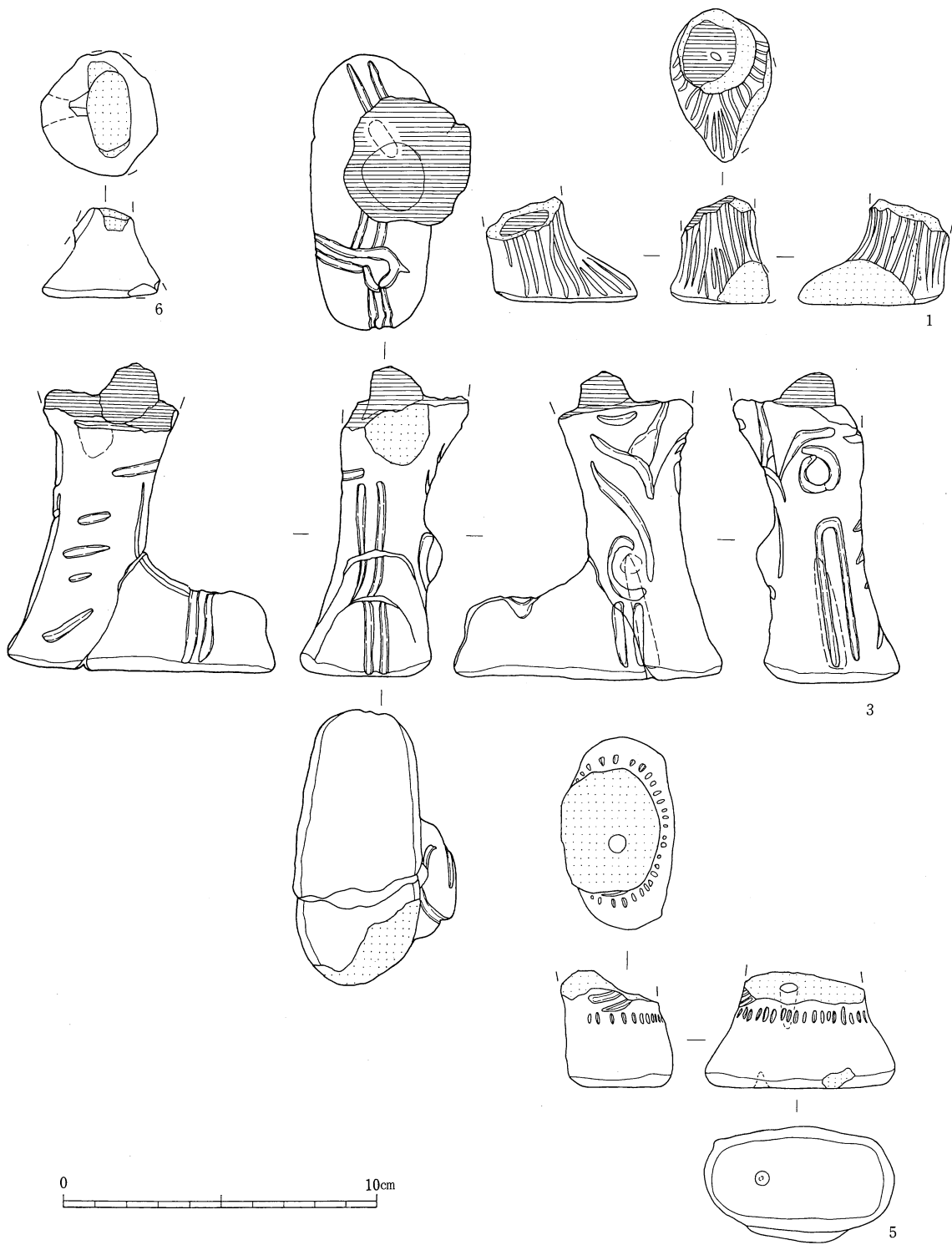
156



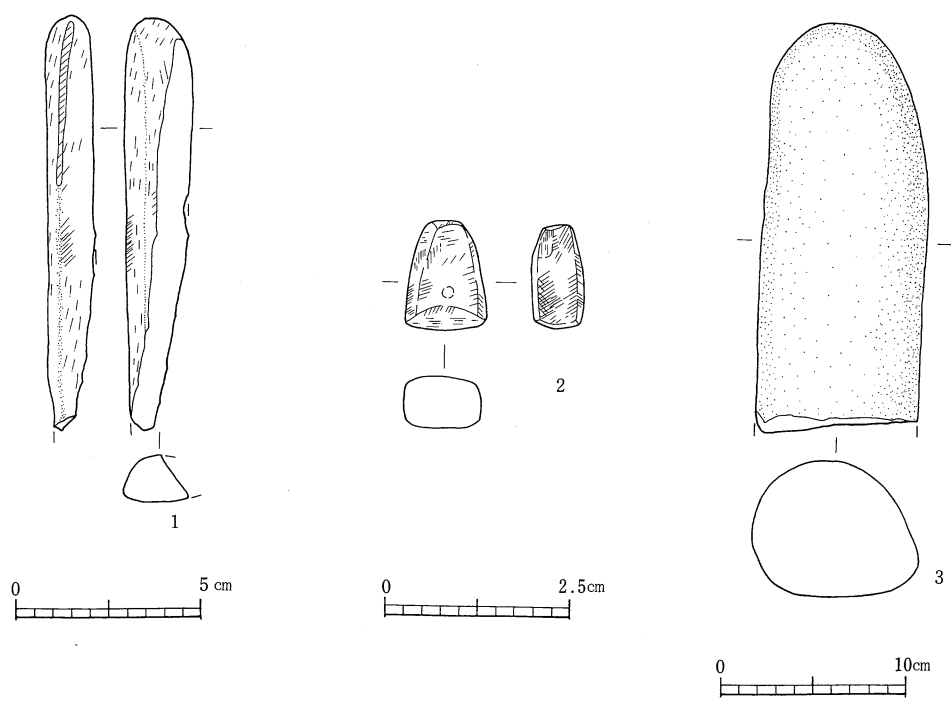
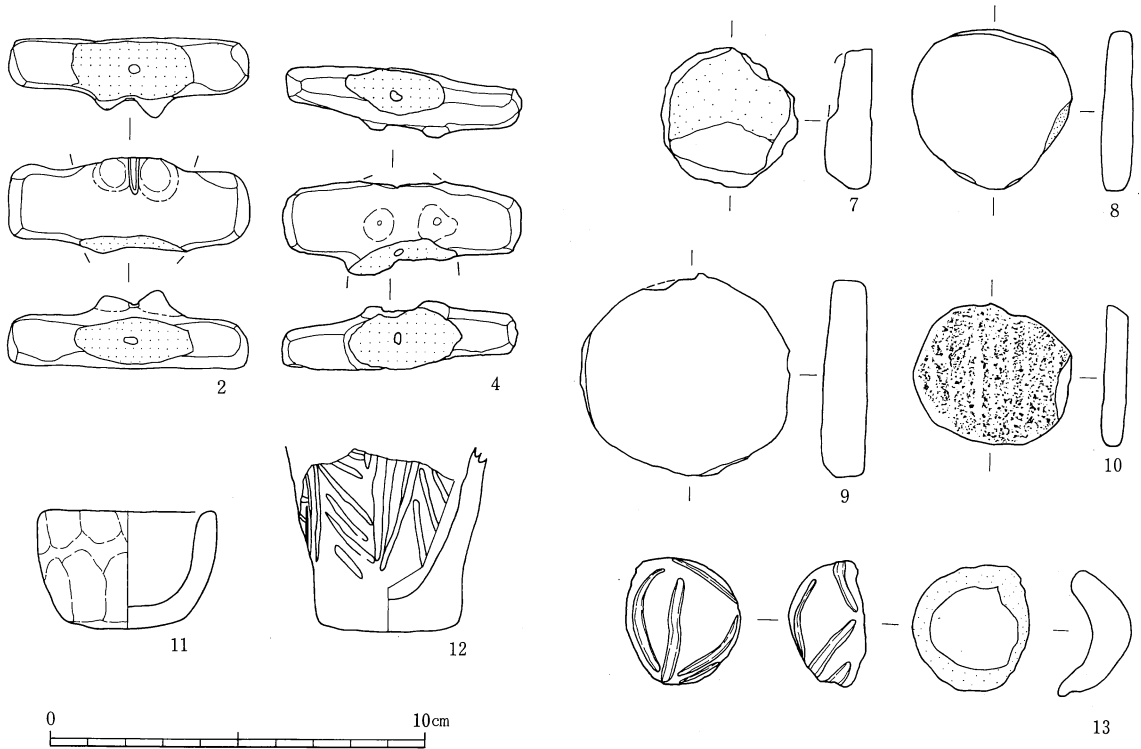
157



第118図 石器 (13) 石皿 (156・157)



第119図 土製品 (1)



第120図 土製品 (2)・石製品

第6章 考察

1. 南中島遺跡における縄文時代集落の変遷

今回の調査では第2次調査で縄文時代の集落を検出した。ここでは時期別に集落の変遷を追ってみたい。なお土坑については明確な時期を特定できる遺物が少ないため、以下の各期とした区分より細かい時期区分は行っていない。

I期（早期以前～早期前半）（第121図）

遺構は押型文期の土坑が数基散在するのみである。早期以前に遡る可能性のある石器が数点出土しており、今回の調査部分に近接する所に生活の場の存在が予想される。押型文期の遺物は調査区北東部を中心に分布している。遺物の量は少なく、生活の場はやはり近接する場所に存在が予想される。

II期（早期末葉～前期初頭）

遺構は調査区の西部を中心に土坑が10数基散在する。遺物の量は前段階に比べると、非常に少なく、生活の場の想定は困難である。

III期（前期～中期初頭）

土坑が数基散在する。遺物の量は非常に少ない。

IV期（中期中葉）（第121図）

3軒の住居址が北東部にあり、東部には住居址として扱った大形の土坑・竪穴が集中している。住居址の時期は2住・32住が勝坂II期、5住が同IV期である。土坑は中央及び西部に散在するが、数は少ない。遺物は2軒の住居址の覆土中から廃絶時以降に廃棄されたと推定される多量の土器が出土しているが、その他の遺構からの出土量は非常に少ない。全体の分布等をみると、この時期の集落の中心は調査区の北～東部にあったと推定される。東部に集中する大形の土坑もしくは竪穴の性格も不明であり、集落の構造等については不明な点が多い。なお周辺遺跡の項で触れたように、調査区西側に隣接する久保添地籍からは同時期の遺物が出土しており、その付近にも生活の場があったと予想される。

V期（中期後葉）（第122・123）

この時期が南中島の縄文集落の最盛期となる。調査区の北東部に15軒の住居址が集中し、中央部に方形柱穴列及び住居址として扱った集石が存在する。土坑は南東部を除くほぼ全域に分布する。北東部の住居址群及び集石に囲まれた部分に空白があり、この部分が広場的な性格をもつ空間と推定される。以下段階ごとに細分し概観したい。なお本項では住居址の名称を○住と省略する（以下同様）。

1 段階（中期後葉Ⅰ期）（第122図）

この時期の住居址は14住・29住の2軒である。いずれも調査区北部で、この段階以降住居が営まれる場所にある。入口方向は14住が南、29住は不明である。炉は14住で検出された。小形の石囲炉で掘り込みは浅い。住居以外では調査区中央部に22住とした集石がある。土坑からの遺物でこの時期のものはほとんどない。

2 段階（中期後葉Ⅱ期）（第122図）

この時期の住居址は16住・18住・26住の3軒であり、調査区の北部西寄りに位置する。いずれも遺存状態が悪く、住居址の主軸方向は不明である。炉は16住で検出されており、方形の石囲炉と推定されるが、掘り込みは比較的浅い。住居址以外では東部に住居として扱った大形の土坑または竪穴が2基あるが、その性格も不明である。土坑からの当時期の遺物出土はほとんどない。

3 段階（中期後葉Ⅲ期）（第123図）

この時期の住居址は3住・4住・15住・17住・23住・24住・25住・27住・31住の9軒で、時期別では最も多い。住居址はいずれも調査区北東部にあり、中央部には20住・21住とした2基の集石と方形柱穴列1がある。住居は出土遺物と切り合いによって、さらに2段階に分けられる。古い段階には3住・15住・17住・23住・31住の5軒が属し、新しい段階には4住・24住・25住・27住の4軒が属する。分布をみると古い段階では前段階に続き、調査区の北部に集中するが、新しい段階では東へ寄り北東部に集中するようになる。人口方向は古段階の3住・23住が南側、15住が西側、17住は南西側とまちまちであるのに対し、新段階はいずれも南側と統一されているようである。平面形には明確な規則性を見いだせないが、後者は全体に丸みを帯びる傾向がみられる。また新段階の24住や27住は、入口側にわずかに張り出しをもつようになる。炉は大形の方形の石囲炉で規模もほぼ同じであるが、新しい段階のほうが中央の掘り込みがやや深くなる。埋甕は古い段階の15住と新しい段階の27住では加曾利E系の土器を使用しているが、他はすべて唐草文系の土器が使われている。このことは埋甕についての考察の中で後述する。柱穴の配置をみると、いずれも支柱穴が4本の構造と推定される。なお住居址の分布は古い段階では2段階に続き北部に集中するが、新しい段階になると東へ寄り北東部に集中するようになる。

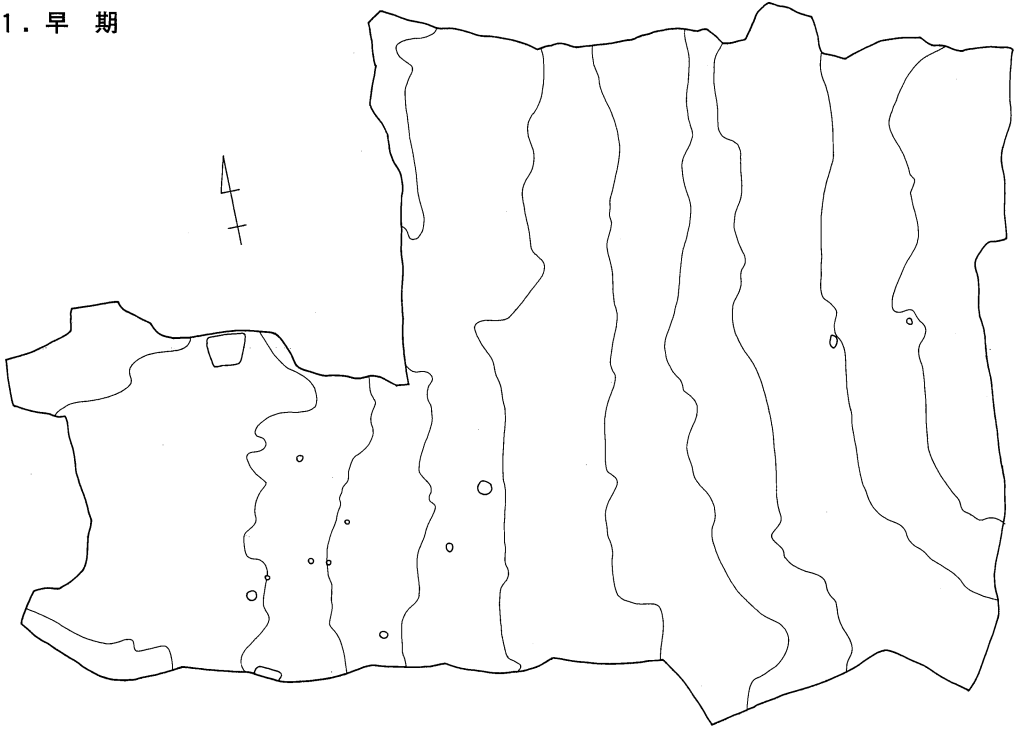
4 段階（中期後葉Ⅳ期）（第123図）

この時期の住居址は28住のみである。位置は再び調査区北部の中央寄りに移動している。入口は3段階の住居址と同じ南側である。炉は方形の石囲炉であるが、前段階に比べてやや小さくなり、石の立ち方が垂直に近くなる。柱穴は支柱穴が炉と壁の間になく、壁に沿って巡る構造に変化する。この時期の遺物は遺構の数の減少に伴い、非常に少なくなる。そしてこの段階を最後にこの遺跡では縄文時代の人々の生活の痕はみられなくなる。

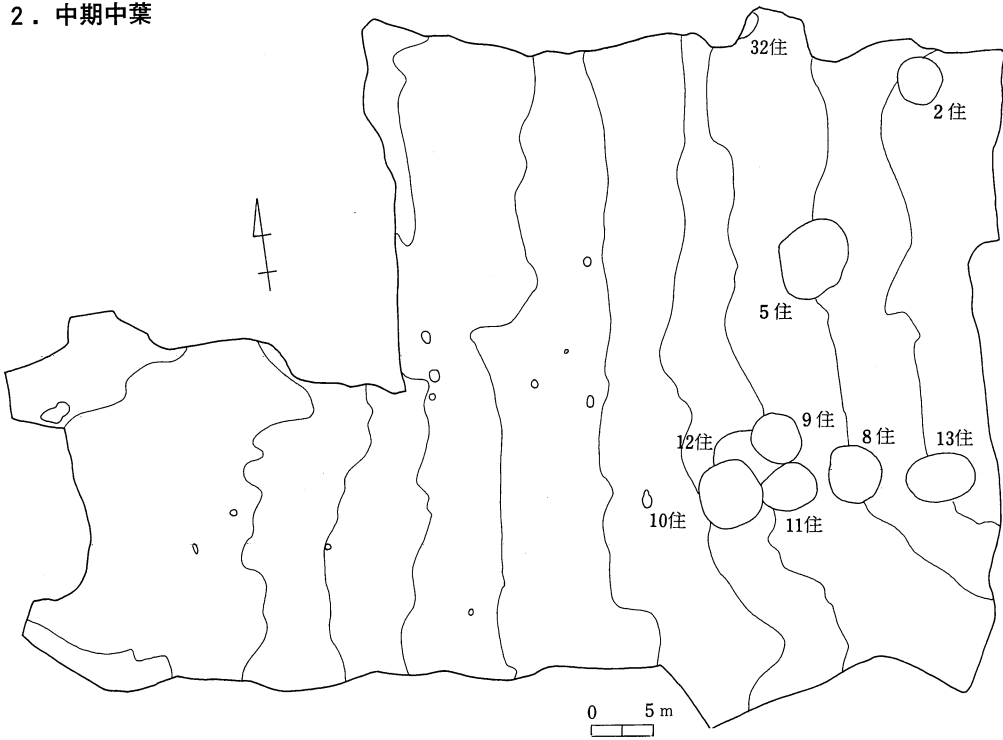
2. 中山地区の縄文時代遺跡群の展開

周辺遺跡の項などで述べたように、本遺跡のある中山地区では近年、向畑・坪ノ内・弥生前・生

1. 早期

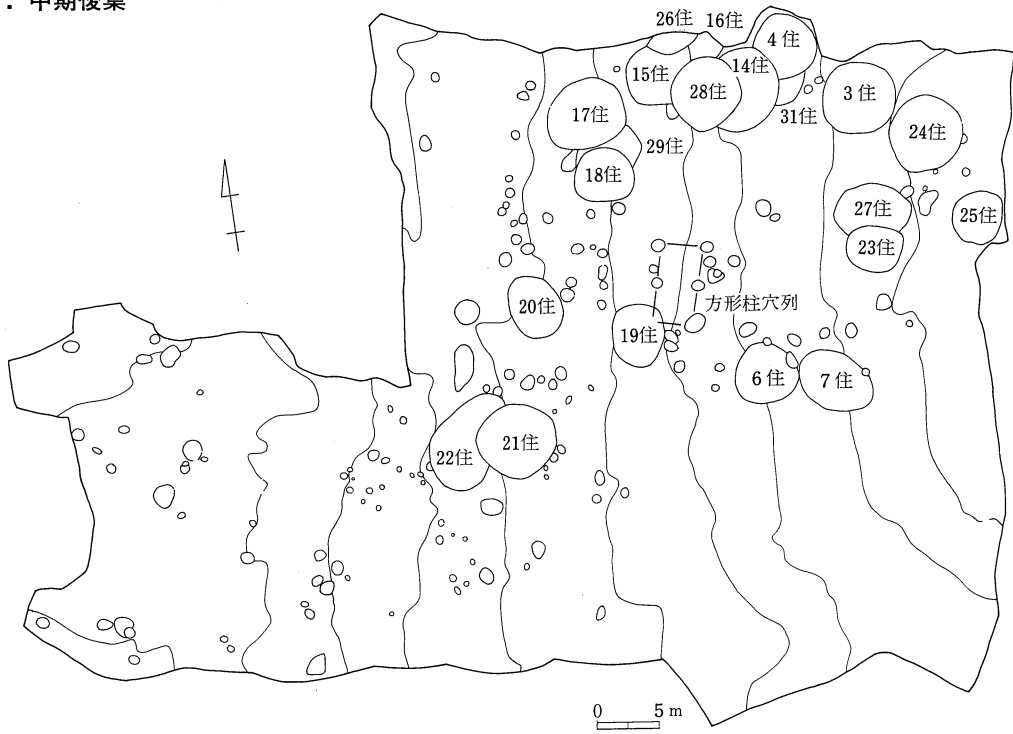


2. 中期中葉

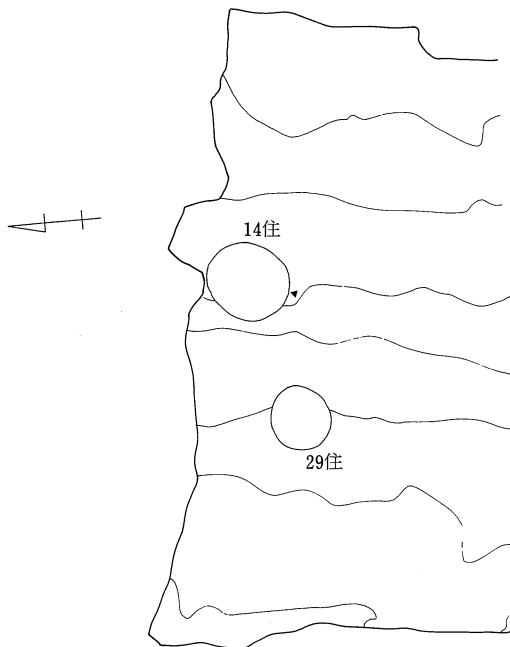


第121図 集落変遷図 (1)

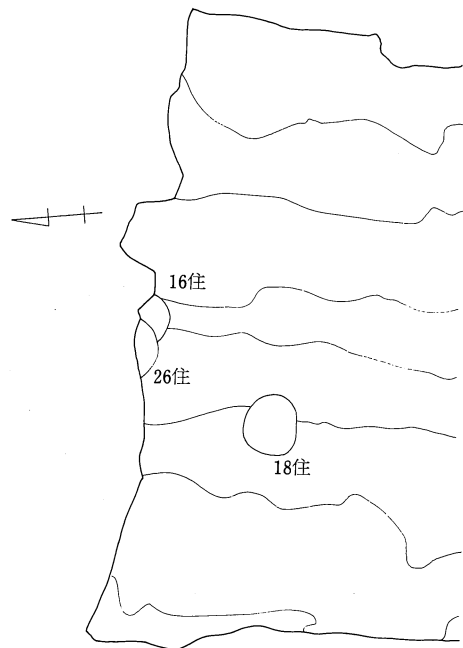
3. 中期後葉



4. 中期後葉Ⅰ期

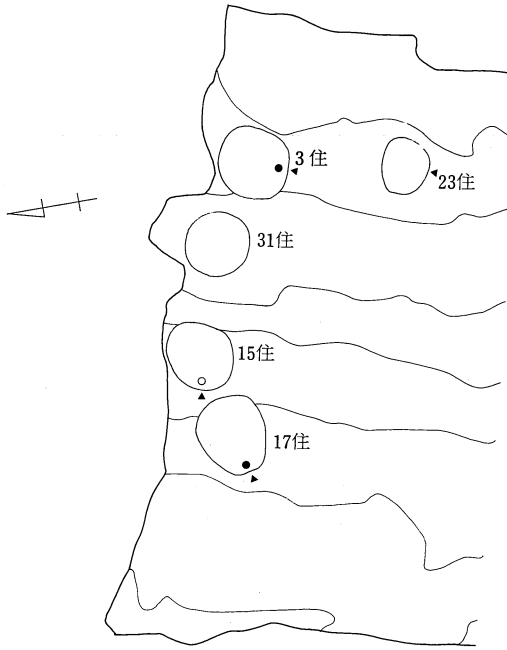


5. 中期後葉Ⅱ期

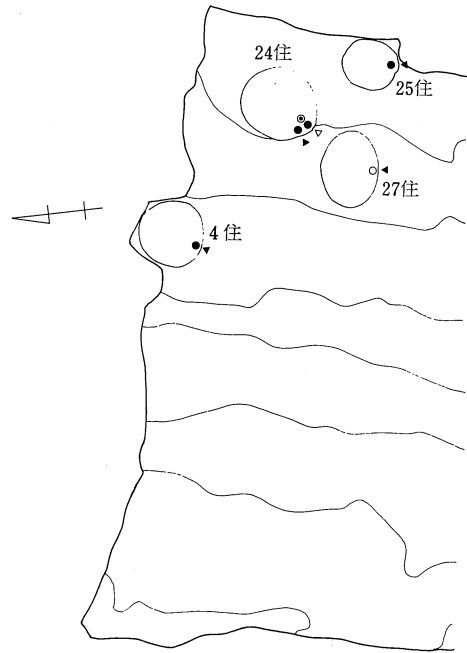


第122図 集落変遷図 (2)

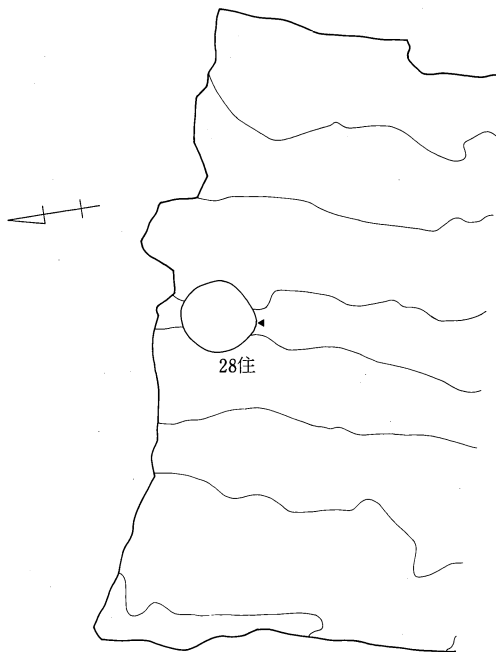
6. 中期後葉Ⅲ期古段階



7. 中期後葉Ⅲ期新段階



8. 中期後葉Ⅳ段階



埋葬 ● 唐草文系
 ○ 曾利系
 ○ 加曾利E系
 入口の方向 ◀ 最終段階
 ◁ 古段階

0 5 m

第123図 集落変遷図 (3)

妻の各遺跡で縄文時代の集落が調査されている。それらの成果を交え、当地区の縄文時代の遺跡について若干の考察を行なってみたい。なお土器の様相の概要については周辺遺跡の項で述べたので、そちらを参照されたい。

中山地区の上記の各遺跡での縄文時代早・前期の遺物のあり方には多少の時期や量の差はあるが、ほぼ同様の傾向がみられる。遺物は早期の押型文期、早期末～前期初頭、前期後葉～終末の各時期に集中しており、その間の時期のものは皆無に近い。量的には早期前半のものが南中島から、早期末～前期初頭及び前期後葉～終末のものが坪ノ内から多く出土している。早期～前期初頭の段階では検出された遺構が少ないため、明確に位置付けられないが、各々の遺跡の近くに何らかの生活拠点が存在したことは推定される。このうち坪ノ内遺跡の土器集中区からの早期末～前期初頭の出土遺物量は非常に多く、同遺跡で検出されたこの時期の遺構の数と、土器廃棄の場という土器集中区の性格を考え合わせると、坪ノ内遺跡のみでなく、同時期の周辺遺跡との関係も注目される。前期後葉～終末段階の資料はまだ断片的であるが、坪ノ内遺跡で住居址が2軒検出されるなど前の段階に比べると、生活の場はある程度ではあるが明らかになってきている。この2軒は同時期の他の遺跡と同様に、台地の平坦面から斜面への移行部に立地している。中山地区では他の遺跡でも同じような所に、この時代の生活の場が営まれたものと推定される。

続く中期初頭の段階では、向畑遺跡で9軒の住居址が調査された。集落の立地をみると前段階と同様に台地の縁辺部であり、斜面への移行部に住居址が、平坦部に土坑群が分布している。集落規模は小さいが、当地区ではこの時期の中心的な集落として位置付けられるものである。しかしこの段階を最後に途絶え、次の時代に遺構の展開はない。そのほかの遺跡の資料は断片的であり、その位置付けは今後の研究を待ちたい。中期中葉になると、各遺跡からの遺物出土量は急増する。この時期の住居址は南中島と弥生前で検出されている。集落の立地は平坦部へと移行するようである。住居址はいずれも遺存状態が悪く、その様相を窺える資料はない。さらに時期を細分すると、中期中葉Ⅰ・Ⅱ期の資料は生妻・坪ノ内にややまとまった資料があるものの全体量は少なく、Ⅲ期以降に急増するようである。坪ノ内では土器集中区から多量の遺物が出土しているが、上で述べた早期末～前期初頭段階と同様に遺構はほとんどなく、周辺遺跡との関連を考えたい。中期後葉になると各地で住居址が検出され、資料も豊富になる。以下時期別に概観したい。中期後葉Ⅰ期の住居址は弥生前で1軒、南中島で2軒検出された。坪ノ内では遺構はなく、土器集中区より少量の遺物が出土しているのみである。住居址の立地は前段階と同様、台地上の平坦部である。いずれの遺跡も資料は少なく、この段階は各地に点在していたという程度である。Ⅱ期になると検出された住居址は生妻1軒、弥生前6軒、南中島3軒である。坪ノ内では少量の遺物が土器集中区から出土したのみである。弥生前遺跡では6軒の住居址が環状に存在するが、いずれも遺存状況は悪い。地区内でどのような位置を占めていたのかは不明である。Ⅲ期の住居址は生妻で1軒、弥生前で6軒、坪ノ内で5軒、南中島で9軒、深沢で2軒を確認しており、時期別の数では最も多くなる。坪ノ内では全

体を調査していないものの、この時期から次時期にかけて台地平坦部に集落が環状に展開している。土器集中区から出土したこの時期の遺物は、極めて少ない。南中島の住居址群も弧状に展開する様子が明らかとなっている。弥生前では前段階に引き続き住居址が環状に展開している。深沢・生妻の資料は集落としては断片的なものであり、その全容を把握することはできない。IV期の住居は南中島・坪ノ内・弥生前で各1軒検出されている。前段階に比べると数は急激に少なくなり、再び各地に点在する程度になる。坪ノ内の土器集中区では少量の遺物が出土している。

中期後葉全体を通してみると、中山地区では各地の台地上の平坦部に小規模な集落が営まれ、住居の数も急増し、多くの人々が生活していたようである。一時期の住居址や遺物量、資料の良好さなどでは南中島のほうが上回るものの、環状集落の全体の大きさや周辺の未調査部分のことを考え合わせると、集落の規模は坪ノ内がもっとも大きく、この地区の中心的な集落と考えられる。しかし近接する塩尻市組原遺跡の同時期の集落と比較すると規模が小さく、同遺跡と松本市東山部のこの時期の中核的な集落と考えるならば、坪ノ内の集落は中山地区というより小さな地域での拠点となる集落であったと位置付けられよう。これは南中島の中期後葉集落にも当てはまると思われる。なお調査面積や位置等の違いがあり明確ではないが、南中島遺跡の対岸にあたる深沢遺跡でも多量の遺物が出土していることから、この2遺跡を合わせると坪ノ内以上の規模の集落が存在した可能性もある。またいずれの集落も遺物のあり方などから、比較的長い期間にわたって集落が同じ場所で営まれており、継続性がみられる。生妻と南中島の集落は中期後葉で途絶えるが、坪ノ内・弥生前ではともに後期初頭の資料が少ないものの、後期前葉に継続している。

後期前葉の住居址は坪ノ内で11軒、弥生前で2軒検出されている。坪ノ内では中期後葉の環状集落より一段高くなった台地上に展開する集落が全面調査されている。弥生前の2軒は調査部分の端に検出されたため、集落の展開は不明である。坪ノ内の集落はさらに後期後葉まで継続しているが、弥生前ではこの段階を最後に集落が途絶える。他の遺跡の資料がないので位置付けは難しいが、坪ノ内遺跡は中期後葉から引き続き、この地区の拠点的な集落と考えられる。後期後葉以降の資料はこの地区では確認されていないが、中期後葉以降の集落の立地が弥生前・生妻・坪ノ内遺跡など比較的標高の低いところへ移る傾向がみられることから、後期後葉以降、中山の縄文時代の集落の居住者たちはさらに低いほうへ移動していったことが予想される。

以上近年の発掘調査の成果を中心に概観してみたが、各遺跡の調査規模や遺跡内での調査範囲などの差異もあり、断片的な資料をもとにしたかなり強引な考察という感もある。また年代観などそのほかの点で力不足からの誤認や曲解もあるかと思われる。また既出資料の再検討も大きな課題である。今後改めて究明していきたい。

なお向畑遺跡の成果については同遺跡報告書を参考にした。弥生前・生妻両遺跡については各々の調査担当者より多くの御教示を得た。この2遺跡の報告書も本書と同時に刊行される予定である。各遺跡の詳細についてはそちらを参照されたい。

3. 南中島遺跡の縄文時代中期後葉の住居址資料に関する諸問題

今回の調査では縄文時代中期後葉の住居址が15軒検出された。ここではそこから得たいいくつかの問題点について若干の考察を行なってみたい。

1) 住居址の拡張と上屋構造の変化

第24号住居址には埋甕、柱穴、周溝などの状態から一度以上の建て替えによる拡張が行なわれたことが想定できる。このような事例については宮坂光昭氏の論考（宮坂1971）などを始め、多くの先学による指摘がある。最近の調査での検出例も増加しており、1988年の坪ノ内遺跡の調査でも検出されている。その報告の際、同遺跡ではこのような建て替えが中期後葉の住居址のみに見られ、後期の住居址では短期で住居が廃絶され、同じ場所にあまり間を置くことなく建て直していることを指摘した（拙稿：新谷1990）。その後、南中島遺跡、塚田遺跡（松本市大村、1990～91年調査）で中期後葉の集落の調査を担当する機会に恵まれ、その中からいくつかの知見を得た。それらをもとに考察してみたい。第124図は中期後葉の拡張が想定される住居址の事例である。いずれも時期は中期後葉Ⅲ期である。以下想定される拡張の様子を検討してみたい。なお図では住居址の入口側を下に向け、記述中では方向を入口から奥を見た時の立場で記すことにする。

- ①坪ノ内18住 支柱穴は4本と推定される。建て替えにあたっては右側の支柱穴を外へ移し、入口は左へ寄せている（報告書の模式図の柱穴番号は誤りである）。
- ②坪ノ内9住 支柱穴は4本と想定される。建て替えにあたっては支柱穴をいずれも左側へ移し、支柱穴間を拡げている。この住居は埋甕が6個体あり、さらに何度か建て替えられている可能性がある。想定した建て替えでは住居の主軸は向きを変えず、平行移動したものと思われる。
- ③南中島24住 支柱穴は4本と推定される。2回以上の建て替えが想定される。1回目は柱穴はそのまま入口側を拡げ、2回目は左側の柱穴を外へ移し、奥側を拡げている。
- ④柿沢東3住（塩尻市） 支柱穴は4本と推定される。建て替え時の支柱穴の移動はなく、同心円状に壁を拡げ、埋甕も外へ新たに埋めている。
- ⑤上木戸34住（塩尻市） 埋甕と周溝より、外側へ向けて同心円状に2回の建て替えが想定される。柱穴の移動は行われていないとされているが、柱穴が周溝を切っており、検討を要する。
- ⑥増野新切D13住（下伊那郡高森町） 埋甕と周溝より、外へ向けた2回の建て替えが想定される。支柱穴は6本と推定されているが、古い段階では4本かもしれない。建て替えの1回目は左側へ、2回目は全体に拡張されている。主軸方向は1回目はそのまま、2回目は左へ振っている。

以上の例をみると、この時期の住居の拡張では片側あるいは全ての支柱（穴）を外側へ移し、それに伴い壁を拡げるという方法がとられていることがわかる。住居の上屋構造を直接窺えるような資料はないが、基本的に4本柱でその上部から放射状に垂木を降ろす円錐形の構造が想定される。このような構造の住居では、調査例にある支柱の移動による拡張は比較的容易であったと推定される。今回の考察にあたっては主に長野県中・南信地方の事例について検討を行なったが、この地域の

中期後葉Ⅲ期の住居址では、支柱穴が4本という構造をもつものが一般的に見られる。またこのような拡張が行なわれている事例もこの時期のものに集中している。増野新切D13住のような支柱穴が6本のものについては、住居の性格あるいは地域による差なども想定されるが、明らかではない。さらに建て替えの方法についても、柱穴の移動を伴うものとそうでないものといった類型化を行えば、地域性などを把握できるかもしれない。これについては、さらに資料の検討を行なっていきたい。

今回検討した中南信地方の資料では、次の中期後葉Ⅳ期になると敷石住居が出現し、住居址の構造に大きな変化がみられる。南中島遺跡では28住がこの時期のものである。他の遺構との切り合いなどのため不明確な点も多いが、炉と壁の間に前段階のような支柱穴は存在せず、柱穴は壁に沿って巡るようになる。この時期の資料は中南信地方の事例では良好なものが少なく、不明な点が多いが、後期の事例も合わせて考えると、この段階から柱穴が壁に沿って巡るようになり、平面形も柄鏡形に移行するようである。そしてこのことは同時に住居の上屋構造にも大きな変化があったことを窺わせる。この時期も上屋構造を直接知りうる資料はないが、壁に沿って巡る柱穴や入口部の柄鏡形の張り出しをみても、中期後葉に比べると複雑になっていると思われる。柄鏡形の平面形をもつ住居の事例についても、いくつかの資料を検証したが建て替えが明確に認められる事例はなく、構造が変化したため、中期中葉の住居のように柱穴を移動して拡張することは困難であったことが予想される。

これを坪ノ内遺跡の事例に当てはめると、中期後葉の住居址では建て替えによる拡張が見られ、後期の住居址では拡張せずに廃絶し、新たに建て直すということが住居の構造の変化によるものとして一応説明できる。しかしこれには住居の継続する時間、廃絶される理由、またその背景として想定される時期による住居への意識の差など多くの検討を要する問題がある。さらに同一時期の住居でも改築されるものとそうでないものの違いや、集落内でのそれらが占める位置などの検討も課題として挙げられる。今後もさらに検討を重ねていきたい。

(図出典) 坪ノ内遺跡：新谷和孝ほか1990『松本市坪ノ内遺跡』松本市教育委員会

上木戸遺跡：唐木孝雄ほか1988『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2 勤長野県埋蔵文化財センター

柿沢東遺跡：三村洋ほか1984『塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』塩尻市教育委員会

増野新切遺跡：神村透ほか1973『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』高森町地区その2 長野県教育委員会

(参考・引用文献)

宮坂光昭1971『縄文中期集落復元の基礎的検討』『信濃』Ⅲ23-4 信濃史学会

新谷和孝1990『第6章 考察』『松本市坪ノ内遺跡』松本市教育委員会

石野博信1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

2) 第15号住居址に関する考察

今回の調査された中期後葉の住居址群のうち、第15号住居址にはいくつかの点で同時期の住居址と異なった部分がみられる。ここではそれらについて考察してみたい。

15住の埋甕には下半部の切断された加曾利E系の土器を用いている。覆土中から出土した土器

を見ると、唐草文系と加曾利Ⅴ系の土器が混在し、量的には後者が多い。埋甕と覆土中の土器には使い分けはみられないが、全体に加曾利Ⅴ系の土器が多いことは他の住居と異なっている。埋甕をみると、15住と同じ中期後葉の古段階の3住・17住はいずれも唐草文系の大形の深鉢を使用しており、埋甕に使われた土器の容積を比較すると、15住のものは他に比べ非常に小さい。また入口の方向も中期後葉の住居址は全ての時期を通じて、ほとんどのものが南～南西を向くのに対し、15住は1軒だけ西を向いている。炉は今回調査した中では唯一底に土器片を敷いている。本来は石囲炉であったと思われるが、石は廃絶時に全て抜かれている。この炉石の全てを抜く行為も、この住居だけにみられる特異なものである。遺物の中では、炉手前のピットの中から出土した彫刻のある石皿が注目される。中央部で折れており、折損後にピット内の一辺に礫とともに並んで入っていた。彫刻のある石皿自体類例の少ないものである⁽¹⁾が、松本市では中山地区に集中しており、坪ノ内遺跡で5例の出土が知られる。今回出土したものは、文様等は各地の出土例と共通する点が多いが、平面形は方形に近い類例の少ないものである。

以上のように15住は多くの点で特異な様相がみられる。おそらく居住者の性格によるものと推定されるが、具体的に不明である。ただ加曾利Ⅴ系の土器を持っていた人々であることなど、いくつかの姿を窺う糸口らしいものはみえる。今後さらに検証し追ってみたい。

註1. 唐木孝雄1984「岡谷市後田原遺跡の彫刻のある石皿」『埋文雑記帳』3

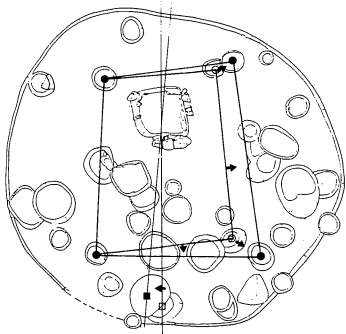
3) 埋甕に関する考察

今回調査した住居址のうち、埋甕を持つものは中期後葉Ⅲ期に集中している。特に24住の埋甕No.2は特異なものである。この埋甕は外側の土器(以下土器A)を逆位で埋設し、その中に小形の埋甕(以下土器B)と別の土器の口縁部(以下土器C)及びミニチュア土器が入っていた。調査時の所見及び土器の大きさからみると、埋設の順番は掘り方内に土器B、C及びミニチュアを設置した後に、上から土器Aを被せたと推定される。上からみると、土器AとBの上部の間隔は極めて狭く、底から土器下部のミニチュア土器の入っていた空間へのモノの出し入れは不可能と思われる。土器Bの内側は床上と続く空間になっていたと思われ、この部分では従来の埋甕で考えられているモノの収納は可能であったと考えられる。言い換えれば、1つの埋甕の中に閉ざされた空間と開かれた空間が存在しており、埋甕の機能を考える上で大変興味深い資料である。

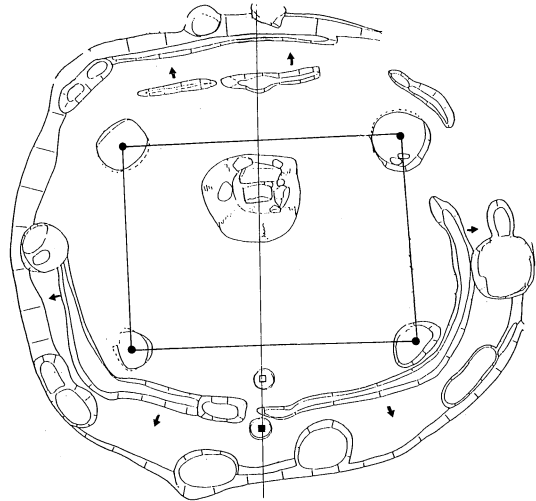
埋甕の中に埋納されたと思われるミニチュア土器は塩尻市平出遺跡J-4住に類例がある⁽¹⁾。この住居では底部穿孔された深鉢がやや斜めに逆位で埋設され、その中からミニチュア土器が出土している。時期は中期後葉Ⅰ期である。このような埋甕内の収納物については、何らかの供献的な性格のものとする先学の指摘があるが、本例の場合ミニチュア土器自体が非日常的なものであり、その可能性は高い。近年埋甕については、内容物の科学的分析による性格の究明が行なわれつつある。しかし使用される土器の大きさや埋設の状態、さらには中から出土する遺物などを考えると、必ずしも用途は一つに限定されず、いくつかの性格が想定される。そうした視点でみたとき注目される

のは第27号住居址の埋甕である。この埋甕は加曾利E系の小形の深鉢の上に、切断した深鉢の上半部を重ねて埋設している。上の土器の切断部の径は下の土器の口径に合わせており、埋設時には両者が一体化した1つの深鉢のようになっていたと思われる。この2つの土器と同時期の住居の埋甕の大きさを比較すると、3基のやや特異な埋甕をもつ24住を除き、4住・25住・27住の埋甕の口径がいずれも約25cmと同じ大きさであることに気付く。土器は4住が唐草文系の大形の深鉢の上半部、25住は唐草文系の小形の深鉢、27住は前述の加曾利E系の深鉢を2つ重ねたもので、それぞれの高さや器形は異なる。しかし容積は、正確な測量はしていないが、ほぼ同じと考えられる。つまりこの3軒の埋甕は使用する土器は異なるものの、その口径と容積には何らかの共通する規格があったのではないかと思われ、それらは中に納められたモノと深い関わりを持っていたと推定される。非常に少ない資料からのデータで単なる偶然かもしれないが、さらに検討してみたい課題である。

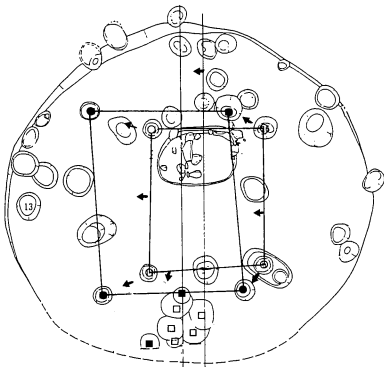
註1. 小林康男ほか1987『史跡平出遺跡』塩尻市教育委員会 なお、この資料については小林康男、鳥羽嘉彦両氏より御教示を得た。



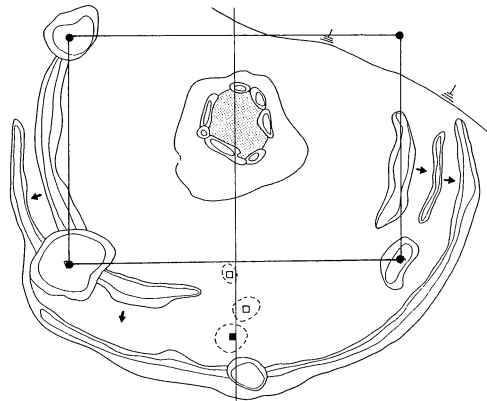
坪ノ内 18住



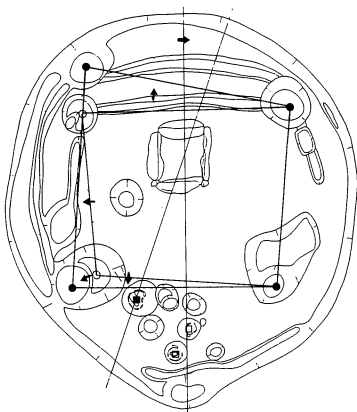
柿沢東 3住



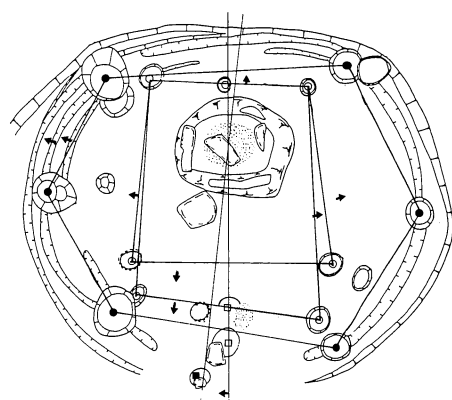
坪ノ内 9住



上木戸 34住



南中島 24住



増野新切 D13住

- 最終段階の柱穴
- 古段階の柱穴
- 最終段階の埋壘
- 古段階の埋壘

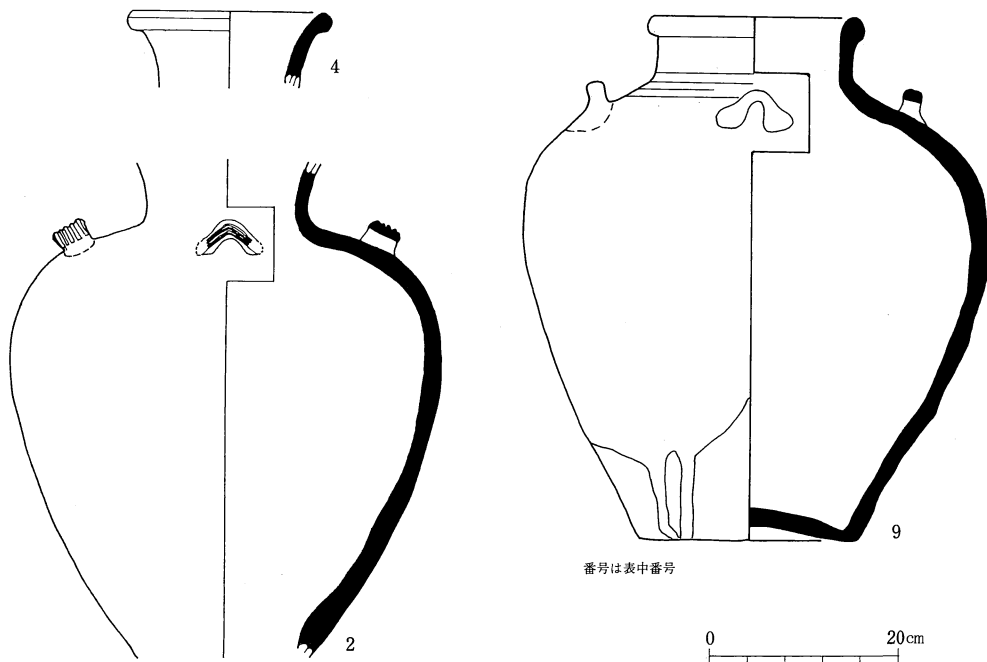


第124図 拡張された住居址

4. 松本市内出土の古瀬戸系陶器四耳壺

松本市内からは、古瀬戸系陶器とみられる四耳壺が6遺跡から10点（個体数）出土している。出土した遺構は、墳墓・供養塔2、住居址3、土坑3、建物址1、検出面1である。それらは墳墓・供養塔より出土したもの以外は破片資料である。銚塚より出土した四耳壺からは、骨などの遺物は出土しなかったが、石積みされた塚に四耳壺を正位に埋設しており蔵骨器として考えられる。蔵骨器としては、松本市内において和田衣外出土の四耳壺について2例目である。長野県内で出土する古瀬戸蔵骨器は、銚塚・和田衣外などのように、単独で営まれた墳墓から出土する例が多いとの指摘がすでにされている⁽¹⁾。これは当地方における墳墓の造られ方が、滋賀県日野大谷遺跡・静岡県一の谷中世墳墓群などのような大規模な墳墓群とは様相を異にしているためであろう。当該地における墓址群の例としては、銚塚の北西約1kmの地点に位置する向畑遺跡で中世から近世（13～15Cが中心）にかけての土坑墓群が発見されている。中世において一般的であった墓制はむしろ向畑遺跡でみられるような墓制であり、土石で塚を盛り、そこに蔵骨器を埋設した墳墓は特殊であったと考えられる。

註1：藤沢良祐氏は「長野県出土の古瀬戸について一特に蔵骨器を中心として」『信濃』第31巻第11号において県内12ヶ所の中世墳墓の分布・立地・出土状況についての考察を述べている。



第125図 松本市内出土の古瀬戸系陶器四耳壺

第8表 松本市内の古瀬戸四耳壺出土地一覧

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	文献
1	神戸遺跡	松本市笹賀	SK278	13C前半	1
2	北栗遺跡	松本市島立	SB252	13C	2
3	〃	〃	SB270	?	2
4	〃	〃	SK1690	13C(?)	2
5	〃	〃	北部南区	?	2
6	三の宮遺跡	松本市三の宮	SB190	?	3
7	〃	〃	SK2270	14C(?)	3
8	北方遺跡	松本市島内	ST8・P2 ST9・P2 SK606	13C	4
9	衣外	松本市和田	供養塔下	14C(?)	5
10	鉾塚	松本市中山	墳墓(?)	13C	今回報告

備考：SKは土坑，SBは竪穴住居址，STは建物址

- 文献 1：『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』19 長野県埋文センター
 2：「 〃 8」1990 長野県埋文センター
 3：「 〃 」1990 〃
 4：「 〃 10」1989 〃
 5：『松本市和田衣外四耳壺出土報告書』1972 松本市教育委員会

第7章 調査のまとめ

今回の2年に渡る南中島遺跡と鉾塚の調査では、縄文時代～中世の様々な遺構が調査され、多くの成果が得られた。

第1次調査では、平安時代後期と中世の遺構が検出された。平安時代の住居址は、松本平では近年膨大な数が調査されているが、中山地区では研究史の項で述べた深沢遺跡での一例が知られるのみであった。断片的ではあるが、この地区では貴重な資料といえるものである。

鉾塚の調査は、松本平では初の中世墳墓の調査となった。遺構の遺存状態はあまり良くないが、被葬者の性格の究明や、近接する向畑遺跡の中世土壙墓群との関連など多くの課題をもたらしている。この鉾塚は現代に至るまで、地域の人々の信仰の対称とされており、その結び付きは根強いものがある。こうしたあり方を分析するのも、またひとつの課題といえよう。また古墳ではないかと考えられていたことは、地区内に分布する古墳群を再検討する際、新しい視点をもたらしたと言える。非常に興味深い資料である。

第2次調査では、縄文時代の集落を検出している。この成果については文中で述べてきたが、時期別にまとめるとともに、問題点を提示してみたい。

早期前半の押型文土器は、量的には決して多くないが、松本市の発掘調査の中では、まとまった良好な資料を得ることができた。文様と器厚に着目して分類を行なったが、原体の大きさ等、十分に検討できなかつた点も多く、再検討してみたい課題である。

早期末～前期初頭の土器群については、近年周辺地域での調査例が増え、様相が次第に明らかになりつつある。今回得られた資料は量的には決して多くないが、まとまった良好なものである。

中期中葉では、2軒の住居址から廃絶後に捨てられた多量の土器が出土した。特に第5号住居址の資料は、量も多く非常に良好な資料である。この地域の土器様相を解明する上でも多くの興味深い問題を提示しているものである。住居址及び集落については、資料が少なく十分に分析できなかったが、調査区の東部に集中する、住居址として扱った竪穴もしくは大型の土坑群の性格など、今後に残された問題は少なくない。

中期後葉では、15軒の住居址と、住居址として扱った集石、方形柱穴列など多くの遺構からなる集落を検出した。方形柱穴列は松本市では初の検出であり特筆されるものである。この種の遺構は近年検出例が増加し、注目されているが、機能や集落内での位置付けなど多くの課題がある。住居址については、個々の分析と、その変遷を一応明らかにできたが、不十分な点も多い。考察中で触れられなかつた問題をひとつあげてみたい。この集落は、多量の大型の礫が含まれる基盤の上に営まれており、地表にも礫が露出している。第23、27号住居址では、2mを越える大きな礫が壁に露

出していたのにもかかわらず住居址が営まれている。このような場所であっても住居址を、その場所に作らなければならなかったのには、どのような理由があったのであろうか。興味深い問題である。

遺物では土偶や土器のあり方が注目される。土偶の量は極めて少なく、近接する坪ノ内遺跡での様相とは大きく異なっている。石器の量は極めて多く、坪ノ内遺跡を上回っている。今回の考察の中では、土器のあり方などを中心にして地区内の遺跡群を検討したが、石器等も含めた、さらに大きな視点からの考察の必要性を痛感している。

土器についても雑多な考察を行なったが、行なうにつれて認識不足を感じるばかりであった。

2年間に渡り、坪ノ内・南中島という中山地区の縄文集落の調査を行ない、その姿がようやく見え始めてきている。今回の南中島遺跡の分析は、同時に坪ノ内遺跡の検討であった感が強い。今後さらに分析を深めてゆくとともに、さらに他地域も含めた幅広い究明を行なってゆきたい。

毎年のことながら限られた時間と膨大な資料の間での作業であり、資料を消化しきれないでいるのが現実である。また何より担当者としての能力のなさを感じている。雑多に思いついたことをならべ、課題として逃げていくのが情けない。

ここに一冊の報告書として、まとめるまでには、多くの方々より様々な御協力をいただいた。心より感謝申し上げるとともに、それらを十分に生かせなかったことをおわび申し上げる。

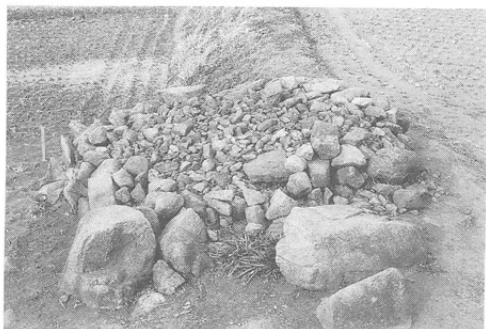
最後に、湧水・凍結・積雪などの悪条件の中、現場で汗を流していただいた方々、多大な御理解をいただいた地元の方々や、中山土地改良区をはじめとする諸機関、報告書作成の連日の深夜に及ぶ作業をともにしていただいた方々に、心よりお礼申しあげ、結びとしたい。



竪穴状遺構 1



鉦塚 清掃状態 側面



鉦塚 清掃状態 上面



完掘状態



第2次調査区全景 南より



同 中央部



調査区南西部 全景



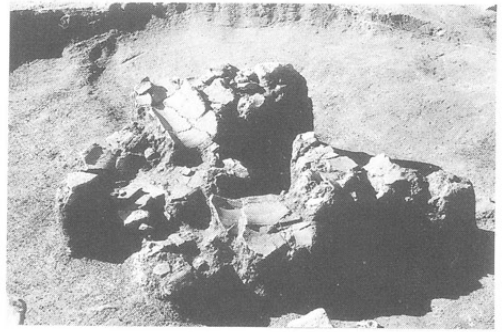
調査区北東部の住居址群



第2次調査区全景航空写真 1989.12.28撮影



第2号住居址 遺物出土状態



同 部分



同 完掘状態



同 炉体土器



第32号住居址 遺物出土状態



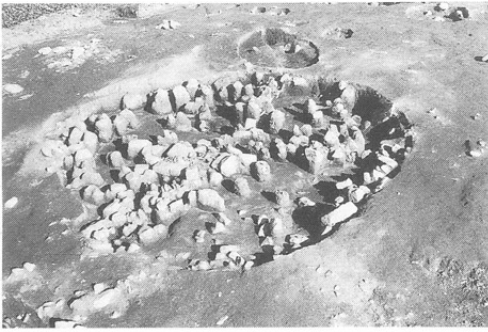
第5号住居址 遺物出土状態



同 部分



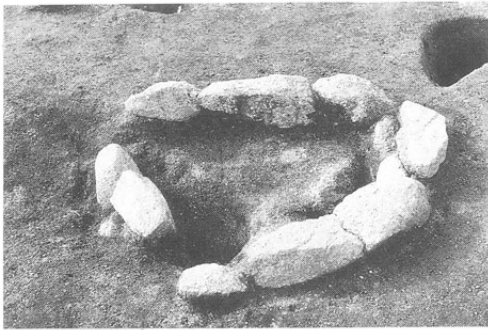
同 部分



第14号住居址 遺物出土状態



同 完掘状態



同 炉



第16号住居址 完掘状態



第26号住居址 完掘状態



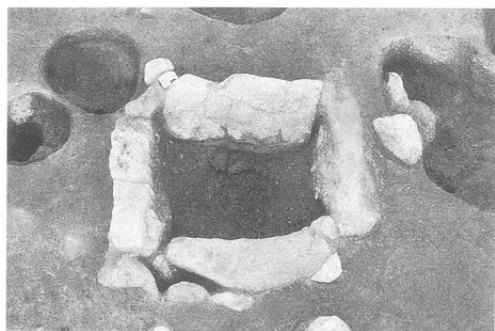
第3号住居址 遺物出土状態



同 完掘



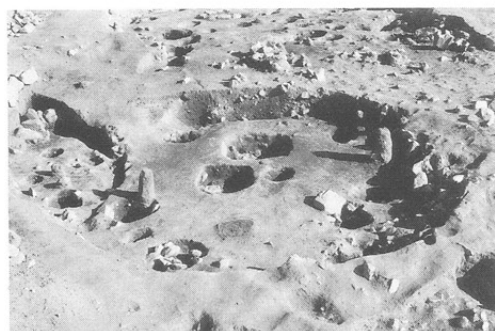
同 P₄器台出土状態



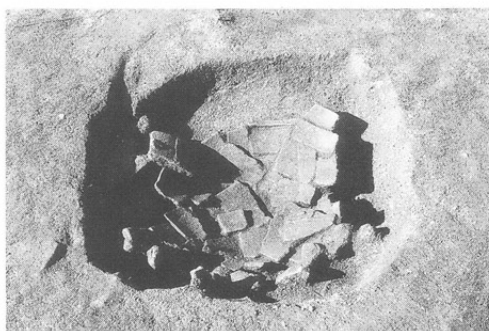
第3号住居址 炉



同 埋甕



第15号住居址 完掘状态



同 炉



同 埋甕



同 埋甕半截状态



同 P₈石皿出土状态



第18号住居址 完掘状态



第17号住居址 埋甕



第23号住居址 遺物出土状態



同 土器出土状態 (89)



同 完掘状態



第4号住居址 完掘状態



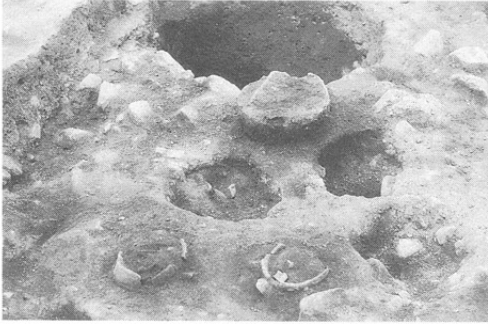
同 埋甕



第24号住居址 完掘状態



同 炉



第24号住居址 埋甕



同 埋甕 1



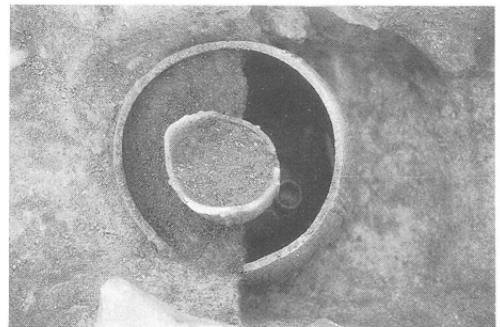
同 埋甕 2



同 外側の土器の上部を外した状態



同 中の土器 (98) が見える



同 真上より ミニチュア土器が見える



同 埋甕 3



同 半截状態



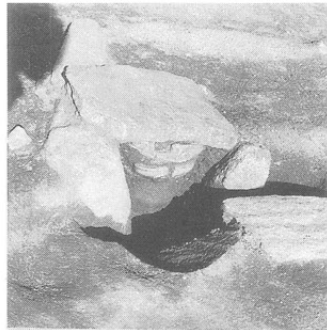
第25号住居址 完掘状態



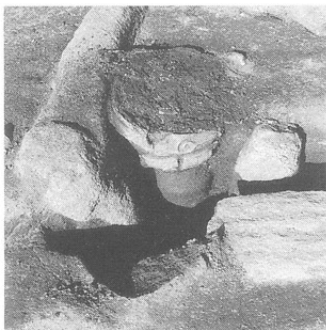
同 埋葬 半截状態



第27号住居址（奥側）完掘状態



同 埋葬 23住の炉に入っている



同 石蓋を外した状態



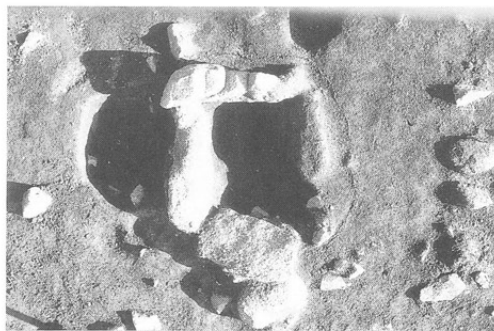
同 上から



同 炉 手前の石が倒れている



第28号住居址 完掘状態



第28号住居址 炉



第19号住居址 (集石)



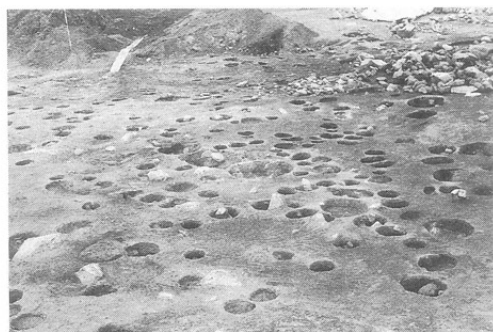
第19号住居址 完掘状態



第21・22号住居址 (集石)



第20号住居址 (集石)



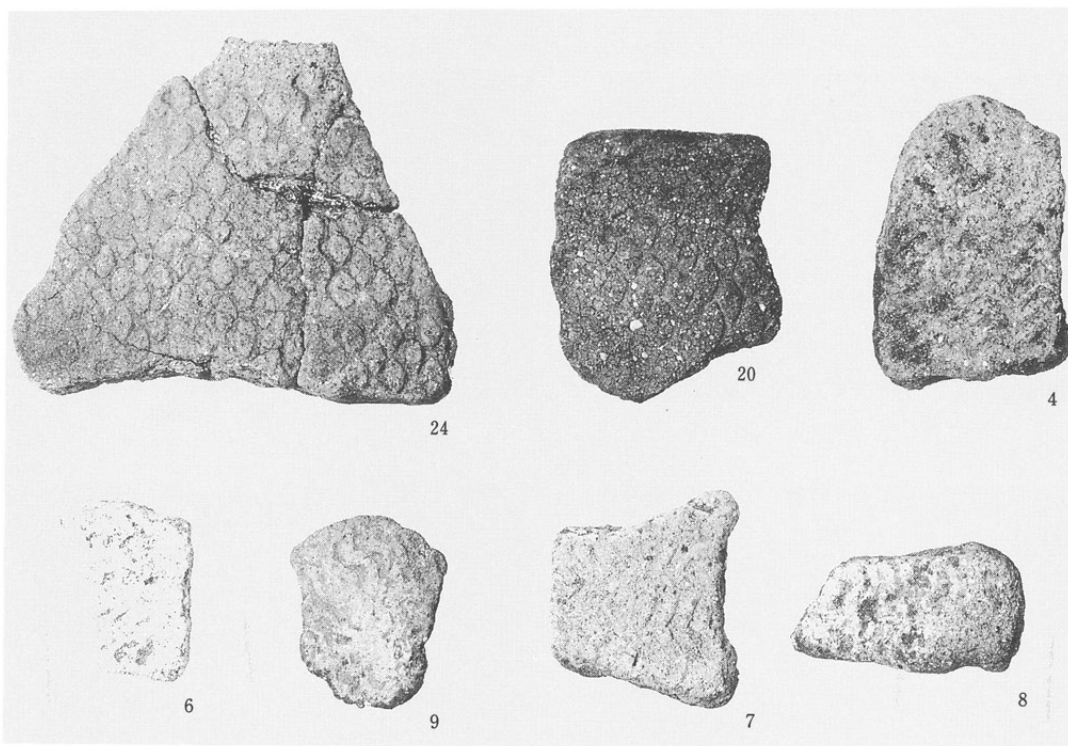
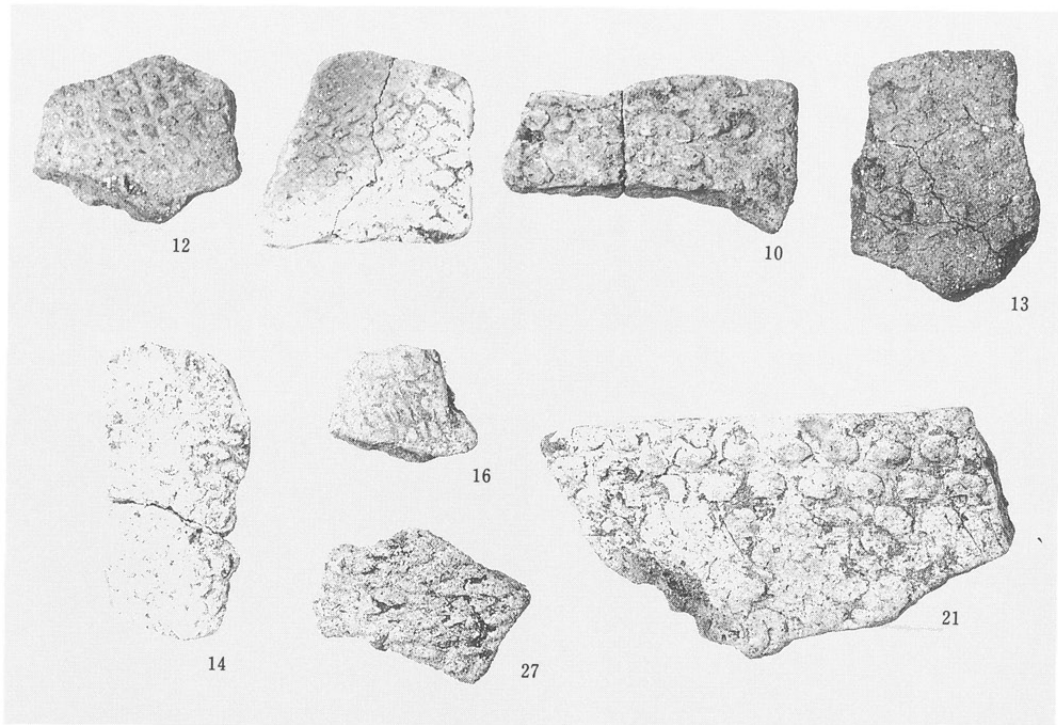
21・22住 南 土坑群

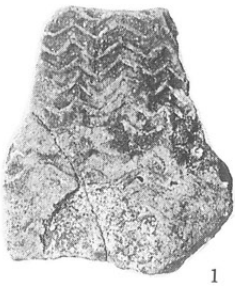


方形柱穴列



同 人が入った状態





1



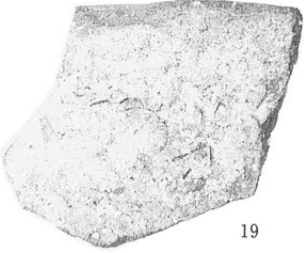
2



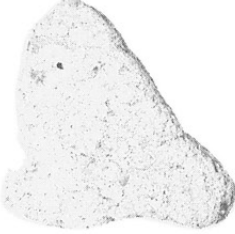
17



18



19



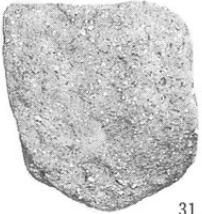
23



26



28



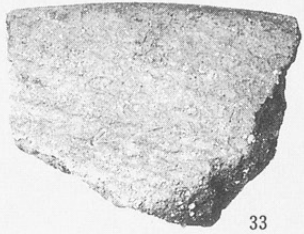
31



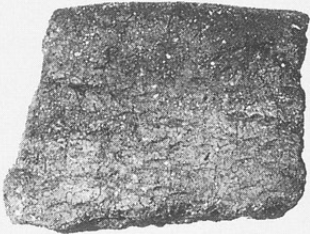
80



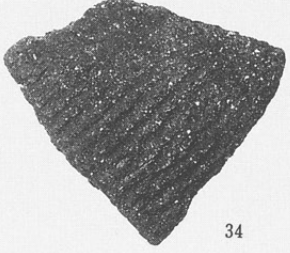
81



33



32



34



